A猪木vs初代タイガー!
脳髄直撃トーク第2弾

神様カール・ゴッチ
独占インタビューinU.S.A.

紙のプロレス RADICAL

No.3



ほっといてくれ!!

王者の脳ミソに肉迫!!
船木誠勝

崖っ淵インタビュー!!
山本宜久

キングダム遂に発進!
安生洋二

満を持して登場!
ザ・グレート・サスケ
工藤めぐみ

OH MY GOD!!

神様降臨

突然ですが、
プロレス・フィギュアに
ATTACK!!

紙のプロレス RADICAL No.3 神様降臨!!

発売元：(株)ワニマガジン社 〒160 東京都新宿区内藤町1番地 電話03-3357-2911
発行元：(株)ダブルクロス 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話03-3403-5188
ワニマガジン社 定価:本体648円+税

JOLF 1242
ニッポン放送 INFORMATION

Uchida Yuki Concert Tour '97

内田有紀

"みんなDA・I・SU・KI・!"



7月25日(金)

中野サンプラザホール

●OPEN6:00PM/START6:30PM●料金/全席指定¥4,500

●お問い合わせ:SōGō03-3405-9999


4/27SUN ON SALE!

ラジオはダイヤル1242
ニッポン放送

ビバ! マンズ・ビーナス記念

RADICAL MIRACLE INTERVIEW

カール・ゴッチ 神様降臨!!



OH! MY GOD!!

Karl Gotch



GOD BLESS THE RING

とうとう神様に会った!!
神様邸の門をくぐり、広い庭を通り抜けると、ガレージの片隅には決して多くはないトレーニング器具が置いてあった。そして、その場所を指さした神様は、開口一番こう言ったのだ。

interview by Nobby Yamaguchi
photographs by Yuri Saito
Cordinated by Mika Haneishi

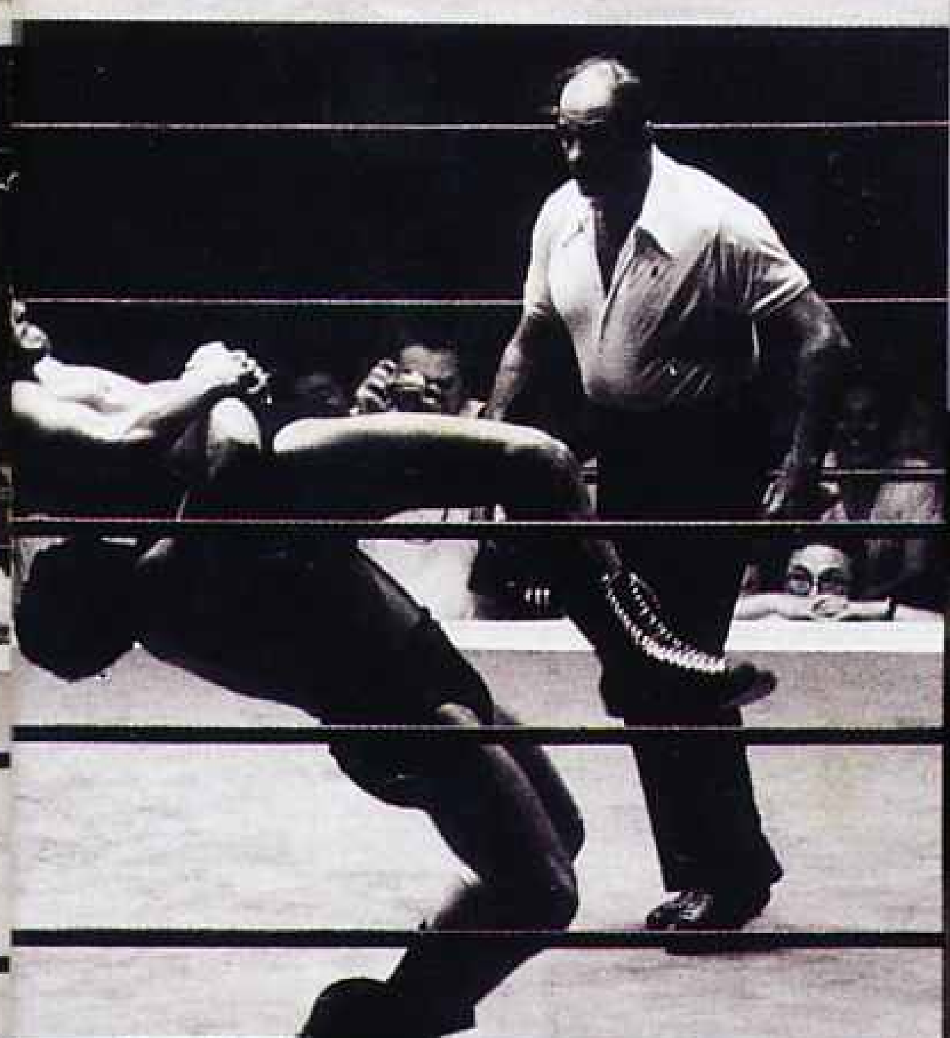


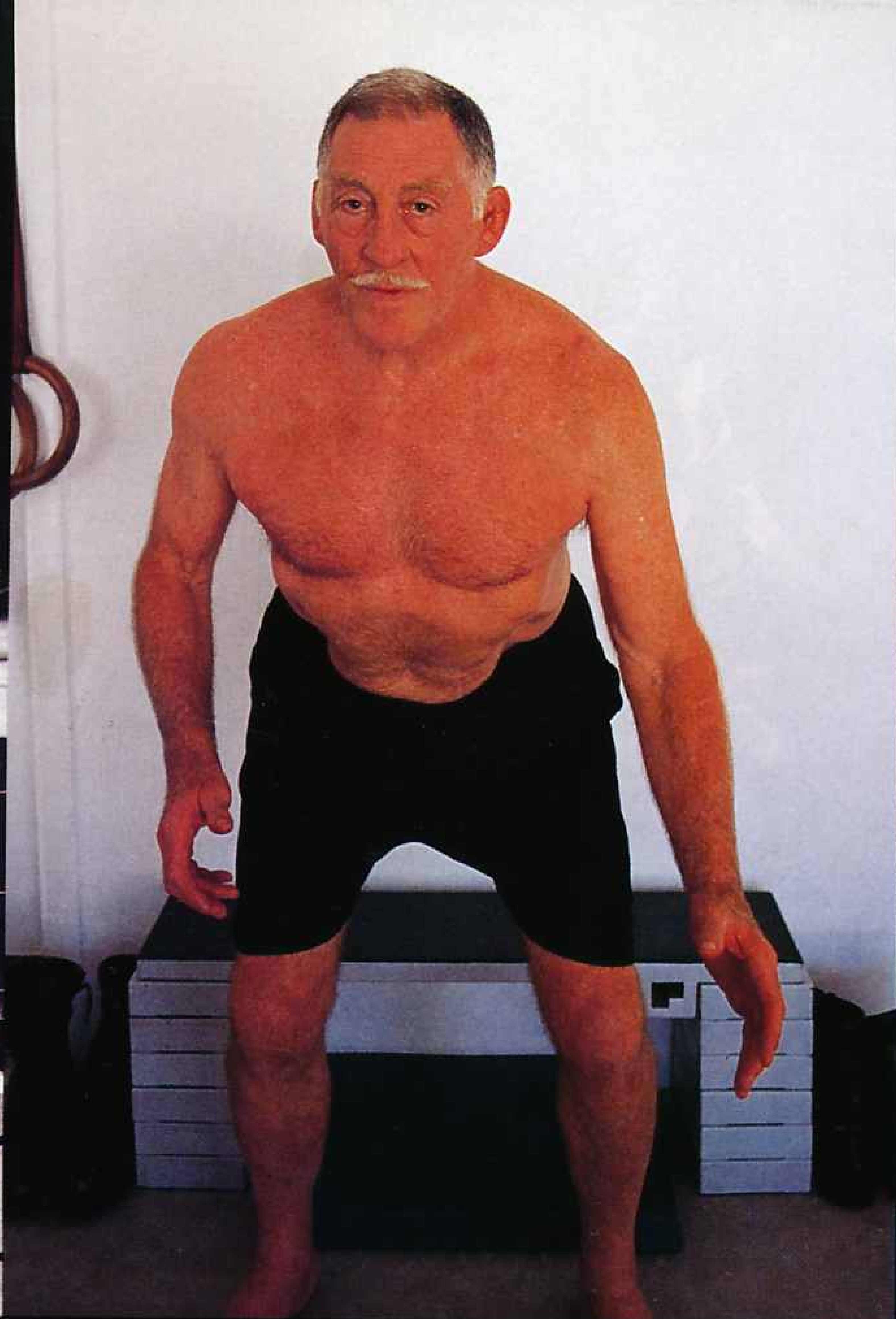
「これっぽっちの器具でも、人を殺せる練習はできるんだ!」

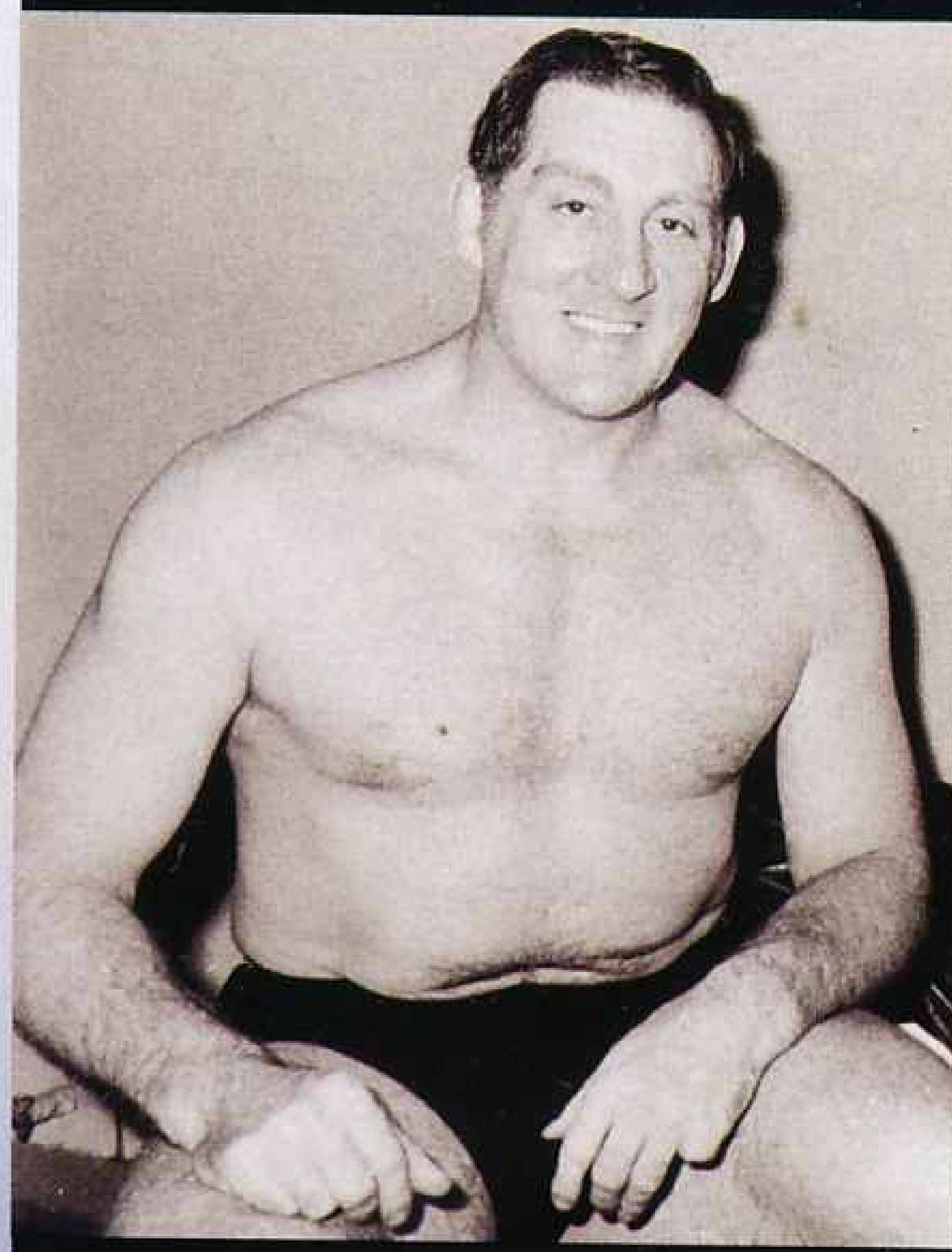
RADICAL MIRACLE INTERVIEW

Mr. Karl Gotch









本名・カール・イスタズ。1923年ドイツ生まれ。8歳の頃からレスリングの道に入り、グレコローマン・スタイルで西ドイツ・チャンピオンとなる。31歳の時、西ドイツでプロデビュー、その4年後アメリカマット界デビュー。ジャーマンスープレックスホールドと、関節技で実力的には認められるものの、妥協のないファイトスタイルで、レスラー仲間やプロモーターからは敬遠される。61年に初来日し、そのファイトスタイルの流れはアントニオ猪木、のちのU系レスラーへと伝えられていく。

GOD BLESS THE RING

Karl Gotch

●無冠の帝王、実力世界一、永遠の格闘王——"プロレスの神様"という称号以外にも数々の異名をとったカール・ゴッチ。

彼が日本プロレス界に与えた影響は計り知れない。

ストロング・スタイルを旗印にした新日本プロレス、格闘プロレスを旗印にした第1次UWFの勃興期など、日本マット界の重要なターニング・ポイントには必ず神様が降臨した。

「日本を含めて、いまや世界中のマット界がアメリカン・プロレスに犯されている!!」

「相手の関節をフック（極める）できない男に、プロのレスラーとしての資格はない!!」

「レスラーとは、格闘技を職業としている人間のことであって、ロックン・ロールや見世物で生活している人間のことではない!!」

ショーマンシップを拒否し、あまりにも強すぎるためにプロモーターに敬遠され続けた不遇の実力者は、数々の警笛をマット界に鳴らし続けた。

そして、RADICALはとうとうその"生き神様"と対面する機会を得たのである。

神様は我々が家に上がると、どう猛なことで有名なアメリカン・ピットブルの愛犬・ジャンゴを一喝で別室に閉じこめ、目の前に鎮座ましました。

——今日はお目にかかれて光栄です。もう、神様に会えてドキドキしてます。

ゴッチ YA!

——あ、ゴッチさん、まずお土産です。レトルトパックで申し訳ないんですが、ジャパニーズうなぎです！　うなぎが食べたいとうかがったもので。

ゴッチ オー、ザッツ・グッド！（それでいい）。

——それから、これはさんまの蒲焼きの缶詰めです。

ゴッチ オー。ちょうど日本の食べ物が**食べたかったん**だよ！　グッド・タイミングだ。

——一応、デパートの人は大丈夫だと言ってたんですが、何せ、このうなぎは一晩中飛行機に乗せられてたもんですから、もしかしたら痛んじゃってるかもしれません。もしひと口でも食べておかしな味がしたら捨ててください。

ゴッチ オー・マイ・ガー…私から、今後何も連絡がなかったら、うなぎにアタって死んだと思ってくれ（笑）。

——オー、ゴッド・ジョーク！　あと、これは……ユーキ・イシカワとユージ・シマダからのお土産です。

ゴッチ トーイ！　トーイは元気か？

——狂ったように元気です。これをぜひゴッチさんに渡してくれと頼まれたんですが。ブルーベリーガムです！

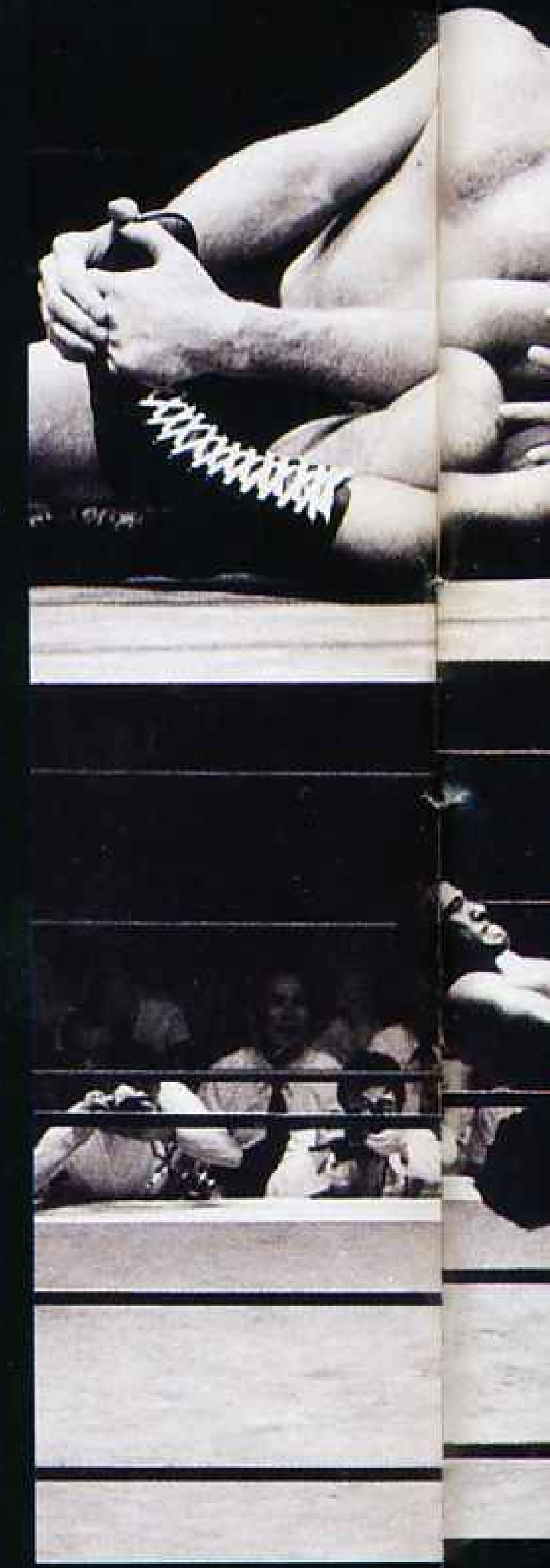
ゴッチ ハッハッハ。ベリーグー。

——ホント、あのバトラーツという団体はお土産までしみったれてますね。ゴッチさんはブルーベリーガムが好きだとユージ・シマダが言ってたんですけど、ホントですか？

ゴッチ イエス。（冷蔵庫から小さなバスケットを出してきて）アメリカのガムはいつもここに入れてあるんだが、やはり**日本のガムが一番だよ。**トーイたちはいつもこのガムを買ってき

てくれたな。
——それから、これはパンクラスのミノル・スズキからで、リングシューズです。足のサイズはいくつですか？
ゴッチ　日本のサイズで言うと、**41センチだ。**
——凄いビッグフッドだ！　日本にゴッチさんがいつ来てもいいように置いておいたと鈴木選手が言ってました。
ゴッチ　ＹＡ！（実際にシューズを履いて、慣れた手つきで紐を結びながら）オー！　ジャスト・フィットだ。**シューズを貰ったから言うわけじゃないが、**スズキは非常にガッツのある奴だよ。
——鈴木選手は、負傷していま欠場してますよ。
ゴッチ　そうか。そういう時は十分に時間をとって休養した方がいい。だが、スズキの性格を知ってるから少し心配だな。彼は私の性格とよく似てるからな。私と同じでせっかちなところがあるからね。きっとリングに上がりたくてウズウズしてるだろう。あせってトレーニングのしすぎに気をつけることだな。後で手紙を書くが、**サンキュー・スズキ**とユーのマガジンを通じても言っておいてくれ（笑）。
——トーイとユージには言わなくていいんですね（笑）。
ゴッチ　ハッハッハ。そうだそうだ。サンキュー、トーイ。
——ガレージには、アメリカのレスラーたちがよく使うウエイト・トレーニング用の器具は置いてなかったんですけど、コシティの「ヤリ」とかを指さして「これでも人を殺すには十分の練習ができる」と言ってましたね。
ゴッチ　ＹＡ！　私は日本に初めて行った時、ニュース・リポーターにこう聞かれたよ。「あなたのフィニッシュ・ホールドはなんですか？」と。その時に私はこう答えたんだ。**「コンディショニング！」**とね。そうしたらリポーターはこう尋ねてきたよ。「あなたは必殺技を秘密にして言いたくないのか？」とね。私としては正直に答えたつもりだったんだがね（笑）。例えば**世界一のロールスロイスでもガソリンがなければ走れないだろう。**それと同じことで、レスラーは、頭や筋肉だけ育っても、ハートとかコンディショニングがなかったら何もないのと一緒なんだ。ウエイト・トレーニングではレスラーとしてのナチュラルなコンディションはつくれない。
——しかし、コンディションが大切なことはわかりますけど、並のレスラーは、人をどうやって殺せるかまでは考えてないと思うんですけど（笑）。
ゴッチ　いや、**レスラーたるもの、それくらいの考え方**を持たないないとダメなんだ。6週間くらい前に、ジャンゴ（犬）を病院に連れてくために、ダウンタウンまで車で行った時のことさ。ヤング・ボーイが運転する車が私の車を後ろからアオってきたんだ。向こうが車を止めて出てきたから、私も止めたよ。私は話をしてやろうと車の外へと出て行った。相手はポニー・テールのように髪の毛を後ろで結んだヤングボーイだったよ。私より背が高かったが、コークとフライド・チキンとディスコしか頭にないような顔をしていた。そのヤングボーイは**「来るなら来い、この爺い！」**と精一杯粋がりながら私を見上げながらこう言ったよ。だから私は彼を挑発してきたんだ。**「私は喧嘩などしない、お前を殺すだけだ！」**とね。ヤングボーイはそれでフィニッシュ。終わりだよ。私は闘いを挑まれれば、今でも本気になるよ。
——いまだ現役なのかァ！
ゴッチ　私は73歳になるよ。私も寄る年波には勝てない。頭も白くなった。だけど私は常々こう思ってる。「年には勝てなくても、必ずしも年寄りになる必要はないんだ」とね。だから喧嘩を売ってきたヤングボーイにもこう言ってやったんだ。**「頭に雪は積もっているが、私の心はまだ燃え盛っているぞ」**とね。そのヤングボーイは、とんでもない年寄りだという怯えた目つきをしていたよ。こんなお爺ちゃんがいるのが信じられなかったんじゃないか。ハッハッハ。

「私は喧嘩などしない、お前を殺すだけだ！」





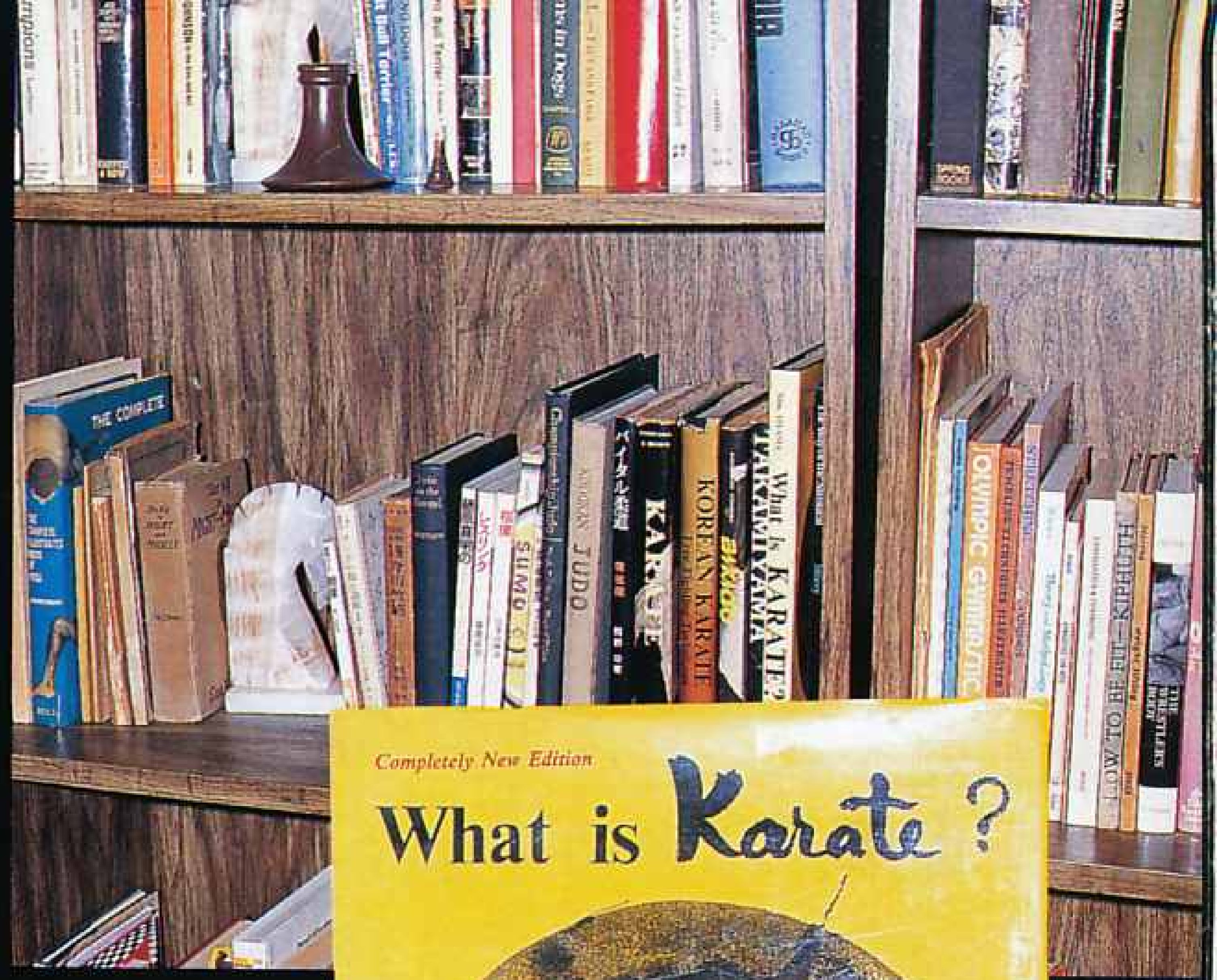
表札には「K　ISTAZ　GOTCH」とあった。多くの日本人レスラーが訪ねた場所である



強さを求める多くの日本人レスラーが練習したゴッチ邸も、一人暮らしの神様には広すぎて売りに出されている



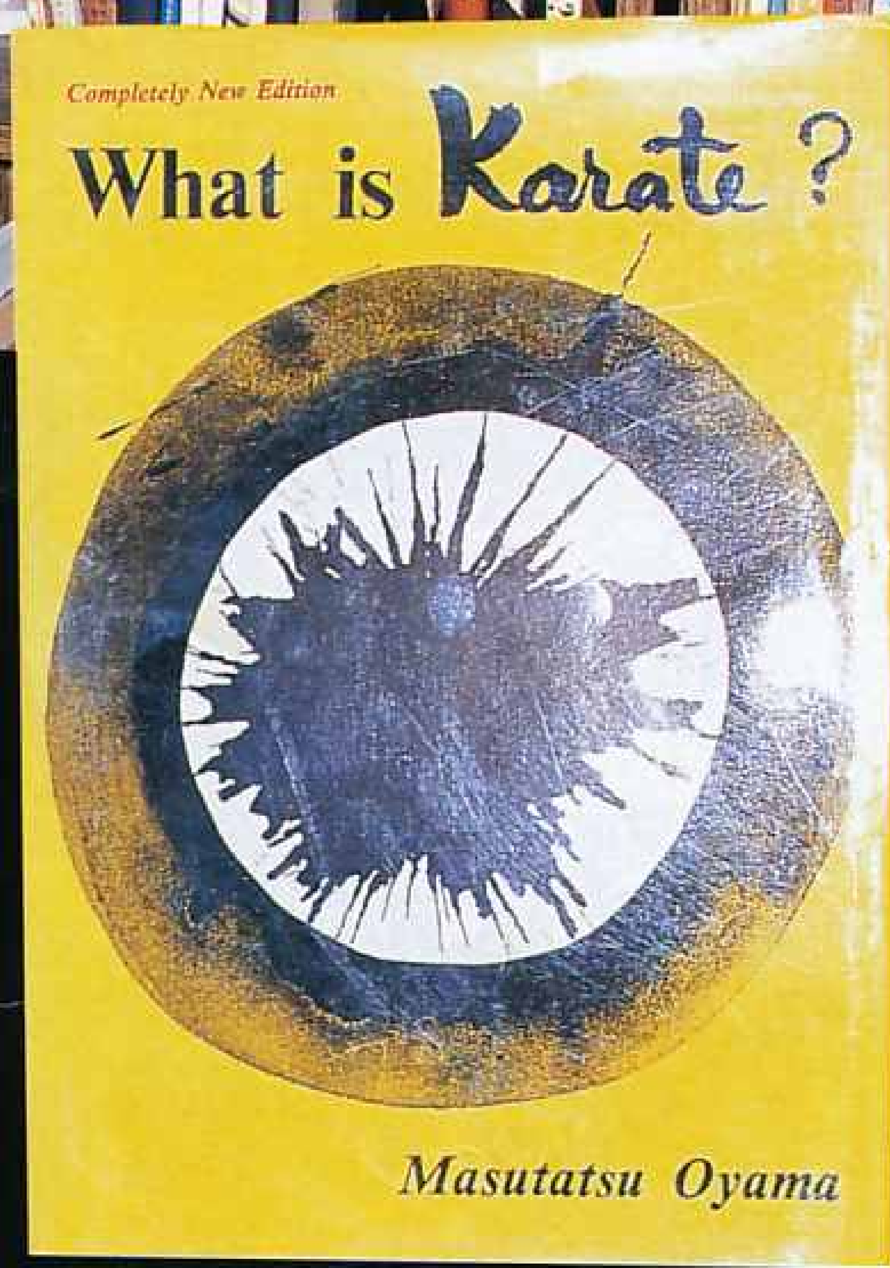
日本の食べ物が大好物の神様。お土産のうなぎを手にしてご満悦のご様子である。痛んでない……よな



―年には勝てないが、必ずしも年寄りになる必要はない、ですか。
ゴッチ　YA！　人間も自然の法則に逆らってはいけないんだ。ベスト・コンディションをキープするためにトレーニングするということは、いつでも自然に帰れるということなんだよ。ライオンだろうが、ゴリラだろうが、彼らは生きるための闘いの資質を備えている。そうだろう？　だが彼らが**バーベルやダンベル持ち上げているところを見たことはないだろう。**それでも闘いの時になれば、自分の体重を、どんなアングルからでも使えるようにしているんだよ、彼らは。
―ライオンがバーベルを持ち上げてるところをゼヒ見てみたいですね（笑）。
ゴッチ　例えば動物が獲物を捕る時は直線的に動くわけじゃない。前後左右、上下と自由自在にすべて動けるようにしなければ闘いに破れてしまう。私はいつも動物が何を思っているかに興味があって、研究しているんだ。

頭に雪は積もっているが、私の心はまだ燃え盛っている

―でもゴッチさんはプロのリングから引退して何年も経つのに、なぜそこまで考える必要があるんですか。
ゴッチ　ハッハッハッハッハ。イッツ・イージー！　**大和魂だ！**　ユーは日本人で、私はドイツ人だ。日本は東にあって、ドイツは西にある。でも考え方は非常に共通点がある。大和魂という言葉をイングリッシュで訳すことができるかい？
―まったくわかりません！
ゴッチ　YA！　イングリッシュでは大和魂という言葉を訳す機能は果たせないんだ。しかし、ドイツ語にはある。それが**EHRGDIZ（エアガイツ）**だ。この言葉は大和魂そのものと言ってもいい言葉なんだよ。というのは私たちドイツ人は軍隊や戦士として、魂を鼓舞する時には、ＥＨＲＧＤＩＺ（エアガイツ）という言葉だけで十分なんだ。
―大和魂とゲルマン魂の融合を見ましたね。
ゴッチ　私にとってのアイドルが誰だか知ってるかい？
―ゴッチさんにとってのアイドルですか!?　うーん、森高千里じゃないないことだけは確かですね。
通訳の羽根石さん　エ？　それも訳すんですか？
―いや、けっこうです。
ゴッチ　私のアイドルは**ミヤモト・ムサシだよ！**　宮本武蔵は60歳で死んだが、死ぬまで鍛錬と勉強を怠らなかった。若い頃から闘いの場に直面している人たちは完全主義が多いが、**誰もが結局は「完全」にはならない**んだよ。いつでも必ず向上させるスペースがあって、それを埋めよう埋めようとしても、まだスペースがある。そんなものなんだ。そのスペースに気がつかない人間はそこで終わりなんだよ。つまり、結局は自分が棺桶に入るまでは、ずっと鍛錬と勉強を怠ってはいけないということだよ。
―大和魂に宮本武蔵。ゴッチさんは本当に日本が好きなんですね。
ゴッチ　YA！　ウエイト・トレーニングやマシンを使ってするトレーニングは見かけをよくするためのトレーニングだろう。そんなものは、「見た目のいい羽は、ベッドをつくるにはちょうどいい。だけどその羽根は**鳥そのものをつくらない**」といった意味のドイツの諺そのものなんだよ。
―日本にはゴッチさんの伝説がたくさん伝わっていて、日本のレスラーからもいろいろな話を聞いてます。で、いま思い出したんですけど、ゴッチさんとブルーベリーガムのトーイが浅草に行ったらしいんですよ。
ゴッチ　オー、アサクサ、アイ・ライク。懐かしいな……それで？
―で、ゴッチさんが神社で**大きな大きな石**をジーッとジーッ見てたらしいんですね。それを見たトーイは、ゴッチさんは日本の石にも興味があるんだと思って、「この石は日本のトラディショナルな石で……」とか説明しても、ゴッチさんは何の反応も示さないらしいんですよ。心配したトーイが「どうしたんですか？」と聞いたら、我に返ったゴッチさんが、**「トーイ！　この石はトレーニングに使えるぞ。持ち上げてもいいし、転がしてもいい……」**と言ったらしいんですよ（笑）。ゴッチさんはホントに四六時中トレーニングのことばかり考えてる、とトーイは思ったらしいんですよ。
ゴッチ　ハッハッハ。そんなことがあったかな。私は裕福な家庭に育ったわけじゃない。父はセーラーで、母は昼間は**エビを売り歩いて、**夜はクリーニング屋で働いてたよ。そういう家庭で育ってるから物がなかったんだ。だから、いつもなにか工夫して使えないかと常々考えるクセがついてるんだ。

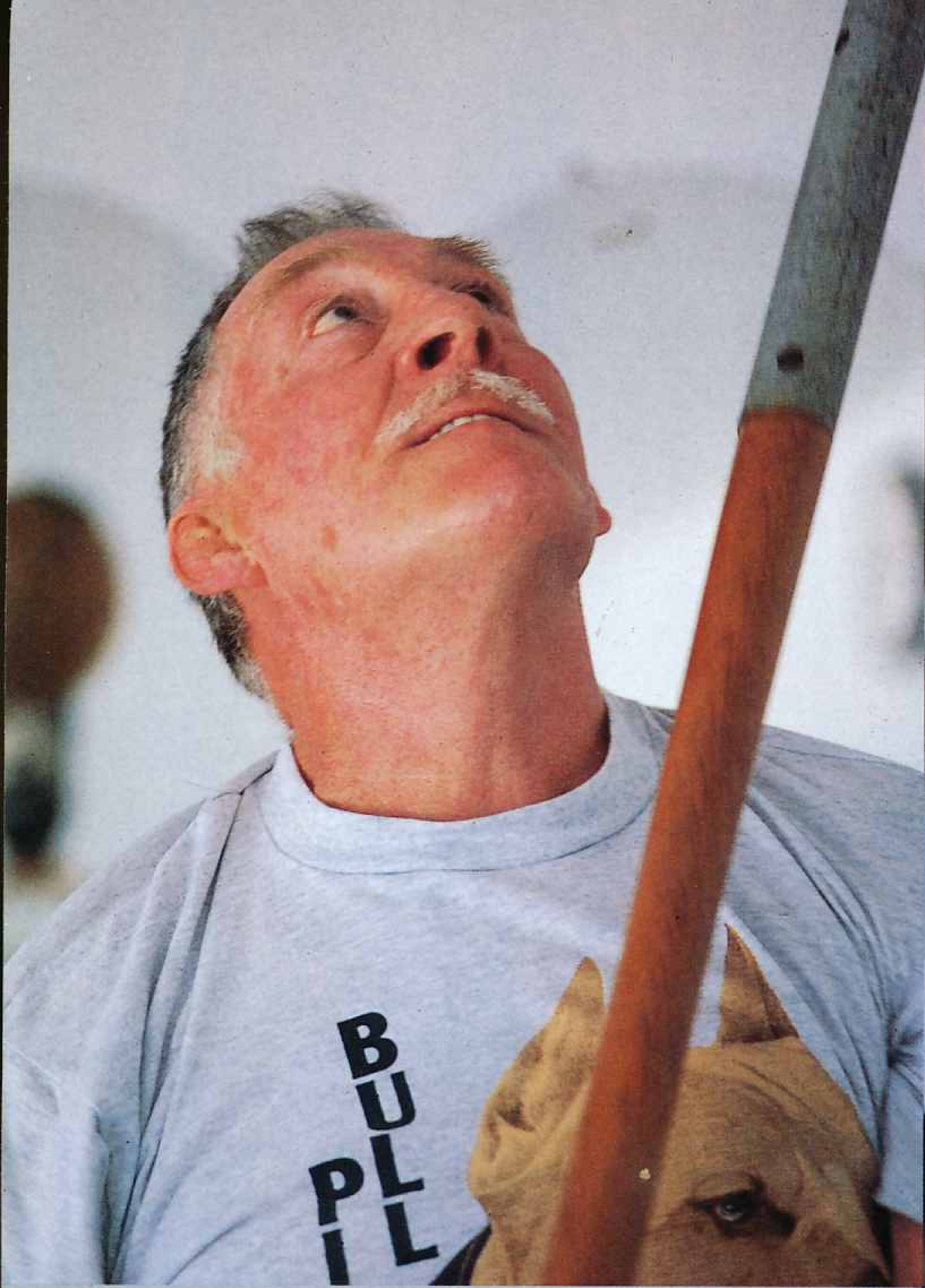


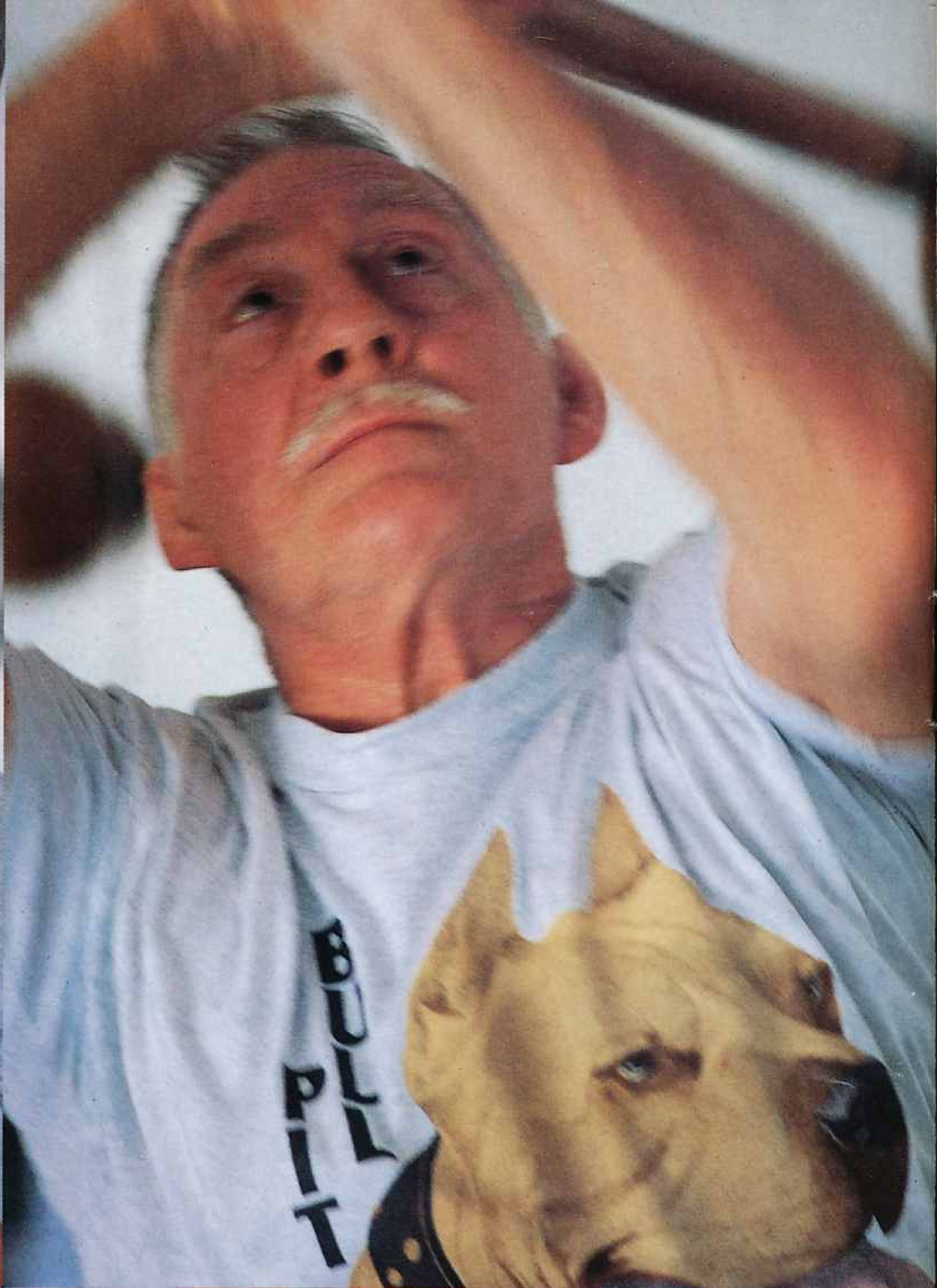
ゴッチ宅の本棚に、なんとマス・オーヤマの『What is Karate』を発見！　これはスクープだ！　嗚々……二人の顔合わせが見たかった。

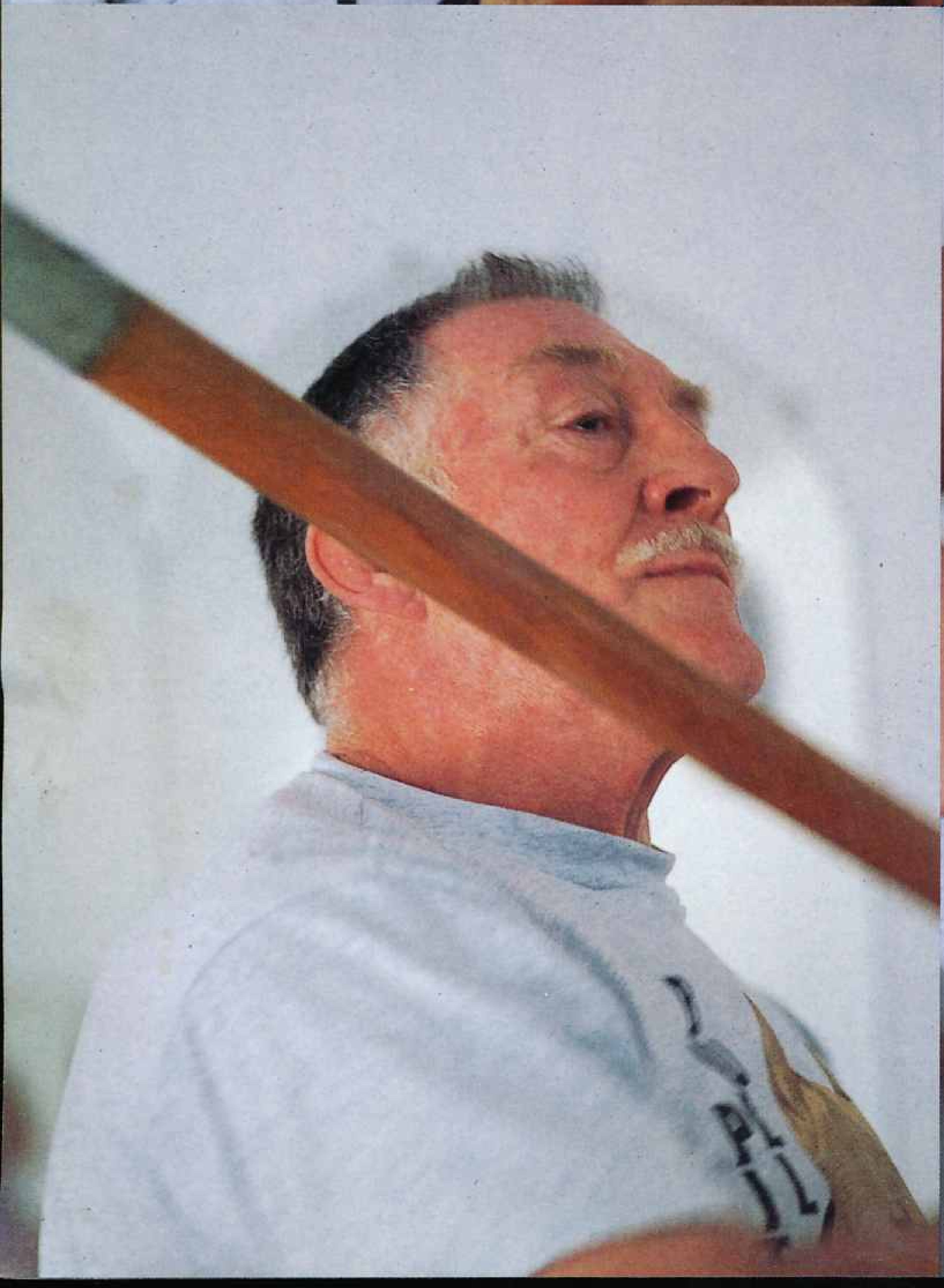
GOD BLESS THE RING

Karl Gotch




BULL
PI


BULL
PIT




PIT

石と言えば、ある時……戦争が終わった後の、確か21歳の頃だった。街に出ると**大きな石**がいっぱい転がっていたんだ。その石を持って丘を登り下りしていたことがあるよ。だから、石を見た途端にそういうこと考えるようになってしまったんだよ。すまない、ちょっと待っててくれたまえ。

（ここでゴッチさんは洗濯に行ってしまった）

――あ、ゴッチさんが洗剤を持って歩いてる。神様と洗剤！　幸せだなぁ、こんな贅沢な場面が見れて。

通訳の羽根石さん　ゴッチさんは、事前に決めたことをキチッとやらないと気が済まない人なのよ、きっと。

（しばらくして洗濯ものを抱えたゴッチさんは、椅子に座る間もなくエネルギッシュに喋りだした）

ゴッチ　石の話だったな。その大きな石を持ち上げながらヒル・トップまで行くトレーニングは、**仕事のない日曜日**にやってたよ。その時、散歩してる老人が私を見て、「キミ一体何をやってるんだ？」って聞いてきたんだ。「下にあったこんな大きな石を上に持ってきてどうするんだ？　丘の上にこんなこんな石を持ってきてナニするんだ？」とね。私は「この石ですか？　これはこのままもう一度街まで持って帰るんです」と言ったよ。そうしたら、その老人にこう言われたさ。**「キミがクレージーだってことがよ～くわかった」**とね。ハッハッハ。

――ゴッチさんはいままで生きてきて、何回ぐらいクレージーって言われたんでしょうね？（笑）。

シャムロック!? ステロイドを打った鳥は臭い！

ゴッチ　幼い頃から言われ続けてるから、それこそ星の数でもきかないだろうな。

――ガハハハハ。星の数でもきかないですか。

ゴッチ　確かにトレーニングというのは試合があってのものだ！　でも本当は自分自身のためにトレーニングをするんだ。**誰かに勝つ前に、まず自分に勝つ！**　それをくぐり抜けなければ、永久にその人の頭上には**栄光は輝かない。**神様は見ているんだよ。

――じゃあ、ゴッチさんは今も自分自身に向けてのトレーニングをしてると。

ゴッチ　イエス。**真の敵は自分の中にいる**んだよ。口数が多い奴はいくらでもいる。だが、私はよくこう言うんだ。人間は耳が二つある。でも口は一つだと。だから二回聞いて話しなさい、とね。例えば、よくここに人が来て、レスリングのレッスンをやってくれと言ってくる。要するにそれをビデオ・テープに撮って儲けようというのが目的なんだよ。しかし、どうしてそんなことが出来るんだ。レスリングっていうのはそんな**簡単に受け継げるものじゃない。**

――そういえば、ゴッチさんの技術書は出てませんよね。

ゴッチ　私には今でも理解できないことがあるんだ。私は日本でトップと呼ばれてる**プロモーターたち**を何人か知っている。でも日本のプロモーターはともかく**マネー**のことばかり考えている。（顔を真っ赤にしながら）マネー・オンリーさ！　日本のヤングボーイたちは一生懸命やっているけど、プロモーターはマネーのためにどこからか白人を連れて来るだろう。そういう欲を持ったプロモーターたちがいるからレスリングはどんどん駄目になっていく。スポーツとマネーを一緒にさせることは危険なことなんだ。私は一回だけじゃなく、**何度も何度も**そういうことが**繰り返される**ところを見てきたからね。



驚ガク!!　とても73歳とは見えないブ厚い肉体を誇る神様。いまでもトレーニングは欠かさない。そしてもちろん1日2回の愛犬ジャンゴの散歩も欠かさない。オー・マイ・ゴッチ

GOD BLESS THE RING

Karl Gotch

――いや、昔からゴッチさんの言うことは一貫してますね。

ゴッチ　人々は私の言葉に対してこう言うことがあるよ。あなたはもう年寄りでしょ、とね。あなたの言うことは過去のことなんだ、ともね。しかし、**未来のことを準備するためには過去を見なきゃいけないこともある！**　古いことは古いことであり、新しいことは古いことでもあるんだ。

――なるほど。

ゴッチ　私は日本のボーイたちに、一生懸命コーチをしたよ。どんなに**ハード**にトレーニングしたとしても、そんなに嫌われてはいないはずだしな（笑）。そうすることによって彼らにチャンスを与えてやってきたんだ。だけど、日本にいるプロモーターたちは、彼らをその気にさせるだけで、強くさせようという気はない。強くさせるための何かをしてあげてはいない！　だから、例えばスズキのいる**パンクラス**は日本から出てきたスタイルだろう。日本から出てきたんだから日本人だけで出来るはずだ。スモーも最初は日本人だけでやっていって大きくなったじゃないか。他国の人々を呼ぶことで、自分たちのスタイルを低下させていることもあるかもしれない、ということに気付くべきなんだよ。

――それはシャムロック・ブラザーズのことですか？

ゴッチ　**シャムロック!?**　シーッット!!（と言いながら鼻をつまむ）あいつの筋肉は見せるだけのものだから、確かにいい鳥に見えるかもしれない。



だけど、**ステロイドを打った鳥は臭い！** 誰かに勝つ前に自分自身に勝たなければいけない、と私はさっき言ったと思うが、ステロイドの魅力にも勝てない奴がどうやって相手に勝てると思う。

（興奮しながら立ち上がったゴッチさんは、そのままま洗濯場へと消えてしまった。しばらくするとゴッチさんは戻ってきて、また椅子に座る間もなく堰を切ったように喋りだした）

ゴッチ　シャムロックはもうパンクラスのスタイルについていけなかったんだ。もともと、そんなにテクニックはなかった。やることって言ったら**バカの一つ覚えで足をロックすることだけだ。** 本当にタイミングよくそれが決まったら、後は相手にしがみついているだけだろう。だから、あのスタイルについていけなくなったから**WWFに行くしかなかったん**だよ。

――元アルティメット王者をそこまで言いますか！

ゴッチ　そういえば、2年前にこんなことがあった。ジムでシャムロックみたいな身体の奴に「お前の歳にしては、いい身体してるな」って言われてしまってね。次に「特別なことをしているのか？」と聞かれたから、私は「**何もしていやしない。俺の父親はバカを作ったわけじゃないからね。お前の父親と違ってね**」と言ってやったよ（笑）。私は若い頃からこう思ってたよ。「**私はミスター・ビューティフルになりたいわけじゃない、ミスターになりたいんだ**」と。

――実にいい言葉です。

ゴッチ　シャムロックは、**マネーをつくる筋肉**は持ってるかもしれないが、**レッスルする筋肉**は持っていないんだ。

――ゴッチさんはいま一人暮らしですけど、ヒマな時にWWFの試合とか見ないんですか？

ゴッチ　ホワイ？　そんな**ヒマがあったらトレーニング**をしてるさ。

――ガハハハハハハハ。トレーニングしてますか！

ゴッチ　**ワラウーナヨ！**（日本語で）WWFをバカにしてると、天罰がくだるぞ。ハーッハッハ。

●ゴッチさんは本当にエネルギッシュだった。どう逆立ちしても73歳とは思えない。この後、時には顔を真っ赤にしながら、アルティメットのビデオを見ながら、そして本誌・山口を相手に関節技のレクチャーをしながら、インタビューは延々8時間にも及んだのだ！　もちろん神様は洗濯物のチェックも忘れなかった。次号でも、ますますゴッチ節に磨きがかかった衝撃・過激なインタビューパート2を掲載しよう。さあ、それではみんなでゴッチさんの健康を祝って叫ぼう。

エアガイツ!!

【3月30日現地時間、フロリダ州タンパ、カール・ゴッチ邸にて収録】

これ以後のゴッチの発言は驚きの連続だった


ヒクソン・グレイシー!?　彼は一流のビジネスマンだ!!


ババはまだやっているのか？　ジーザス・クライスト……


フジワラ、キド、スズキはグッド。マエダ？　まあまあだ


アルティメット？　誰も操縦桿を持っていないじゃないか

この続きは、6月発売予定の第3号で!!

必読連載第２回

石川雄規の『闘いの美術館』

あるいは『神様 カール・ゴッチ』



その昔、神様が住み始めた頃、その周辺は広大なオレンジ畑と湖だけしかなかったという。当時から数えると随分長い歳月がながれてはいるが、道路が整備されたことや住む人が増えたこと以外、その大自然は現在もほとんど変わっていない。

フロリダ州オデッサ――。「神様」カール・ゴッチが住む町である。

アメリカ最南端の土地キーウエストや、リゾート地として有名なマイアミを抱え持つフロリダ州のほぼ中心に位置する所といえば、おそらくその気候の良さは簡単に想像がつくであろう。とにかくアメリカ本土は広大である。山がないので空がやたらに広い。一年の殆どが温暖であり、真夏になると外に停めておいた自動車のボンネットで目玉焼きができるほど暑くなる。ただし日本と違って湿気が少ないので、決して気持ちの悪い猛暑ではないのだ。

そんな恵まれた気候の中、人里離れた湖のほとりにゴッチさんがひっそりと頑固に暮らしている。何だかそれだけで胸がワクワクしてくる情景ではないか。まぁ……ここ数年に関しては実際はワクワクできない状況ではあるのだが、それは後で書くことにしよう。

いずれにしても、私はそんなゴッチさんを、密かに心の中で『アルプスの少女ハイジの″おんじ″』と呼んで慕っている。

いまから8年前、そのゴッチさんの家を奇跡的に探し当てたことから、私の中の″石川雄規物語″は始まったと言っても過言ではない。オデッサという地名と湖の写っているゴッチ邸の写真だけを頼りに訪ねてきた青年を前にして、ゴッチさんは「WHY（何故？）そんなにまでして、何故、俺に会いに来た」と驚き、レスラーになりたいこと、日本で一度だけお会いして一言だけ言葉を交わしたことを伝えると、もう一度驚いた後「嗚呼！　あの時のボーイか」と思い出してくれたのだった。

そしてあの太い声で「HEY、BOY、COME　IN」と言って、私を家の中に招き入れてくれた。その時ゴッチさんの愛犬・ジャンゴ（アメリカンピット・ブル）が喜んでじゃれついてきたのだが、とにかく獰猛で有名なこの犬、とても怖かったのを覚えている。びびる私を見てゴッチさんは大笑いし、「ジャンゴ！」と一喝して別の部屋に閉じこめてしまった。

自らを「ハンブン、ニホンジン」と称するゴッチさんはオリエンタルな物が大好きで、日本からのお土産を本当に大切に収集し家中に飾っている。リビングで一通り話をした後「ついておいで」と言って席を立つと、それらを一つ一つ案内し、説明してくれた。ゴッチさんは若い頃の写真まで見せてくれて、その頃の思い出話をしてくれた。

「時の経つのは早いもんだ……」感慨深げなゴッチさんの横顔がとても印象的だった。

私はタンパに滞在している間、ゴッチさんの親友ラリー・マレンコさんの家に御世話になっていた。それ故、週に1～2回ゴッチさんがマレンコ家に遊びに来た際、ゴッチさんと私は二人でビールを飲みながら、ずーっと話をしたものだった。

ゴッチさんはとにかく話が好きだ。そして話し出すと止まらない。だからマレンコさんたちもゴッチさんの話につかまらない様、序盤戦ですぐに″避難″する。なにかと理由をつけて外出してしまうのだ。午前中に避難したラリーさんが夕方家に帰ってくると、ビールの空き缶の山を前にゴッチさんの話がまだ続いているのを発見し、目が点になっていたことも数知れず……。

以前、レフェリーの島田裕二が同じくマレンコ家に滞在していた際、やはりゴッチさんのよい話相手になっていたそうだ。電話で話して2時間程経った頃、ゴッチさんが島田に言った。

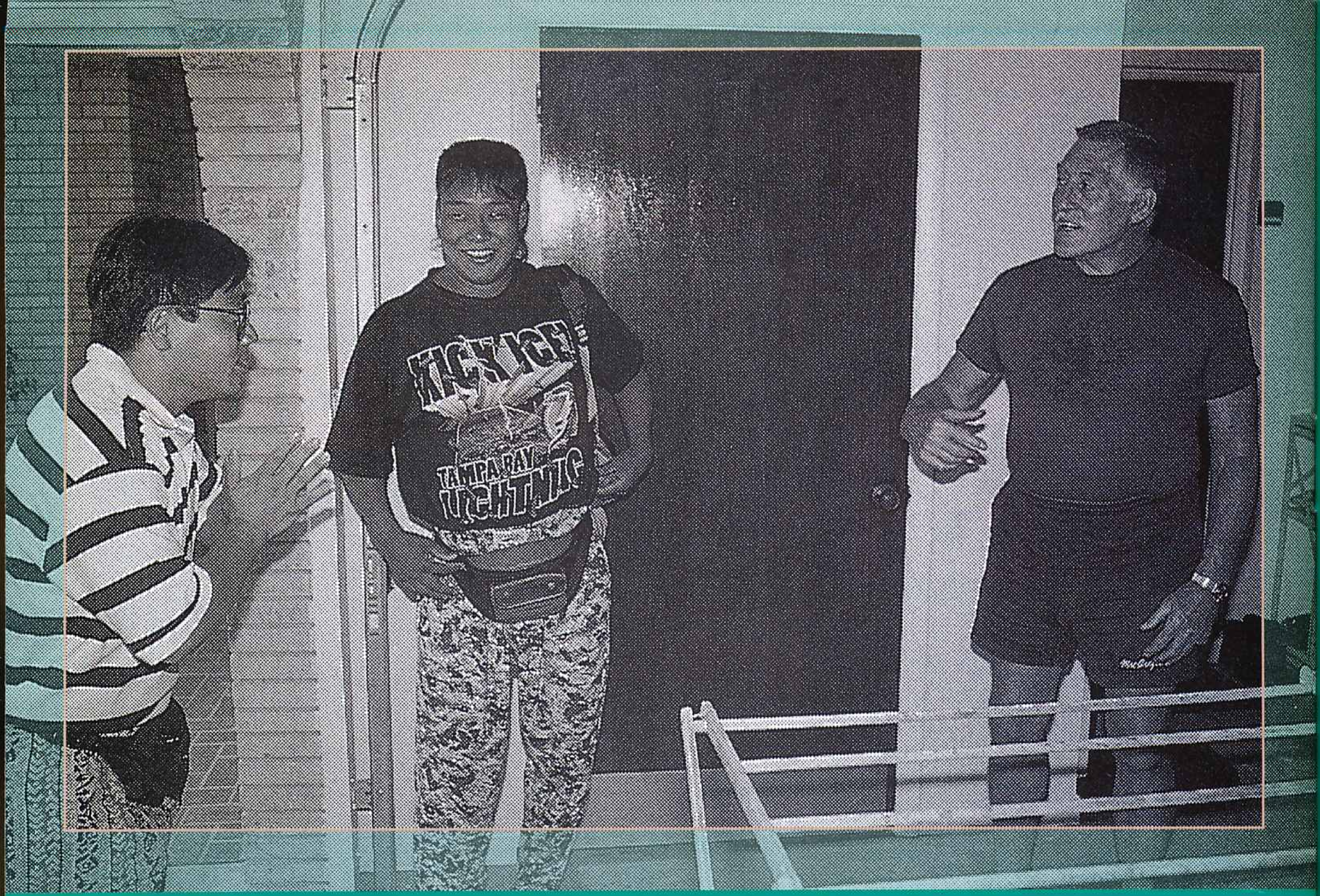
「ところで裕二、私はどうも電話は苦手なんだ。長電話もなんだからこれから私の家に来ないか？」

その後、島田がゴッチ家で6時間程お話の相手をすることになったのは言うまでもない。まぁ、ゴッチさんの長話に皆閉口しているというのは半分は冗談で、とにかくゴッチさんの話は面白く、ためになり、心にしみる。

「レスリングの話は、どんなワインよりも私を酔わせてくれる」

これはゴッチさんの有名な言葉だ。

藤原組の旗揚げ当初、私が新弟子であった頃、ゴッチさんは3ヶ月間日本に滞在し、私たちにレスリングの技術をみっちりと授けてくれた。そして浅草の寮（ワンルームマンション）で我々と共に生活をし、主に私が身の回りの御世話をさせて頂いた。プロレスの神様も一旦リングを降りれば、相撲と時代劇と銭湯と焼酎のお湯割りが好きな、陽気でお喋り好きの



「トーイ、これは忘れるなよ。技術や練習は人が教えてくれるが、ガッツは誰も教えてくれない」

おじいさんになる。

今でも覚えているのは、浅草の今戸にある『今戸湯』に毎日せっせと通い、サウナや露天風呂等、約2時間程かけてゆっくりと練習の汗を流しに行ったことだ。本当に楽しかった。銭湯には年輩のプロレスファンも多く、ゴッチさんの姿を見て大感激する人も多かった。

あるとき「ルー・テーズさんですよね？」と言われ、ゴッチさんはムッとしていた。それを見て笑ったら思いきり冷水をかけられ、そしてゴッチさんの笑い声が銭湯にこだました。『今戸湯』では、今でもゴッチさんのサインと写真が飾られている。

フロリダ州タンパは私の第二の故郷の様なもので、何かの折りに訪れている。そしてもちろん行く度にオデッサのゴッチさんの家を訪れる。ただ残念なことに、何故か大切な人のお葬式に出る為に訪れる場合が多いのだ。

最初はミスター空中さんが亡くなった。ゴッチさんの娘さんの婿でタンパに在住していたUWF・藤原組と通しての名レフェリーである。次はゴッチさんがプロレスラーとしてアメリカに移住した頃からの親友、マレンコ道場の総師範フリー・マレンコさん。カール・グレコの義理の父で、私にとってもアメリカの父の様な人だった。

そしてゴッチさんの最愛の奥様、エラ夫人がゴッチさんとジャンゴを残して逝ってしまった。私はお葬式の度に教会の片隅で悲しみに俯くゴッチさんの姿を見ている。エラ夫人が亡くなった後ゴッチさんの家を訪ねた際、私は何と言葉をかけていいのかわからなかった。

「練習している間だけ悲しみを忘れることが出来るが……」

ゴッチさんは次の言葉を探していた。義理の息子を送り、親友を送り、その時にも私達には涙を見せなかったゴッチさんが声を詰まらせていた。

我々が帰る時、ゴッチさんはやはりいつもの様に庭先まで出て見送ってくれた。夕暮れの中に神様が佇んでいた。以前同じ風景の中でゴッチさんが私を呼び止めて、投げ掛けてくれた言葉を思い出した。

「トーイ、これは忘れるなよ。技術や練習は人が教えてくれるが、ガッツは誰も教えてくれない」

ゴッチさんはいつもの様に我々が見えなくなるまで見送ってくれたが、その時は最後に静かに手をあげただけだった。

船木よ、船木よ、船木さん……
一体あなたは何を考えているのですか!?
やっぱり、あなたをほっとけません!!

木誠勝の~~苦~~脳



カラー➡モノクロ ブチ抜き19ページ!!

F LONG INTERVIEW Vol.1



王者 船木

FUNAKI

F

針の穴にラクダを通せ! '97

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi

撮影／斉藤ユーリ
photograghs by Yuri Saitoh

KING OF

――船木さん、突然なんですけどね、脳ミソって興味ありますか？（笑）。

船木　メチャクチャありますね。**脳ミソの限界**ってものにメチャクチャ興味あります。

――限界？　それは自分の脳の限界？

船木　いえ、もう人間自体の。いろんな人間がいて、それこそ脳ミソの限界には差があると思うんですよね。でも、やっぱり記憶力の脳と発想の脳とは違う脳だとは思うんですよ。それで、俺自身は**どっちが発達してるのか**ってことですね。

――自分では今のところどっちの脳が発達してると思うんですか？

船木　記憶抜群です！　そのかわり「この本をまるごと1冊記憶しなさい」っていうのは絶対ダメですね。ただ自分の身に回りで起こったことは……絵として出て来ますね。**画像で。**

――画像で出て来る？　それで、やっぱ映画とか作りたがるわけだ（笑）。

船木　ですね（笑）。発想も結構、豊富な方だと思いますけど、夢の記憶は最高に抜群ですね。夢って、普通は起きたら「なんとなく夢見てたなぁ」って感じですけど、俺はもう思いっきり覚えてますからね。で、必ず自分が主役じゃないですか。だから、メチャクチャ楽しいですね。**夢に出て来る女性って、自分の理想**なんですよ。

――顔もハッキリわかる？

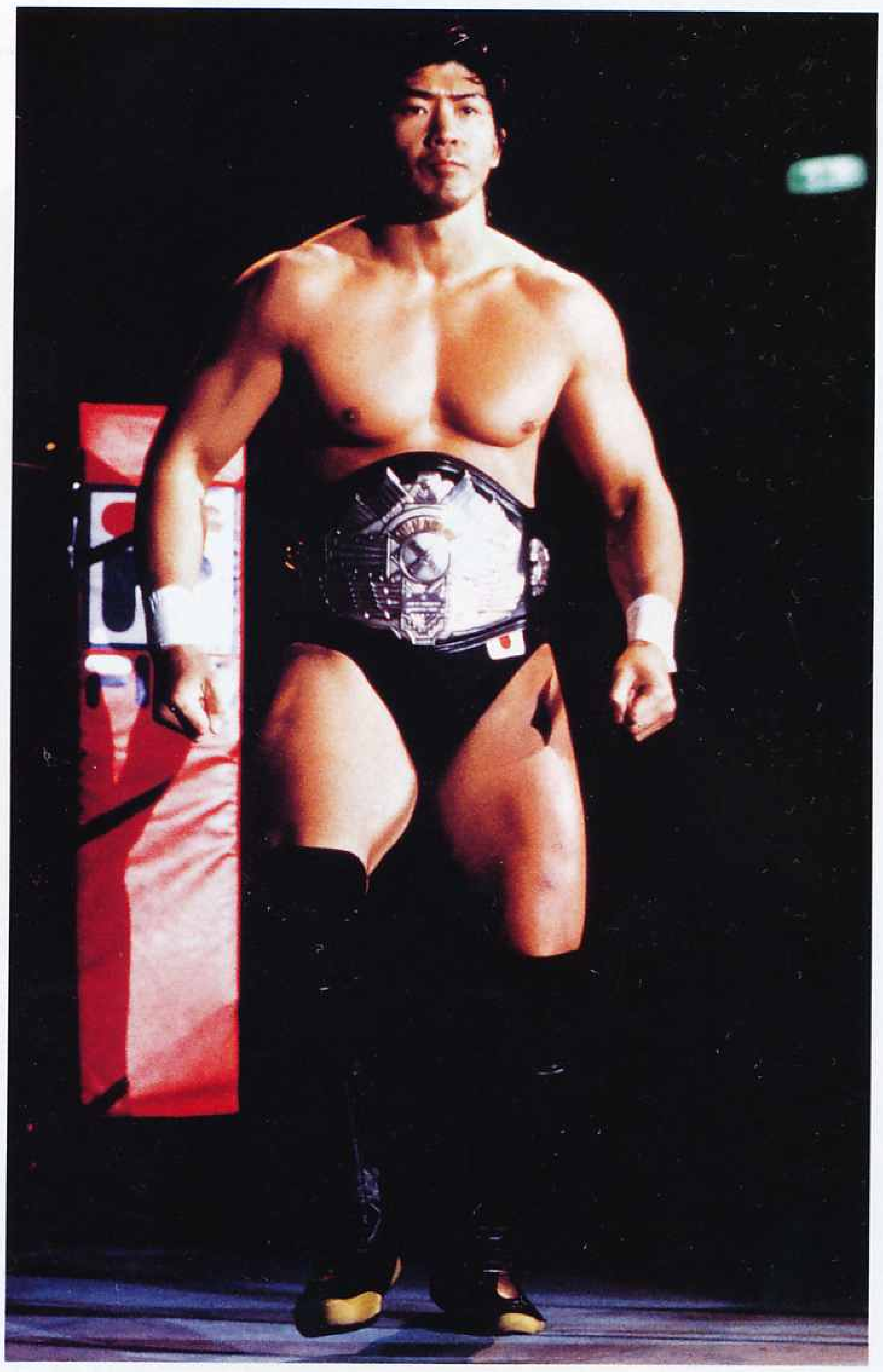
船木　全部わかります。そういった意味では、俺、寝てる時の夢って凄く好きですね。それだけ熟睡してないって証拠だと思うんですけど。

――ある人の話によると、夢ってほとんど現実になってるらしいですね、形を変えて。ホントか嘘か知らないけど。

船木　ああ、そうですか。なったとしたらチョット怖いですね。

――現実になったら怖い夢でも見たんですか？

船木　おととい見た夢なんて、凄く変でしたよ。俺が試合に勝ってサマーソルトやりますよね。「今日はちょっと体が重いな」って感じの時に、パッて飛んだんですよ。そしたら、とたんにドーンッて首から落ちて負傷するんですよ、俺が。で、廣戸レフェリーと梅木レフェリーがバッと介抱しにきて担架で運ばれる時に、なぜかパンクラスのリングなのに**新日本みたいに柵があるん**ですよね。



――あ、フェンスがある（笑）。

船木　そのフェンスのところに、なぜか襟のところが黒い、**金のガウンを着た近藤**（有己）がやってきてね。

――ガハハハハ！　金のガウン！

船木　そこで、柵をガチャッて開けて俺は運ばれていって、行ったところが、凄くデカい体育館なんですけど、そこの会場を見下ろすような高い席の裏にドンッて置かれたんですよ。で、廣戸レフェリーがなかなか治療を始めてくれなくて、そうこうしているうちに**アントニオ猪木が出て来て、バレーボールをボンボン打ってくるん**ですよ。

――ガハハハハハハ！　なぜだ!!

船木　なんでこの人、こんなことするんだろうと思って。で、梅木に「出せ、そいつを」って言って。で、その人は出されていきました。**そういう夢を見ました**（笑）。

――いやー、それは猪木さん流の今の船木さんへの檄なんですかね？　それとも……。

船木　俺が猪木さんのことをそういう風に見てるんじゃないですか？（笑）。

――はっはー。面白い！　なんかね、船木さんが考えてることって専門誌のインタビューなんかに出てるのと絶対違う部分で埋蔵量を感じるんですよ。だから脳ミソの話とか夢の話とかしたら、ちょっとは読者に伝わるんじゃないかなと思って、脳ミソの話をしてみました（笑）。

船木　あとですね、なぜか中学校時代に好きだった女の子が……。

――かわいいんですか、その子！

船木　……かわいい、かわいくないっていうのは俺の好みですからね（笑）。

――かわされた（笑）。



FUNAKI

プロレスの持つ爆発的なものを最初からやっても、他の団体にはかなわないですよ

船木　で、この世の中のどこかの中学校にその子がいるっていう情報を聞いたんですよ。実際にその中学校に行ったら、いるんですよ。俺はもう年食ってるんですけど、その人は昔のまんまの状態でいるんですよ。で、放課後になって新宿にいて、新宿の街で久しぶりに声をかけて話をしている時に、しきりに**「やりたいんでしょ？」**って言うんですよ。

——実にいい展開ですね（笑）。

船木　そればっかり聞いてくるんですよ。で、俺は自分の指輪をその子に見せて、「俺はコレ（既婚）だから、絶対そういうことはしない。ただ、話をしたいだけなんだよ」って答えてね。**夢の中でも潔癖でありたい**っていう自分がいましたね。やっぱり浮気とか、そういうのも興味はあると思うんですよ。あると思うんですけど、それをやっちゃうと**「俺じゃなくなる」**っていう使命感が夢にまで出てきてるっていう。

——その使命感っていう部分での「俺が俺でなくなる」とか、あるいは「パンクラスがパンクラスでなくなる」とかね、そういうのはイメージとしては伝わってくるんですけど、根っこというか芯の部分というのが、茫洋として掴みきれないんですよね。

船木　**芯はないですよ！**

——エ！　芯はない!?

船木　ええ。ハッキリ言って、芯っていうのはないと思いますね。**まったくの無形**で、それでとりあえず俺は今、こういう「売り」じゃないですか？　いかにも**求道的で真面目な**

Masakatsu Funaki 針の穴にラクダを通せ！'97

ことしか考えなくて、っていう感じの。

——はいはい。つまり、ｎＷｏのファンとかにしてみると、つまんない奴！と思われるタイプですよね（笑）。

船木　でも、それが単なる一面でしかないというのは事実ですよ！

——じゃあ、今見せてる船木誠勝以外の船木誠勝もあるわけですね。

船木　あるんですけども、**出てないだけ**なんですよ。

——それはやっぱりタイミングの問題ですか？

船木　どうなんでしょうね。見たくないものがあると思うんですよ、ファンの人が。こんな船木は見たくないなっていう。そういうのを出してないだけなんだと思いますよ。実際は17～18歳の頃は**毎晩毎晩、六本木**ですから！

——ガハハハハハ！　何も毎晩行かなくても（笑）。

船木　そういう時代を経験して、今の僕ですから。それは一番、**鈴木（みのる）**が知ってますよ。その頃のパートナーでしたから。

——やんちゃコンビ！

船木　そうですね。

——だから、もの凄くはしょって言っちゃうと、僕なんかは今のパンクラスを見てると、やんちゃな船木さんとか、やんちゃな鈴木さんを見たいと、どうしてもそう思っちゃうんですよ。

船木　あの、もうちょい時間かけると出てくるかもしれないですよ。っていうのは今、新人選手がバーッと上がってきてるじゃないですか。で、今度俺たちが追い詰められてくるんですよ。そうすると俺らが**ルード**になる必要があるんです。

——スペイン語で来ましたね（笑）。

船木　ええ（笑）。だから、そういった意味では今度の**対近藤戦**（４・27 ＮＫホール＝タイトルマッチ）っていうのは、もしかしたらアイツのほうが**イイ者**に見えちゃうかもしれないですよ。

——うん、だから非常にルード的な部分っていうのは、多面的な船木誠勝の中の一面として絶対あると思うんですね。でも、それが見えないというか、見せないのが、パンクラスの戦略なのか、船木さんの戦略なのか。

船木　戦略じゃないですね。……まず、**「脱プロレス」**っていうところから始まってますから、そういった意味ではプロレスが持ってる**爆発的なもの**をまずは抑えて、綺麗な形にカッコよく、プロレスっぽくなくっていうところから始まってますから。

——そのプロレスの持つ爆発的なものっていうのは船木さんの中では悪いことなんですか？

船木　いえ、悪くはないです！　悪くはないんですけど、それを最初からやっちゃうと**他の団体にはかなわない**っていうことなんですよ。

——はっはー、なるほど。

船木　で、やっぱり自分たちは**リアリティ**ってものを一番追及してるじゃないですか。それが作られて出てきたものじゃいけないんですよ。自然に回りの状況の中で、そういった爆発的なものが出てきてくれたら最高だなと思いますね。で、**作っちゃう**

FUNAKI

人間がどこまで飛べるんだろうと、3階から飛び降りたりしてましたね

とパンクラスのリングの上では嘘なんですよ。

――その「嘘」ということに関しては創刊号のインタビューでもちょっと触れたし、今度ジックリ話したいテーマなんですけど、まずその爆発的なものってことで言えば、この間の名古屋大会（3・22）を見てて感じたことがあるんですよ。第1試合から第4試合あたりの試合までは、凄く静かなイメージだったんですよね。「もっとケンカ腰でいかんかい、ワレ！」なーんて、ド素人みたいな感想を持ったんですけど、いけませんか？（笑）。

船木　それはやっぱり、**あいつらの性格**でしょうね。性格と、あとは……綺麗でありたいっていうのはあるんでしょうね、どこかで。

――綺麗でありたいっていうのは、船木さんの影響なんですかね？

船木　どうでしょう？　プロフェッショナルっていうのを意識し過ぎてるんじゃないですかね。**プロは汚い試合をしてはいけない**んだ。普通の人ができない技術やスピードとかを見せる。そういった思いが先行してるんじゃないですか。あとやっぱり、俺から見ても、その第3試合ぐらいまでの選手たちは、性格的にもの凄く**大人**ですよ。逆に言えばね。ほんとに、こいつらこんな歳でこんなに人間ができちゃってていいのかなって思うくらいですね。

――そういう人たちと付き合ってて、船木さんは面白いですか？

船木　面白いですねえ。逆に俺がいろいろ経験してきた**バカなこと**ってあるじゃないですか。**やつらは経験しないで、今の俺の性格**してるわけですよ！　今の俺ですよ！　それってスゲエなと思いますよ（笑）。

Masakatsu Funaki 針の穴にラクダを通せ！'97

――うらやましい？（笑）。

船木　俺は逆に、そういうバカなことやっといて良かったなって思いますね。だからバカなことを「やれ」って言うんですけど、**やんない**んですよ。

――へえ～、へえぇぇ～。

船木　それって新人類だと思います！

――新人類！（笑）。

船木　いや、ホントそう思いますよ。「やれ」って言われたら「わかりました。さ、船木さんのお墨付きだから女抱きに行こうか！」ってなるじゃないですか。ならないんですよ……っていうか金がないのが原因だと思いますけど（笑）。実際、当時の俺の場合はやっぱり金もある程度あって、**日曜になるとそれにつぎ込んでましたから**ね。日曜になるとハチ公の前で待ち合わせて。

――なんで日曜日なんですか（笑）。

船木　いやー、やっぱり月曜から土曜は練習でしたから。マジメでフザケてましたから。睡眠時間が毎日5時間でしたよ。彼女の家から新日本の道場に通ったりしましたから（笑）。

――だから、ハチャメチャな部分はあったんですよね。

船木　やってましたね。酔っ払って**飲み屋の3階から飛び降りたり**（笑）。

――なにも3階から飛び降りることはないじゃないですか（笑）。

船木　いや、2階からだったら誰でもできそうじゃないですか。3階っていうところに人間のその……どこまで飛べるんだろうっていう（笑）。

――試しますね（笑）。

船木　そういう時に限って、捻挫さえもしないですからね。ほんとに**20歳までは、やっぱり命惜しくなかった**ですね。なんでか知らないですけど。

――で、今の話じゃないけど、プロレスラーとかプロの格闘家というのは、私生活でもハチャメチャさがあっていいし、むしろそれがリング上で、いい意味でのガムシャラさとなって出れば、逆にプラスだと思うんですよ。若い頃はとくに。でも、パンクラスの前座というか若手選手の試合を見てると、何か「熱」とか「血のたぎり」みたいなものを感じないんですよね。

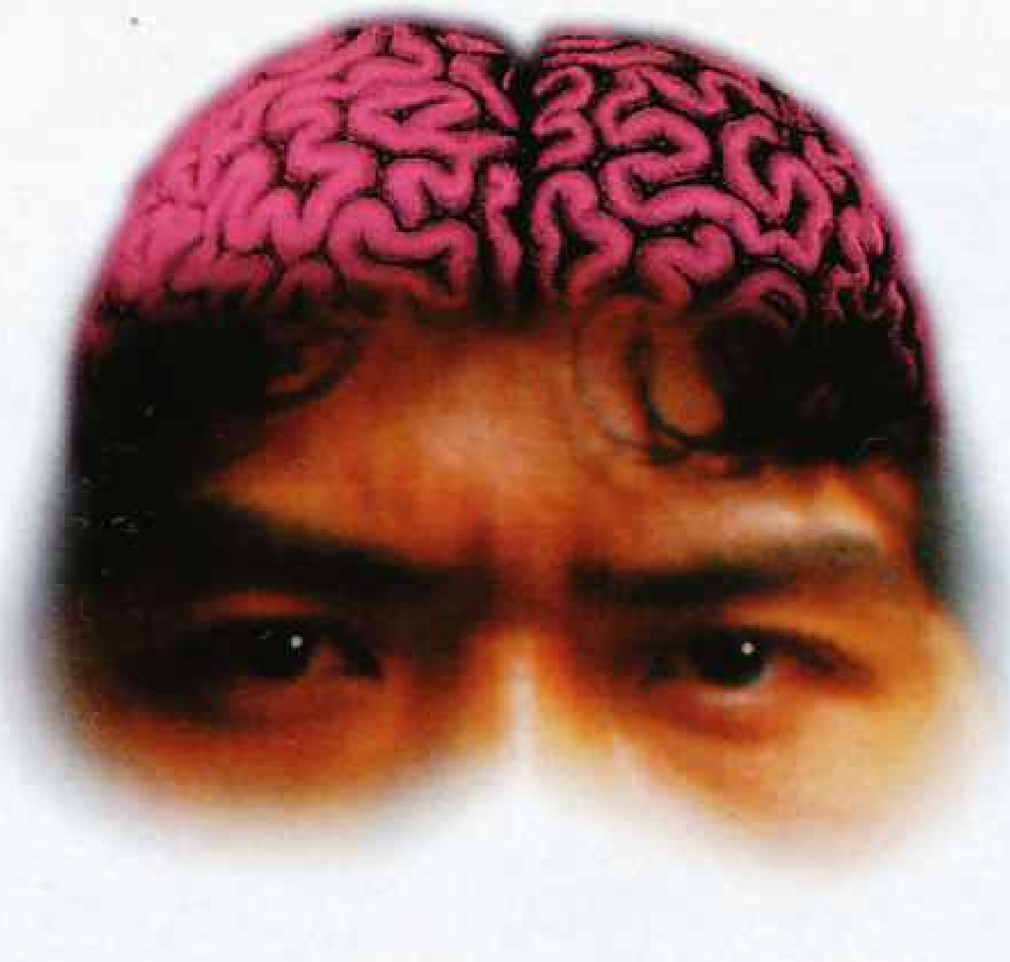
船木　そうですねえ、あいつらはあいつらなりに一生懸命やってるとは思いますけど。

――もちろん一生懸命じゃないと困りますよね。

船木　なんなんでしょう？　だから**渋谷（修身）**なんていうのは、強い選手とやらないと本領を出さないですよ。前座の時というか第1試合、第2試合で普通の選手とやる時には、ほんとに目立たない選手だったんですけど、（バス・）ルッテンなんかとやると、実は渋谷ってこんなに強かったんだって、そういう引き出してくれる奴がいないんですよ。いないし、自分たちだと引き出そうとしないんですよ。いわゆる守りでしょうね。でも格闘技ってそこから始まってるんですよね。

――守り？　護身術ってことですか？

船木　護身術ですから、もともと。そういった意味では、意識していながらもプロフェッショナルっていう部分で成り切っていないんでしょうね。だから、まだ**周りに見られてるっていう意識がない**んですよ。いかにして自分が勝とうかっていうところしか見てないから、一見消極的に見えると。積極的過ぎると、今度は墓穴を掘って負けるかもしれない。その**負けが怖い**んですよ。若い奴らはやっぱり勝ってナンボの世界ですから。パンクラスの中では。勝っていかないと上に上がって来れない。で、上に行かないと試合が組んでもらえないっていうのがあるから、まずは勝つことだけを狙って、そういった保身の方から入っていく。だから、**つまらない試合**になっていくんでしょうね。



――あ、つまらないという言葉を先に言われちゃいましたね（笑）。僕は言ってないですからね（笑）。

船木　みんな、だから**「達人」**になっちゃってるんですよ。だから……怖いですね、そう考えると。「達人」が全員揃っちゃってるっていう。

――そうですよね。だから僕は、プロレスや格闘技って、スポーツとかエンターテインメントという衣を一枚剥ぐと、「喧嘩」という人間の持ってる闘争本能をズバリと突いてくるジャンルだと思うんですよ。で、「喧嘩」は勝たなけりゃいけないわけだけど、まず「喧嘩」には負けることを恐れない勇気が一番大事で、その勇気を観客に一番伝えられるのが、「気迫」を全面に出すってことだと思うんですよ。つまり、負けることを恐れない勇気、気迫を一番全面に出せるのが『前座』という世界だと思うんですよね。

船木　あの、負けることを恐れないっていうか、勝ちにいって当たり前だと思うんですよ。

――うん、で、その勝ちにいって当たり前の世界が、さっき言ってた「達人」の世界と結び付いてしまうと、やっぱりパンクラスの中でも『前座』っていう概念はなくなっちゃいますよね。

船木　なくなっちゃいますね。**ただの第1試合、第2試合**になっちゃいますね。

――今、だからプロレス界全体を見渡してみても、『前座』っていう世界がスッポリ抜け落ちちゃってるような気がするんですよ。



船木　それは**鈴木が一番言ってますよ**。その話を鈴木としたら、凄く気が合うと思いますよ。

――あ、鈴木選手が（笑）。船木さんは、そんなには感じてないんですか？

船木　俺は全然感じないです！（キッパリ）。とりあえず、**メインが良ければすべてヨシ**って思ってますから（笑）。

――ガハハハ！　なるほど！

船木　だから、最終的には、まあ、つまんない試合がいろいろあって、その中で、一興行で**一個だけ**素晴らしいものが提供できれば、それでお客さんを帰らせてあげればいいなって思ってますよね。

――じゃあ、その役割は今は船木さんが担ってると思ってるんですか？

船木　俺はそう思ってます（キッパリ）。

――こんなに面白い世界を他の選手に渡してたまるかって感じ？

船木　いやー、渡せるもんなら早く渡したいですね。ほんとに、もう、言いましたもん、俺。控室の中で。近藤が試合後のマイクで言ったじゃないですか。「善戦なんて期待しないでください！」って。リング上であいつがそう言ってる時に、俺、控室でそれに答えてるんですよ。「わかった、じゃあ勝て」って。「俺が時代を変えてやる！」、「よし、変えてくれよ。俺は早く引退したいんだよ」って。

――ハハハハハ。引退して早く六本木に行きたいんだ！って（笑）。ああ、でもそれ、面白いですねえ。

船木　でも、でもですよ！　実際問題そうはいかないですよね。**俺は負けても引退しないです！**　ほんとに。もう危なっかしくてしょうがないですもん。あいつに任せたら。それこそパンクラスがムチャクチャになっちゃいますよ。

――その危なっかしいっていうのは、どういう部分でですか？

船木　自分のことしか考えてないです



鈴木が舵をとるようになると、反発する奴が出てくるでしょうね

FUNAKI

から、基本的にね。周りが見失っちゃうと思います。

——近藤選手っていうのは、「達人」の群れの中でやっぱりちょっと外れてる選手なんですか？　他の若手と欲が違うなと、この間感じたんですけど。

船木　外れてますね。第1試合にいりゃあいいのに、あいつもうメインに上がって来ちゃいましたから。だから、**パンクラスってそういう団体**なんですよね。ああいう奴が本当は第1試合とかにいりゃあいいんですけども、うちじゃドンドン上に上がって来ちゃうんですよ。

——そこがパンクラスの面白さでもあり、ある意味でつまんないとこでもありますよね。船木さんは、近藤選手なんかとはやっぱりもっと差があったほうがいいと思うんですか？

船木　どういう分野でですか？

——実力もそうだし、イメージ的にも、もっと開きがあったほうがいいと考えてます？

船木　まあ、別に。**俺は俺**ですから。

——ガハハハハハ。

船木　まあ、それこそ……1人でも食っていけますからね。それ言っちゃう

とおしまいなんですけどね（笑）。

――そりゃ、おしまいですよ（笑）。

船木　まあ、だから近藤とかみんなやっぱり慕ってきてくれるんで、凄く重荷ですよ、ホントは。だから、1人で自分のことだけやってれば、どんだけ楽かわかんないですよねぇ（笑）。だけど、俺はいわゆる体育会系ノリの、（テープレコーダーを指さして）これがビデオデッキだって言ったら、ビデオデッキになるんだよっていう……。



――白が黒になる世界。

船木　そういうのは嫌なんですよね。

――ああ、なるほどね。

船木　だから、逆に俺に負担が来てると思うんですよ。俺がワンマンになっちゃえば、そりゃ楽だと思うんですけども、そういう団体はいままでいっぱい見ましたから。

――そういう団体は居づらいですか？

船木　居づらいし、そのワンマンな人間が他の人間の個性を奪っちゃいますから。

――でも、そこで敢えてワンマンになることによって、見えてくる世界もあるんじゃないですかね。

船木　ワンマンは1人いるからいいんです。

――鈴木選手？（笑）。

船木　そうです。

――じゃあ、鈴木選手がトップになった方がいいということですか？

船木　トップになったらば、おそらくパンクラスは割れますよ、また。だから、俺っていう人間が、今、邪魔でしょうがないと思うんですよ、あいつにとってみれば。で、まあ鈴木が周りの個性を引き伸ばさないっていうことはないとは思うんですけど、やっぱり鈴木は鈴木流っていうのが凄く好きで、**世界一**だっていう自負がありますから、残された若手たちが、**鈴木が舵を取るようになると、反発する奴が出てくる**と思いますよ。思いっきりそれに従う奴と思いっきり反発するやつと。だから、早く**俺がいなくなったほうが面白くなる**んじゃないですかねえ（笑）。

――ああ、下が反発してきた方がグチャグチャになって見てる方は面白いですよね（笑）。

船木　面白いと思いますよ。鈴木がトップになったら、俺の……今のパンクラスとは全く別になりますよ。

――船木さんがそういう爆発力のある世界にもって行こうという考えはないんですか？

船木　**ないですね！（キッパリ）**。鈴木がいるから。

Masakatsu Funaki 針の穴にラクダを通せ！'97

――じゃあ、逆に言えば鈴木さんがいなくなったら、船木さんの世界オンリーになるわけじゃないですか？

船木　そうですね。

――そうなったらそうなったなりに面白くする展開とかを考えてると。

船木　**考えてないです！（凄くキッパリ）**。

――そんなキッパリと（笑）。そこら辺が、非常に入り組んでて面白いなぁ。

船木　なんなんでしょうね？

――いや、やっぱり船木さんの脳ミソ中心に回ってますよ、パンクラスは。

船木　だから、今回、**道場が二つに分かれますよね**。で、片方の道場長が俺で片方が鈴木になるじゃないですか、そういった意味では鈴木が育成する若手たちに反発する者が出てくる可能性がありますよね。そういった意味でも**道場は早く分けたくてしょうがなかった**んですよ。

――なるほど。この間の名古屋大会見てて、例えばパンクラスが、「馬場、飛べ～！」とか「猪木を出せ～！」とか、そういう観客の前でやったら果たしてどうなるのかなっていう想像をしてみたんですけどね（笑）。

船木　何の反応も示さないで終わっちゃうんじゃないですか、多分（笑）。それこそ、東京ドームで、全団体が集まって興行したりしたら、一部にはパンクラス・ファンがいるからいいと思いますけど、他の団体のファンの人達にはやっぱり**ションベン・タイム**になるかもしれませんね。

――休憩（笑）。で、そうなると船木誠勝の世界っていうのは、ある意味、凄く地道に存在していくしかないわけですよね。で、それをブッ壊しにかかるのが鈴木みのるということですか？

船木　そうですね。鈴木のほうがよっぽど**エンターテイナー**ですよ。

――あ、そうですか。僕なんか船木さんのほうが、奥深いところでエンターテイナーだと思いますけどね。

船木　何なんですかね。オレは**マニアック**な方なんですよね。外見はエンターテイメントなんですけど、中身はメチャクチャ、マニアックなんですよ。だから、みんな外見から入ってくる人たちは、後悔してますからね。特に女性ファンとかは。

――ガハハハハ、後悔しますか（笑）。

船木　なんか優しそうに見えるじゃないですか。花束持ってったら、抱いてくれそうな……なんて言うか……。

――何を言ってるんでしょうか、この人は（笑）。

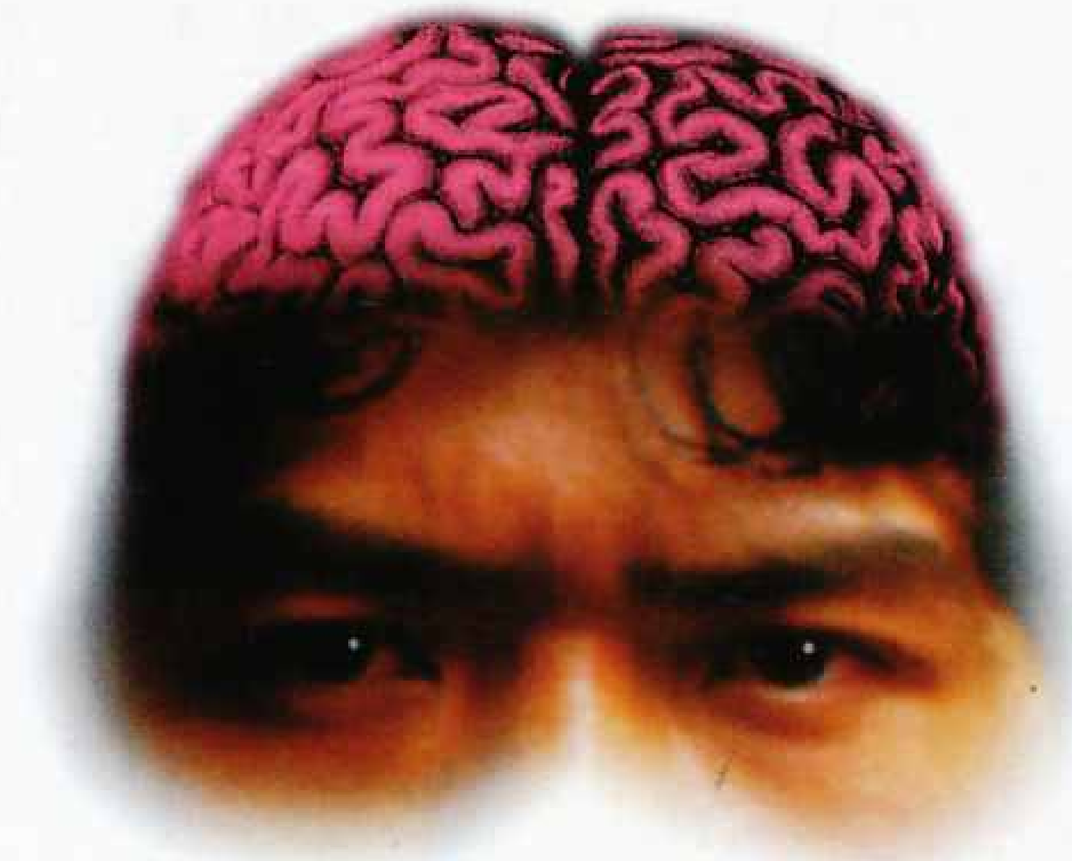
船木　でも、ホントはそういうことするのは、鈴木なんですよ。見た目じゃないんですよね（笑）。

――船木さんのそういう感性の成り立ち方っていうのは子供の頃から？

船木　ありましたね。自分の妹が結構太ってたんで、いつも一緒に歩く時は**5m離れて**歩いてましたから。

――ガハハハハハハ。あ～あ。人を寄せ付けない人（笑）。

船木　ええ。あと、1回両親とケンカして、親父に向かって「俺っていう人間は必要ないのか？」っていう話になって、「そうだ」って言われたんですよ。それで、もう、**包丁持って、指切った**ことありましたね。



―ベッ！　指を切った！

船木　死んでいいんだなって。指、ズバッて切ったんですよ。（親指を押さえて）ここら辺スパッと。**ブワーッと血が流れてきた**途端に、親父がバッっと来て（包帯を巻く仕草）叱りもしないで、応急手当をしたんですよ。

―血を止めてくれたんだ。

船木　ということは、まだ俺は生きてていいんだなと。

―かぁ〜。激しいですね、船木さんの世界は（笑）。

船木　**冗談ないですからね。**

―……ムチャクチャ難しいですよ。船木さんって、衣まとってるように見えてまとってないし、まとってないように見えてまとってるし、難しいですよ。でも、ファンの想像力とか愛着は、多分置き去りにされちゃうでしょうね。

船木　**一生ついてこれない**と思いますよ。

―ふ〜ん。……難しいんだなあ（笑）。

船木　でも、**中卒**ですからね。

―あ、僕も高校中退の学歴は中卒です（笑）。寺尾中学中退の猪木さんにはかなわないですけど（笑）。

船木　あれですよ、通信簿ヒドかったんですよ。ホント極端にオレの性格を表してるんですけど、1と2でバーッときて、英語だけ4なんですよ。英語だけは必要だと思ったんですよ、**プロレスで海外に行くつもりだった**から。それ以外は勉強しなくていいって思ってたんですよ。

―体育は？

船木　体育も3ですね。ヒンズースクワットとか腕立て伏せとかは、メチャクチャやってたんですよ。球技とかって、あれは全然意味ないですね。

―意味ないですねって、船木さんにとってはでしょ（笑）。

船木　でも、サッカーやったら人の足蹴っちゃうし……バレーボール叩いたら体育館の端まで飛んじゃうし、野球はもう、当たればホームラン、当たらなきゃ全部三振ですから。

―さしずめ怪童ですね。ところで、若手選手とたまごっちの話とかしないんですか？（笑）。

船木　たまごっちは……しないですね。あの、俺と付き合うと居心地いいらしいですね、みんな。息苦しいんですけども、なんか一緒にいちゃうらしいですね。向こうから、絶対「メシ食いに行きましょう」っていうのはないんですよ。俺から言わないとないんですよ。逆に鈴木は、若手と同じ立場でいられるんですよ。それこそ、たまごっちの話ができちゃうんですよ。俺、たまごっちなんか全然興味ないですから。難しい話ばっかりしてるんですよ、俺。どんどん喋っていって時間が経っていくと、若手選手はみんな**脳が酸欠**になっていくみたいですよ。

Masakatsu Funaki 針の穴にラクダを通せ！'97

―今まで船木さんがいた団体のトップどころの選手たちは、船木選手と付き合ってると酸欠状態になってたんですかね？

船木　猪木さんなんか相当嫌だったんじゃないですか。

―前田さんも？

船木　前田さんも、やっぱり別の意味では、俺、反発もしなかったし、何考えてるかわかんないし、それこそ**宇宙人**っていうアダ名つけられてましたからね。

―TAKAみちのくと一緒ですね！（笑）。

船木　「あいつら何考えてるのかわかんない」って。自分たちが育ってきた年代の人種じゃないことは、確かにわかってたみたいです。俺、部活入ってても、やっぱり別行動とってましたからね。

―やっぱり単体なんですね、船木選手は。

船木　**単体ですね。**だから周りの友達なんかも、息苦しかったんじゃないですか。

―人々を酸欠状態にさせる男（笑）。

船木　俺は普通の学生服で普通の生活してるんですけど、**ツッパリ**とかよく便所にたまってるじゃないですか。

―ツッパリという単語が出ましたか！（笑）。

船木　で、俺が便所に入って話はじめると、ツッパリの話が止まっちゃって次第にいなくなるんですよ。別に俺、暴力振るったり、そういうことしないんですけど、単純に「なんでそういうふうに（学ランの襟を）高くするんだ？」とか、「**なんで**（学ランの裏地に）**竜が入ってるんだ？**」とか聞くから（笑）。

―また淡々と（笑）。

船木　「そのソリはどういう効果があるの？」とか。あと、「ドス効かせて喋るのはどういう効果があるのか」っていう質問をしちゃうんですよ。

―ガハハハハハ！

船木　結局、なんの意味もないっていう答えが出ちゃうんですよ。

―でも、とりあえずハッタリは効くじゃないですか。

船木　俺には全然、威嚇になってないんですよ。「それやってもカッコイイとも思わないし、**怖くもないよ。**だって、実際にこうやって喋ってるじゃん」。そういう感覚なんですよね。

―でもね、船木さんは怖くなくても、周りの人たちは怖いわけじゃないですか、そのツッパリが威嚇をするとね。竜の刺繍を見たら、ほんとにビビる人はいるじゃないですか。

船木　**ま、そんなのただの服ですけどね**（笑）。

―ガハハハ。いやいや、ソリ入れたのを見ればビビる奴らのほうが圧倒的に多いから、ツッパリはそういう格好をするわけでしょ。

船木　でしょうね。

―それは、船木さんがさっき言ったプロレスの爆発的なものっていうのと結びつきますよね。要するにプロレス

怖いなって思うのは、心の中の怖さですよ！　そういう人間の片鱗を見たら怖いですよ

FUNAKI

F

界っていうのは、ソリ入れた世界とか竜の刺繍の世界が横行してる世界じゃないですか。

船木　そういうの**ダメ**なんでしょうね。俺、全然、そういうのは**爆発してるとは思ってない**ですから。**ファッションだけだ**と思ってますから。

――ファッションだけ！（笑）。ホントに淡々とした顔してキツイこと言いますよね（笑）。

船木　だから嫌がられるんでしょうね。

――そうでしょうね（笑）。

船木　実際にやっぱり、俺が見て怖いなって思うのは、**心の中の怖さ**ですよね！　そういう人間の片鱗を見たら、やっぱり怖いなって思いますよね。やっぱり、俺が一番怖いのは死んだ後に、魂としてこういう場所にいれたらいいんですよ。

――へ？　なんだか全然わかりません。すいません（笑）。

船木　あの、周りの人に見えない**透明人間になれればいい**ってことなんですよ。

――はら～。

船木　死んで、実体がなくなっても、こういうところに、例えば「山口さんはどうしてるかな」って、こう、山口さんの横に**フッと**来れるようになったらね。

――居酒屋ゆうれいじゃないんですから（笑）。メチャクチャ怖いですね、それは（笑）。

船木　そういうふうになれたら、俺、いつ死んでも構わないです!!

――はらら～。



船木　死んだら、それが出来ないいんであれば、ホントに何もなくなって、考えることすらもなくなるっていうのが一番怖いですね。

――それだったら死にたくない？

船木　だからそれは、死ななきゃわかんないから一番嫌なんですよね。でも、例えば坊さんとかが、「いや、それは魂に戻って、行きたい所に行けて、自分の子供の将来とかも見れるんだよ」って言ったら、「ああ、なるほど」って思うんですけど、でも、**その坊主って死んだことないじゃないですか**。だから、嘘かホントかわかんないんですよね。

――坊主は死んだことがない（笑）。

船木　だから、死後の世界まで語れるわけがないんです。

――船木さんが、今言ってたような、言ってみれば精神的な世界と、竜の刺繍の世界とかっていうのは、僕は何かしらの接点が、こう、グルッと回った時に……。

船木　（遮るように）**ヤクザの人と**かいるじゃないですか！

――そりゃいますよ。

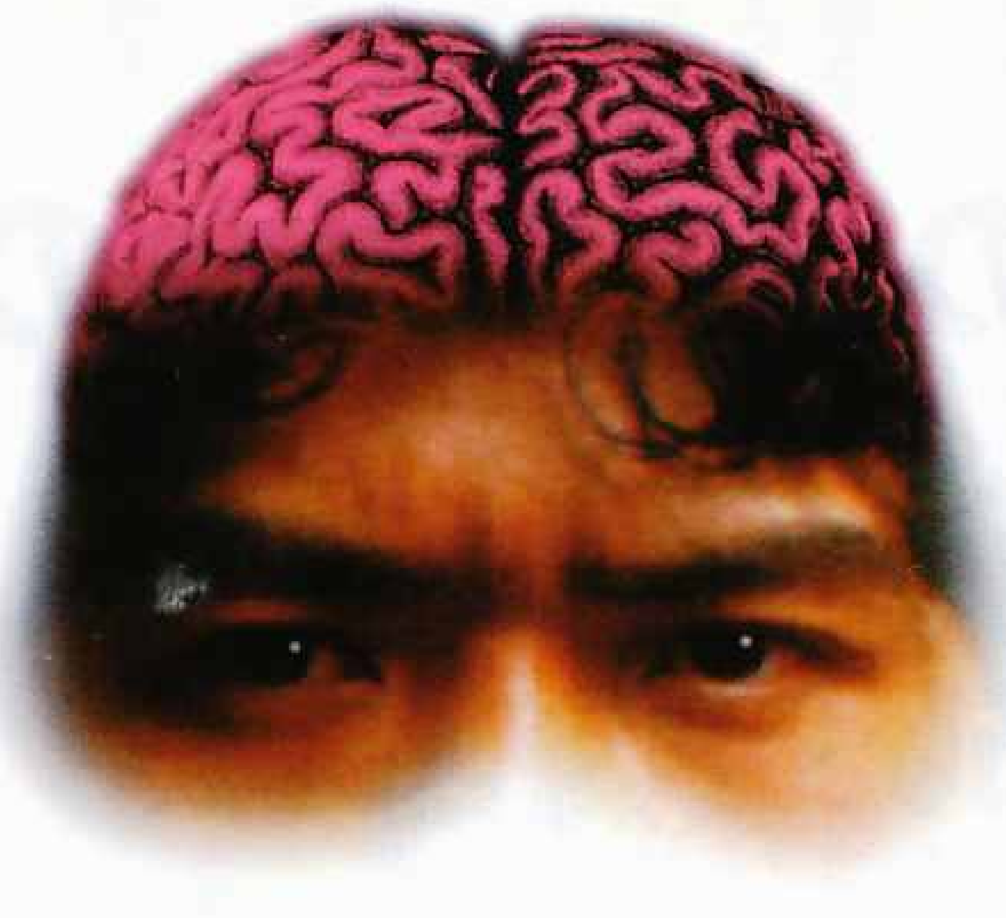
船木　むかし、飲みに行った時に、ヤクザの女とヤクザのケンカがあったんですよ。柳澤（龍志）と2人で、「もしも、被害がこっちに来たら、まずお前が突進しろ。で、**俺がスリーパーで落とすから**逃げようぜ」って。

――ガハハハハハ。落としますか。

船木　それで、そうこうしてるうちに、**親分**が入って来たんですよ。で、そのお付きの人とかも来て、で、たまたま俺の横に来たんで、**「あの、ご職業は何やってるんですか？」**って聞いたんですよ。「何に見えますか？」って言うから、**「極道屋さんですか？」**って答えたら、「ああ、そうですよ。おたくは何やってるんですか？」って聞いてくるから、**「格闘技屋さんやってます」**って（笑）。

――ガハハハ。ハードボイルドだなぁ。

船木　で、結構そういう話をしているうちに、その親分が俺の顔を知ってたんですよ。で、「格闘技雑誌で見てるよ。ウチの息子が、今、国士館で柔道やってるんだ」って言うんですよ。で、一気に意気投合しちゃって**寿司おご**



ってもらって朝まで一緒でしたよ。だから、ソリとか関係ないんですよ。指なくても、話して入っていけば同じ人間なんですよ。外見だけで怖がって入っていかないから、向こうもやっぱり**威圧しちゃう**と思うんですよ。でもやっぱり、自分から「ご職業何ですか?」っていくと、ちゃんと答えてくれますからね。でも、つい数秒前には**ブッ倒して**2人で逃げようぜって話をしてたんですよ!

——ヒドイ!

船木 で、なんでそのアレを変えたかっていうと、相手の人数が多くなっちゃったからなんですよ。これは仲間になるしかないなって(笑)。

——それは一番強いですね(笑)。

船木 最初は1人ですからね。1人だったら、こっちは2人だから大丈夫だなと思ったんですけどね。3人、4人だったら絶対不利じゃないですか。もしかしたら、**拳銃**もってるかもしれないし。

——武器が出てきますからね、あちらの人は(笑)。でも、その船木さんの世界っていうのは、興行とかパンクラスという団体を運営していく時にね、ある意味で邪魔になってる部分ってあると思うんですよね。それはどういうことかというと、要するにさっき言った極道屋さんの威嚇する部分……。

船木 それがない!

——うん。それがないんですよ。で、だから船木さんの世界を理解したいと思ってるファンだけしか、やっぱり集まって来ないですよね。

船木 そうですね。

——船木さんはそれで果たしていいのか悪いのかっていうところに……。

船木 (間髪入れずに)**俺はいいです!**

——あ、船木さんはいい。

船木 ただ、やっぱり尾崎社長とかはもっと盛り上がって欲しいなって思ってるみたいですけどね。

——で、パンクラスの会場に来る人は、要するに船木さんの世界というか、パンクラスの世界を非常にみんな理解してると思うんですよ。

船木 ええ。

——だけども、観客の方もやっぱり船木さんの世界に踏み込んでいかないんですよ。

船木 いけないですね。

——うん、だから、何かこう、お互いが踏み合わないっていうか、そういう関係に見えちゃうんですよね。

船木 でも俺は、それは……**凄く好きですよ。**

——気持ちいい?

船木 はい。楽ですよ、俺は。逆に踏み込まれると、**ほっといてくれ人間**ですから。

——「ミスターほっといてくれ」ですもんね(笑)。

船木 嫌なんですよ、あまりにも中に踏み込んでこられちゃうと。

——なんで第1試合、第2試合でつまんなかったら、「つまんねーぞ!」って野次を飛ばさないのかっていう単純な疑問が出てくるんですよ。それは多分、船木誠勝の世界っていうのを壊したら……。

船木 怒られるんじゃないかって(笑)。

——うん、へそ曲げるんじゃないかって(笑)。船木誠勝やパンクラスの世界をわかってないなと思われるのが嫌というか。

船木 でしょうね。実際そうですよ。

——そういう意味ではパンクラスのファンは臆病ですよ。そこで、船木さんは、ガーッと野次を飛ばされた時には、船木さんは「許せない」って思います?

船木 **「うるせーよ!」**って、実際に昔は言ってましたから。

——ガハハハ。だから、観客も多分怖がってる部分あると思いますよ。船木さんの世界を壊すようなことをしちゃいけないって。

船木 何が怖いかっていうのが、凄く不思議……わかんないんですよ。**ソリも入れてないし、服に竜はいないし。**なんでしょう、**ほっといて欲しいんですよ、俺は。**来られると、嫌うんです(キッパリ)。

——来られると嫌う!(笑)。

船木 いっつも、そのパターンですから。女の人もそうですよ。**来ると、全部突き放しちゃうんですよね。**

——実にもったいないです!(笑)。

船木 その代わり、向こうもこっちに来たい意志を持ってて、来たいんだけど、来れないっていうモジモジしてる女の子が凄くいいんですよ。

——はあ。

船木 自分が生きていく上で、負担がくれば**全部切っちゃいます、俺は。**

——でも、凄く大きな部分で負担を背負ってますよね、船木さんは。

船木 どういう?

——うまく言えないんだけど、負担のないように負担を削ぎ落としていきながらも……。

船木 それが負担になってきている?

——うん、それが逆に自分のプレッシャーになって……それに快感を覚えるというか(笑)。

船木 プレッシャーはもう、ないですね。それはありますよ、ダイエットとか通ってますから。自宅でピザが注文できないとか、スーパーマーケットに買い物に行ってもラーメンとかそういったものになかなか手が出ないとか。あと、ビデオ屋さん行ってもエロビデオのコーナーに入れないとか。

——ハハハハハ。……ごめんなさい、今、宙を見つめちゃいました(笑)。でも、どのレスラーよりも自分から負担を背負ってると思うんですよね。

船木 それは、レスラーじゃないから。

——レスラーじゃない!?

レスラーじゃないのに
プロレスの世界にいるから
不思議だし、居づらいですよ

船木　じゃないですか？　**レスラーじゃないのに、プロレスの世界にいるから**じゃないですか。

――はっはー。つまり、船木さんは、さっき言ってた、威嚇のある、竜の刺繍がある世界の中にいるわけじゃないですか。

船木　不思議ですね。

――いながらも、「ほっといてくれ」って言ってる。

船木　そうなんですよ。

――非常に整合性があるように見えて、矛盾してますよね（笑）。矛盾があるから整合性を求めるんだろうけど。

船木　だから、**居づらい**ですよ。

――ガハハハハハ。

船木　ムチャクチャ居づらいスよ。『週プロ』、『ゴング』とか読んでても、**俺のいる場所じゃない**なと思いますよ。

――じゃあ、どこか別に居場所があると思ってるんですか？

船木　別にある……それも……。

――かといってK―1だとか、シュート・ボクシングとか……。

船木　でもないことは、確かですね。**『格通』に載ってるのも、やっぱ違う**なと思いますよ。



――あらら。じゃ、そうなると「船木誠勝の世界」っていう独自の世界しかないですよね。船木さんの生きる世界は。

船木　宗教作りましょうか？（笑）。

――ハハハ、僕は入りませんよ（笑）。

※このインタビューは、まだまだ続きます。読みたい人は「ほっといてくれ」と言わずにP81を今スグ開け！

4.27 船木vs近藤！
TAKAみちのく 衝撃の参戦！

PANCRASE　千葉・東京ベイNKホール大会

（17:00試合開始）


●船木のTAKA参戦へのコメント●


「ずっと他団体からの選手を望んでたんですけど、やっぱりメジャー団体になると、プライドとかもあるし、しかもパンクラスのリングで、パンクラスルールで、となると難しいものがあると思うんです。そこを敢えて、みちのくプロレスの（ザ・グレート・）サスケ選手の『勉強させてもらう』っていう気持ちから出てきてるらしいんで、そういった意味では、いいものをつかませて帰してあげたいですね」

※船木は静かにこう語るだけだが、スタイルがあまりにも違いすぎる団体からの参戦は、伝統的なプロレスからの挑戦状、あるいは道場破りと受けとめている選手がパンクラス内にいないとも限らない。いずれにしても、パンクラスの会場がいつもと違う雰囲気に包まれるのは間違いない！　要注目だ!!

【その他のカード】國奥麒樹真VSバス・ルッテン／渋谷修身VSリオン・ダイク／高橋義生VS長谷川悟史　他

問い合わせ／（株）ワールド・パンクラス・クリエイト
03・3707・4646


山本宜久



Yoshihisa Yamamoto

Yoshihisa Yamamoto 針の穴にラクダを通せ!'97

聞き手／羽賀玄太
interview by Genta Haga
撮影／斎藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

彼（田村）が60分中に3分いい動きを見せたいって言うなら、俺は60分間、ボコボコのシバキ合いを見せる!

前田さんとG・ゴルドーの試合を見て前田さんとはシバキ合いをしたいと思った

Yoshihisa Yamamoto 針の穴にラクダを通せ！'97

（前号からのあらすじ？）
前号で好評を博した田村潔司インタビュー。それに気をよくした羽賀玄太は、今回はその宿命のライバルとも言うべき山本宜久と、リングスの明日について熱く語るべくノコノコ前田道場に出向いた。だが彼は忘れていたのだ。前号で田村戦でヒートアップした山本を「興奮してわけわからん人」呼ばわりしてしまっていたことを——。

山本　興奮してわけわからん人ってどういうことなんですか？

——ギクゥ！

山本　ちゃんと説明してください！

——いや、それはですね、誤解なんですよ！　きっと話せばわかることですから！　あとでちゃんと説明しますから。

山本　ホントですね。

——もちろんですよ！（急に話題を変えるように）そう、先日（４・４）後楽園での対高阪戦はよかったですね！30分フルタイムの熱戦やったわけなんですけど。

山本　そうそう。

——僕の知り合いの女性なんですけど、あの試合を見て、感動して泣いてましたよ（笑）。

山本　ホント？（笑）。

——ホンマ、ホンマ（笑）。

山本　剛が勝ったからじゃないですか？（笑）。

——いやあ、試合がよかったからでしょう。どうですか、ご本人としては。

山本　うーん、そうですねえ。格闘技って本来ああいう感じでしょ？　緊張感がちゃんとあって。あと、お互い動き続けて30分間闘えるスタミナがあってね。きっとあいつも自信ついたんじゃないですか。あいつは30分やったことなかったですからね。

——高阪さんはない……かな。

山本　初めてですね。僕は何回かあるんですけど、ああいう展開で30分闘ったのは初めてですけど。お互い技術を出して、フルタイム闘って、結果は判定で向こうが勝ったんですけど、最後はもう、何にも考えてなかったですね。あいつも目を切ったりしたけど、昔のあいつだったらそこで精神的に負けてたと思うしね。それでも向かってきたっていうのは、凄い嬉しかったですね。なんて言うのかな、お互いのシバキ合いでガンガンやればいいかなって。ああいう試合はもっとやりたいですね。

——いいですねえ！

山本　でも今日はあの試合の話じゃないんでしょ？（笑）。

——はい（笑）。

山本　今日は何の話？

——今日はですね、前回の田村さんのインタビューが非常に評判がよかったんですよ。その中でも特に田村さんから見た前田さん、あるいは田村さんから見たリングスっていうのが面白くて。やっぱり前田さんとかリングスっていうのはいろんな角度から見たら、もっと面白いやろうなあと思ったんですよ。で、ここは山本さんにもぜひ、前田さんのことやリングスのことを聞いてみたいなあと思いまして。

山本　今さら？（笑）。

——今さら（笑）。まずは山本さんがこの世界を志したきっかけは何やったんですか？

山本　ここは前田さんって言わなきゃいけないんでしょうね（笑）。

——いやいやいや（笑）。好きなように言うてくださいよ。

山本　ハハハハ。でも本当に前田さんなんですよ。前田さんのビデオを見てからですね。前田さんの魅力っていったら、感情を前面に押し出して試合をするところじゃないですか。そういうのって僕も好きだしね。

——前田さんのビデオを観たのは第二次ＵＷＦぐらいですか？

山本　前田さんがＧ・ゴルドーとやった試合かな？　その試合のビデオを観て、前田さんとシバキ合いをしたいと思ったんですよ。この人はいったいどのくらい強いんだろうと思って。俺が測定してやろうと思って。

——命知らずの素人ですね（笑）。

山本　で、高校を卒業して、一回ＵＷＦに入って、ケガで辞めて、その後バイトとかしてたんですけど、前田さんが新しくリングスを旗揚げするってことで、もういっぺんやってみたいなあって思って。

——でも、それはケガとはいえ、挫折感はあったでしょう。

山本　そうですねえ。やっぱり、あのまま終わっていたら負け犬じゃないで

YOSHIHISA YAMAMOTO

すか。だから、あの時は精神的な部分で弱かったんだと思いますね。

――僕が山本さんの試合を見てきて思うのは、山本さんはきっと最初から精神的に強かったわけではなかったんやろうなと。でも、例えばヒクソン戦とか、節目節目の試合を乗り越えていくうちにタフになったたんやろうなあって思うんですよ。

山本 そうでしょうね。それに、僕ら新弟子の頃、そういう精神的な部分っていうか、「絶対に相手にナメられるな！」っていうことは言われ続けてきましたからね。プロはナメられたらおしまいなんですよ。そういう精神的な部分は前田さんから受け継いでますからね。新弟子の頃は前田さんとあんまり会話しないんだけど、そういうことは叩き込まれましたよ。

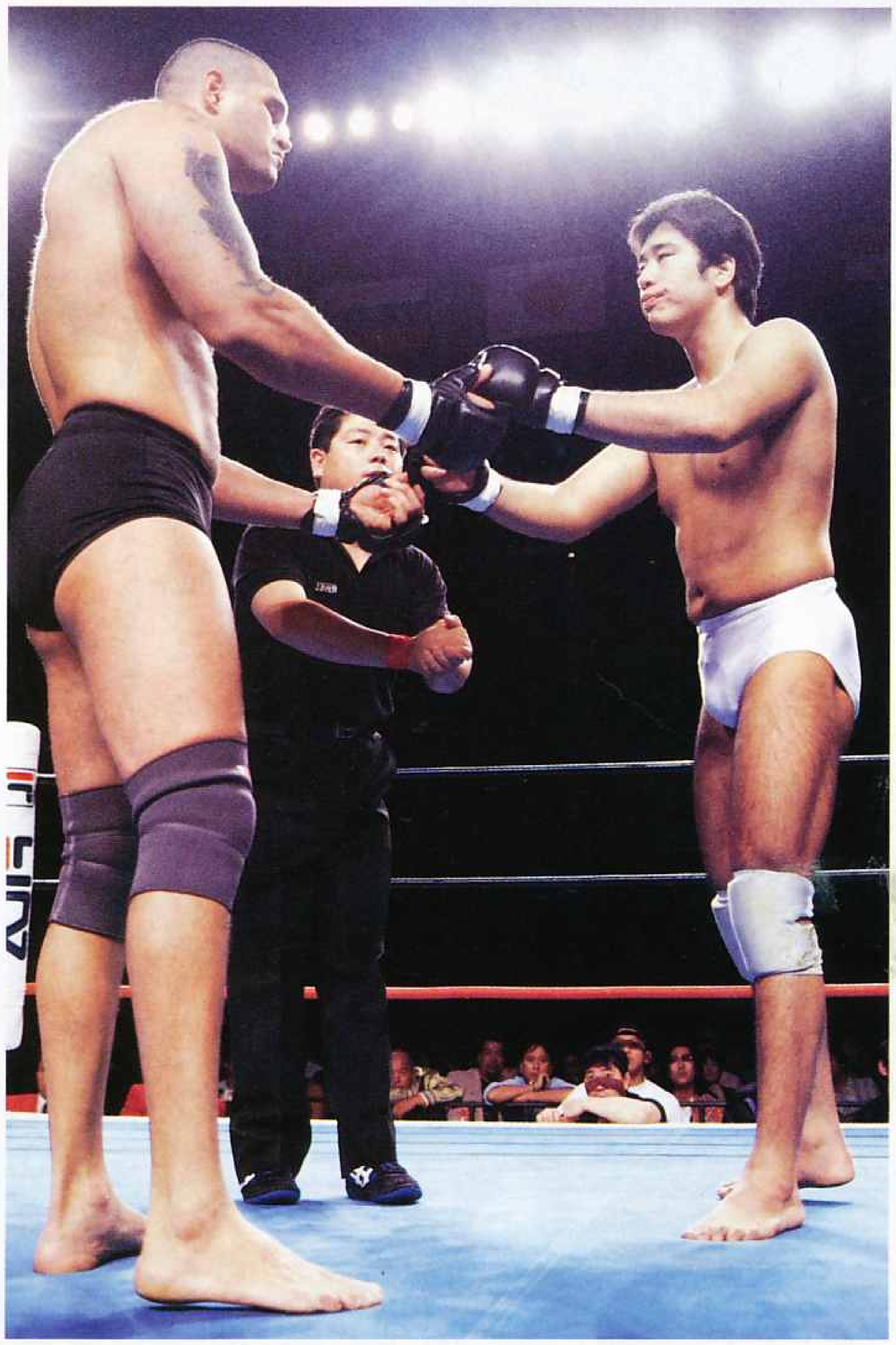
――山本さんは前田さんに憧れてリングスに入ったわけじゃないですか。山本さんの前田さんに対する第一印象はどんなでした？

山本 坊主、坊主って言われていたのはよく覚えてますね。あとねえ、なんか成瀬と俺だけ目の敵にされていたんですよ。

――ええ～（笑）。なんでやろう？（笑）。

山本 なんででしょうねえ。だから、例えば腕立て100回やらされるとするじゃないですか。でも、前田さんはいけずして、99回から「はい、もういっぺん1から」って言われるんですよ。それを必ず俺と成瀬で残されて、何回もやらされてましたね。

――謎の差別待遇ですねえ（笑）。



山本 でも、後々自分にプラスになってますからね。……ちょっとこのへんでフォロー入れとかないと（笑）。

――カカカカ。

山本 あとね、前田さんの印象っていったらね、僕、新弟子の頃、体調が悪くて鍼をうってもらってたんですよ、道場で。それでもちろん、チャンコ番もやんなきゃいけないじゃないですか。で、ある日、ちょうど鍼うたれている時に前田さんに「おい、メシくれ！」って言われたんですけど、動けないじゃないですか。だから「オ～ス！」って言うだけなんですよ。そしたらそのうち前田さんが「誰や、チャンコ番！」って言うんですね。それでももう一回「オ～ス！」って言ったら「山本か、ちょっとこっち来いコラァ！」って言い出して。

――おお！（笑）。

山本 でも、鍼刺してるからどうしても行けないいんですよ。で、5分くらい経ってから行ったんですよ。そしたら前田さん、納豆食ってたんですけど、俺の顔見たら箸を床に叩きつけたんですよ！ しかも、その箸プラスチックだったんですけど、それが折れたんですよ。

――ええ！

山本 普通、プラスチックの箸なんか、投げただけじゃ折れないですよ。

――そうですよね（笑）。

山本 それで前田さん、箸を叩きつけて、僕の方にスタスタと来て、ボコボコって殴って。

――うーん、前田さん、よっぽどお腹減ってはったんやなあ。

山本 まあ6発目で脳に来たね（笑）。それもね、ちゃんと拳の一番硬いところで殴ってるんですよ。前田さん、よく言ってたんですよ。「殴る時は拳のここで殴れよ」って。

――ちゃんと実証したんや（笑）。

山本 その時初めて「この人、強いんじゃないか？」って思いましたね（笑）。

――ワ～ハッハッハ！

山本 これは冗談ですけど（笑）。

――いやあ、そういう人の下にいると大変ですよねえ。僕の上司にもイヤな男がおるんですよ。凄い太ってて、あだ名は『デブ太郎』っていいます。まあ、僕の話はいいですけど（笑）。でも、山本さんは気性的に前田さんに近いんじゃないですか？ だから、前田さんと衝突するとしたら山本さんかなと思うんですけど。

山本 僕も不器用なんでしょうね。あんまり上手く口で表現できないし、だから僕がぶっきらぼうに言うと、前田さんもカチンと来て、「なんやそれは！」っていうことになるんですよ。だからまだ、子供の部分があるんでしょうね（笑）。あと、お酒の席なんかになると、止められないですね。やっぱり酒飲んでる時って、前田さんも本

音を言うじゃないですか。で、僕もつい本音を言っちゃうんですよ（笑）。で、何回か衝突したことはありますね（笑）。

——リングスの飲み会は荒れることで有名やもんなあ（笑）。

山本　もうエゲツないですよ！　エゲツないし、男臭いしねぇ（笑）。そう、一昨年の暮れかな、よく行くスナックで、みんなで飲み会してたんですよ。で、だいぶみんな酔っぱらってきた頃に、前田さんがいきなり「山本、ちょっと便所来い」って言ったんですよ。

——ええ！　まさか山本さんも監禁されたんやないでしょうね（笑）。

山本　ハハハハ。それで便所に行ったら、「お前、この壁殴れるか？」って言うんですよ。で、僕も「殴れますよ」って言ったら、「こんなもん、一発で壊せなアカンのじゃ」って言って、前田さん、ボコーンって壁殴って穴開けたんですよ。

——ムチャするなあ！（笑）

山本　で、僕も負けずにやったら2発目で穴開いたんですよ。そしたら前田さんに「お前、気合い足りないな」ってポコッて殴られましたね（笑）。

——アホなことしてますねぇ（笑）。今時そんなことやってんのはリングスだけですよ。

山本　やる時はやる。遊ぶ時は遊ぶ！（笑）。まあ、ホントはアスリートとしてよくないんでしょうけどね。海外の選手とかはそういうのないでしょ。お酒飲まない人って多いですよね。でも、なんかそういうの、面白くないでしょ？

——おもろない、おもろない（笑）。

山本　それに日本人の一般の人も、けっこう僕らをそういう目で見てるんですよね。「こいつ、あんまり酒飲まないけど弱いんじゃないかぁ？」とかね。自分には意地があってね、やっぱり僕らは一般の人とは違うっていうのがあるんですよ。

——やっぱりそれは重要でしょ！

山本　それはバカといえばバカかもしれないですけど、そういうことでも一般の人とは違うっていうところはあるんですよ。結局、一般人にもナメられたくないんですよ。

——というか、一般人にナメられたら終わりですよね。レスラーも格闘家も、まあ芸人もそうやと思うんですけど、僕はそういう「ムチャしてなんぼ」の世界は大好きなんですよ（笑）。

山本　でも、練習もやってますからね（笑）。

——わかってますよ！（笑）。しかし、そういう部分のこだわりは、やっぱりリングス独特というか、前田さんの流れという気がするなあ。

山本　いやあ、僕らと前田さんは違うでしょう。前田さんは哲学の人ですから（笑）。

——でも、前田さんと話してて、「前田さんの話は難しいなあ」って思いません？（笑）。



YOSHIHISA YAMAMOTO

山本　難しいというよりわかんないですよ（笑）。

——カカカカカ。

山本　前田さん、本をたくさん読むからいろんな言葉知ってるんですよ。だから僕も最近は本を読むようにしてるんですよ。

——おお！

山本　凄いですよ、ハッキリ言って（笑）。最近僕が哲学の本を読むようになったっていうのを知ったファンの方が、段ボール箱にいっぱい哲学の本を送ってくれて（笑）。

——カカカカカ。

山本　もうさっぱりわからん（笑）。また難しいんですよ、これが。

——いやあ、そんな本、読まん方がええんちゃいます？（笑）。

山本　そうですかねえ。

——無理してそんな難しい本読まんでも、選手って身体でわかってるとこってあると思うんですけどね。まあでも、前田さんと一緒におったら、本の一冊も読まんとアカンなあと思うでしょうね。

山本　そうですね。移動中は前田さんはいつも本読んでますからね。まあ、成瀬は後ろで『少年ジャンプ』読んでますけど（笑）。

——なるほどねえ。まあ、そうやって山本さんも哲学から何かを学ぼうとするっていうことは、山本さんは前田さんを理解しようとしてるってことなんですかね。

山本　理解ですか？……最近わかってきましたね。

——最近ですか。

何でもやりますよ。彼を潰すためなら……

山本　前田さんの立場とか今までの過程とか。ファンから見れば、前田さんって今まで何でもストレートにやってきたと思うじゃないですか。でも、それだけじゃないんですよ。やっぱり人間関係にしても、いち選手としてもいろんな波があったと思うんですよ。だから、そういう意味では僕もどっか似てるところあるんですよね。僕もやっぱり順調に来たわけじゃないしね。挫折もあったしスランプもあったし。そしてそれを乗り越えてきたわけですから。まだまだ自分で甘いなって感じる部分もありますしね。

――逆に前田さんのことがわかってきたから自分の甘さも見えてきたんじゃないですか？

山本　そうだと思いますね。

――特に最近、前田さんのことがわかり始めたっていうのは、何かきっかけでもあったんですか？

山本　まあ、昔はわかろうとしなかったですからね。なんかやっぱり反発心もあったんじゃないですか。最近自分も上の方の立場になってきて、前田さんの昔のことを人から聞いたりすると、自分の立場に置き換えて考えられるようになりましたね。

――あと、去年、前田さんが長期欠場して、トップを経験したっていうのが大きいんじゃないですか。

山本　あの時は凄い勉強させられましたね。ハッキリ言ってメインって特別じゃないですか。最後にビシッとしめなきゃいけないし。そういう状況を前田さんは何年もやってきたわけなんですよ。だから改めて前田さんの大変さをわかってきましたね。

――メインを張るとなると、観客動員も気になってくるでしょうしね。

山本　ハッキリ言って、興行はメインで決まりますからね。だからあの時はお客さんはみんな自分を見に来てると思ってましたよ。その状況で、結果はもちろん、それ以外に求められるものがたくさんありますからね。だから、うん、きつかったね。でも、そのぶん、やりがいはありましたね。

――でも、その結果、前田さんのことがわかってきたんやから、もの凄く意味はありましたよね。

山本　でも、やっぱりあの人は測定不能ですよ（笑）。


――カカカカカ。まあ、そうでしょうね。ほんなら逆に、前田さんは山本さんのことを理解してますかね？



前田さんには潰しに来てほしい。冷静さをなくした前田さんが見たいんですよ

山本　どうなんですかね。
——「前田さん、なんで俺のことをわかってくれないんだ⁉」みたいな苛立ちはないんですか？
山本　そういうのはないですけどね。けっこう気にかけてくれてるんじゃないですか。たまに電話かかってきたりしますしね。留守電に入ってるんですよ。
——ええ⁉　どんなことが入ってるんですか？
山本　「え～、前田ですけど。こんにちは」って。
——ワ～ハッハッハ！
山本　必ず「こんにちは」って入ってるんですよ（笑）。で、「これを聞きましたら連絡ください。さようなら」って。
——さようなら（笑）。なんかかわいい留守電やなあ（笑）。
山本　もう恐縮しますよ（笑）。
——山本さんは、前田さんの前やったら緊張します？
山本　やっぱり新弟子の頃のイメージがありますけどね。緊張しすぎて口がきけないとかそういうことはないですよ（笑）。
——なるほど（笑）。で、ここらでちょっと試合のこともお聞きしたいんですけど。ズバリ田村戦のことなんですが……。
山本　あんまりあの試合は喋りたくないですね。
——山本さんはあの試合は好きですか？
山本　嫌いですね。最悪ですね。あれを名勝負だと言ってほしくないですね。
——田村さんと同じやなあ。
山本　彼もそう言ったんですか？
——ええ。でも、山本さんが言うシバキ合いの試合やったやないですか。
山本　うん、もちろんそうですけど、終わって凄く気分悪かったね。最悪ですね。ムカムカしてしょうがなかったです。
——でも、試合は緊張感のあるいい試合でしたよ。
山本　緊張感ありました？
——ありましたよ。
山本　そうですか。でもまあ、あれは潰しに行きましたからね。
——はあ。凄いなあ。
山本　何でもやりますよ、彼を潰すためなら。ルール上のギリギリの部分でね。スレスレでしたね。一歩間違えたら、眼球潰れることだってありますからね。
——山本さんの掌底もやばかったもんなあ。
山本　危なかったでしょ？　まあ、ギリギリですよね。あの試合は結果としては自分のミスの部分もありましたからね。
——ホンマ危険な試合でしたね。
山本　いや、あんなもんじゃないですよ。僕は何でもやりますから。
——ただ、どうなんですかね。ああいうカードは危なっかしくてなかなかマッチメイクできませんよね。
山本　あの一戦で終わりってことですか？　とんでもない！
——とんでもない？　まだまだやってるでと。
山本　いや、まだまだどころか次で終わりでしょ。潰しますから。僕は何でもやりますから。
——しかし、こうやって聞いてると、山本さんも田村さんもズバズバ言いますよね。この前、田村さんにインタビューした時も、ハッキリ言う人やなあと思いましたが。
山本　どんなこと言ってたんですか？
——いや凄いですよ。「この世界は弱肉強食ですから、僕より弱い人は僕に頭を下げるべきなんです」ってサラッて言うんですよ。
山本　なにそれ？　じゃあ、負けたから僕が頭を下げなきゃいけないんですか？　絶対イヤですよ。
——ただ、僕はそういう大胆な田村さんは面白いと思ったんですよ。
山本　いいんじゃないですか？　それはそれで。ただ、田村戦で僕がミスったのは、あの試合は、試合前からレッドゾーンを超えてたんですよ。それがいけなかったですね。ホントは冷静でないといけないんでしょうけどね。つい、頭に血が上ってわけのわからん人になるんですよ（笑）。
——またあ、いや、そういう意味じゃなくてですねえ（笑）。
山本　どういう意味なんですか、わけわからん人って（笑）。
——いやいやいやいや（笑）。

YOSHIHISA YAMAMOTO



山本 ちゃんと説明してくださいよ。

――なんちゅうのかなあ。そう！ 本能の赴くままに生きている人っていう意味ですよ。

山本 野生児っていう意味ですか？

――そういうことです！

山本 なんか上手いこと言って（笑）。

――いやホンマに（笑）。

山本 お願いしますよ（笑）。僕、某プロレス雑誌に昔、言ってないことを書かれたことありますからね。マスコミには気を付けないと。

――へえ、そんなわけわからん……。

山本 わけわからん？ 俺に言ってんのか！（怒）。

――違います、違います！（笑）。わけわからんことを書かれてしもたんですか？ と聞きたいんです。

山本 そう、わけわからんことを書かれてしまったんですよ（笑）。まあ、雑誌としては膨らまして書きたいかもしれないし、ちょっとくらいなら僕らもわかるけど、その時は言ってないことを書かれましたからね。

――はあ。それはひどいなあ。これはちゃんと書きますからね。

山本 でも、『紙のプロレス』は要注意雑誌と聞いてますよ。あそこだけは気を付けろと（笑）。

――よう言いますわ（笑）。山本さんはマスコミについてはどう思ってますか？

山本 まあ、マスコミは必要ですよね。でも、真面目になるけど、マスコミといい関係でいたいなって思うんですよ。あんまり深く付き合ったりしないでね。本音語れないじゃないですか。やっぱ

りお互い仕事としてやんなきゃいけないと思うんですよ。
――そうですよね。それにあんまり親しいと、逆にちょっとしたことで揉めますからね。
山本　ありますね。それイヤですね。
――僕もイヤやもんなあ。例えば、これから山本さんと友達づきあいみたいになったりして、いざ、仕事の時に、「ええ、山本さん、リングスについてどう思いますか？」とか言われへんもん。
山本　やりにくいでしょ。本音言えないでしょ。
――言われへん、言われへん。
山本　わけわからん人とか言えないでしょ（笑）。
――ワ～ハッハッハ。もう忘れてくださいよお（笑）。
山本　ハハハハハ。
――まあ、そんな話はいいんですけど（笑）、最後に前田さんの引退表明についてなんですけど、それについてはどう思ってますか？
山本　状況変わらないでしょ。
――ん？　というと？
山本　例えばこれが1年前とかだったらね、リングスの進む方向もあんまり見えなかったし、選手も力がなかったから、前田さんの発言を聞いたらどうしていいかわからなかったと思うんですよ。でも、今は個人個人力を付けてるし、まだまだだけど、それぞれお客さんを呼べるようになってきたしね。前田さんが引退したら、僕の名前でお客さんを呼べるようになりたいしね。
――なるほど。では、いち選手として

Yoshihisa Yamamoto 針の穴にラクダを通せ！'97

前田さんには、まだ勝ったことはないんですけど、リング上ではどうですか？
山本　あれ、前田さんに勝ったことなかったでしたっけ？　ああ、ないですね（笑）。
――ワ～ハッハッハ。
山本　ああ、ないか。ないない（笑）。
――笑うなあ（笑）。で、そのへんはどうですか？
山本　でも、次やったら前田さんダメでしょ。
――ダメ！
山本　今の前田さんならね。でも、逆に……、前田さんとやりたいとは思わないですね。体調とか状況とかね。ただ、もしやるんなら、前田さんに潰しに来てほしいですね。冷静さをなくした前田さんを見たいんですよ。
――それは見たいなあ!!
山本　だから、前田対田村戦みたいに、どっかで余裕を持っている前田さんじゃなくて、キレた前田さんを見たいんですよ。
――そう、リングス・ジャパンの中で、前田さんがそういう面を見せるとしたら山本さんに対してだけやと思うんですよ。
山本　そうでしょうね。たぶん、そういう試合になるだろうし、僕と前田さんの最後の試合になるだろうし。その時に前田さん本来の姿を出させてあげますよ。僕もレッドゾーン超えますからね（笑）。



――前田対田村戦とは違うでしょうね。
山本　全く違うでしょうね。前田さん本来の姿を見ないで引退されたら悲しいでしょ？
――そら悲しいですよ。
山本　怖い前田さん見たいでしょ？
――見たい、見たい！
山本　みんなそうだと思うんですよ。僕もあの人の怖さを体験してみたいし、ある意味、新弟子の頃に戻りたいですね。あのフライ戦の後のような前田さんが一番いいじゃないですか。
――いいですよねえ。それは前田さんだけじゃなく、リングス全体に望んでいるのはそれなんですよ。
山本　だから、昔のリングスは緊張感あったじゃないですか。でも、最近はどっかしら緊張感なくなっちゃってるんですよ。
――おお！　言いますねえ。
山本　でもそうでしょ？　格闘技って本来、緊張感なんですから。でも、みんなすぐ、技術、技術、技術ってそっちの方に走るんですよ。それはそれでいいんだけど、そのうちに大事なものを忘れちゃってると思うんですよ。そう思いません？
――いや、凄く思いますよ。だから、この前の田村さんのインタビューの時も、田村さんはリング上で見せたいのは高度な技術の攻防って言って、僕が見たいのは殺気なんですって言うところで平行線やったんですけど。
山本　だから、彼が60分の中の3分のいい動きを見せたいって言うんなら、僕は60分間、ボコボコにシバキ合う闘いを見せますから。
――いいですね！
山本　僕は、こうしてリングスで闘ってるっていうのは修行だと思うんですよ。そして、つらい修行をすればするほど精神的に強くなれるんですよ。精神力は無限大ですから。だからリング上でも、身体がボロボロになるほど強くなれると思って闘ってますから。
――いやあ、今日は熱く語ってくれてありがとうございました。でも、あんまり興奮しすぎて、わけわからんようにならないでくださいね（笑）。

【97年4月7日　横浜・前田道場にて収録】

紙のプロレス RADICAL

1997 NO.3

技術は誰かに教われるが、
ガッツは誰にも教われない！
いっちょう針の穴に
ラクダでも通しますか！

紙のプロレス・ラディカル

CONTENTS

Art Director
出田さん ●San Ideta

Design／two-three
村松さん ●San Muramatsu
ヒサくん ●Kun Hisa
マツ ●Ma-tsu

表紙モデル／船木誠勝&3千万円の制作費をかけたベルト
撮影／斉藤ユーリ
スタイリング?／尾崎さん
ヘア&メイク／船木誠勝

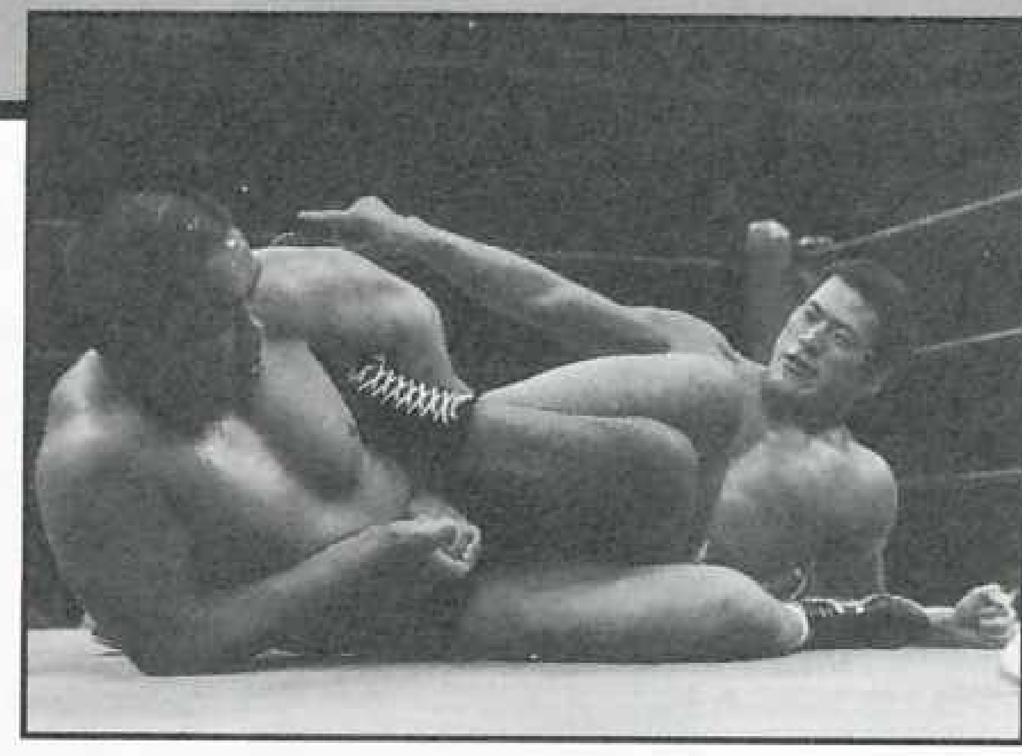
※えー、「RADICAL」は「根源的」「根本的」という意味でとらえてくれると非常に嬉しいといいますか。

を忘れたプロレス界にカチ喰らわす爆弾企画

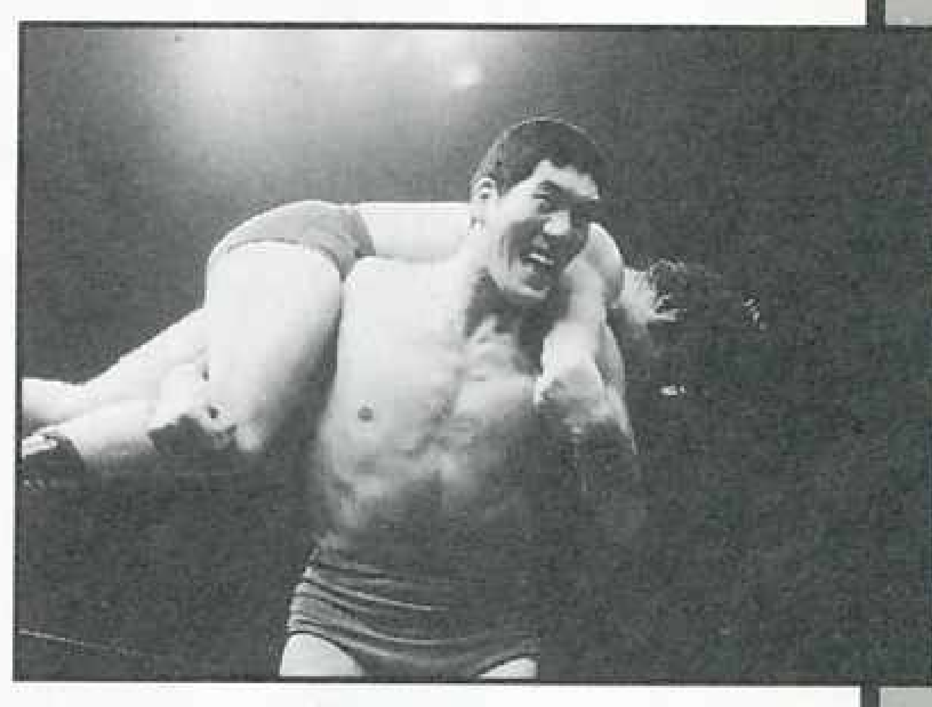
スの敵は世間だ!!

プロレスは世間からの厳しい蔑視にさらされるジャンルであった。その代表的な例がプロレス八百長論議である。しかしその反面で、そういった厳しい目に晒されながら反発をし、成長を遂げてきたのも事実である。ところが最近は世間レベルでの受けが良くなったために、プロレスの中にある本質的な『闘い』が希薄になりつつある。紙のプロレス RADICAL は断言する。プロレスは世間に迎合してはならない。プロレスの敵は世間なのだ!

ニオ猪木 96票



アント馬場 81票







その他 票が集まったのは、

T・J・シン 18票

ブッチャー 14票

ライガー 13票

小橋 5票など。 三沢、蝶野、大仁田、ナルシストの人（高野なんとか）、前田日明、長州力、ルー・テーズなども。

真

マスク 20票



人アンケート）

プロレス・ファンじゃない 500人のアンケート結果を 叩き込んだ総力特集14ページ!

殺しゃあいんだよ!何書いたっていいんだから!」

起こすダイナマイト・コラム「八百長論議と闘え!!」

闘え！プロレスの

八百長論と闘うことを 忘

アンケート収集地●渋谷／新宿／池袋

Q1

好きなレスラーあるいは知ってるレスラーの名前を1人挙げて下さい。

1位 アントニオ

2位 ジャイアン

3位 知らない！ 38票

4位 力道山 36票

5位 タイガーマス

（16歳から72歳まで 500人 ア

鬼も泣き出すRADICALアンケート「ブッ殺しゃ

衝撃の2部構成

寝た子を起こすラ

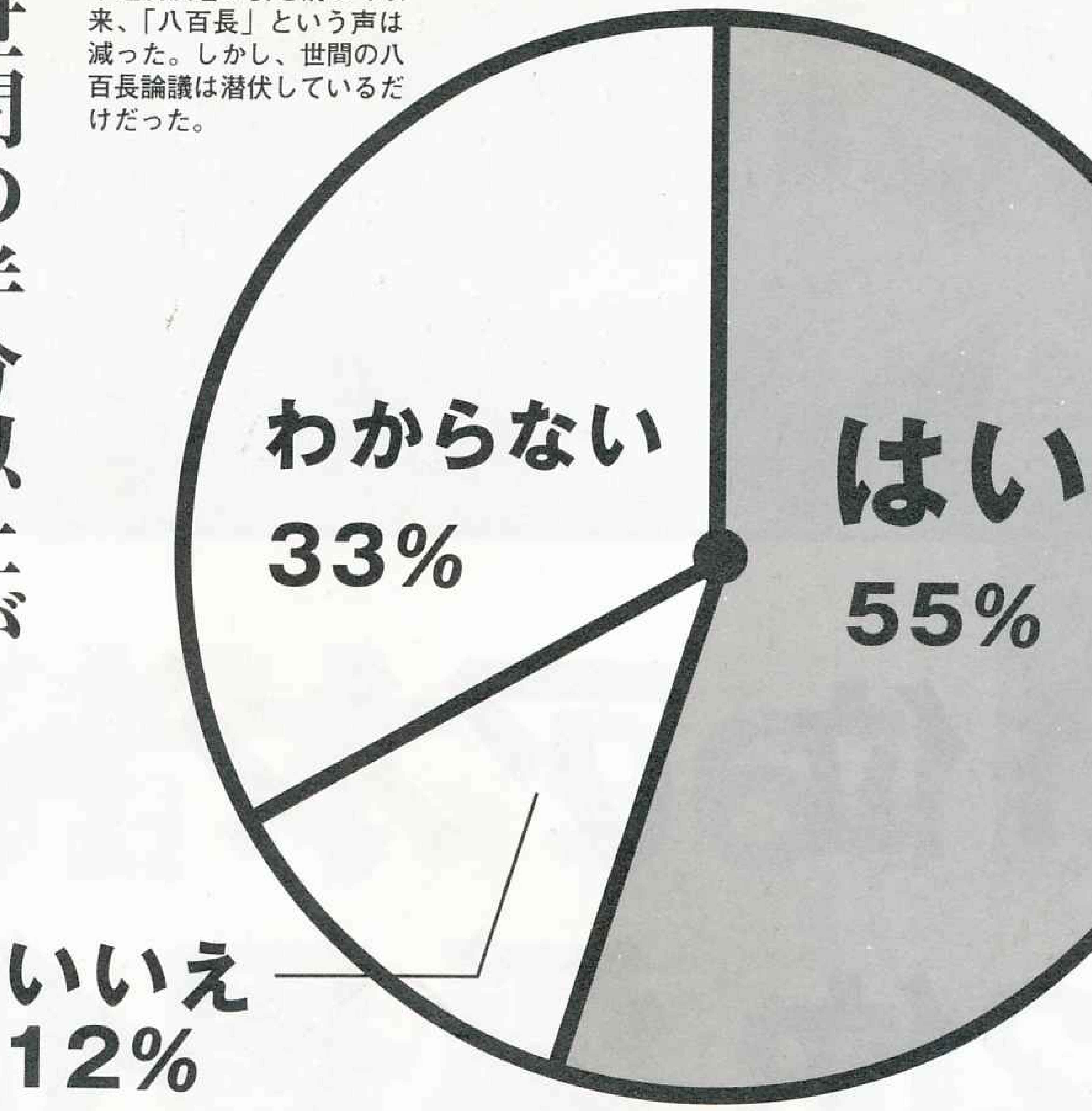
Q2

プロレスは八百長だと思いますか？

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました

世間の半分以上がプロレスを八百長と断言。

不透明決着が姿を消して以来、「八百長」という声は減った。しかし、世間の八百長論議は潜伏しているだけだった。



る。だが、テーズやリキは違ったのだ！（梶原一騎）

八百長論議と闘え！

文・吉田豪

プロレスから両者リングアウトやジョー樋口の失神、場外フェンスアウトなどといった曖昧な決着が姿を消してから、かなり久しい今日この頃。以前に比べ、「八百長」という言葉を耳にすることは桁違いに少なくなった。

これは喜ばしいことなのだろうか？

思えばゴールデンタイムでプロレスが放送されていた頃、「プロレスは闘いじゃなきゃいけねえんです！」をモットーに空手家や八百長論議と闘っていたのが我らのアントニオ猪木であった。だが新日本プロレス内で格闘技的要素を求める面々がUWFとして外部へ流出していくと、幸か不幸か八百長論議は彼らへと向かっていくこととなってしまうのだ。

まあ、当然である。八百長論議とは結局、その対象が真剣勝負のはずだという前提と、世間一般における圧倒的な認知度がなければ到底起こりようのない代物なのだから。

八百長論議と、すっかり疎遠になってしまったプロレス界。これは要するに「お前んとこは真剣勝負じゃなくて人気もない」と世間様に言われているようなものなのだから、レスラーは断固として激怒するべきなのである。でしょ？

ボクに言わせれば、昔からプロレスラーの敵は対戦相手ではなく観客であり、マスコミであり、そして猪木流に例えれば環状線の向こう側に広がっている「世間」であった。

我々『紙プロ』もそんな風潮に立ち向かうべく「世間とプロレスする」ことをモットーに、ドンキホーテのごとくデタラメに闘い続けているわけだが、プロレスが格闘技とスポーツとショーの狭間をさまよう非常に不安定で隙だらけの特殊なジャンルである以上、世間に噛みつかれるのも当然なことだとは思う。

「はい」と答えた人はいつ頃から？　どうして？

・見始めた時から。勝敗よりも観客を楽しませる部分が大事。
・かなり前から。時間通りに終了する、事件にならない程度のケガが不自然。
・高校2年生のとき。そういうウワサを聞いたので。
・ジャイアント馬場の16文キックをテリー・ゴディが受けたとき。ゴディが馬場を支えてたから。
・昔から、特に男のプロレス。なんだかわざとらしい。
・八百長だと思うけど、あんなにハードなことは誰にもできない。
・小学校4年生から。うさん臭いところがあったから。
・わからない。オーッとかリアクションが大きい。
・最近。馬場のバトルロイヤルを見たから。
・いつも。日本人が勝つから。
・小さいころから。勝つべき人が、いつも勝つから。
・中学生。本気だと体が壊れるから。
・ハタチ頃。見ていると、「悪は負ける」と決まっている様子。
・20歳。シナリオができている。
・最近。キックボクサーのお友達が言ってたから。
・小学校1年生くらい。どうしてもプロレスのキックって痛そうに見えません。
・女子プロは八百長だと思う。かわいいから。
・八百長じゃなかったら馬場は死んでる。
・最初から。死ぬまでやらないから。

プロレスは八百長だって。友達のキックボクサーが言ってた。（19歳・女）

ショーマン派は筋書き通り試合をする。だ


リングの中でも外でも力道山は世間の蔑視と戦い続けた。

なにしろ力道山が日本にプロレスを輸入してきた時点で、その悲しき運命は決まっていたのだから。

「プロ・レスリングは往々にして筋書き通りに運ぶことが多いが、これをショウとして見るならば実におもしろいものである」（昭和28年、八田一郎『レスリング』より）

「レスリングのよさは、度を越えた見せ物であることだ。そこには古代演劇がそうであったような誇張がある」（昭和29年、ロラン・バルト『レッスルする世界』より）

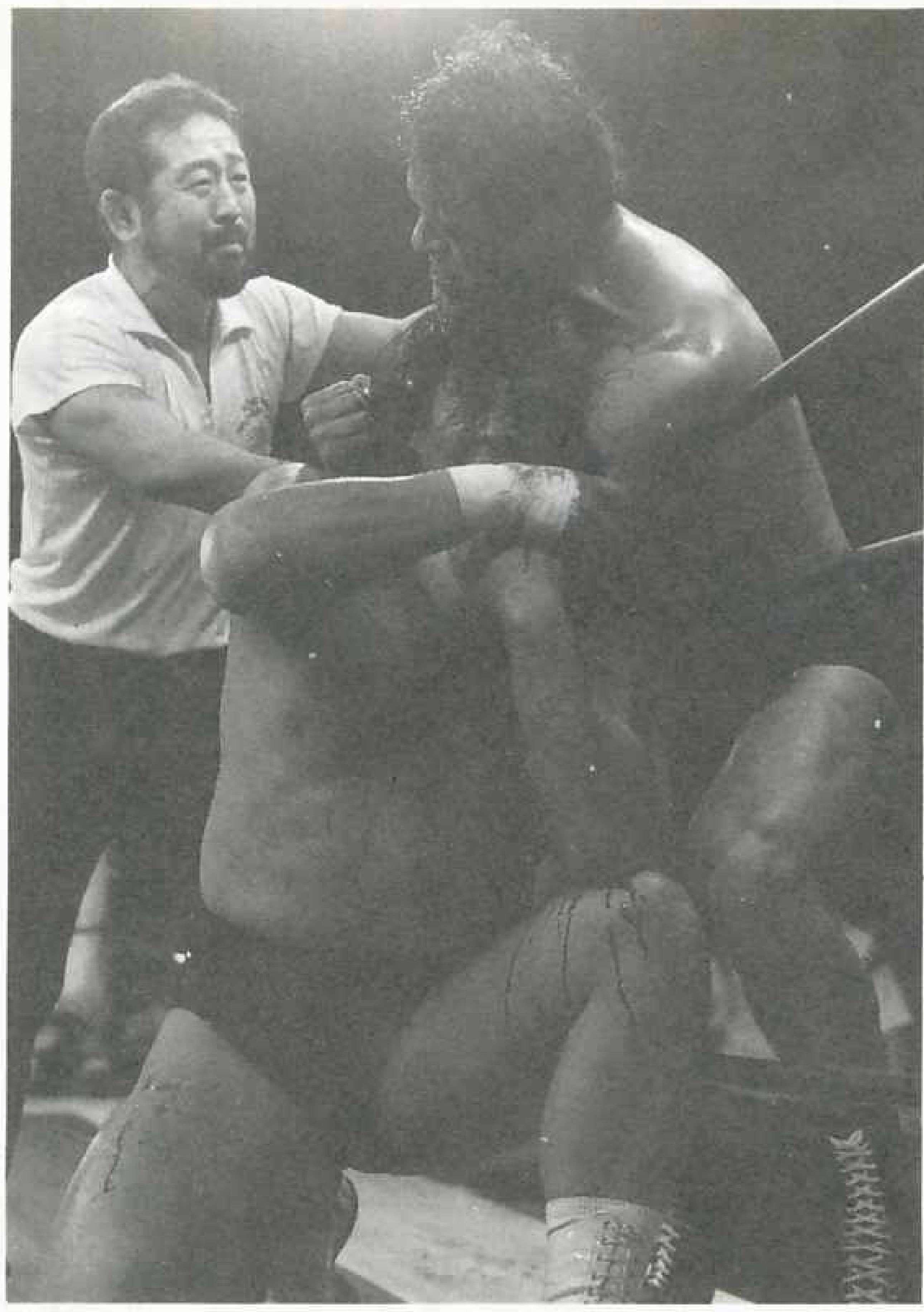
思わず「カチ喰らわすぞ、コラァ！」と怒りのグーパンチでもブチかましたくなるところだが、世間でのプロレスに対する論調なんてのはしょせん、いまもこんな調子でしかない。

長論議と闘え！

Q3

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました

プロレス以外で八百長だと思うものはなんですか？



世間の首根っこをふん掴まえて、プロレスに目を向けさせた男、A・猪木。このアンケート結果を見て、何と言うだろうか？　絶対に聞いてみたい。

1位	相撲	159人
2位	ボクシング	29人
3位	競輪	23人
4位	野球	18人

相撲は国技のくせして　プロレスのタメを張る　八百長論のターゲット！

その他

- クイズダービーのはらたいら
- 政治
- K-1
- 文壇
- 熱湯コマーシャル

戦でも受ける！（アントニオ猪木）

全てのレスラーよ、いまこそ八百長論議に牙を剥け！　と、心からボクは叫びたいのだ。

八百長だの測定不可能だのガタガタぬかすマスコミなんて女子便所に閉じ込めろ！　そして鉄拳うならせつつキツく説教してやるべきなのだ。たとえ法律が許さなくてもボクが許す！

そういう意味で前田日明の『女子便所説教事件』（前田の試合は測定不可能だのと言った某格闘技雑誌編集長を、鉄拳で壁を破壊しつつ女子便所でキツく説教した）は、プロレスラーとして見れば誰が何と言おうと賞賛に値する行為なのである。

では、これまで他のレスラーはどうやって世間の好奇の目に立ち向かってきたのか。

たとえば力道山の場合。『俺がつき合ったスゴイ奴・大物シリーズ2／大物はつらいよ』（金田正一＆竹村健一著・太陽企画出版）というスゴイ本で、カネやんはこう語っている。

「プロレスは八百長だってよく言いますよね。でも僕が面白半分に『リキさん、腹出してみろ』と言って思いっ切り殴ったら、なんと手首捻挫ですよ。もっとすごいのは、灰皿を手で割ったりしちゃうんですよ」

生意気な白人がいれば野球の硬球を渡し、「これを思い切り顔に当ててみろ。ワシらはびくともしないぜ！」と豪語して、顔面でキャッチしてみせたというリキさん。ガタガタ抜かす輩は、己の身体を張ってでもいいから黙らせる。こういう気概がなければ、とてもじゃないがレスラーとは呼べねえんです！

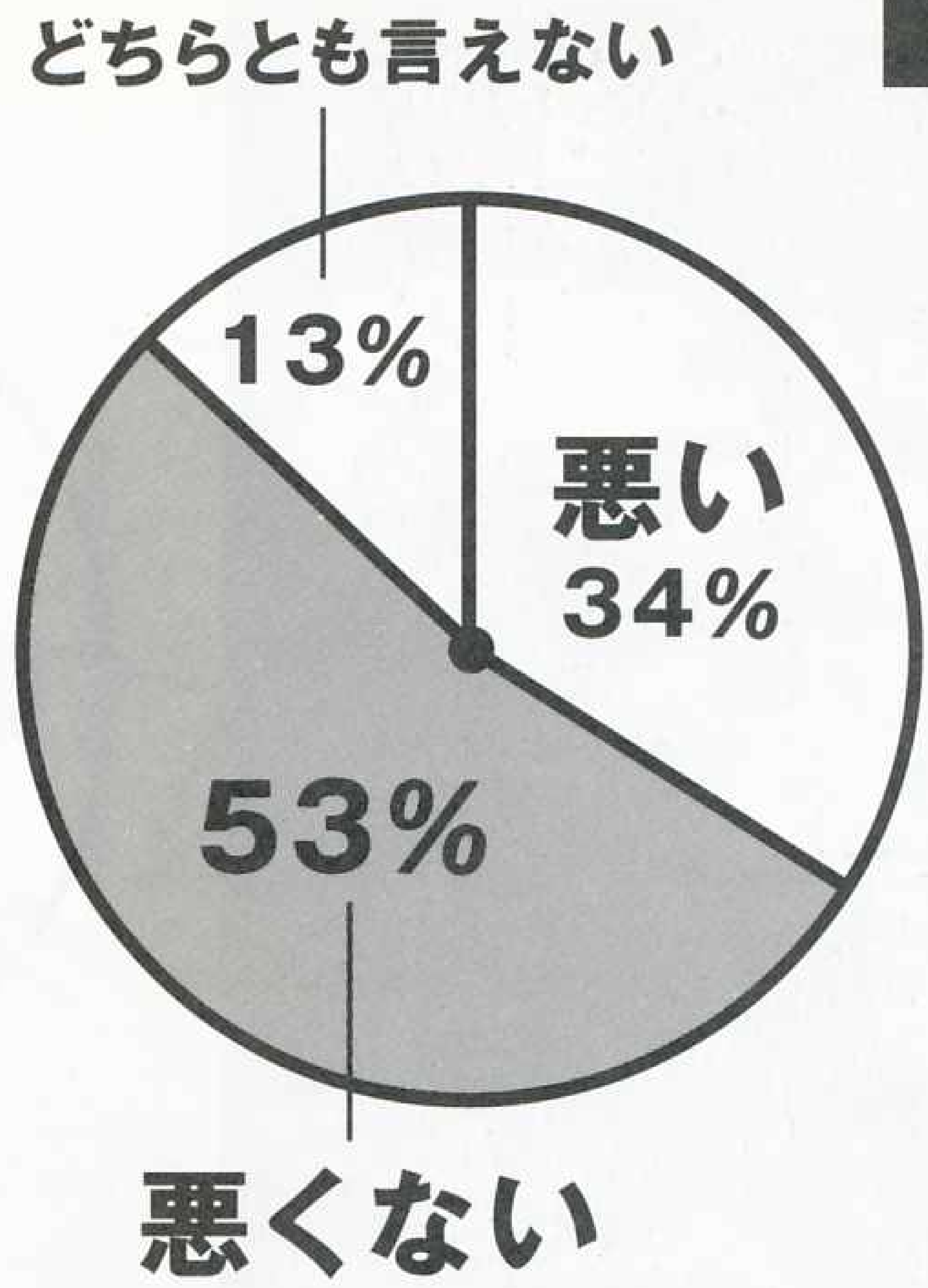
「酒もね、ウィスキー一本一気飲みさせるんだよ。飲めなきゃブン殴る。それでこうやって飲むんだって自分でも飲んじゃうんだな。参ったのは酒だけじゃなくてコップまで喰うんだよ。仕方なくて俺も喰ったよ。何度も噛んでいるといまに砂みたいになっちゃうからね。それで飲み込む。血？　そりゃ切れるから口ん中は血だらけだよ」（芳の里・談）

やはりレスラーはこうあるべきであろう。

そういう意味では、酒を飲んでの武勇伝に事欠かない前田や高田延彦、やはりグラス喰いを得意とするジョージ高野、アイスペールに酒を注いで一気に飲み干す上田馬之助や天龍源一郎

Q4

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました
「八百長は悪である」と思いますか？



「悪くない」が「悪い」を上回った。ちょっと以外な結果。作家の村松友視氏は「ルールこそが八百長である」と輪陣を張った。

いろんなゴ・イ・ケ・ン

- ・ショーであればいい。
- ・必要悪。
- ・いいえ。だって、世界平和は八百長から。
- ・いいえ。だっておもしろいし。
- ・別に。
- ・悪。
- ・思わないが、呆れることはある。
- ・けっこうおもしろいこともある。
- ・お金が関係してないなら、悪。
- ・悪というよりもセコい！　スポーツではないと思う。
- ・勝負についてそこまで考えたことがない。おもしろけりゃいいや。
- ・プロレスの八百長はやむなし。

いいえ。
だって面白いし。（19歳・男）

いつ、なん時、誰の挑戦で

らも、実は力道山の遺志を受け継いでキッチリ世間と闘い続けているわけなのである。

「私は一升瓶を一気飲みさせられたことがありましたね。そうやって体を張って対抗するんです。彼ら（興行を手掛けるヤクザ）はどこかでプロレスというものを軽んじるところがありますから、プロレスラーっていうのはこんなに凄いんだぞ、というのを見せつけなければならないんです。そのためには、人前でどんどん殴るんですね。相手がびっくりするぐらい痛めつけて、威圧するんです」（人前で靴ベラで殴られたこともあるアントニオ猪木・談）

ヤクザのみならず世間にもナメられないように、リキさんは暴れ続けた。なにしろ安藤組の元組長・安藤昇氏の著書によると「フィリピン・ギャングの顔役の車を坂から落っことしたりと、あばれ放題」で、やがて安藤組からも命を狙われることになるほどなのだから。

酒を飲めばグラスを噛み砕いて暴れるし、気に入らない奴はブン殴る。自動車に乗れば暴走し、ガタガタ抜かす警官もブン殴る。新聞には「力道山、また暴れる」と何度も報道され、女優や歌手も大好きとくる。

リキさんを兄貴と慕っていたカネやんが「もう少し長生きしていたら、警察に捕まってたんじゃないかねえ」とも証言している通り、世間的には非常識だと言われるだろうが、「レスラーは非常に非常識でなければならない」という持論を持つボクに言わせれば、リキさんこそ身体を張って死ぬまでプロレスを守り続けた真のプロレスラーだったのである。

そんな世間とプロレスするリキさんの前に、やがて巨大な壁が立ちはだかることとなる。後年、日本で唯一グレイシー一族を破った男として名を馳せる実戦柔道の鬼・木村政彦が、国民的英雄だったリキさんにこう噛みついてきたのだ。

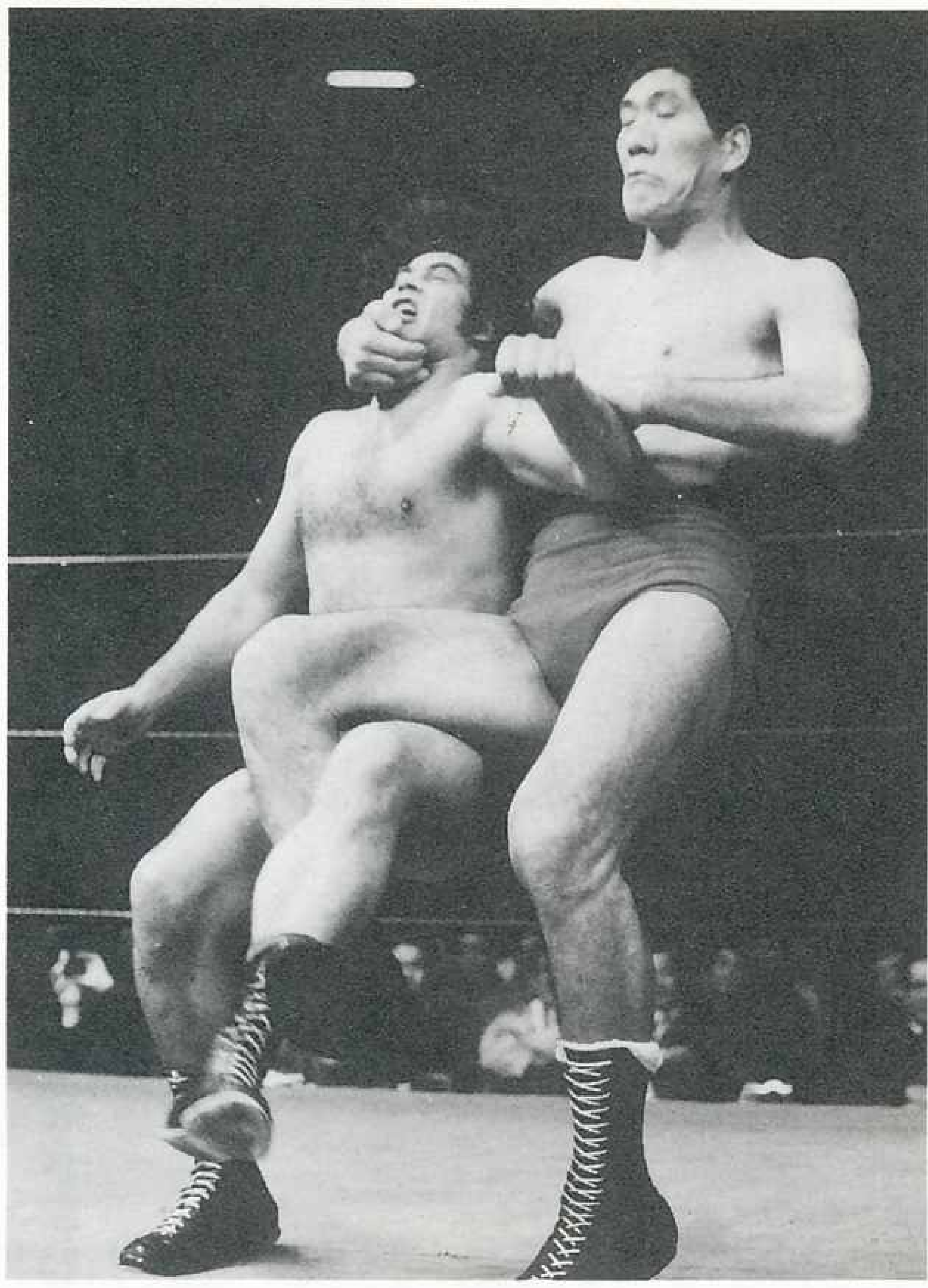
「シャープ兄弟戦では、やられ役を演じたが、真剣勝負なら私は力道山に負けない。力道山のプロレスはショーだ」（木村政彦・談）

「相撲くずれ」のリキさんと違い、柔道界での成功を経験し

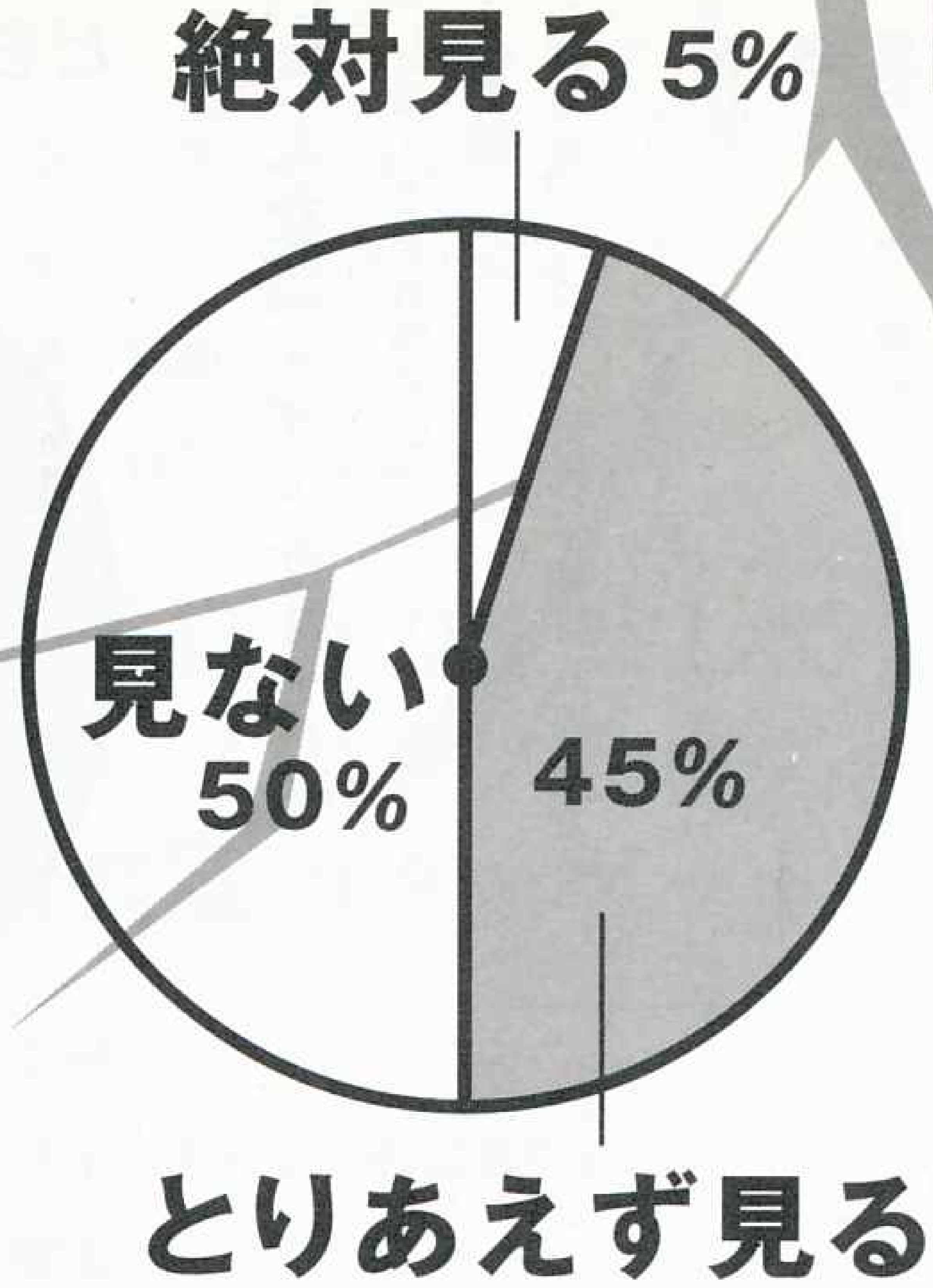
Q5

TVでプロレスをやっていたら見ますか？

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました



G・馬場は「全てを含んだものがプロレス」という考え方を通し、世間に波風は起こさなかった。馬場さんから見た世間とはどのようなものか聞いてみたい。



プロレスがテレビのゴールデン・タイムから遠ざかって久しいからか、視聴者も昔ほど熱心ではない。世間の首根っこを掴まえるレスラーは誰だ！

がプロレスである（ジャイアント馬場）

た木村にとってプロレスは「守るべきもの」なんかでは決してなかったのだろう。

そのためリキさんは、たとえ卑怯な八百長破りだと糾弾されようとも、プロレスを守るためには公衆の面前で木村を潰さなくてはならなかったのだ。

リキさんにしてみれば、シャープ兄弟戦で格の違いを見せつけた木村に負けるようなことがあったら最後、木村の八百長発言が正当化されてしまうことにもなるのだから。

結果としてリキさんは木村を倒し、プロレスを守り通した。逆にあまりにも普段のプロレスとは違いすぎる凄惨な潰し方をしたため、「やっぱり普段のプロレスは八百長なのか?」という疑問を観客に抱かせてしまうとはいえ、だ。

八百長論議と闘

「リキさん。プロレスは八百長があるそうやけど、あれはほんまどないなってんや」

そのためだろうか。プロ野球パ・リーグの設立者でもある小谷正一氏に、こんな失礼極まりない質問をぶつけられた力道山はつい答えたね。

「それはプロレスは八百長あるよ。今日はお前が負けるんや、俺が勝つんやという結論は決まっておるけど、ここのとこ三分三十秒のとき、こっちがバーンといったらこっちがやられるというように、秒刻みでやれるはずがない。そうすると、ええかげんに殴って、ええかげんに殴り返している話が、両方が動いているからボカッといくときがある。瞬間に人間は、痛いと『この野郎!』ちゅうんで、本気が出ちゃう。向こうが話が違うと怒る。部分部分は本気でやっている。結論だけ持っていっとるんや」（講談社『おもろい人やなあ』より）

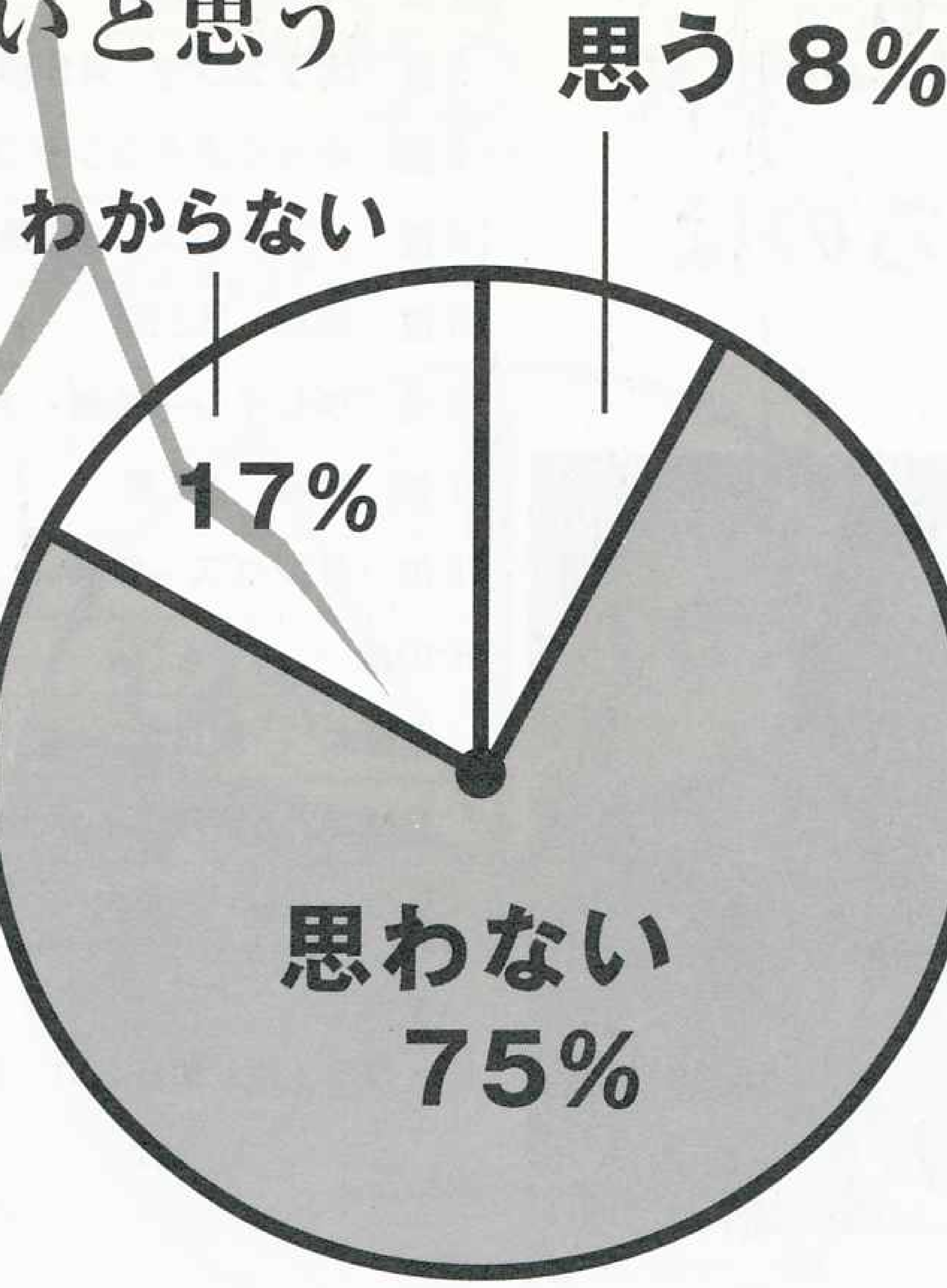
これが真実なのかどうかは、どうでもいい。むしろ、こういうものを平気で講談社から出版する輩の根性と、文化人だからとはいえそんな輩に噛みつくこともなく放置しておくようなレスラーがボク的には非常に納得いかねえんです!

「力道山没後、プロレス中継は生放送であった。ところが、ほとんど放送時間終了直前には決着がついてしまうのである。時間まで適当に技を掛け合っていて、突然真剣に闘って勝負を

Q6

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました
プロレスこそ最強の格闘技だと思いますか？

K-1のほうが強いと思う
（21歳・女）



プロレス最強幻想は時代と共に薄れてしまった。これにキッチリと回答を出すプロレスラーをプロレスファンは待っている。



馬場さんは、キャラクターとしての凄みでＴＶの前の世間に立ち向かっている。

シューティングを越えたものが　プ

付けるというパターンである。日本テレビの場合、『そろそろまとめましょう』というと場外乱闘になったり、フォール攻勢が始まる。そのパターンは、事前にディレクターとレスラー側とで確認されていた。この演出のまずさが、低視聴率につながっていたのである。だが、アントニオ猪木がテレビ朝日に登場して、スピーディーな技のプロレスを展開してから少しづつプロレスの人気が回復し、勝敗より試合そのものを楽しむようになったのだ」（東京テレビスタッフ『テレビの裏側まる見え情報』より）

こんな匿名でプロレス批判をするような悪質ライター集団も、

レスラーは非常識でなければならない

一度キッチリと潰さなきゃならねえはずなんです！

その点、劇画王・梶原一騎はさすがである。

著書『力道山と日本プロレス史』で、言うことを聞かずに試合をするリキさんに対する師匠・沖識名の発言として、プロレスをこう語るのだ。

「リキは、決めた通りにしなかったよ。映画の俳優、勝手に筋を変えないね。ハリウッドの映画とプロレス、同じね。レスラーは役者よ。他の誰にもないキャラクター持たないと駄目——キャラクター持つ者スターになれるね。プロレスラーも同じ。素敵なキャラクターを持ってスターになれば、いつの試合でも

Q7

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました

いま真剣勝負だと思う団体もしくは格闘技を挙げてください。

1位	K-1	94票
2位	ボクシング	45票
3位	キックボクシング	32票
4位	パンクラス	30票
5位	相撲	23票
6位	グレイシー柔術	14票
7位	空手	11票
8位	リングス	9票

その他

全日本　新日本　みちのく

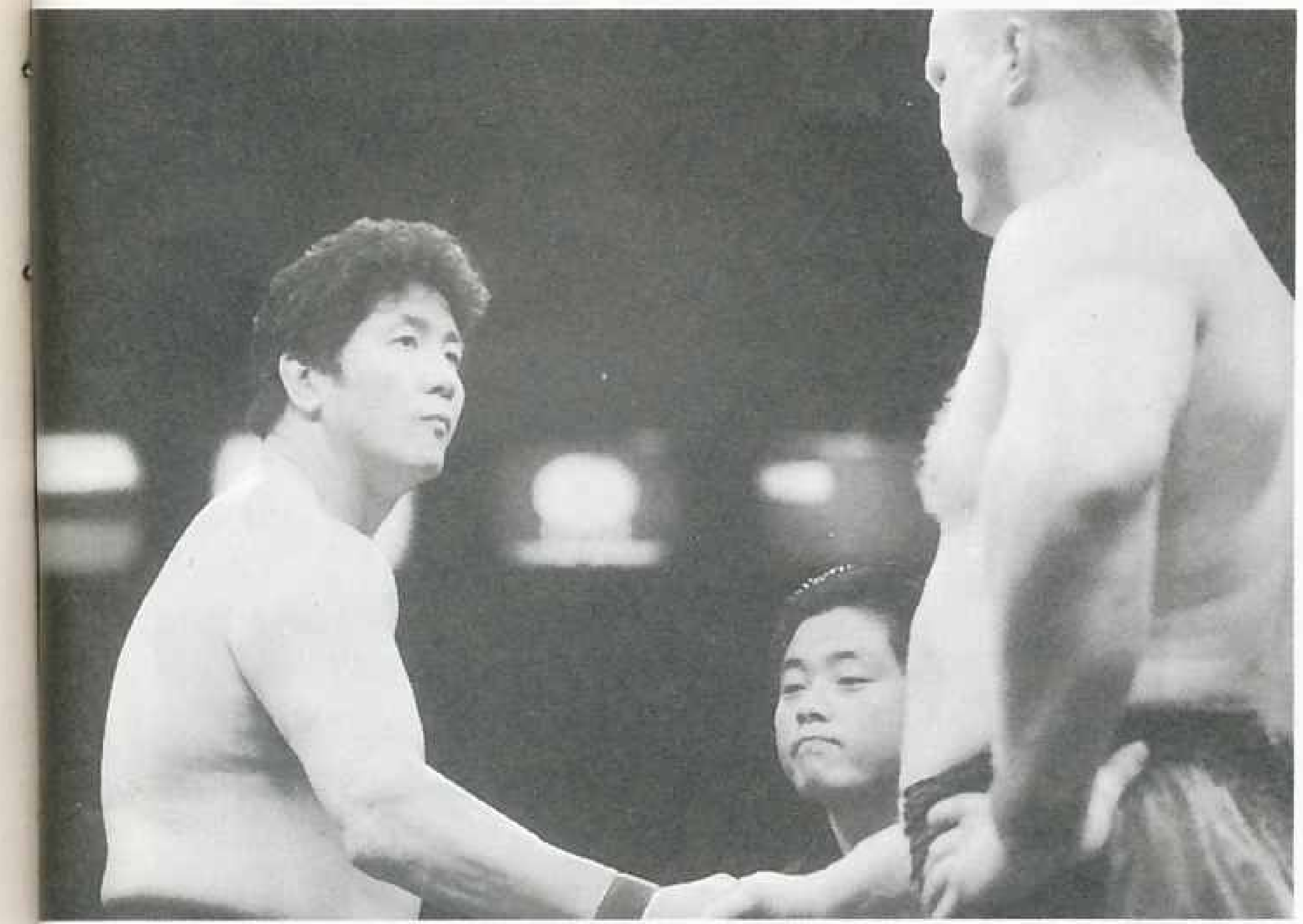
FMW　アルティメット

テコンドー　将棋

シューティング

……ウラ1位　知らない　132票

いま世間で最も真剣勝負だと認められているのはK-1である。



前田日明はプロレスとは一線を引きたがっているが、プロレスに噛みつくことでプロレスを守ってきた存在である。前田はこのアンケート結果を見て、何と言うだろう。

はプライド持てないんですよ（前田日明）

勝てる筋書きもらえるよ」。と。

なんと梶原は沖識名の口を借りて「プロレスは八百長だ！」と、あの恐ろしいリキさんの存命中に命知らずにも断定した。

そしてさらにこう続けるのだ。

「ショーマン派は筋書き通りに試合をする。だが、テーズやリキは違ったのだ！」、と。

これは要するに、猪木が「プロレスはショー的レベル（全日？）から真剣勝負（新日？）まで恐ろしく幅があり、その幅の広さこそがプロレスの奥行きの広さであり、限りない可能性だ」とかつて表現していたようなものだろうか。

『ケーフェイ』を書いたのは山本じゃないんですか？

つまり、当時なぜかWWF常任理事だった野末陳平流にわかりやすく表現すると、こういうことになるのである。

「全日プロのリングではハンセンやシンが相手のレベルに合わせて実力を落とし、馬場に花を持たせている。これからはTV中継で、シンやハンセンのわざとらしいやられ方に注目したまえ」（『陳平のプロレスの裏知りたい』より）

梶原一騎流に、ショーマン派の全日を差別することで、新日は自らの真剣勝負ぶりを世間にアピールした（いまはそれがインディー批判にスケールダウンしつつ続けられている）。

ところが新日とのイザコザから旧UWFへと移った佐山聡が

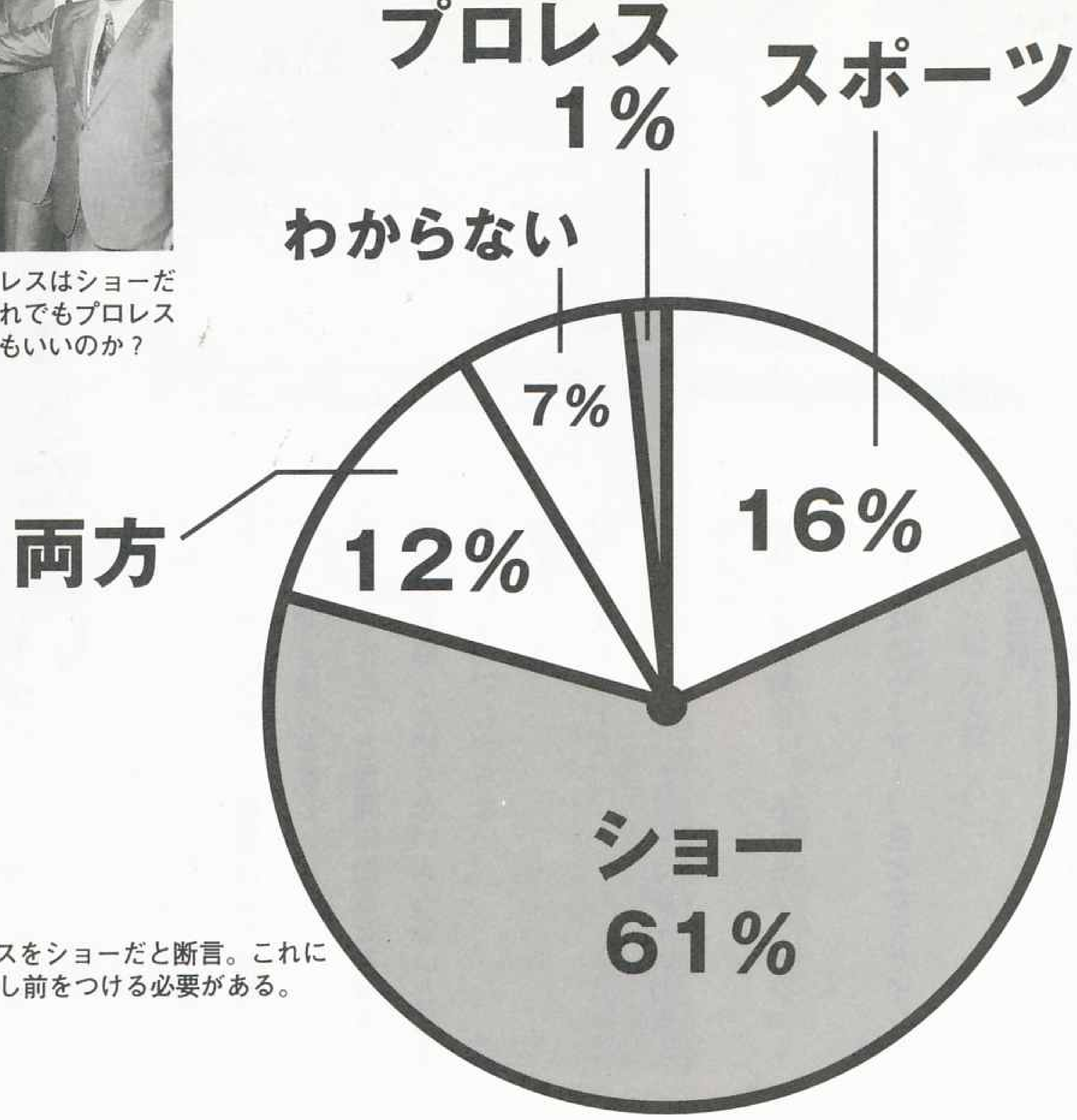


世間の半分以上がプロレスはショーだと思ってる現状……それでもプロレスラーは牙を剥かなくてもいいのか？

Q8

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました

プロレスはスポーツだと思いますか？ショーだと思いますか？



6割以上の人がプロレスをショーだと断言。これにはキッチリとした落とし前をつける必要がある。

いまの「プロレス」という言葉には　プ

フェイク、すなわち「インチキ」という言葉を業界用語チックに裏返した隠語をタイトルとする悪質極まりないプロレス暴露本『ケーフェイ』を発表すると、状況はすっかり変わってしまうのである。

なにしろ「暗黙の了解がないと、なかば永久に極まらないワザ」として四の字固めを取り上げるなど、まるで近頃の新日とUインターとの対抗戦をも否定するような内容だったため、プロレス界は大混乱に陥るのだ。

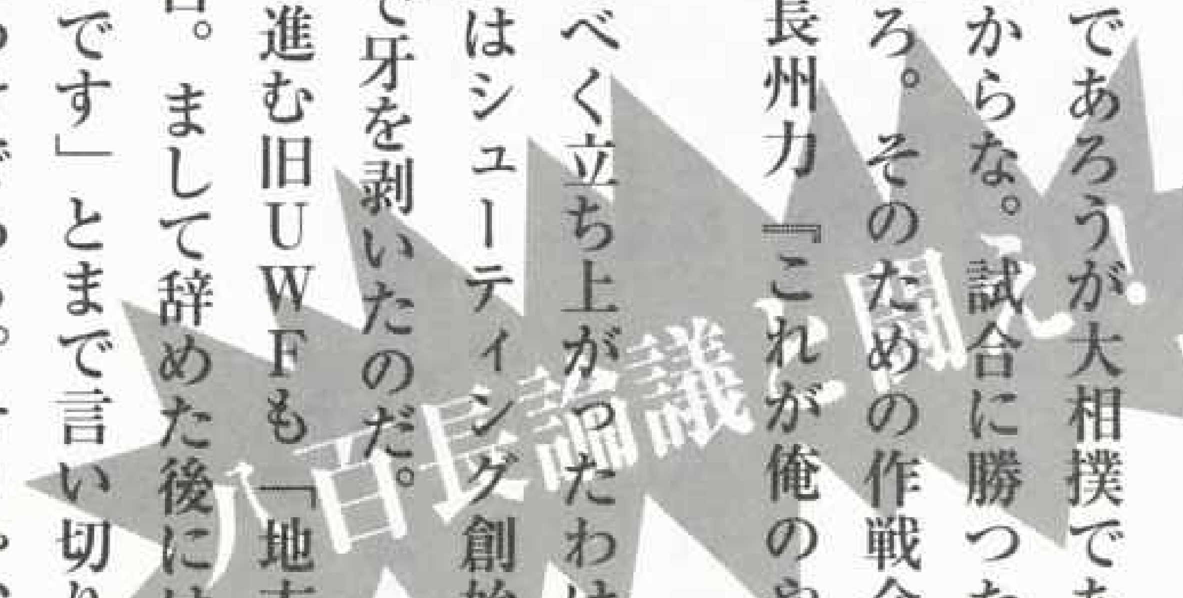
このとき、批判されることに慣れている馬場さんは「シューティングを越えたものがプロレスである」と、堂々と胸を張って葉巻片手に発言する。

そして長州はこう発言したのだ。

「ケーフェイなんて、ボクシングであろうが大相撲であろうが、プロの世界には必ずあることだからな。試合に勝つためには、敵の裏をかかなきゃいけないだろ。そのための作戦会議をするよな。それがケーフェイよ」（長州力『これが俺のやり方だ！』より）

このように誰もがプロレスを守るべく立ち上がったわけなのだが、そんなことは気にもせず佐山はシューティング創始者として当時参戦中だった旧UWFにまで牙を剥いたのだ。

新日を否定して格闘技路線を突き進む旧UWFも「地方じゃプロレスしてますから（笑）」と公言。まして辞めた後には「しょせん、UWFもプロレスだったんです」とまで言い切り、ファンや前田の怒りを買うこととなるわけである。そりゃ、金的蹴りもされるわ。



「あんまり悪口ばっかり言ったんで、佐山についてひとつだけ弁護するとすれば、『ケーフェイ』を書いたのは山本じゃないんですか？」（『猪木とは何か？　キラー編』より）

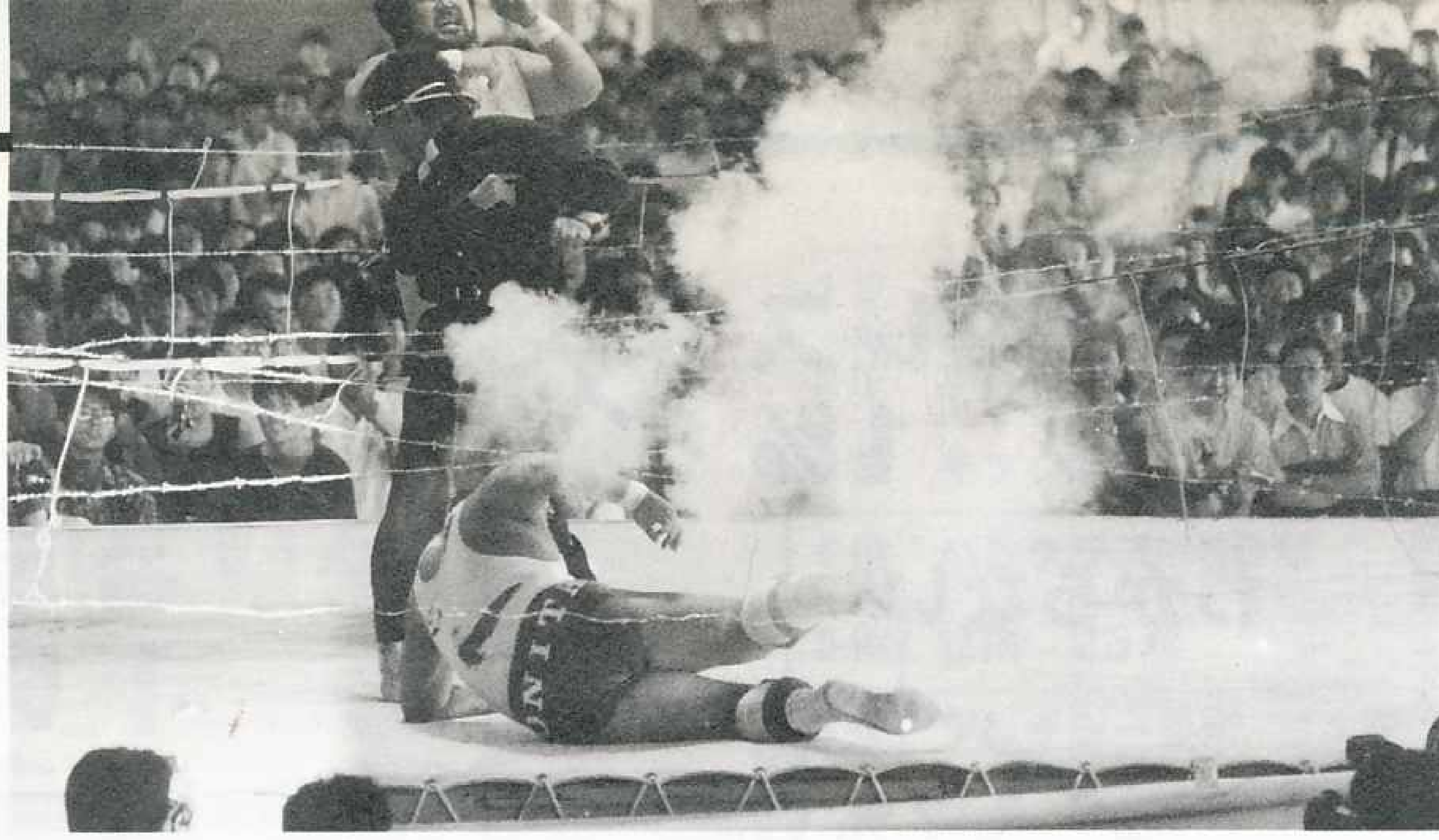
佐山に対していまも激怒しまくっている前田もこの件だけはフォローしているのだが、当の佐山によると真相はこうである。

「ボクが常日頃言ってることを（ターザン）山本さんがバーッと書いちゃったから、まあボクが言ってたことではあるんだけど（笑）」

Q9

●16歳から72歳まで老若男女500人に聞きました

プロレスが改善すべき点があったら挙げてください。



大仁田は猪木のスキャンダリズムを独自に発展させて、世間を巻き込んでいった。

・オヤジはヤメロ。
・ショーならショー、格闘技なら格闘技としての開き直りが欲しい。
・レスラーをもっと世間に知らせるべき。猪木と馬場しか知らない人も多いと思う。
・きらいなのでわからない。
・猪木のアゴ。
・服、コスチューム。
・分裂したり消滅したりするな！　わかんねえよ。
・地味な部分禁止！　もうちょっとショー的に。
・プロレスのウェアー。色とかデザインとか。
・閉じた世界。
・派手過ぎるパフォーマンスが良くないと思う。
・馬場はヤバイと思う。
・もっとルックスが良くて、カッコいい人がいたら女性ファンが増えると思う。
・小さい団体の潰し合い。
・残酷過ぎる点。

なんじゃあ〜（大仁田厚）

八百長論議と闘え！

そんな口の軽い佐山（まあ、格闘技界で実績を作ることによってプロレスの強さを証明するからいいんだが）とは対称的に、前田は新生ＵＷＦでどんなにイケイケドンドン状態になろうとも「今のプロレス界はどうとか、こっちが真剣であっちが偽物というつもりは全然ないです」と、謙虚にプロレスを守り続けたのだ。

これがきっと旧ＵＷＦ崩壊時に馬場さんから救いの手を差し伸べられた理由であり、維新軍団時代に「俺のやっていることはプロレスなんかじゃないからな！」とプロレス蔑視発言を繰り返した長州との違いなのであろう。

では現在、レスラーたちは八百長論議とどう闘っているのだろうか？

二年ほど前、『プロレスマニア』なるミニコミがプロレス団体に直接電話して八百長なのかどうか確かめるという、素人ならではのカラッと激しい悪質企画を強行していたので、ちょっと各団体の回答を引用してみよう。

「いま、ライガー選手が怪我してますよね。馳選手は死にかけてますよね。八百長やってるなら怪我なんかしないで済みますよ！」と言い切る新日（まさに「八百長だという人間を完璧に納得させる力は、今のオレにはないよ。ただ、プロレスが八百長で片づけられるスポーツだったら、すごい悲しいよな。もしプロレスが八百長だとしたら、ここまで身体をいじめることはないと思うからな」と語ったこともある長州イズム全開の発言であろう）。

そして「そんなことないですよ！　みんな本気で頑張ってますよ！　応援して下さい！」と、これまた頑張り重視の天龍イズムを爆発させるＷＡＲ。

「……わかりません」と、電話でも徹底した鎖国政策で応戦する全日。

「う〜ん……、勝負ある物すべて……、まあ……、そういった声ってありますよね」と、なぜかすっかり困惑してしまう、みちプロ。

「他の団体はわかりませんけど、ウチはやっておりません！」



大仁田はＴＶに出まくることで、世間と闘い続けた。最も対世間の立場でプロレスを考えたレスラーの内の１人だ。

・ロープに振ってかえってくるのはやめてほしい。ロープに振ること自体がムズかしいはず。
・電気ビリビリとか使って血を出されても面白くない。腹が立つだけだ。
・八百長。
・もっとショーに力を入れる。
・マスクを取る。
・海水パンツにブーツのヤツ。
・面白い試合をたくさん組んで欲しい。
・不透明な部分が多いようだ。
・痛そう。
・世間にアピールするためにＫ－１と闘うのもよし。
・マニアックに走り過ぎ。

この傷はホンモノ　な

と、往年の新日のごとく力強く言い切ってくれるＵインター。

そして「まったくないです！」と、両極端のスタイルを持つ犬猿の仲の団体でありながら揃って完全否定するＦＭＷとＲＩＮＧＳ。

そう。いまのプロレス界で八百長論に身体を張って立ち向かうほど男気のあるレスラー（？）といえば前田と、なぜか前田の大嫌いな大仁田厚だったのである。

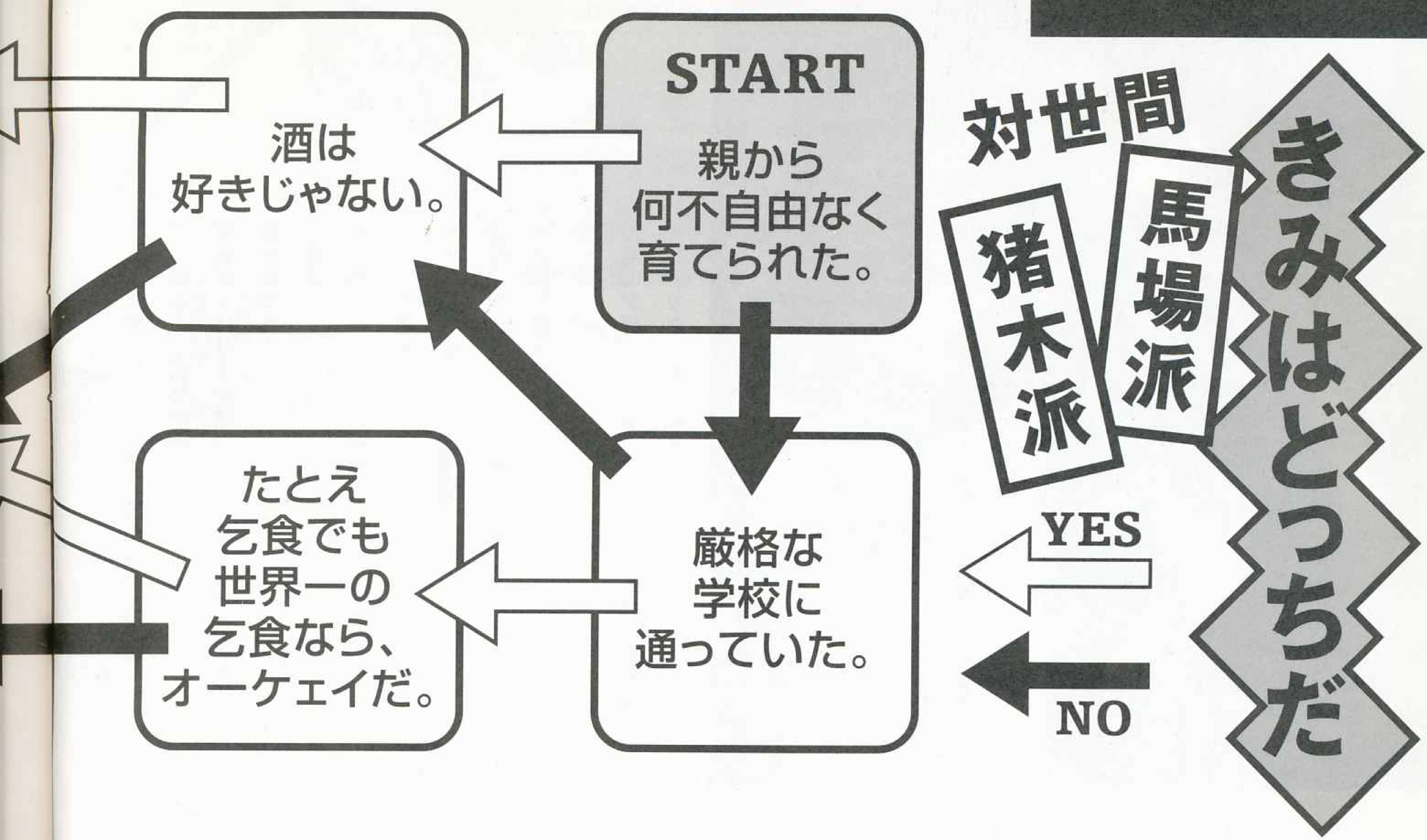
テレビに露出しまくる大仁田は、それだけタレントなどに八百長論をぶつけられる機会も多かった。

レスラーが八百長だと言わない限り、八百長ではない！

だが『「この傷は本物なんじゃ〜（涙）！」っていうのと、プロレスが八百長であるかないかとは、まったく違う次元の問題ですよね」などと大槻ケンヂに言われても気にせず、その度に身体の傷を見せて号泣したり怒りだしたりしながらも、ガタガタとつまらないことを言い出す輩とキッチリ闘い続けたのだ。

「プロレス界では八百長という言葉はタブーだった。誰もそんなことは口に出さなかったし、その疑問に真っ向から反撃する奴もいなかった。でも、オレはあえてその言葉を自分の口から吐いてしまう。そう言ってしまうことで、いつも『八百長じゃねえか』という眼に挑戦し続けてきた」（『涙の男塾』より）

診断室



ワシらはびくともしないぜ！（力道山）

確かに誰も八百長とは口に出さなかったとは思う。「八百長ばっかりやりやがって。お前なんか八百長野郎じゃねぇか！」とジョン・テンタに言い放ち、SWSを解雇された北尾以外は。

では、女子プロ界ではどうだったのか。

「闘いそのものは本気でも、我を忘れた攻撃で互いに傷つけあってしまったら、プロレスは成り立たない。だって、選手の数には限りがあるのですから」

元・アイドルで現・神様のミミ萩原でさえここまで筋の通った発言をしていたのだから、UWFに触発されて女子プロ革命に着手したクラッシュギャルズになると、さらに過激になる。

「（山崎照朝）先生はプロレスじゃなく格闘技しか教えないから、ファンに見せるということは全く考えていないんです」

「女子プロはショーだとかいろんな雑音が入って来るんですけど、女子プロレスがいちばん強い。どの武道や格闘技にも負けません」

もはや長与千種の意識は「ファンを無視した最強の格闘技」に向かっていたわけだが、それを人並み外れた練習嫌いとして知られたダンプ松本はどう思っていたのだろうか？

ところがビックリ。これがまた全女の名物アナ・志生野（温夫）さんの著書によると、ダンプもプロレスを守るべく八百長論に牙を剥いていたのだという。

「ダンプ松本が一番くやしいといつも思っていることは、プロレスは八百長じゃないか、という声だ。それなら本物の反則を見せてやろうじゃないか、となっても不思議はない」（『女子プロレス革命伝説』より）

世間にナメられないように、技術ではなく半端じゃないほど反則を磨きあげたダンプ。それはそれで正しい姿勢ではある。

だが、引退後に芸能界入りを果たすと、突然こんなふざけたことを言い出してしまうのだ。

「よくプロレスは、演技だ、芝居だとか言われるよね。確かに、ストーリーのあらすじは決まっていることが多いけど」（ダンプ松本『どんとこい芸能界！』より）

こんな輩がいまでもたまに全女のテレビ中継のゲストに招か

会ったことも、見たこともない人間も嫌いになることもある。

人の期待を裏切ってまで我を通そうと思わない。

のんびりと旅にでも出たい。

自分の魅力をわかってくれる人としか付き合わない。

世の中の流行りものには興味がない。



馬場派の君は

自分の周辺の変化に関しては敏感だが、それ以外に関しては興味がない。人の目を気にして守りに入りつつも、実はかわいがられるタイプでもある。愛され上手な外見と誰よりも鋭いドスを心に持つべし！



猪木派の君は

常にアンテナを張り巡らせて、世間の動向の先頭に躍り出るべし。散々、目立って人々の度肝を抜いた後に、のたうちまわりながら次の戦場に向かう。まあ、オンモシれぇことやりゃあいいんです。

これ（野球の硬球）を思いっ切り顔に当ててみろ。ワ

れているのは、どうしたことなのか。結局、「女子プロを見返したい」という思いで芸能界入りを果たしたダンプ的にしてみれば、やはりプロレスは決して「守るべきもの」ではなかった、ということなのだろう。

　ちなみにビューティーペア全盛期、TVでおなじみの牧太郎はこんなふざけたことを書いていたものだ。

「『二十分経過』『三十分経過』のアナウンスのたびに、二人の立場が逆転した。攻勢に出たジャッキーがマキをさんざんいじめ抜いている時に、アナウンス。これが合図なのか、すぐ立場が転じて、今度はマキがジャッキーをいじめる。試合は見事に演出された」（『社会部記者が見た芸能界・裏の裏』より）

　全てのプロレスラーよ、ダンプを男子便所に、そして牧太郎を女子便所に閉じ込めろ！

　かつて山田邦子に「流血の血って本物なんですか？」と聞かれた馳浩が「ふざけたことを聞くな！」と激怒したように、とりあえずレスラーたるもの八百長論議をふっかけられるほどの知名度を得てから、キッチリ世間と闘うべきなのだ！

　そしてレスラーだけではなく、我々も断固として闘わなければならないのである。

「よく海外マットでは『この試合では負けてくれないか』という八百長があると聞きますが」などと天山広吉に質問する大沼孝次とかいうライターや（「自分の回りでは、そういうことは聞いたことありません」と答える天山も天山なんだが）、「なぜならプロレスには筋書きがあるからだ。先日の新日対Uインターの抗争も、あらかじめ結果は決まっていたと聞く」などと編集後期に明記する『OH！　プロレス&格闘技』のような悪質書物に対してだ。

　かつてテレビ朝日系の『プレ★ステージ』で「プロレスには筋書きがあるわけでしょ？」と司会者に失礼なことを言われたプロレス界の嫌われ者・ターザン山本は、こう答えたね。

「レスラーが八百長と言わない限り、八百長じゃないんですよ！」、と。

　ズバリ言って、非常にそういうことなんです！

PRO-WRESTLING WRESTLE ASSOCIATION WAR

PRO-WRESTLING INTERNATIONAL UWF

プロレス界きっての名勝負製造器

天龍vs高田

★各ビデオ絶賛発売中!!

★表示価格は全て税抜きです

天龍源一郎と高田延彦
2人の闘いから目をそらすな!



頂上対決、再び!倒すか、倒されるか
神宮決戦をも凌ぐ名勝負が生まれた!

天龍vs高田 両国REVENGE

1996年12月13日両国国技館
カラー180分/¥9,515/SPA-4912

**かってない激闘に国技館が沸き返る!
天龍の剛拳 vs 高田の剛脚
両雄が真正面からぶつかり合った
リベンジマッチ!**

【収録内容】◆時間無制限1本勝負/天龍源一郎vs高田延彦◆時間無制限1本勝負/北尾光司vsジョン・テンタ◆ジュニア8冠戦 60分1本勝負/ウルティモ・ドラゴンvsレイ・ミステリオ・Jr◆インターナショナル・ジュニアヘビー級タッグ選手権 60分1本勝負/安良岡裕二&ランス・ストームvs初代タイガーマスク&望月成晃◆30分1本勝負/北原光騎&荒谷信孝vs山崎一夫&飯塚高史◆30分1本勝負/嵐&大刀光修vsバンバン・ビガロ&平井伸和◆30分1本勝負/中野龍雄vs米山サトシ◆30分1本勝負/剛竜馬vs冴夢来MAX◆30分1本勝負ドインク&超電戦士バトレンジャーvs山田圭介&松田慶三◆30分1本勝負/岡村隆志&多留嘉一vs神風&福田雅一◆30分1本勝負/菊地淳&石井智宏vs石川孝志&大黒坊弁慶

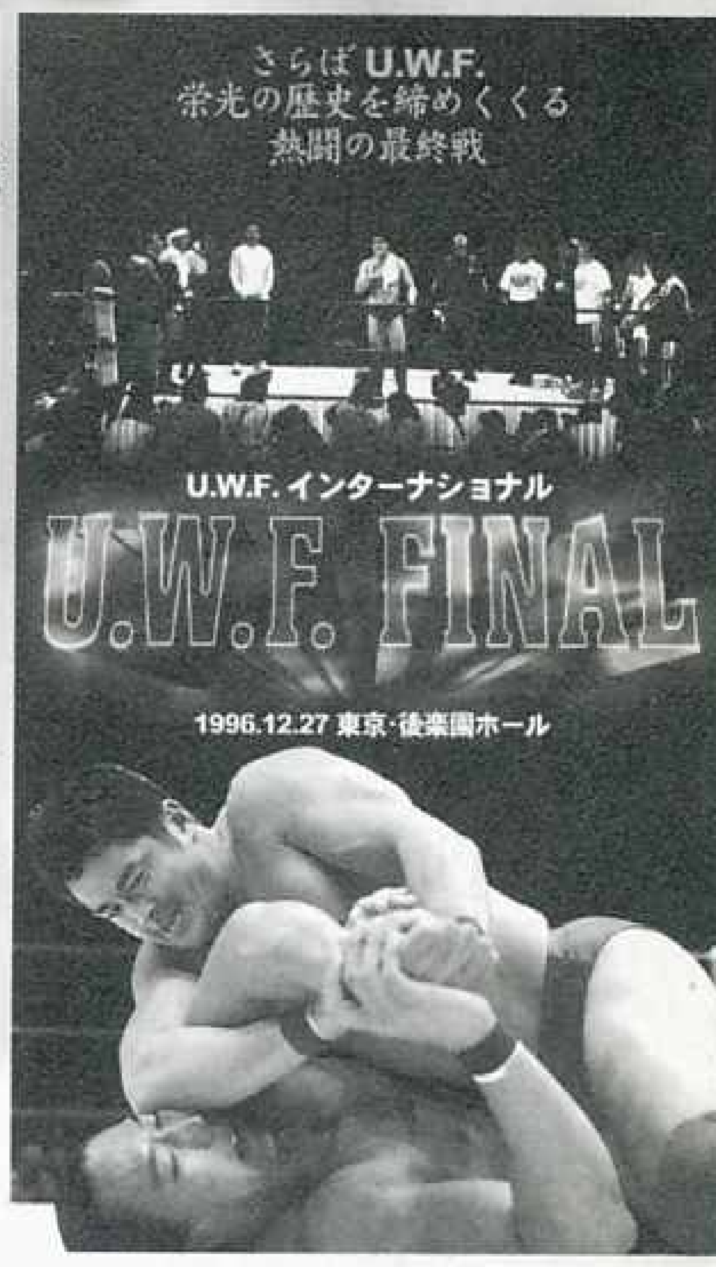
プロレス界を大激震が襲った あのU.W.F.が突如として解散
大観衆が、選手が泣いたU.W.F.インター最後の一日!

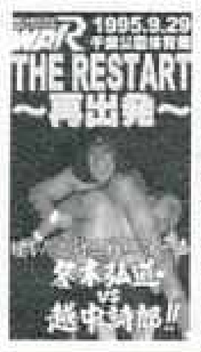
U.W.F.インターナショナル最終戦 U.W.F. FINAL

1996年12月27日東京・後楽園ホール
カラー145分/SPA-4912/UWFV-1063

**試合前の全選手による記者会見から、
入場式、最後の激闘全5試合、
そして感動のフィナーレにいたるまで
カメラは克明に追った!**

【収録内容】◆メインイベント(60分1本勝負)/高田延彦vs高山善廣◆第4試合(45分勝負)/垣原賢人&山本健一vs金原弘光&桜庭和志◆第3試合(30分1本勝負)/安生洋二vsビリー・ジャック・スコット◆第2試合(30分1本勝負)/佐野友飛vsジェームス・ストーン◆第1試合(10分1本勝負)/松井駿介vs上山龍紀





THE RESTART ~再出発~

1995.9.29 千葉公園体育館
カラー90分/¥9,515/SPA-4901
「レッスル・アソシエーションーR」として再スタートを切ったWAR。その記念すべき第1戦を収録。冬木が平成維新軍の越中と激突。理不尽大将の作戦が勝つか?越中のサムライ魂が爆発するか?注目の一戦に加え、天龍と北尾が再び激突した6メンタッグマッチ、邪道&ライオン道vs佐藤昭雄&タイフーンなど激闘全7試合を収録。



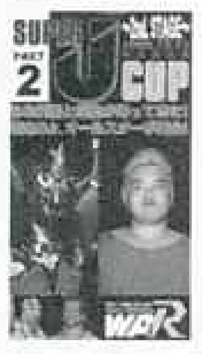
理不尽大将三戦紀

カラー90分/¥9,515/SPA-4902
「越中、あんなヤツは腰抜けだ!」「正々堂々とやってやる。ただし50キロ減量して来い。」「負けたら天龍は坊主だ!俺は負けても坊主になんかならないけどな。」まさに言いたい放題の理不尽大将が、その実力者ぶりを遺憾なく発揮したシングルマッチ、越中詩郎戦、北尾光司戦、そして天龍源一郎戦を収録。理不尽語録も特別収録。



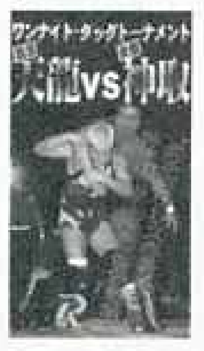
SUPER J CUP~2nd stage~ PART1

1995.12.13 両国国技館
カラー140分/¥9,515/SPA-4903
団体のワクを超えた最強戦士を決めるトーナメントとして大反響を巻き起こしたジュニアの祭典SUPER J-CUP、その第2弾。ペガサス、ドスカラス、ダミアンら海外の強豪に加え、W.A.Rからウルティモ・ドラゴン、外道、ライオン・ハート、新日本プロレスから獣神ライガー、エル・サムライ、大谷、みちのくプロレスからの愚乱・浪花、中島半蔵、レッスル夢ファクトリーの茂木、バトラーツの船木勝一、北尾道場の望月ら実力派、個性派が集結。



SUPER J CUP~2nd stage~ PART2

1995.12.13 両国国技館
カラー130分/¥9,515/SPA-4904
激闘に次ぐ激闘。ジュニアの最強戦士14人が栄冠を争ったトーナメントは、第1回をしのぐ名勝負の連続となった。迎えた決勝戦、そのリングに立ったのは獣神・ライガーと外道の2人だった。そして、トーナメントに勝るとも劣らない名勝負でセンセーショナルな日本デビューを飾った音速の戦士ミステリオJr。誰もが興奮と感動を押さえきれない素晴らしい大会となった。



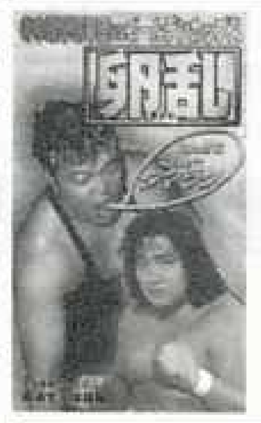
男気・天龍vs女傑・神取

1995.12.8 東京・大田区体育館
カラー120分/¥9,515/SPA-4905
男 vs 女、前代未聞の激突が公式戦で実現した!男はミスタープロレス、あの天龍源一郎。女は"女子プロレス界最強の男"神取忍。性別を超えた2人のアスリートの激突は必見!天龍組、冬木組、北尾組、シンジャ組など、8チームが一夜で激突したタッグトーナメントSUPER HEAVY-WARの激闘全試合を収録。



激突!理不尽軍団vs新日蝶野軍

1996.4.19 札幌中島体育センター
カラー120分/¥9,515/SPA-4906
怒声、嘲笑、渦巻く中、乱れ飛ぶバナナと共に入場した冬木弘道率いる理不尽軍団。対するは、新日本プロレスの狼軍団、蝶野&天山&ヒロ。プロレス界を自らの実力だけで我が物顔に渡り歩く身勝手軍団同士の激突となった世界6人タッグ選手権試合。天龍は極悪大王ボーゴとの決着戦。さらにJ-CUPの感動を再び、あのミステリオJrとシコシスが再来日。脅威の大空中バトルで観衆の度肝を抜いた。



冬木理不尽軍団vsゴールデンカップス/卵乱

1996.5.26 横浜文化体育館
カラー120分/¥9,515/SPA-4907
W.A.R vs U.W.F.ついに開戦!天龍対中野、冬木軍対安生軍が実現。冬木、邪道、外道の理不尽軍団と安生洋二率いるゴールデンカップスが世界6人タッグ選手権をかけて全面対決。冬木は予告通り生卵攻撃で安生の顔面をヌルヌルに!「!?さらに、中野の熱意が天龍をついに動かした。天龍対中野の一騎打ちが実現。天龍をして「ここ数年のうちでの俺のベストバウト」と言わしめた白熱の好勝負も収録。



拳骨・天龍vs蹴撃・高田 初対決

1996年7月20日両国国技館
カラー180分/¥9,515/SPA-4908
W.A.R、U.W.F.インター、そして新日本プロレスの3団体から総大将の天龍、高田、長州が出場。さらには、W.A.R冬木軍、ゴールデンカップス、山崎隊という実力派の3チーム、そして因縁深い北尾とテンタ…かってない程の超豪華メンバーが結集して争われた世界6人タッグ選手権王座決定トーナメント。1回戦で実現した注目の天龍組と高田組の激突は?注目のトーナメント全試合に加え、タイトルマッチ2試合を収録。



Mr.プロレス 天龍vsMr.200% 安生

1996年7月21日両国国技館
カラー120分/¥9,515/SPA-4909
W.A.R両国2連戦の大トリとなった天龍vs安生。安生が硬軟取り混ぜた攻めで200%の実力を見せつけ、その全てを耐えた天龍が、怒涛のグーパンチを叩き込む。両雄の初の一騎打ちは力と技の激突で満員の大観衆をうならせる名勝負となった。他に北原vs垣原のU.W.F.ルール戦、高田&金原組vs藤波&越中組、冬木軍vs長州組、ジュニア8戦士による夢のタッグマッチと、すべてが対抗戦として行われた両国大会全試合を収録。



拳骨 天龍源一郎vs毒華 グレート・ムタ

1996年10月11日大阪府立体育会館
カラー120分/¥9,515/SPA-4910
遂に実現した天龍vsムタ、初の一騎打ち。悪の化身グレート・ムタが変幻自在の残虐ファイトを繰り出せば、その攻撃に耐えに耐えた天龍が怒りのグーパンチで反撃。想像を遥かに超えた激闘に、W.A.Rマットは文字どおりの修羅場と化した。さらに、冬木、ビガロ、安生の異色トリオが高田&佐野&垣原のU.W.F.軍と激突した世界6人タッグ選手権試合、サスケvsドラゴンの8冠戦、邪道&外道の5番勝負FINAL、そして音速の戦士ミステリオの大阪初登場!文字どおりのオールスター揃い踏みとなった10・11大阪大会を収録。



怒髪天龍、新日本拳骨制裁

1996年11月9日後楽園ホール
カラー120分/¥9,515/SPA-4911
天龍、怒りの鉄拳が手負いの山崎を襲う!「病人には一度も出させない」(天龍)「ジイサンは早く辞めさせないと」(山崎)激しい舌戦から始まった両雄の対戦。意地の山崎か、不機嫌パワーの天龍か?注目の初対決!そして、ヤス&ランスが大役を果たす!ライガー&サムライの新日最強軍からI・Jタイトルを奪還。さらに空飛ぶ入れ墨モンスター・ビガロが大変身を遂げた平井伸和と合体。新たなる闘いに挑む!



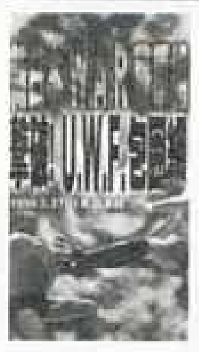
高田延彦vs越中詩郎

1995.3.1 東京・日本武道館
カラー144分/¥9,515/UWFV-1049
新日本プロレスの武藤を倒し新IWGP王者となった高田の初防衛戦。挑戦者は平成維震軍の大将である越中…かってIWGPジュニア王座を賭けてマット史に残る激戦を展開した2人が、8年の歳月を経て、再び火花を散らす!ほか佐野vs武藤、山崎vsゴールデンカップス、垣原vs大谷、チャンプアvs金原、田村vs桜庭の必見の全7試合を完全収録。



高田vs長州頂上対決

1995.4.19 大阪府立体育会館
カラー97分/¥9,515/UWFV-1051
8年の歳月を経て再びリング上で相対した高田vs長州は、タッグマッチとはいえ、互いを執拗に意識、凄まじい闘いを展開。長州のバックドロップで高田が大の字に伸び、高田の蹴りの連打で長州の前歯が吹っ飛ぶ!金原、健介もフルファイト爆発。他にも正規軍vsゴールデンカップスの抗争、若き闘志が真正面から火花を散らした垣原vs永田、"越境ライバル物語"第1章、高山vs高岩、桜庭vs石沢、そしてオープニングマッチの田村vsスコットまで全6試合をパーフェクト収録!



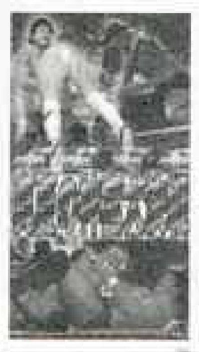
撃破!U.W.F. 包囲網

1996.5.27 日本武道館
カラー120分/¥9,515/UWFV-1052
U.W.F.インターの旗揚げ5周年記念大会第1弾。メインイベントではあの組長・藤原喜明が高田との5年7カ月ぶりのシングルマッチに挑んだ。U.W.F.の旗揚げからの歴史を感じさせる田村vs桜庭、平成維震軍との異色対決・垣原vs越中、金原vs野上、さらに、U.W.F.正規軍を敵に回したゴールデンカップスと冬木軍とのファイトぶりも必見!(あの200%マシーンも遂に登場!)そして、中野龍雄とW.A.R北原のシングル対決は、Uインター戦士としての中野のラストマッチだ!!



スクランブルウォーズ

1996.6.26 名古屋レインボーホール
カラー136分/¥9,515/UWFV-1054
天龍、藤波がUインターマット初登場を果たした名古屋大会。高田は垣原と組み、藤波&藤原の越境コンビと激突。セミファイナルではミスター200%安生洋二が佐野友飛と激突。嵐と組み高山&200%マシーンと激突した天龍は、顔面へのグーパンチ、そしてサッカーボールキックを連発。新鋭・桜庭和志はオランダ・チャクリキジムの2メートルを越す巨人キックボクサー、レネ・ローゼを撃破する快挙。



真夏の神宮大決戦

1996.8.17 神宮球場
カラー180分/¥9,515/UWFV-1056
U.W.F.頂上対決—U.W.F.インター旗揚げ後、初めて高田vs安生シングルマッチが実現した!手の内を知り尽くした2人の攻防の行方は…!?W.A.R大将の天龍は、佐野を撃破。仮想・高田となる一戦を制し、一騎打ちへ向け期待はますますヒートアップ。さらに復活した初代タイガーマスクvsグラン浜田、Uインター新時代を切り開く垣原vs桜庭、高山vs怪人・キモのアルティメット戦、ゴルドー軍団の参戦と、まさに最強のラインナップ。完全ノーカット収録。



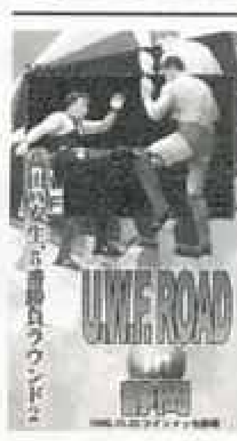
高田延彦vs天龍源一郎

1996.9.11 神宮球場
カラー150分/¥9,515/UWFV-1057
文字通り立錐の余地がないほどの大観衆が神宮球場を埋め尽くした!高田と天龍の初の一騎打ちに加え、ミスター200%・安生洋二のアルティメット戦、新日本プロレス・橋本真也、佐々木健介との対抗戦、初代タイガーマスクと復活ザ・コブラのスペシャルマッチ。まさに真のオールスター戦となった神宮決戦。この日、神宮につめかけた4万の大観衆は、歴史の証人となった!



U.W.F. ROAD in 盛岡

1996.9.30 岩手県営体育館
カラー140分/¥9,515/UWFV-1058
「ワリイけど一回ぐらいでオレはまいんねえよ!」神宮決戦では高田のハイキックでKO負けを喫した安生だったが、主役の座を狙う意欲は衰えず、早くもやってきた雪辱の機会に闘志満々。天龍を倒して乗りに乗っている高田を相手に、虚々実々のハイスピードバトルを展開した。さらに、全日本プロレス川田との対戦を経験した高山は、実績ナンバー2の垣原と対戦。ゴールデン・カップスがU.W.F.を乗っ取る日も間近か!?



U.W.F. ROAD in 静岡

1996.10.23 ツインメッセ静岡
カラー140分/¥9,515/UWFV-1059
確実な回転と進化を続けるUインター・ロード。次の主役を掴むのは誰だ!?高田と安生の両エースが激突する5番勝負。その闘いに割って入るのは、佐野か、高山か、それとも桜庭か?Uインターのマットは、完全な戦国時代に突入した。初対決にも臆せず高田を追いつめた桜庭。先輩の垣原を圧倒した金原。実力者ビリーと互角に渡り合った山本。誰もがフル回転の好ファイトで魅せた静岡大会。



U.W.F. ROAD in 札幌

1996.11.20 札幌テイセンホール
カラー140分/¥9,515/UWFV-1060
打倒!高田、大目標に向け、熾烈な争いがスタート!高田と安生が、それぞれパートナーを変えて挑むダブルバウト5番勝負は、1勝1敗の後を受け、高田は垣原と、安生はビリーと組んで激突。4人が一歩も引かぬ変幻自在の攻防で、観衆を魅了した。さらにこの日から、金原、高山、桜庭、山本の4人によるリーグ戦が、高田との対戦権を賭けてスタート。実力伯仲の闘いを制し、トップへの階段を駆け昇るのは誰か!?



U.W.F. ROAD in 仙台

1996.11.23 仙台ワッセ
カラー140分/¥9,515/UWFV-1061
U.W.F.新時代到来!「みんな力をつけて来ているので高田さんもうかうかしていられないですよ」不敵に言い放った金原だけではなく、高山、桜庭、そして山本と、レベルアップを果たした新鋭達が素晴らしい好勝負の連続で実力をアピール。念願の高田戦へ向け熾烈な争いを勝ち抜くのは誰か!?第4戦を迎えた高田と安生の5番勝負。安生のパートナーに抜てきされたニコ・ゴルドーと高田との注目の初対決は、安生、佐野を巻き込んだ大熱戦となった。



U.W.F. ROAD in 福岡

1996.12.25 博多スターレーン
カラー140分/¥9,515/UWFV-1062
高田の突然の宣告、Uインターの解散。しかしそんな激変の中でも手たちは精一杯の全力ファイトで「これがUだ!」とアピールした。Uインター最後の両エースの激突、高田vs安生、実力者同士の壮絶なシバキ合い、垣原vs佐野、そしてラストマッチとなる後楽園大会のメインイベント出場権をかけた金原、高山、桜庭、山本の気迫に溢れた闘い。西の聖地・博多スターレーンは、選手たちの確かな明日を予感させる熱気に最後まで包まれていた。

★お求めはお近くの書店、レコード店、ビデオショップ、電器店か、直接当社にて。
〈通信販売要領〉 現金書留 郵便振込 口座番号…00190-9-753158 ・ いずれかの方法で下記住所へご送金下さい。
ビデオの送料はサービスですので広告記載の代金のみで結構です。どちらの場合でも住所・氏名・年令・TEL・希望商品名の明記をお願いします。(郵便振込の場合は用紙裏面の通信欄に記入)

表示価格は税抜きです。消費税を加算してください。(掲載商品の—1997年3月31日まで¥9,800 税込価格 1997年4月1日以降¥9,990)

〒169東京都新宿区高田馬場3-3-1 ユニオン駅前ビル5F TEL.03-3360-3810 FAX.03-3366-7766
QUEST 株式会社クエスト http://www.bekkoame.or.jp/~questnet/ E-mail:questnet@bekkoame.or.jp
クエストビデオカタログをご希望の方は270円切手をお送り下さい。通販ご利用の方にはもれなく差し上げています。

※当社でのお求めは通信販売でのお申し込み、もしくは下記ショップへご来店下さい。

格闘技&武道ビデオショップ クエストII
小社及び国内で発売されているあらゆる格闘技、武道のビデオを揃えております。
●JR高田馬場駅から歩いて1分
●営業時間
月~金 AM10:00~PM6:00
土 AM10:00~PM5:00
日・祝・祭休み



別章＝時代の中のプロレス＜第2回＞

プロレスについて考えることは狂喜である
復興!「ザ・ドマイナーパワー」

山本隆司

4月2日付けの産経新聞の夕刊に興味深い記事を見つけた。

本当に見出しがおどっていた。

「プロレスはスポーツにあらず!!」

小見出しは二つあった。

〝米で「娯楽ショー」と定義〝

〝税金対策で自己申告〝

だいたいの要旨は次の通りである。

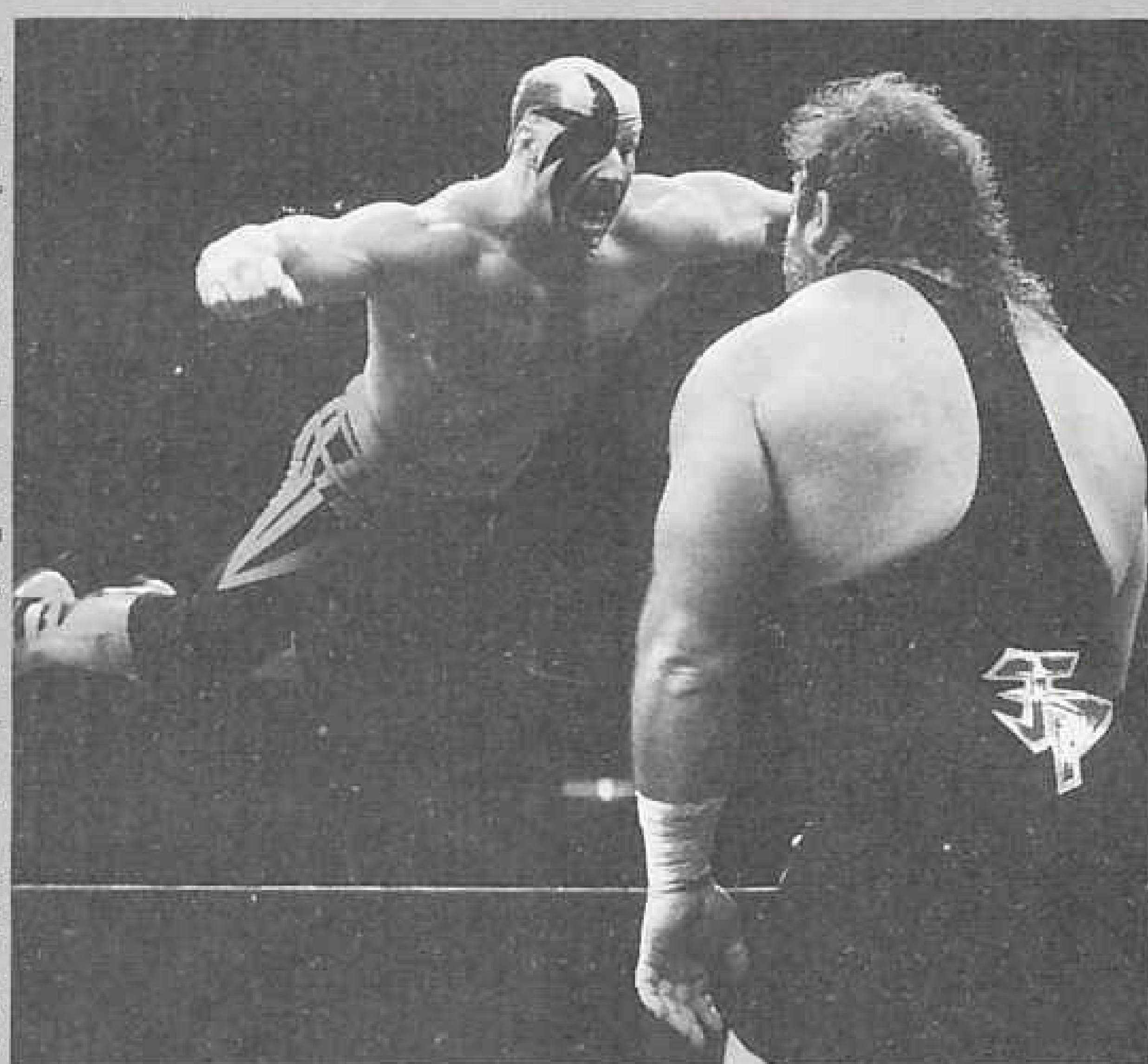
「米ニュージャージー州でこのほどプロレスをショーのようなエンターティメントと定義し、免税措置を与える州法が成立した。米プロレス界は、この法律を歓迎しているが、自らスポーツとしての存在を放棄したとして話題を呼んでいる」

なるほどこれは面白い話である。

現在、アメリカのプロレス業界はハウスショー（興行）からくるあがり（収入）よりも、ペイ・パー・ビュー（P・P・V）、つまり有料テレビからくる収入を財源の柱にしている。

WCWはその典型である。興行収益は初めから当てにしていないのだ。この全国的な有料のテレビ中継には、ボクシングなどと同様に10万ドル（約1240万円）のメディア税が取られるのだ。

10万ドルは大変な金である。ところがP・P・Vでは一回あたりの契約料が25ドル前後のため10万人の契約者がいると、売り上げは2億5千万円になる。



▲昔からプロレスファンは「スポーツ」という言葉に弱いが、プロレスが世間の価値観におもねる必要はないのだ

お金の桁（けた）が違うのだ。そのためWCWとWWFはずっとニュージャージー州でのP・P・Vの開催を回避してきたという。

だが、今回の州法変更で10万ドルのメディア税は払わなくてよくなった。それによって次の三つを失った。

①プロレスは州のスポーツ委員会の管理から外された。

②プロレスラーは試合前の健康診断を受ける義務がなくなった。

③プロモーターとレフェリーもライセンスが不要となった。

へえ～、アメリカではプロレスはスポーツのジャンルにはいっていたのかとその方がびっくりした。

プロレスは別にスポーツである必要は全然ないのだ。アメリカの人気プロスポーツの大リーグとNBAは、スポーツという側面よりも、エンターテインメントの方に重点をおいている。

エンターテインメントとは観客が評価を下す世界のことである。その場合、プロレスは「ショーのようなエンターテインメント」だからスポーツではなく、そうしたプロレス界の娯楽ショー化には、ファンも失望しているという論法だ。

それに関してWWFの代表者は「レスラーはたしかに殴り合うが、それはもちろん演出の一種」といったそうである。

スポーツは10万ドルの税が課せられる。スポーツでなければ税は免除される。

プロレスがスポーツであるのか、それともスポーツではないのかを論じるのはナンセンスで不毛である。

なぜならプロレスはスポーツとは別の何かであるからだ。その別の何かがなぜ「ショーのような」とか「演出の一種」という必要があるのか?

そこがまったくバカバカしい。

お前ら本気でプロレスを定義しろと言いたい。頭が悪すぎる。

スポーツはやるもの（競技者またはプレイヤー）が尊重されるもので本来、みるもの（観客）はなくてもかまわないものなのだ。

プロレスの主体は観客にある。「初めに観客ありき」である。この論法でいくとスポーツが税を免除されなければならない。そうなっていないのはスポーツが巨大商業化した証拠でもある。

アンダーテイカーのようなキャラクターが存在する世界が、スポーツであるわけがない。プロレスはおとぎ話の世界である。

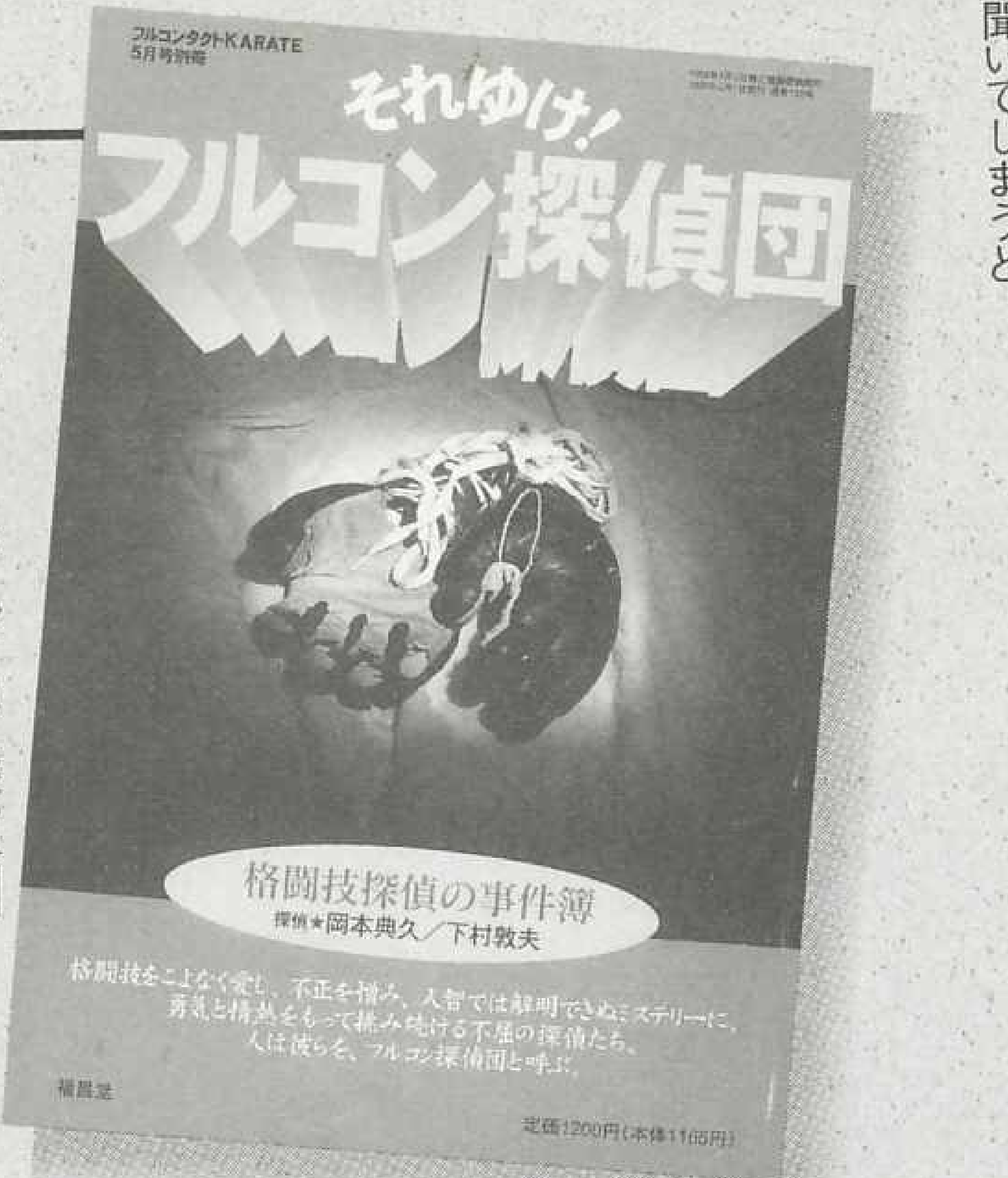
観客がおとぎ話に酔う世界に税を取ったらバチがあたる。正解である。

『紙プロ』22号以来、沈黙を続けてきたあの物騒極まりないコーナーが帰ってきた!

日佐夫クン人生劇場
書評の星座 PART2

書評は平和ではない
書評は戦いである
武器のかわりが毒舌であるだけで
それは地上における最も激しい厳しい
自らを捨ててかからねばならない
戦いである——

(ネール元インド首相の娘への手紙)



それゆけ! フルコン探偵団
(岡本典久・下村敦夫／福昌堂)

「看板に偽りあり」、もしくは「何でこうなるの?」(by萩本)。題材はいいのに、そんな言葉が似合いすぎるのが非常に惜しまれる一冊だ。

たとえば「『キックの鬼』失踪事件」なる謎めいた章の場合。探偵団がどう事件を捜査するのかと思えば原作のあらすじとアニメの内容紹介をするだけで、「まだ調査しなければならないことが残っているが、それはこの別冊の続編で明らかになるだろう」という何の解決にもならないまとめで、あっさり捜査を打ち切らせていたり——。

そして「赤星潮(『四角いジャングル』の主人公)を探せ!」という章の場合。『四角い〜』の劇画家・中城健に電話してきた黒崎健時先生が、「娘が学校で『黒崎さんのお父さんって、すごく恐いのね』って言われるのが可哀想だから」との理由で顔を優しそうに直すよう訴えただの、ケンカオリンピックに参戦した謎のカンフー男の正体が、プロ空手で牙直人(梶原一騎の大傑作『カラテ地獄変』の闘うヤリチン主人公)を名乗った極真カラテマンだったなどの大スクープを掴みながらも、なぜか肝心の赤星を捜査しないで終わるのだから、あまりにももったいなさすぎる。

まあ、和製カラテ映画の重鎮・南部英夫監督に取材すればなぜか格闘技歴を聞いてしまうという、さすが格闘技を「観る側」ではなく「やる側」の人間ばかり揃った『フルコンタクトKARATE』の別冊!と痛感させせられるステキな部分もないわけではない。

だが、「やる側」の人間でありながら『人はなぜ山に篭るのか?』なる章で実際に山篭りもしないようでは、まったくもって本末転倒。非常に問題であろう。

なにしろスポーツ経験皆無のボクでさえマス大山同様、あの清澄山に1時間ほど篭っているほどなのだから(その苦労も空しく二日後、池袋の路上で4人の暴漢に襲われ、頭を4針縫うことになるんだが)。

さらに「謎のブルース・リー人形を追え!」の章では、そこらの雑貨屋でいくらでも売っている輸入リー人形を一種類紹介するだけで「あとは自分で作るしかない」だのと言い切り、なぜかガレージキット屋に乗り込んでリー人形ではなくエヴァ初号機を紹介しちゃったりするのだから、おちゃめにも程がある。国内外問わずいくらでもあるぞ、ガレージキットのリー人形なんて。

まあ、「格闘技以外のことは何も知らない自分の愚かさに気付く」なる記述もあることなので、それも無理もないのかもしれない。

だが、「聞いたことのない映画のタイトルが含まれていたのである。その映画の名は『世界最強のカラテ・キョクシン』という」などという格闘技知識すら疑わしいとしか思えない記述だってあるのだから、これまた非常に問題であろう。

こんなフルコンどころか完全に寸止めで終わっている未熟な捜査しかできない探偵に、報酬(すなわち本の代金)を支払う必要が果たしてあるのか? と、ついつい温和なボクも毒づきたくなるが、今回は良しとしておくとしよう。

我が社が2年以上前に『大山倍達とは何か?』で再録して業界に波紋を投げかけた、「私が牛を殺すというのはウソですよ(笑)。万一、殺せるという人があったら会ってみたいです」(昭和28年『オール読物』より)というマス大山爆弾発言を、非常に遅ればせながらとはいえ格闘技マスコミが初めて活字化したという小さな功績に免じて、だ。



プロレス世紀末読本
(宝島社)

「相」変わらず抜群のUインター暴露話を繰り返すセッド・ジニアスの天敵・流智美がとにかく面白い、恒例の別宝プロレスシリーズ最新作。

だが小川英二とかいう輩(こんな長渕剛丸出しな筆名を使うのはShowぐらいのものだろうが)による抜群に面白くない佐山インタビューには、正直言って愕然とした。いや、マジで。

なにしろ、いま修闘という足枷が外れて抜群に面白い男となった佐山に、いまさら誰もがさんざん聞き尽くしたバーリ・トゥードでの技術論だけを聞いてしまうのだから……。

それだけではない。「最後にハッキリ言ってほしいですね。プロレスとバーリ・トゥードは違うものだって」と、まさしくどうでもいい誰にでもわかりきっていることを佐山に言わせようとした彼氏。「それはもう言っときましょう。別モンなんですから」と期待通りに答えられれば「別モンですか(笑)」と、無意味な「(笑)」付きで返すのだから、まったくもって不快極まりない。

さらにShow氏の実名による、これまた「(笑)」を多用しまくった『ウ○コを巡る因縁"笑"史』なる、クソつまらないだけでなく下品すぎて腹が立つ話まで掲載されているのだから、不快すぎるにも程がある。クソぶっかけるぞ、コラァ!!

ターザン山本バッシングに熱中する単純なプロレスファン諸君にボクは言いたいね。そんなわかりやすい敵だけでなく、他にも叩くべき人間はいくらでもいるんじゃないか、と。



日本女子プロレス殿堂大図鑑
（須山浩継＆安田拡了／ジャパンミックス）

女子レスラーの手書きアンケートを中心とした内容はともかく、一人約600文字にも及ぶスーパーロング著者紹介が圧巻な一冊。とにかく、ここで安田拡了ことヤスカクおじさんが無茶苦茶イイ仕事をしているので、勝手に引用する。ではどうぞ。

「だいたい、週刊プロレスの編集部ではヤスカクと呼ばれているんだけど、無礼であろう。拡了さんとか安田さんとか言ってチョンマゲ。ネ、ネーてば」

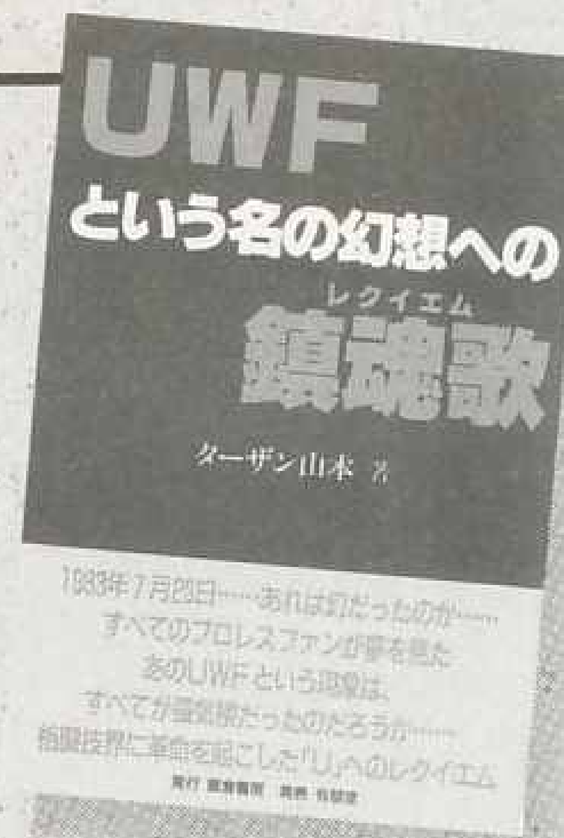
ビバ、ヤスカクおじさん！　この破壊力ありすぎる文章に敬意を表し、今後は愛を込めて「拡了さん」と呼ばせてチョンマゲ。いや、呼ばせていただくこととしよう。面識ないけど。



風雲プロレス城
（籔中博章・他／小学館）

チャンプアの入場テーマ作曲者であり、自分用のマスクを制作する際にも「このきれいな金髪は外に出したい」と言い出すような長髪＆バギーパンツ愛用者・籔中氏。そんな著者がインタビューカットにも顔を出しまくり、プロレス雑誌比較コーナーの採点も籔中君マークで行うという、原タコヤキ君級の出まくりぶりが一部マニアにはたまらない一冊。

だがそれも、わずか数カットしか出ていないというのに存在感を発揮しまくる『週プロ』でおなじみ須山ちゃんの前では完敗であろう。どんなに忙しくて会社に泊まり続けてもメガデスからアイアンメイデンまでTシャツの着替えには徹底したこだわりを見せる須山ちゃんに、小細工は必要ない。もう最高です！　ネ、ネーてば。面識ないけど、のものもファンです。



UWFという名の幻想への鎮魂歌
（ターザン山本／有朋堂）

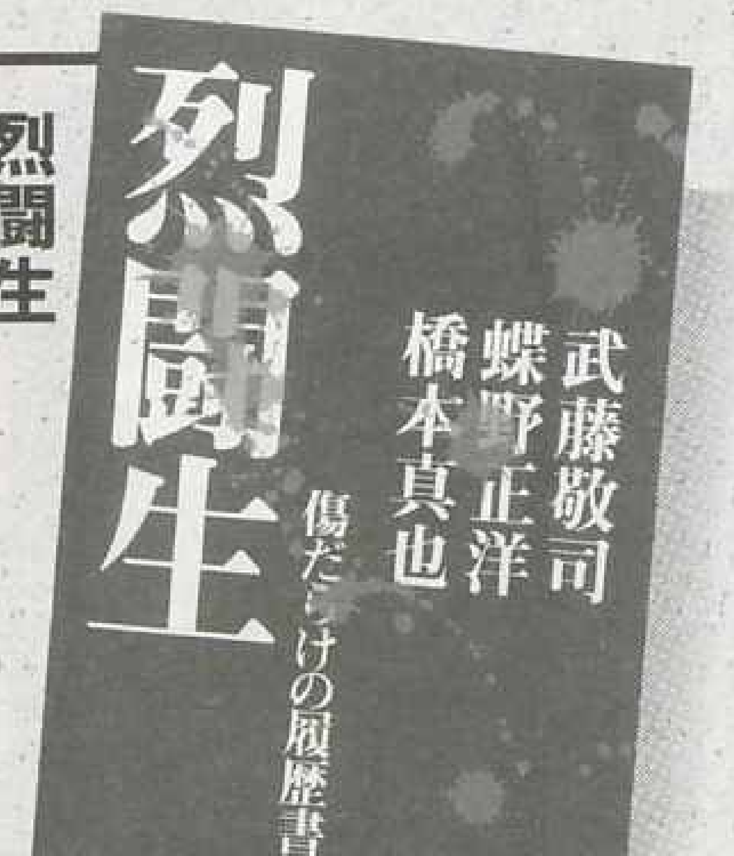
これは1988年、週刊ファイトで連載されたターザン流UWF論の初単行本化なのだが、実はボクも知らなかったちょっとイイ話が掲載されているので、勝手に紹介してみるとしよう。

長州の新日離脱の原因となったパキスタン遠征のことである。食事が合わず重度の下痢に悩まされた上、長州革命中だというのにターゲットの藤波とタッグを組まされたことで「かませ犬」の長州的には「こんな会社、辞めてやる！」と思い立ったのだと、ボクはこれまで聞いていた。

だが、ターザンはこう主張するのだ。「パキスタンは純然たる回教徒の国ゆえ、飲む打つ買うの遊びができなかったためである」、と。

それだけではない。「長州は斎藤とともに浦田社長に会い、UWF移籍に関する話し合いと交渉を持った。一貫したUWF嫌いで通っている長州にとって、この話は最も触れてほしくない部分だろう」なる知られざる話を、これまた最も触れて欲しくない部分とわかっておきながらも堂々と活字化するのだからタチが悪い。

これでは前田にペンゴロと呼ばれ、長州にクソぶっかけられるのも自業自得というものである。



烈闘生
（武藤敬司＆蝶野正洋＆橋本真也／幻冬舎）

猪木イズムを植え付けられた最後の世代・闘魂三銃士（その後は石沢あたりまでブランクが空く）。彼ら特有の肩の力が抜けきったトークの面白さは、海外遠征話や若手時代の話を中心としたこの本では、このように大爆発しまくっているのである。

「キニヨネスともすごく仲良かったですよ。食事に招待してくれたりとか、星（女を意味する隠語）を紹介してくれたりとかね」

「俺にいっぱい貢いでくれるおばさんがいたんですよ。その人、以前に自殺未遂起こして入院してたんですけど」

などと、二枚目アイドル路線のはずが、平気な顔して女子の話をしまくる武藤。

「（高校時代）じゃあパーマを切りゃあいいんですねって、床屋に行ってモヒカンにしちゃった。でも俺、家ではマサヒロちゃんだから」

「ヨーロッパでは『女遊びもしなければ練習もしない。こんな日本人レスラー見たことない』って言われました」

などと、ヒールでありながら育ちが良いだの、さらに練習しないことまで公言する蝶野。

「新日の入門テストの前にエロ映画見せられて、『ここで勃ったら駄目だ！』って」

「俺、童貞は絶対、素人の子で切ろうって思ってたんだけど、荒川さんの押しの強さに負けてね。筆下ろしだって言われて。スケベ椅子でケツ洗われるだけで爆発寸前（これが偶然にも長州軍離脱の当日だったため、3発抜いて会社に戻ったらすっかり大騒ぎになっていたという）」

などと、某誌の人生相談級の破壊的トークを発揮しまくる橋本（理想のタイプはアンヌ隊員）。

さすが我らが三銃士、であろう。先日、ファイト紙上で橋本が「俺達、スーパースターのパーぐらいまではいってる！」などと訳のわからないステキなことを豪語していたものだが、それすらも誰もが納得できること確実な一冊だ。



馬場伝説
（監修・全日本プロレス／筑摩書房）

原寸馬場や馬場壁紙も収録のCDロム版に続いて出された『馬場伝説』のハードカバー書籍版（カバーを外すと、ここにも原寸の馬場顔面アップが！）。

ブラッシーを見たとき、銀髪を知らないから「なに、このおじいさんは」と思っただのという「馬場さん、ちょっといい話」を多数含むインタビュー中心の本なのだが、そこには馬場さんの衝撃発言が掲載されているのだ。

15年ほど前に、全日がシン、ハンセンに続いてホーガンとも契約をキッチリ済ませた（！）にも関わらず、すっぽかされたときのことである。

「だから、あいつはぶん殴られたんだよ。あいつはもう日本に来ないだろうから話をしてあげますけどね（笑）。京王プラザホテルでね、テリー・ファンクがぶん殴っちゃったんだよ（笑）。そしたら、そこにタイガー戸口も一緒にいたんだって。『お前は邪魔だ』って、そいつも殴られたんだって（笑）」

ああ、いつでも不幸なタイガー戸口。やはりプロレス界でダブルクロス（二重契約）な輩は有無を言わさず殴られる運命にあるのだろう……。

結核が必死に集めたバトバト秘蔵写真
命懸けの写真館




命懸けの電車

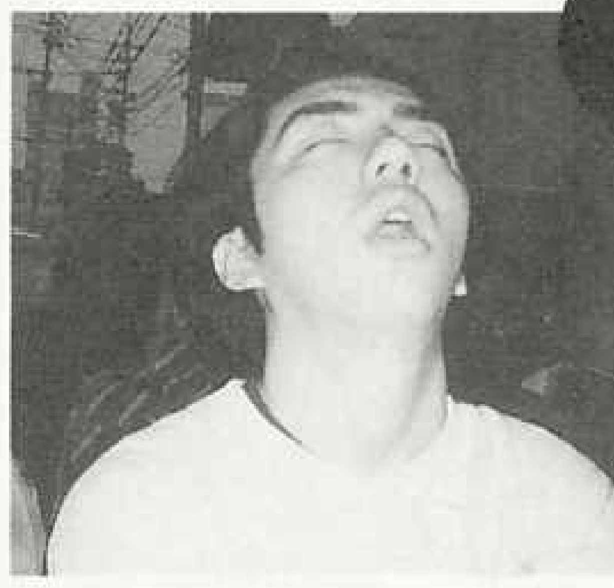



命懸けのバス





命懸けの寝顔

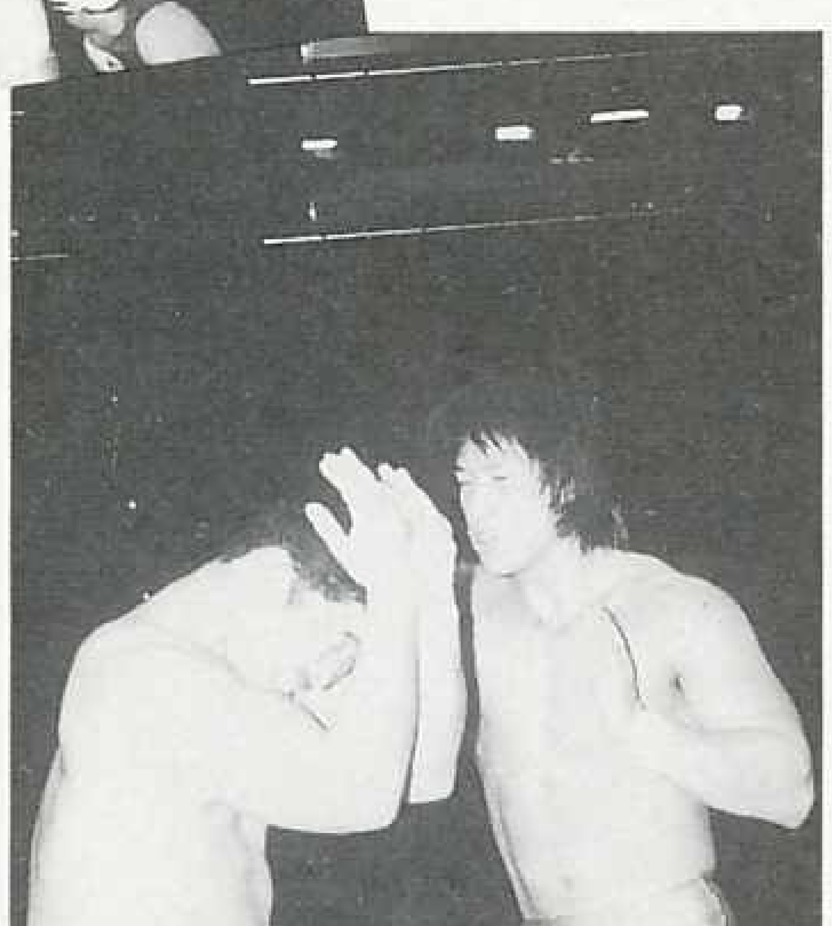



日記 in 九州

もし、あなたがプロレスファンなら必ず一度は売店でグッズを買ってるはずだ。買わないまでものぞいてるはずだ。ファンがいてはじめてプロレスが成立する以上、これはもう「ファンと団体を結ぶ中継点」と言っても差し支えはあるまい。すなわち、売店なきプロレスは無能なり！　プロレスなき売店もまた無能なり！　ということになる。ここに入り込めば、現在のプロレス界が見えるのではないかと思い、今回はバトラーツの売店に命懸けで潜入してみた。このページは、その際の様子を描いた渾身の売店日記である。

3.13 長崎 ncc&スタジオ

売店の仕事で朽ち果てても オんモシレぇからいいんです！

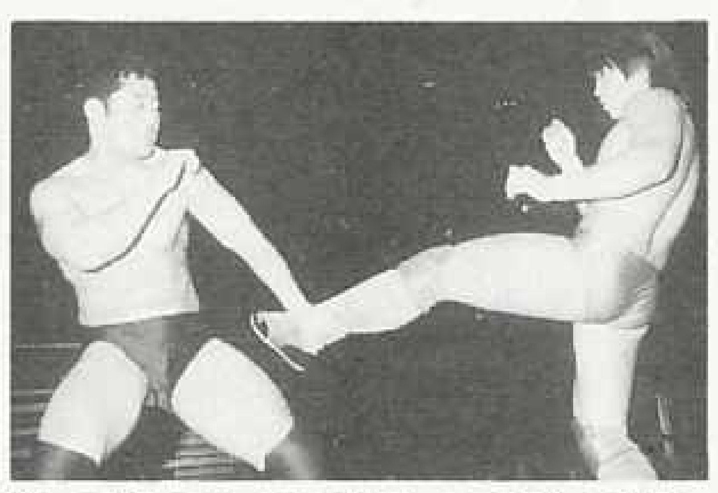
今号のインタビューでは自ら「地味な試合」と言ってのけた臼田。う〜ん、いい試合。



西VS松永のジャケットマッチ。う〜ん、西さんはいい顔してる。



第一試合の鶴VS伊達は3R鶴の判定勝ち。西道場の人たちです。う〜ん、ボコボコ。



第三試合の田中VS臼田。この試合の前「3カウントは入りません」とアナウンスが入った。



まさに草キック・ボクシング！　う〜ん、あしたのジョーみたいだった。

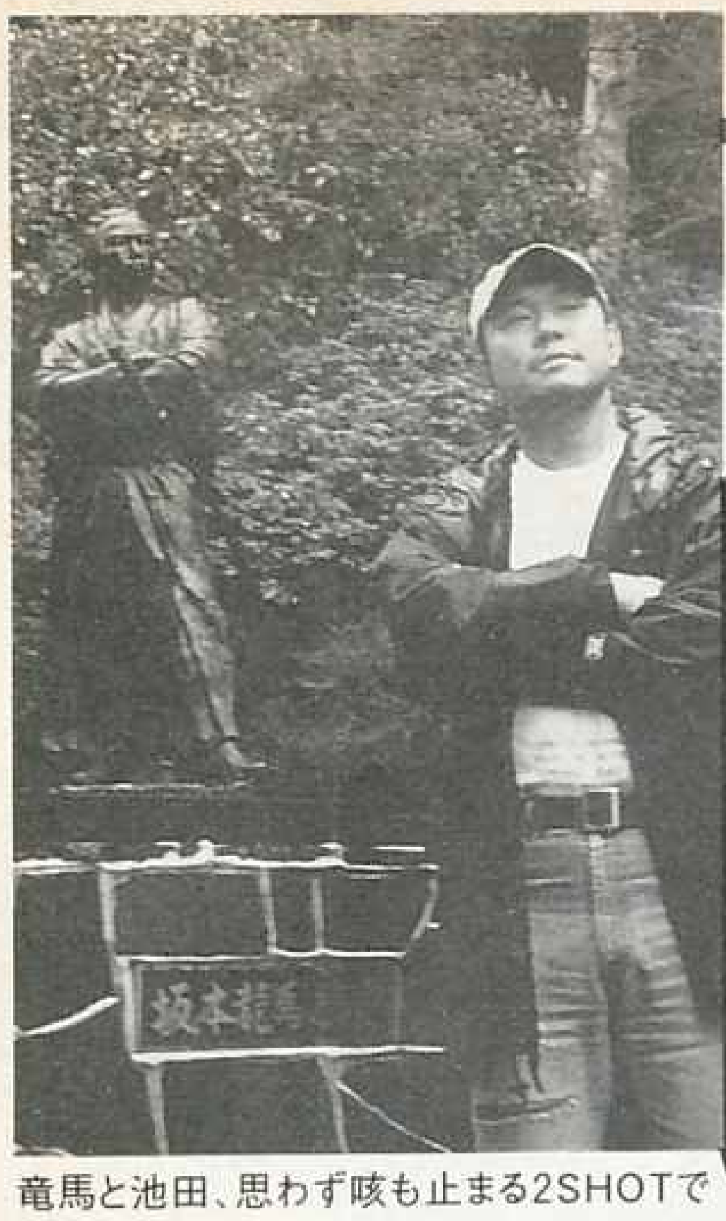
「オイ、結核！　オレと一緒にバトラーツの九州ツアーに行くぞ」と山口昇本誌編集長が吠え出した。出発の3日前のことだ。今回の九州巡業はファンのための観戦ツアーも同時に組まれており、当然レスラー、関係者、ファンと大人数での集団行動を強いられるわけだが、人一倍協調性のない本誌編集長が自分から「行きたい」と言い出すのだから、これはよっぽどの大事である。

出発当日、協調性のない山口昇、のものも、結核の紙プロ特別取材班は、時間に遅れて羽田空港に到着。飛行機は落ちることなく、無事に長崎に着陸した。

日頃の行いのせいか、長崎の空は文句なしの雨模様で我々を迎えてくれた。そこからバスに揺られること1時間30分。試合会場である長崎文化放送（NCC）スタジオの前でバスは止まった。さっそくアレク選手&日高っちょが荷物を降ろし、会場の設営に取り掛かっている。すると、「いや〜、どうもどうも、結核君！　君、今日は売店をやって。それじゃ、よろしく！」と、ボンジョビ島田レフェリーから売店員を任命されてしまった。

会場は後楽園ホールの3分の1程の大きさだった。こういう狭い会場は個人的に大好きだ。

やがて大型トラックが到着して、リング機材が運び込まれてきた。重い鉄柱やワイヤーを担いでの肉体労働は無理があり、余命の少ない病弱なボクとしては命懸けであった。咳き込む僕を見つけて、「ゲホゲホうるさいから何かと思ったら……、結核君は元気じゃないか！」という島田レフェリーの激励は素直に嬉しかったのだが、



竜馬と池田、思わず咳も止まる2SHOTである。



命懸けの竜馬！

本誌が命を懸けて入手した竜馬と社長の2SHOT。

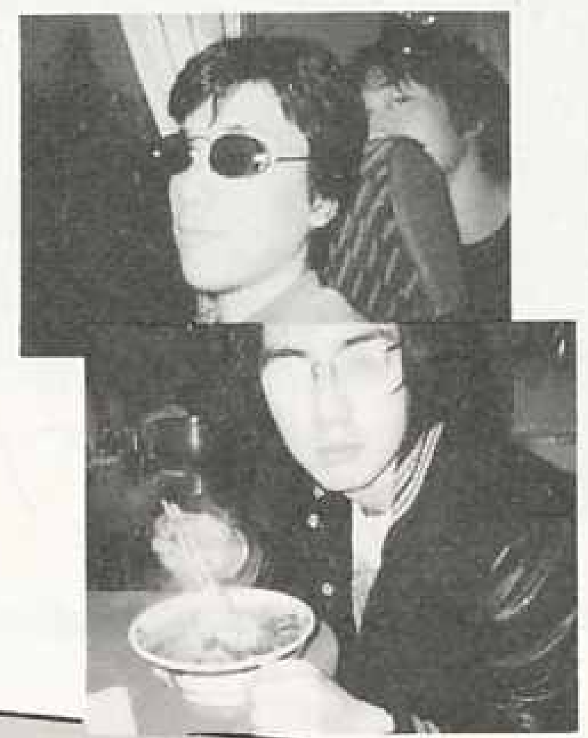


まずは撮るでしょ、というわけでターザン・ボーズで記念撮影。



世界的なマジシャン？ 小川心平の店で発見した『ハーフ&ハーフかつら』

命懸けの小川心平







命懸けのメガネ

伸びた寿命も、また縮む!?

坂井結核の '97 バトラーツ巡業同行記 命懸けの売店日



試合は石川の脇固めで船木がギブアップ。う〜ん、バトラーツのタッグは面白い！





メインは池田&船木VS石川&星川。う〜ん、すげえ蹴り！





第四試合の小野VSアレク。小野のTKO勝ち。う〜ん、アレクがいい攻め。





う〜ん、何だぁ？ 小野の打撃をガンガン受けまくったアレク。

同時に「殺す気か！」とも思った。

リング作りも一段落し、開場してお客が入ってくると、今度は売店の仕事が待っている。これが死ぬほど忙しい。迫りくる客をサバくだけで病弱な店員としては精一杯であった。お釣りを間違えれば命取りだ。まさに命懸けの売店である。

話は変わるが、この団体のグッズは、売る気があるのかどうか分からない。ガッチリTシャツは、その典型であろう、とてもかわいいが。そこで火に油を注ぐのが、同じ売店に並ぶパンチ・プロモーションのグッズである。ＲＩＮＧＳのロゴをパロったTシャツや、ゲーセンで取ってきたようなグローブに池田&小野の直筆サインが入った『ぼてくりグローブ』などである。

売店では、グッズを購入した人に選手がサインを上げるのが、どの団体でもおなじみの風景である。バトラーツとて、例外ではない。長崎では田中、福岡では船木の両選手がサインをしていた。これが東京とは全然違った風景になるので面白い。小学生が本人の目の前で、「コイツ、ポスターに出てた人だよ」とか言ってるのが、微笑ましい。コアじゃないファンばかりの会場というのもいい。親子連れが多いというのも地方会場の特色である。試合を見ながら親父に技をかけてた子供がいたが、こういう風景がプロレスのラディカルな姿ではないかと思った。地方の会場には、東京にはない風景があった。

翌日はバスで3時間をかけて福岡まで移動。長浜ラーメンを食べに行くが、店に向かう途中で、ものすごい雷雨の大歓迎を受けた。つくづく、日



肉体労働の果てに昏睡状態の結核（現代風）。



九州では週プロが土曜日発売なので、この日（金曜日）に手に入るのは貴重だ。この日は美穂ちゃんテレカとセットで販売していた。

命 売店百景



これが幻の『ぼてくりグローブ』だ！ 世界に5個しか存在しない。パンチ田原、珠玉の一品である。



客の心を打ち落とすマシンガントークが人を呼ぶ。

3.14 博多 西新パレス

売店が大繁盛記念！ 狂乱の街・博多で試合も売店も大噴火！



アレクVS中野の一戦のセコンドに臼田がついた！ う～ん、早く見たいぞ中野VS臼田！



ライガーばりの低空ドロップキックまで飛び出した。う～ん、きれいに決まってる！



今回のツアーでは1試合だけの日高を田中が秒殺。う～ん、はやい。



表情豊かな船木と、ポーカーフェイスの臼田。う～ん、しぶい！



臼田VS船木は盛り上がった。船木が左ヒザを攻める。う～ん、ねちっこい。



久々の試合の中野が逆片エビ固めで勝利！ う～ん、アレクがよかった。



これがフィニッシュ。う～ん、ダイナミック！

頃の行いを反省しなければなるまいと思った。

会場であるボーリング場・西新パレスに入ると、昨日と客層が違う。昨日の客層の半分がマニアになった感じで、会場も一味違った熱気であった。博多の観客の体温の高さを売店でも体験することが出来たのはいいが、ボクは半死半生であった。ここの売店は昨日よりも格段に忙しいため、一時は昏睡状態にまで陥ったが、それでも「オレが売店を守る」という気迫だけは、グッズを買う人に伝わったと思う。

この2日間を通して、怪しいグッズに囲まれてみて、それを笑顔で買って行く人達を見てると、いろいろと思うことも多い。例えば買ったグッズを、いつまでその人は持ち続け、使い続けるのか？ どんな時にぼてくりTシャツを着てるのだろうか？ とか。もちろん観戦の記念にという意味もあるのだろう。だが一方で、そのグッズがあからさまに日常生活に食い込んでいる人たちもいる、少数ではあるが。そういうマニアックな層の人たちがプロレス団体の縁の下を支えているんだなと、改めて実感することができた。売店とは実に業の深い世界であった。

今回の旅で売店という世界に触れたボクは売店員としてのグッズ販売に興味を覚えてしまいました。これからは要請があれば、いろんな団体の売店に参戦したいと思っています。と、同時に結核のコスチュームに広告を入れてくれるスポンサーも募集します。小川とスバルのような良い関係が築ければと思います。





のも コラム

ホントに 命懸けの汚点日記 in 九州

アディオス、アミ～ゴ! 新日本プロレスの東京ドーム大会をスッポかして、14時間も寝ちゃったのものもだよ。のものもの睡魔は何よりも強し!

というワケで、新日本はのも睡魔に勝てなかったけど、唯一勝てるんじゃないかと思うのが、バトラーツ!(自信ないけど)ま、そういうことで大好きバトラーツ(宮内美穂ちゃん風に言うと)を見るために、のものも今回は(って言うか、いつものことだけど)自腹切って九州ツアーに参加したんです。

バトバトの試合もおもしろかったし、おいしいモノも腹いっぱい食べたし、満足マンゾーの旅でちた。そう、ただひとつのことを除いては……。

それは2日目の夜の出来事でした。石川社長、臼田さん、島田レフェリーとウチのバカ軍団(小野ちん風に言うと)でごはんを食べてから、のも(バカ1号)、のもダチ(バカ3号)、結核(バカ4号)、臼田さんでチームタコのいるお店へ移動したんです。そこは、何やら九州のエライ人のお店だったらしいんだけど、そんなことをこれっぽっちも知らないのものもは、かなりエキサイトしちゃったんですね。小野ちん(バカ2号、ちなみにバカ師範代は池田大輔)にはグーパンチでボコボコ殴られ、臼田さんには肘鉄入れられ、次の日にはオデコがボッコリ腫れ、しかも内出血してました。ま、いつものことだと言えばそうなんですけど、内出血するほど殴ることはないだろーに(自分からオデコ差し出してた説もあり。のものも、女だてらに身体張ってます)。ちっくしょー。今に見てろよ、いつかリベンジしてやる!



にっくきチーム悪巧みの2人と記念写真。これでもかー!っちゅー笑顔だけど、腹の中はリベンジで燃え上がってる。ま、元々デコっぱちだから、タンコブできてもあんまり変わんないだけどね。って、ほっといてくれ!



最後は福岡空港で記念撮影。楽しい旅だったが、ボクは次なる売店を求めて旅立つ宿命にあるのだ!



美穂ちゃん、船木選手と共に売店に命を懸ける結核。半分死んでる!?

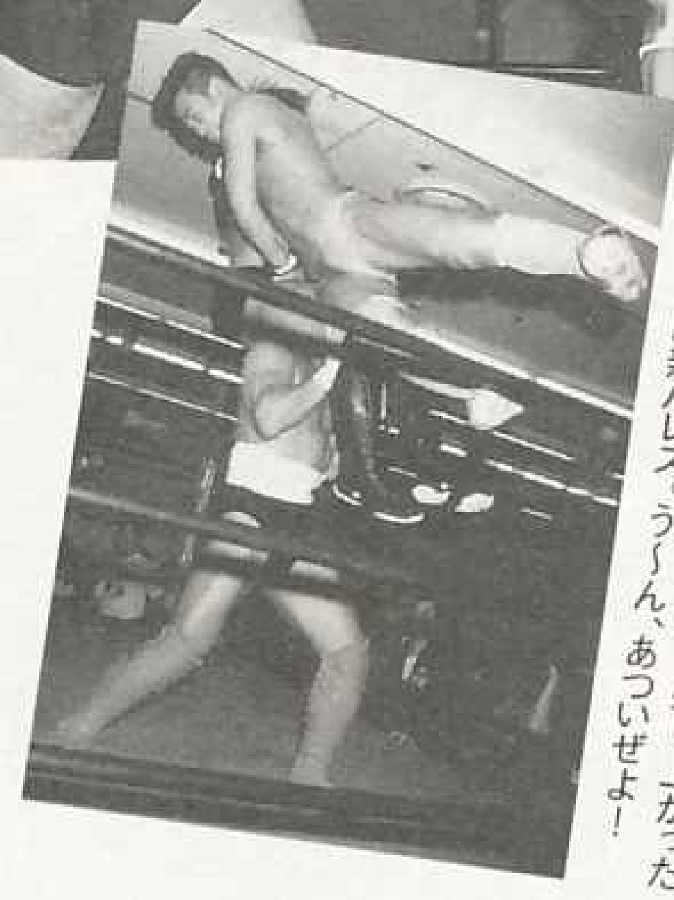




ハイキックを受けまくる星川。う～ん、受けの凄み!

命

ワキ腹を痛めてる池田を蹴りまくる石川。う～ん、プロの鉄則!



チーム・タコのダブル・インパクトで飛び出して、かなり盛り上がった西新パレス。う～ん、あついぜよ!





4・15でシングルで対戦する2人。う～ん、楽しみ! もう終わってるけどさ。



すごい表情の星川選手。う～ん、いい顔!

格闘探偵団 バトラーツから5月の試合日程のお知らせです!

ドーンと来てみろ!
5・18(日) 新潟フェイズ

イカレちゃったやつらの祭典!
5・21(水) 後楽園ホール

見ずに死ねるか!
5・24(土) 名古屋中村スポーツセンター

初のファンクラブ限定マッチ敢行! 見たい奴は今すぐファンクラブに入れ!
5・25(日) JCTVスタジオ

チケットの問い合わせは0489・63・0005 バトラーツ事務所まで。

さらにさらに!!

9月には全国ドームツアーを敢行するバトラーツ。あなたの地元にある小さな(別に大きくてもいいけど)ドームを教えてください! きみんちの近所にバチバチがやってくる! こちらもバトラーツ事務所まで!

注:紙のプロレスRADICALとバトラーツは一切関係ありません。



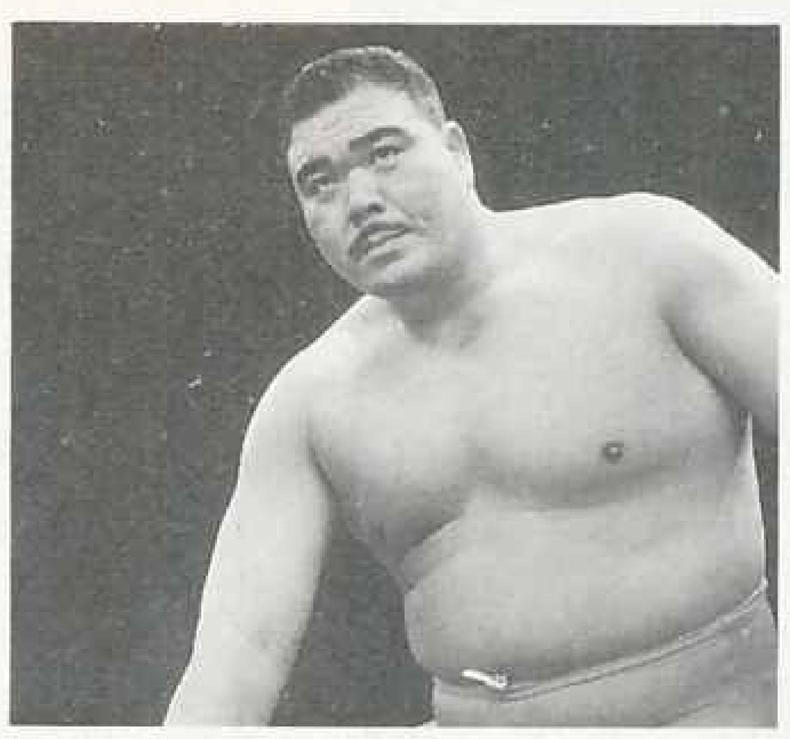
GIRLS ARE GIRLS

ガールズはガールズ

LOVE LOVE YASUDASSU

やぁぁぁ、みんな元気だったぁ？　バカ1号または氷の女こと、のものもだよぉ。ちなみに今日は、サスケ社長と2時間もドライブしちゃいましたぁ。なぜかと言うと、カタブツ君の初（ダメ）インタビューのため、のものもがサスケ社長をお迎えにあがったんだけど、普通だったら30分で戻って来れる道なのに（しかも2～3回通ってる道）、相変わらず、ま～た迷っちゃったからなの。おしゃべりに夢中になって曲がるとこ通り過ぎること数回……、最後は2人とも無言モードになっちゃいましたぁ。サスケ社長、気まずい思いさせて、ごめんなさ～い。

さて、気を取り直して！　前号予告した『LOVE LOVE YASUDASSU』のとっておきの話を教えちゃうね。…………って言っても、もう去年のことなので、忘れちゃったぁ。グハハハハハハ。……って、笑ってる場合じゃないよねぇ。えっと、破壊王に渡す『秀吉』のビデオを取りに来てくれたのが安田っスだったのね。駅で待ち合わせしてたんだけど、安田っスったら、なかなか来ないの。10分くらいしたら、人混みの中に紛れてんのに、全身から"オレは安田だ！　オーラ"を発してるデカイ図体した男を発見！「あ、安田っスだぁ！」と思って近寄ったら「遅れてすいません。一つ手前の駅で降りちゃって。ヌハハハハ」と。そして「あのコレ～」と差し出したのは1枚の紙切れ。受け取って見たら、何と『破壊王・2度目のおこずかい』じゃありませんか！　ハタから見たらどう思うよ、コレ。風格のいいオッサンからおこずかいもらう小娘（小娘って言うほどヤングじゃないけどぉ）。援助交際？　いや、もしかしたら姐さんと子分？　ま、それはいいとして、「受け取れませ～ん」と言ってるのものもを尻目に「じゃあ、どうも～」と言いながら走り去ってく安田っス。しかも来た方向と同じ電車に乗ろうとしているぅ。「安田さん、そっちじゃないですよぉ」と改札で叫ぶのものもに、安田っスは「いいんですよ～」と言いながら軽やかに走り去って行った。ほぇぇ？　どうして「いいんですよ～」なの？　帰る方向と逆なのに……。そんな奥が深い安田っスに、のものもは首ったけぇ♥　（完）



この日の安田っスは、グランドコートに、セーター、スラックスといった、「ゴルフ帰り？」っちゅー出で立ちでした。対するのものもは、思いっきり地元仕様っちゅー手抜きの格好。ハタから見たら、ホント、謎の2人だよなぁ。

LOVE LOVE PANCRASE

やぁぁ、みんな元気？　1日最低12時間寝るのものもだよぉ。最近、あまりにもみんなに「デブ」呼ばわりされるので、ようやく自分が太ったことを自覚してきたよ。ちなみに「レスラーばっか見てるから、自分のこと小さいって錯覚してんじゃないの？」とは、バトバト・池田選手談。バト道場でちゃんこをごっちゃんこしてる時に「お皿は食べちゃダメだよ」とは、バトバト・小野選手談。みんなひどいねぇ。よぉし、こうなったら、甘味仲間の佐山タイガーも痩せちゃったことだし、のものもも肉体改造に取り組むぞぉ！　ハイブリッドな身体目指してがんばるもんね！（と言ってるそばから机はお菓子の山）

ってなワケでぇ、ハイブリッドと言えばパンクラス。のものもはパンクラスのことも大好きい～。……って、ちょっと待てよ。のものも、パンクラス好きだったっけ？　ごめんなさ～い。実はのものも、パンクラスのこと全然知らないの。でもね、こないだ、某世迷い人の粋な計らいで……ま、粋かどうかは置いといて、某迷い人のセッティングでパンクラスの高橋氏（世迷い人風の呼び方）に会ったので、その話をみんなにこっそり教えちゃうね。

それは、高橋氏がアルティメット大会から帰ってきてからの、とある日のことでした。場所は池袋のファミレス。会話の内容は、プロレスの話オンリー（パンクラスはプロレスじゃないのかな？）。高橋氏はのものものことを、いっぱしのプロレス記者だと思ってたようで、むしろサービス精神で話してくれてたみたいなんだけど、「タックルが如何に大事か？」なんて話、のものもは、ズバリ言って全く興味がないのですぅ。なので会話の内容はほとんど理解できなかったの。ごめんなさいぃ。お別れの時に「パンクラスは1回しか見たことないんですぅ（しかも高橋氏が欠場してる試合だった）」と言ったら、高橋氏はいかりや長介氏ばりに「ダ～メだ、こりゃ～」って顔をして帰って行きました。

あ、しまったぁぁ、「絶対、書いちゃヤダ」って言われたのに、この日のことネタにしちゃったぁ。のものも、うっかりさんですぅ。高橋氏、怒るかなぁ。でも、のものもは高橋氏のことも、パンクラスのこともだ～い好き………に、なるぞ、これから。



ちなみにファミレスでは、3人で仲良くチョコレートパフェを食べました。レスラーはホント、甘味好きが多いねぇ。甘味王ののものもとしては非常にうれしい限りですぅ。でも、のものもはダイエットだね。は～い、がんばりま～す。



世界格闘技連盟とは何か?

紙のプロレスRADICALは世界格闘技連盟を、たとえ嫌だと言われようとも断固として応援します!



文／吉田豪

―スポーツ新聞などに見る猪木軍団行脚の奇跡―

世界格闘技連盟とは何か？

いきなりだがストロングスタイルとはズバリ何だろうか？　近頃はテレ朝の辻アナまで「私の実況はストロングスタイルです、ヒャッホー！」などと口走っていたりするから、ボクの中で謎は無限に広がるばかりなのである。

本来ストロングスタイルとは「キング・オブ・スポーツとして強さを求め続けるプロレス・スタイル」であり、それゆえ強さを求め過ぎた配下の選手にいつ牙を剥かれるかもわからないという非常に危険な思想であった。

これはズバリ言わせていただくなら、猪木イズムと言い換えてもいいだろう。

佐山や小鉄、前田、藤原、長州、荒川といった厄介極まりない頑固な連中を山ほど抱えながら闘い続けた猪木の心中は、察するに余りあるほどだ。

しかもそれら厄介な連中に猪木イズムを伝授したらしたで、かつて日本プロレスを飛び出した自分のごとく、誰もが猪木イズムを発揮して新日を飛び出してしまうのだから、世の中うまくいかないもの。そうして皮肉にも自分で作り上げた団体内に猪木イズムが存在しなくなっていたというわけなのだ。

「新日本全体が小粒になり過ぎている」（猪木・談／東スポ）

「姑息になりすぎたんでね、新日本が」（猪木・談／週プロ）

さて、そんな数ある猪木イズム継承者の中でも、最も豪快に後ろ足でプロレス界に砂をブッかけていったのが初代タイガーマスクこと佐山聡であり、彼の厄介な暴露本『ケーフェイ』であった。

誰よりも格闘技指向（すなわち、これも猪木イズム）が強かった佐山が新日離脱後、「プロレス雑誌には載らない格闘技」を目指してシューティングを設立したのは御存知の通り。

その後、10年の時を経て身も心も丸くなった佐山が94年の福岡ドームで新日マット復帰を果たし、これまた格闘技指向の強かったライガーとの試合が決定したときは正直、緊張したものである。

たとえ減量失敗と諸般の事情によりエキジビションに格下げされようとも、緊張感溢れまくる試合を素顔で「ヘラヘラ笑いながら」繰り広げた佐山を見たボクは、「全て許すからプロレスへ帰ってこい！」と心から思ったほど。

だが、しかし。試合前には「猪木さんへの恩返しを……」だの「夢のある試合をライガー君と……」だのと腰の低い発言を繰り返していたくせに、直後のシューティング興行では手のひらを返し「新日で試合、いや芝居をしてきました（笑）」と、これまた相変わらず豪快に後ろ足で砂をひっかけまくるのであった。

その後もやはりシューティング興業で、かつてのライバル・小林邦昭を失神させたりもしていた佐山が、近頃は石沢や藤田といった若手しか理解者のいなかった猪木の元へ巡り巡ってようやく帰ってきたのだから、もうたまらない。

すなわち東スポの失礼な記事によると**「今、東京・世田谷区の新日本プロレス道場で連日、アゴの長い54歳が、太った39歳を徹底的にシゴきぬいている」**という**「猪木、デブ虎佐山をしごく」**状態になったわけなのである。

さすがに「あれだけクソぶっかけておいて、ふざけるな！」と激怒する新日選手もいるだろうが、「なんでも許しきる！」こともまた猪木イズム。

あれだけの技術とハート（前号インタビュー参照）を兼ね備え、さらに笑い好きという猪木イズムの継承者なんて、佐山ぐらいのものなのだから。

こうしてボクらの世界格闘技連盟が誕生したというわけなのである。

これだけでも二人のスパーリングパートナーとなったアマレス王・藤田君が、佐山流のフェイントや猪木流のバックの取り方を試合で披露したりと、ボク的には非常にたまらんチンだったもの。

さらに柔道王・小川直也のプロレス入りと続いたのだから、これはもう我々のような試合周辺の些末なストーリーに余計なサムシングを感じてしまう昭和のプロレスファン的には、非常にたまらなすぎる出来事であった。

猪木イズム、そしてストロングスタイルの復権を祝し、我々『紙のプロレスRADICAL』は、たとえ嫌だと言われようとも世界格闘技連盟を断固として支持する！

というわけで、久しぶりにファンタジーを生み出しまくった橋本対小川戦にまつわる報道を中心として、格闘技連合ちょっといい話をお届けすることにしよう。ではどうぞ。

◆

97年2月19日、**「小川直也、プロレス入り決定」**と一面で報じた東スポは、いきなりこう書いていたものだ。

「柔道界では様々な確執で苦しんだ小川。二度出場した五輪で金メダルを獲得できなかったのも、実力をフルに発揮できない状況も影響した。しかし、プロレス界はあくまでも実力主義」

一般常識でいえば柔道こそ実力主義のような気がしてならないんだが、東スポがこう言うんだから間違いない。

そんな小川に、猪木はこう言ったね。

「度胸がない男には、この世界務まらないというか。まあ、無理にアメリカ流のプロレスをやるのではなく、そのまま柔道での強さを生かしたスタイルでもいいのではないか」

要するに猪木は、「いまの新日はアメリカン・プロレスであり、そこに順応するのではなく最強の格闘技としてのプロレスを度胸を持って目指せ！」と強く主張したわけなのである。

東スポの『マシン眼』では**「プロレス入りするのなら、やはり飛んだり跳ねたりする小川が見たい」**などと書かれたり、その後もしつこく**「小川、空**





中技（ローリングソバット）会得へ」などの見出しが踊っていたものだが、そんな戯言なんて無視して良し！

するとボクの期待通り、小川はいきなり猪木とともにアメリカへと飛び、佐山のパイプによってヒクソン・グレイシー道場やマーシャルアーツのジムを訪問したのだ。

こうしてコシティなどのファンタジー溢れる練習用具が盗まれてしまった現在の新日内では明らかに異質と言える、長い棒でトレーニングする最強・最後のファンタジーに包まれた夢の猪木軍団が誕生したのである。

「え〜、来年には猪木軍団を率いて世界を行脚したいというか」などと去年のG・1だかで猪木が口走っていたこともあったとは思うが、まさかこういうことだったとは誰にも予想できなかったはず。

その結果、3月7日の記者会見の席上で小川は「**プロである以上、相手をブッ殺してやるという気持ちで臨む！**」「**今、熱く燃えております**」「**負け戦はしない！**」と、すっかり度胸を持ってプロらしく猪木イズムを発揮させまくり、格闘技連盟入りを公式発表したのだ。

ただ、「**ファイトマネーは1億円欲しい**」発言は「**金よりリスクを求めるのが新日本のやり方だ**」という猪木イズムと矛盾するような気もするんだが、細かいことはどうだっていいんです！

「**私はプロレスに入ったわけではない。だからレスラーのような筋肉質の体は必要ないし、自分流の体を作る**」と、いわば新日の主流となったパワーファイターを否定するようなことを言い出してしまったのも、ボクは許す！

たとえ「**新日戦士は決して口にこそしないが、猪木・佐山の合体、そして小川への特別コーチに眉をひそめている**」（**東スポ情報**）状態になろうとも、ボク的にはそんなの非常に問題なし！

その姿勢で行け、格闘技連盟！

「**猪木さんに『今、（路線が）ズレているから変えてくれ。その分、全て教えるから』と言われ、複雑な心境ですが……**」（**小川・談**）

路線のズレてしまった新日を元に戻すべく小川に技術を叩き込む佐山、ハートとプロ意識を叩き込む猪木。そこへかつての鬼軍曹・山本小鉄と喧嘩屋・星野勘太郎のヤマハブラザースまで加わったのだから、もうビックリ。古き良き新日が、ここに復活したわけなのだ。

「**彼は最初から橋本、武藤、前田、高田らと同じ超Aランク。その中でも群を抜いている。教え甲斐があるよ。会えたことに興奮している。仕事のない限り道場に来るよ**」

山本小鉄は日刊スポーツでそこまで高い評価を下すが、東スポ紙上では「**佐山、前田、高田クラスだ**」と微妙に面子が変わっているから、謎は深まるばかりである。ついでに日刊バージョンでは同じ闘魂三銃士なのに蝶野だけ名前も出されやしないのも謎であろう。

とにかく、「**柔道時代も暇をみつけては禁じ手などの研究に余念がなかった**」という小川が、柔道時代は二日に一度飲んでいたという酒も断ち、「**一対一で格闘技を俺が教えるのもこれが最後かもしれない**」という切実な思いを秘めた猪木の元にやってきたのだから、超

Aランクでなければこっちも困る。

「**こんなにでかくて動ける人はいないで〜す**」と佐山は言い、「**今、日本で藤田のタックルをかわせる奴はいない!**」と猪木に言われた藤田君にも「**才能は抜群。攻守ともにバランスがいい**」とベタ褒めされまくった小川。

これも後に東スポの『マシン眼』で「**元柔道王なんだから、動きが良くて当然**」と突っ込まれることになるが、ボク的にはそんなのまったく問題あるわけがない。

なにしろ「**小川のようにプロの強さだけを求める動きは、格闘技界に革命を起こせる!**」と、猪木が選挙に初出馬したときのように、熱く燃えてきたのだから。

「**格闘家はいつ何時、誰の挑戦でも受けるという姿勢を忘れてはいけない。新日本の中にも『よーし、ガンガンやってやる』というスピリットを持っている連中がいる。藤田の他にも中西とか。鉄は熱いうちに打て、と鍛えていきたい**」(**猪木・談**)

燃え上がりすぎて勢力拡大まで口にし始めた師匠に触発されたか、小川までもがどんどん燃え上がり、やがてスポーツ紙に無理難題をブチ上げ始める。

「**入場テーマはロッキーにしろ!**」

「**格闘技世界一ヘビー級選手権のベルトをよこせ!**」

後日、夢は叶わず「**入場テーマは風と波をテーマにした音作りが進んでいる**」とゴング誌上に発表され、さらに実際は「単なる風と雷鳴だけのテーマ曲」になってしまうことになるのだが。

そうして小川がスポーツ新聞で吠えまくっている頃、猪木は某『TVゲーマー』誌上で生まれて初めてプレイステーションの『闘魂列伝2』に挑戦。

試合序盤で腕ひしぎ逆十字が極まった瞬間に勝利を確信して「ダァ〜ッ!」とばかりにコントローラーを置く、といったオチャメぶりを発揮しつつも、その奥深さにどんどんハマっていった。

ゆえに静岡・観音温泉での山篭り中、

世界格闘技連盟とは何か?

格闘技連盟はクロスカントリー、剣道、ボクシング、丸太にヘッドロック、そしてなぜか「**橋本の持ってる技の勉強には、これが一番**」とばかりに、プレイステーションを持ち込み『闘魂列伝2』特訓に励むことになるのだ。

「**ゲームといっても、橋本のキャラクターは本物と同じような技を使う。いろんなことを試した方がいいからな**」

そんな猪木流の意見に従い、「**猪木のアドバイスはあまりに奥が深くて、まだまだ理解できないこともたくさんある**」と素直に語る小川はゲームによるイメージトレーニングを開始する。

だが後日、東京体育館で橋本の試合を生まれて初めて生観戦した際、こういう呑気な感想を残したのだ。

「**いままでビデオやゲームソフトで、ずいぶんと橋本選手の動きを研究してきたが、実際に見ると全然違う。蹴りにしても技の仕掛けにしても想像していたよりも、全然早い。まぁ、ゲームやビデオより迫力あるのは当然だけど……**」

これもまた『マシン眼』で突っ込まれるまでもない、至極当然の話であった。

◆

続いて宮城・蔵王での特訓を開始した小川は柔道技・谷落としに回転を加えた、藤田も二度失神したという危険極まりない必殺技・竜巻谷落としをマスコミに公開。負けじと橋本も新必殺技・送り襟締めDDTを開発するが、小川は決して揺らぐこともなかった。

「**一撃必殺の技でないと俺は倒れないよ。まあ、俺の技はすべて一撃必殺だけどね**」

ところが、そうして強がったかと思えば「**すぐに相手に背を向ける柔道の癖はヤバい**」「**キックが爆弾を抱えている膝に入るとヤバい**」などと、暴露癖のある佐山が小川の弱点を暴露し始めたりと、もはや猪木軍団の行動は誰にも理解できない、不可解にも程があると言いたくなるような代物になっていた。

それでは3月26日付けの東スポから、猪木軍団の不可解ぶりが全開な蔵王合宿での素晴らしすぎるハプニングを伝える記事を、一部紹介してみよう。

◆

――最後の晩、禁酒中の佐山、小川に勧められ、しこたまアルコールを口にした猪木はそのまま温泉に直行。

「これも特訓だ」と熱湯につかり、10分以上に渡って佐山、小川が熱湯から脱走することを許さなかった。

そして今度は単身、雪中の水風呂にドボン。あまりの寒さに立ち尽くす佐山、小川に『お前らはだらしがない。これが男ダァーッ!』と絶叫し、猪木は頭まで水風呂に潜ってしまった。

身の危険を感じた佐山が小川に目で合図を送り、水中の猪木を無視して、阿吽の呼吸で温泉場からタオル一枚で脱走。あわれ猪木が水風呂から浮上した時、周囲には誰もいなかった。

以来、猪木は「お前らは冷たい」と佐山、小川の脱走を根に持ち、さらなるメニュー強化を企んでいる。

ところが気まぐれな猪木のこと。24日突如として「北京に身長290センチ、体重300キロの凄い奴がいるらしい。俺が発掘してくる。次は新日本プロレス対北京原人だ!」と佐山に言い残して3日間の予定で中国・北京に旅立ってしまった――

◆

なおボクが入手した情報によると、この事件。猪木が頭まで水風呂に潜った際、チョロチョロと外へ流れ出した水が裸足で立っていた佐山的にはあまりにも冷たかったため、思わず発作的に逃げ出した





のだという。一人取り残された小川も佐山と猪木をキョロキョロと見比べつつ、やがて決心してタオル一枚で逃走したというわけである。

素晴らしすぎるぞ、格闘技連盟！

◆

この頃、橋本は格闘技連盟に対して世界中の誰よりきっと激怒していた。

毎日のようにスポーツ紙を騒がせる小川情報の前に、「どうして俺が何年もかけて闘魂伝承してきてるのに、お前が後から横取りするんだよ！」という思いが押さえきれなくなったためであろう。

「どこの世界に敵に弱点を教える人がいるのか。スパイ行為だ！」

「精神的な揺さぶりをかけているのは誰かの指図を受けていると思うが、俺は姑息なことはしない！」

そして遂に、**「今度の真の敵はアントニオ猪木だ！」**とまで明言したのだ。

「何か会長（猪木）を軸とした今回の動きは、よう分からん……。なんか周りの人間が変な知恵ばかり小川に与えてるような気がする」、とも。

そうやって猪木批判を繰り返す現・選手会長の橋本を見て、元・選手会長の越中はズバリこう言い放ったね。

「小川みたいな1年坊主に翻弄されて、情けない！」、と。

そう言う越中自身、情けないことに1年坊主の小川の前座でしかないんだが。

ついでにドームで越中と激突する石川一家の首領・石川敬士までもが、なぜか小川ブームに噛み付いたのである。

「小川一人に大騒ぎしやがって。プロレスラーは小川一人じゃないことを見せてやる！」（石川敬士・談）

結局、石川がそれを見せ損なったことは言うまでもない。そもそも小川がプロレスラーだと思っていた時点で、巨大な勘違いをしていたわけである。

とにかく、だ。そんな状況を見かねて、さすがの長州も橋本を一喝した。

「ガタガタするな！　王者はドッシリ構えていろ！」、と。

すると橋本はドッシリ構えて突然サムライのマスクを装着すると、なぜかすっかり自信を取り戻してこんなステキなことを言い始めるのだ。

「新日本は俺を頂点に組織のピラミッドが成り立っている。昔で言えば征夷大将軍のようなもの。小川が何を発明しようとチャンピオンがガタガタすることはないんだ！」

ビバ、破壊王！ もはや、この手のトークに関してはすっかり闘魂伝承済だとしか思えないわけだが、その点に関しては猪木も認めてはいるのだ。

「スピリットという点では彼が唯一（後継者的）だけど、自己コントロールとか体型とかね、それ以上は言わないけど、いいとか悪いとかじゃなくて、もっと絞ってもらいたい」（週プロ）

これはズバリ言えば「デブ！」ってことですかね、猪木さん！

ところが、これまた猪木イズム伝承者の高田延彦は、こう語っている。

「人はあいつをデブと言うが、あれはあれで彼のベスト体重。200％負けることはない！」

なぜ200％？ と、東スポ紙上に連載されていた各界著名人による橋本対小川戦の結果予想コーナーから軽く引用してみたが、これがまたなぜか武双山の巻では「18分53秒、DDTで橋本の勝ち」などと断言していたりと、抜群に面白い企画だったものなのである。

◆

「移動を何度も繰り返し、やっていることもテレビゲームや水遊び」と、またも『マシン眼』に叩かれながらも、続いて猪木軍団は懲りずにハワイ特訓を強行。小川も思わずスポーツ刈りにして気合いを入れ直したものである。

それが効いたのか、小川はスペース・トルネード・オガワ、すなわちSTOなる、「実はある人から危険すぎるから禁じ手にした方がいいと忠告されているんだよ」という荒技まで開発。

その機に乗じて「スペース・トルネードの名称は自分の代名詞にするために谷落としもSTT（スペース・トルネード谷落とし）にします」と、スペース・ローン・ウルフを思わせる宇宙規模の命名センスを発揮し始める。

世界格闘技連盟とは何か？

すると我らの破壊王はドッシリ構えて、すかさずこう返すからさすがだね。

「そんなの知らないよ。俺はSTOじゃなくてS・E・X（東スポ注／シンヤ・エクスタシー・Xの略。いったいどんな技だ？）で十分！」、と。

「こんなの中学生レベルのギャグじゃねえか」などと怒ってはいけない。

これでいいのである。少なくとも闘魂伝承的には。これぞ猪木イズムだし。

そしてハワイ特訓最後の夜、猪木はまたも闘魂の炎を燃え上がらせた。

東スポ情報によると、観光客でにぎわうワイキキのメインストリートで、猪木は空手のポーズで挑戦してきた青年をアキレス腱固めで一蹴したり、ストリートダンサーと踊り出したり、オウムを頭に乗せて観光客をビンタしたりで大暴れしつつ、最後は「ダァ～ッ！」でキッチリ締めたらしいのだ。

「小川にプロとは何かを知ってもらいたかった。周りのものをすべて巻き込む力を持つのが、本当のスター。力道山もそうだった。橋本にもわかってもらいたいんだ」

猪木イズム、大爆発の瞬間であった。

そして気が付くと、猪木の眼はもはや橋本戦を見てはいなかったのだ。

「今、石沢がブラジルで修行中なんだが、ディナーショーでバーリ・トゥードを見せるところがあると報告してきた。できれば小川もそこに連れて行きたい」

ディナーショーでバーリ・トゥード！ とにかく猪木は試合前からすでにグルジア行きを予定したりと、橋本戦以降の具体的な方向性を考え始めていたのだ。

それだけではない。さらにこんな謎かけまで我々に与えてきたのである。

「俺が小川に付くと、橋本に限らず敏感になってるのがいるしな」と、いきなり小川のセコンドを拒否したのだ。

「それはそれで無責任すぎる！」

これにはさすがにドッシリ構えたはずの橋本も、またもや激怒する始末。

さらに試合前日になると「6－4で橋本の勝ち！」などと、東スポ紙上で大胆推理までかましてしまったのだ。

様々な「？」が渦巻く中、東京ドームのメインは始まった。ローキックに袈裟切りチョップという黄金パターンで押しまくる橋本に対し、たどたどしい素人格闘家然とした中で強さもチラつかせた小川が結局はSTOとSTTを炸裂させ、この日の興行は格闘技連盟の勝利に終わった。結局、橋本の送り襟締めDDTも謎の大技S・E・Xも火を噴かなかったというわけなのである。

◆

ここで話は大きく変わる。

昭和63年11月。このとき格闘技連盟ならぬ格闘技連合という秘密組織が発足したのを、キミは御存知だろうか。

「（新生）UWFの会場に現れては抗議文を渡す悪の集団……。格闘技連合はUWFファンから少なからずそう思われてきた」（『ゴング格闘技』より）

といえば一部マニアぐらいは、きっと思い出してくれたことだろう。

新日を追われ、さらに旧UWFまでも追われた過激な仕掛人・新間寿が、起死回生のつもりでジャパン女子マットで大仁田対グラン浜田をマッチメイクした頃のことだ。内輪揉めの多かったジャパン女子勢もこの件でだけは意見が一致したのだろうか。続いてジャパン女子まで追われることになった新間が、プロレス界に向けて放った幻のリベンジ。

それが格闘技連合なのである。

「UWFは私が作った団体。UWFの名義を私に返してもらいたい。いや、私は新しい団体を作って、UWFに対する用意がある。名前をかけて闘お

にイラ立つ破壊王に「ガタガタするな」



う！」

そう主張して格闘技連合の顧問となった新間は、我らが真樹先生直筆による前田への挑戦状（相手は、まだ知名度も低かった頃の佐竹だった）を送り付けたり、**「テリー・ファンクも『俺に前田とやらせてくれ』なんて言ってくれている」**と真偽も定かではない爆弾発言をかましたりしつつ、ひたすら当時人気絶頂の新生UWFに対して怨念剥き出しで噛み付き続けたのだ。

このとき大仁田が士道館の師範と共に格闘技連合の挑戦状を持ってUWFの会場を訪れたところ、神社長に「チケット持ってますか？」と言われて追い返される事件が勃発。屈辱を味わった大仁田がFMW旗揚げへ向けて突き進んでいくこととなったのは、もはや誰もが御存知のことであろう。

初期FMWがフロンティア・マーシャルアーツ・レスリングを名乗ってチープな異種格闘技路線を突き進んでいたのは、そんな名残だと思われる。

とまあ、実は人知れず佐竹に光を当て、大仁田を完全復活させた功績も持つ格闘技連合発足の際、新間は記者会見の席上でここまでゴキゲンな相変わらずの新間節を聞かせたのであった。

「いま、私は格闘技連盟みたいなものを考えています。その中には女子プロレスはもちろん、キックボクシングや空手、そしてマーシャルアーツもあるというようなバラエティーに富んだ団体だと思っていただければいい。まあ、その前に猪木の世界戦略をやらねばなりませんが……」

どうですか、お客さん！　なんと猪木の格闘技連盟構想は、偶然なのか何なのかは謎でしかないとはいえ、こんな昔に始まっていたわけなのである。

これはつまり、かつてのパートナー・猪木の夢を新間が具体化させようとしていたわけなのであろうか？

まあ、少なくとも参加予定メンバーを見る限り、そこには猪木イズムはまったく感じられやしないのだが。

なにしろグラン浜田、浅井嘉浩（ウルティモ・ドラゴン）、キラー・カーン、剛竜馬、大木金太郎という、ただフリーというだけであまりにも脈絡のなさすぎる面々が並んでいたのだから。

そして、さらに衝撃の事実がある。

この格闘技連合発足の目的だが、新間発言によると実は梶原一騎が会長となって新日内部に作り上げながらも、結局は梶原の死によって本格的活動前に崩壊したという幻の組織、『日本格闘技連盟』の継承であったのだという。

そう。要するにいまの世界格闘技連盟が面白くてしょうがないのは、根底に猪木イズムのみならず梶原イズムまで流れていたからなのに違いない。

ゆえに、格闘技連盟にはどうしても佐山聡の存在が必要不可欠になるわけなのだろう。きっとそうだ。

そういうことならば、ボクも最後に心から言わせてもらうとしよう。

「ありがとう、世界格闘技連盟。そしてありがとう、梶原一騎先生！」、と。

●カッコ内コメントは全て東京スポーツ、日刊スポーツ、週刊プロレス、週刊ファイト、ゴング格闘技などから抜粋。



佐山聡プチ・インタビュー

格闘技連盟とダイエットとは何か?

（『マガジンBANG!』誌上でのインタビュー「恋愛編」「お金編」より一部抜粋）

この日、「お酒でも飲みながらインタビューしましょうか?」という編集部の提案に対し、「いえ、それよりも甘い物を用意しておいて下さい」と答えた我々取材班は、ケーキを山ほど用意して現タイガー・キングを待ちかまえた。猪木に「痩せろ!」と叱られ続けているのも承知の上で、だ。まったく、ひどい話である。

佐山　ど〜も、遅れちゃってすいませ〜ん。よろしくお願いしま〜す。（コーヒーが届く）あっ、すいませ〜ん。今日は砂糖はいいです。（テーブルの上に置かれた小皿を目敏く見つけて）このお皿、何ですか?

――さすがに目敏いですね（笑）。今日は佐山さんのためにケーキを用意したんですよ。猪木さんに「痩せろ!」って言われてるのは知ってるんですけど、大変みたいですね。

佐山　そうなんですよぉ、今日からダイエットなんで、（ケーキ届く）すいません。じゃあダイエット中だから2個だけ（モグモグ）。こんなとこ猪木さんに見られたら大変ですよ（笑）。あの沢木って知ってます? 猪木さんの付き人みたいなのしてる。

――沢野じゃないんですか（笑）?

佐山　そうです、そうです。あの野郎! この前、山登りに行ったんですよ。滝で祈るとかで。控室みたいなとこで誰かがお菓子くれたんで、「あっ、すいません」って猪木さんの後ろをついて行きながらモグモグやってたら沢木の野郎、告げ口しやがって! ビックリしちゃった、もうホント。だから、これ見たら猪木さん怒りますよぉ。

結局、この山登りには猪木、佐山、中西、そして沢木ではなく沢野氏の4人が参加し、真冬だというのに滝に打たれた。最後まで耐え抜いたのは、やはり水風呂愛好家（夏場は氷風呂）の猪木。二番目は、さすが世界のクロサワ、そして真っ先に滝から飛び出していったのは単なる素人の沢野氏ではなく、なぜか佐山だったのだ。

しかも、だ。後日、ビデオでこの模様を確認したところ、一人だけ紙一重の距離で滝に打たれていなかったりするから、さすが佐山。幻想をとことんまで崩さない男なのである。

――最近、猪木さんとスパーリングすると、お腹掴まれちゃうらしいですね（笑）。

佐山　そんなの、しょっちゅうですよぉ（苦笑）。猪木さんにはもう、全然頭上がらないから。棒の先生って知ってます?

――七尺の棒でしたっけ?

佐山　そうそうそう、いまあの先生が来てたんですけど、これがまたゴッチさんみたいな人なんですよぉ（笑）。

――ガハハハハ。佐山さんも棒のトレーニングしてるんですか。

佐山　もう、バンバンやってる。棒のトレーニングは、ホントいいと思う。あれはね、理論を聞くとゴッチさんと一緒。すっごい理論ですよ。ウェイトとかボクやらないじゃないですか。そういう理論とすごい相通じるものがあって。理論はホント凄いですよ。とにかく、あの61歳のオヤジさんは2時間しか寝ないんですから。すごい元気なんですよ。

――猪木さんもあんまり寝ないですよね。

佐山　（モグモグ）それは歳取って、5時ごろ目が覚めちゃうから、アハハハハハ。

――橋本さんも、そう言ってました（笑）。

佐山　でも棒使うと、すごい調子良くなりますよ。ガンガン食えちゃう、ウフフフ。

（30分経過）

――ケーキもっと食べちゃって下さいよ。

佐山　すいませ〜ん。でも、4つ食べることになっちゃいますからねえ。

――まったく問題ないですよ（笑）。

佐山　ホントですかぁ? これ猪木さんに絶対言わないでよぉ。書かないでよ! 猪木さんが見るかもしれないんだから。

――いや、バッチリですよ。

佐山　でもホント、今日から減量なんですよ。今夜からね。昨日、減量着とスキーウエア買って、猪木さんが帰ってくるまでに落としとかないとマズイでしょ（モグモグ）。

――はあ……。

佐山　信用してないですね（笑）。

――いえいえ（笑）。だけど佐山さんと猪木さんの師弟関係が復活したのは、本当に楽しくていいですよね。

佐山　（モグモグ）ふぉ〜ですか?（モグモグ）面白いね、猪木さんはホントにボクはわかってるんですよ、猪木さんがどういう人かっていうのは。あの人を理解できる人は、いまあんまりいないんですかねぇ。

――そうでしょうね。

佐山　そうでしょ。一緒に居てね、昔からそうなんですけど違和感がないっていうか、そういう人いないでしょ、猪木さんに対してね。みんな緊張しちゃったりするし、猪木さんも飛んでること言ってますから（笑）。ボクも猪木さんも大人になったしね。

――猪木さんは面白いですよねえ。世界情勢の話をしながら、ズボンのチャックを上下させちゃうような人ですから（笑）。

佐山　面白いよねぇ。一時期ボクは猪木さんと別れたんですけど、あれは他の人の手によって壊されたような感じですから。

――ショージ・コンチャとかですよね。あっ、ケーキまだ残ってますよ。

佐山　もう駄目だよ、4つ食べちゃったんだから。俺5つ食べたらホントに何か言われちゃうから、いらないいらな〜い。

――まあまあ（笑）。全部で6種類あるんですから、あと2つ残ってますよ。

佐山　……絶対、言うでしょ、何か。

――いや、大丈夫ですよ（笑）。ボクは口が固い男ですから。

佐山　ホント? じゃあ、ちっちゃいのね（ムシャムシャ）。

（60分経過）

――じゃあ、今日はこんな感じで。

佐山　ケーキごちそうさまでした。

――もう一個残ってますよ。

佐山　それ食べたらホントに全部になっちゃう。もう6つだよ! じゃあ、これはね、自分が欲しいんじゃなくて、もうここまできたら食べないと失礼に当たりますからね、ウフフフフ（モグモグ）。

――しかし夢を壊さない人ですねぇ（笑）。

佐山　俺は面白いよぉ（笑）。でもこんだけ食べてさ、10日後に10キロぐらい増えてたらどうかなと思うでしょ（笑）。これが食い納め（モグモグ）。だってもうスキーウェアも買って、全部揃えてるんだもん。すごいよぉ、今日から。あ、今日からじゃないや、午後から、夜から（モグモグ）。

――まあ、頑張って下さい。

佐山　頑張るよぉ、ホントに。

――痩せて今度は何するんですか? 猪木さんとの格闘技連盟みたいな感じで?

佐山　よくわかんないんですけどぉ。だからボクは格闘技はもう2つぐらい作りますけど、もう着々とやってますからね。でもそれはアマチュア。ホントのプロっていうのは、やっぱりエンターテイメントとしてね。でもそのプロでは、やっぱり昔の新日本みたいな状態を作りたいんですよね。そこでボク、猪木さんとビッチリ話が合うんですよ。まあ、猪木さんに教え込まれたわけですから合うのは当然なんだけどね。……ケーキのこと、絶ッ対に言わないでよ!

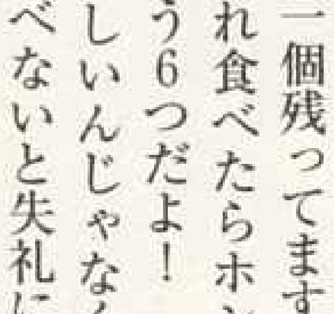
【97年1月8日、サン出版喫茶室にて収録】

この日、「来月会うときには見違えるように痩せてるはずだから、驚くよぉ」と言い残した彼氏。だが、一ヶ月後に現れて和菓子を食べまくったのは間違いなくいつもと同じ、あの佐山聡であった。

ダイエットに成功したいまとなっては笑い話なので、あえてここに掲載させていただくことにしたのだが……。許してくれますよねぇ、佐山さん……。ボク、ガタイ良くないし、メンチ切ったりもしないし……。

『タイガー・キング』佐山「猪木を蹴殺だ!!」

初代タイガー・マスク（佐山聡）の新リングネームが〝タイガー・キング〟に決定した。「24時間、オレが食事まで目を光らせているから〝セコム猪木〟なんてイヤミを言われたよ」と猪木が語る通り、タイガー・キングの体重は90キロまで減った。第1次UWF時代の94キロを下回る体重、そしてはるかに上回るコンディションにタイガー・キングは「猪木さんを蹴りまくる。ボクに負けたからって引退を考えないでください」と強気の挑発。猪木戦からタイガー・キングはプロレス界にレトロ感覚でなく、本格的に復帰する予定だ。



「タイガー・キング」佐山



この過激さから
目をそらすな!!

「『LOVE』とかってあるでしょ！」
……あまりにも意外な謎かけを残して終わった、

あのスーパー対談の続編が
遂に次ページより
大公開！

それではみなさん、
いきますかーッ！



現タイガーキング

初代タイガーマスク 河師弟対談

撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitoh

とは何か？ Part2

この対談が行われた2月5日以降、アントニオ猪木と佐山聡を中心とした「世界格闘技連盟」の周辺は急速に回転し始めた。

黄金期の「新日本道場神話」を復活させるかのような石沢、藤田らとの猛稽古。

破壊王・橋本真也と4月12日に東京ドームで対戦した元・柔道世界王者の小川直也、彼をアマチュアの柔道家からプロの格闘家として改造するための、世界を股にかけた一連の地獄の特訓。

現在のプロレス界に絡みつく諸問



アントニオ猪木 VS

命懸けの大

世界格闘技連盟と

現在のプロレス界に絡みつく諸問題を、マグマのような速度と熱さで根底から揺さぶろうという動きを見せ始めたのである。
そして、「技術と技術をぶつけ合い芸術に昇華させる」ということをテーマに、破壊王と元柔道王者が闘った同日に、この両者は相まみえた！　慣れ親しんだ初代タイガーマスクが、新しいリングネームで登場するという強烈なオマケまで付けて！
そういった流れの素、そして両者のラディカルな精神を伝えるべく、時期的なズレを別にして、敢えて前号に続いて収録した次第である。

ズバリ言って『好きにさせる』ってことも凄く大事な要素だろうしね。

——猪木遺伝子は**「外」**にしか広がらないんでしょうか。

猪木　近くにいすぎてわからないということをね、よく言われるんですね（笑）。で、まあ、多分ある時代からはアントニオ猪木が好きだからって入ってきた選手とアントニオ猪木じゃなくて、例えば長州に憧れて入ってきた選手ってのもいるわけですね。そういうことからすると、好き嫌いとかそういうんじゃなくてね、そういう選手に遺伝子を刷り込むということはちょっと難しいかなって。だって興味がないんだから。ある人間に興味を持ったり、あるいは好きであるというのは絶対的なものですよね。昨日も**『好き』っていうテーマ**で朝まで議論したんですけどね。

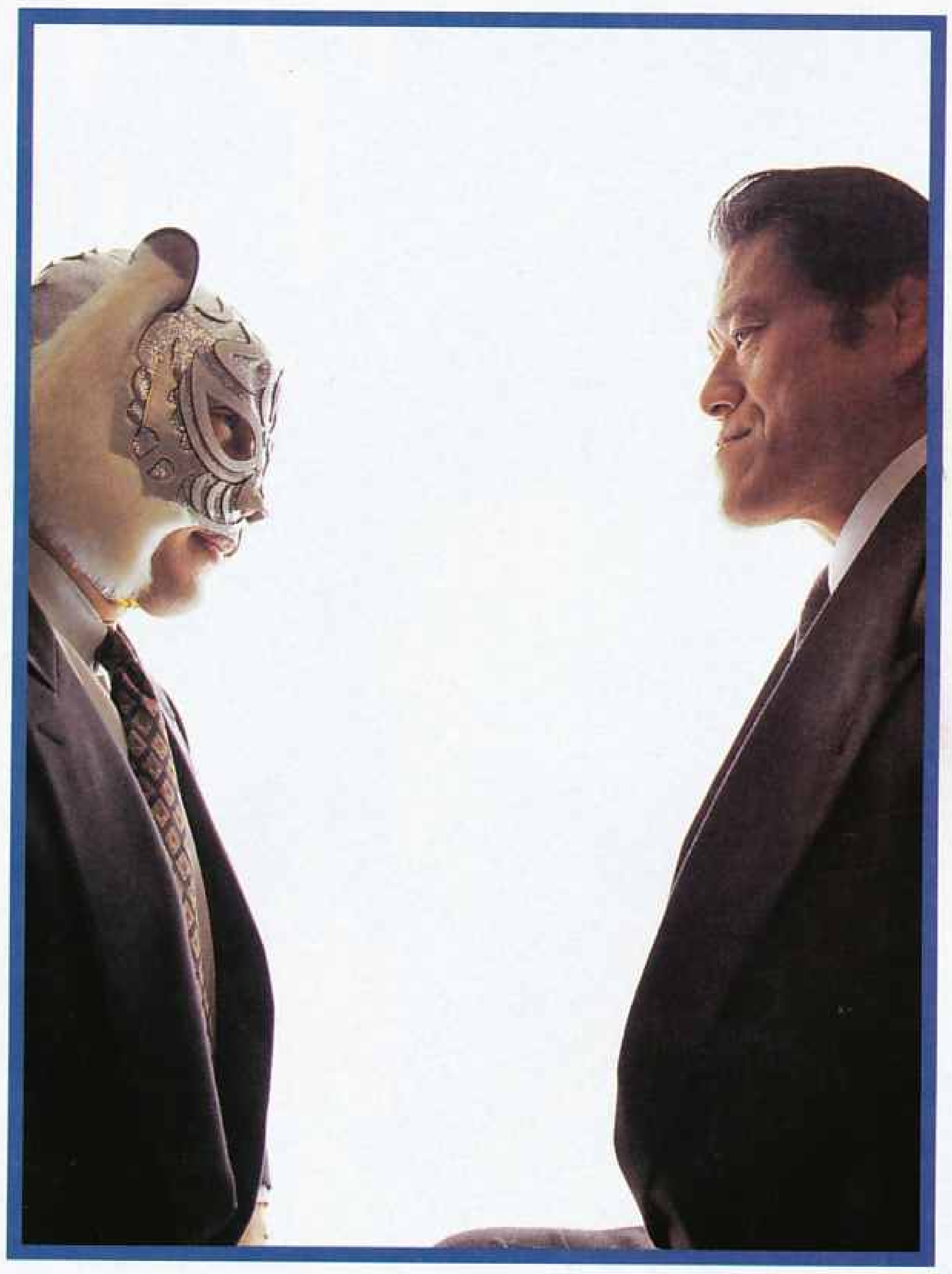
——『好き』っていうテーマ！（笑）。

ティグレ　……『好き』……？

猪木　あの、『LOVE』とかってあるでしょ！

（つづく）

※ここまでは、前回のラスト部分をちょっと巻き戻したものである。いよいよ「『LOVE』とかってあるでしょ！」という猪木さんの巨大で素敵な謎かけの続きが読めるときが来たのである。映画の予告編によく流れる壮大な音楽を頭に流しながら、キミよ心して読め！（※ティグレとはスペイン語でタイガーの意。以前、猪木は佐山を呼ぶときにこう呼んだ、という）



猪木　だから『愛してるよ』っていうものが絶対かっていうと、夫婦の関係だってある時に壊れちゃうわけでしょ。憎しみに変わっちゃうというか。どうも俺は『愛』なんていうよりも、『好き』っていうことの方が絶対じゃねぇかと。俺はいろんな事件を体験した中でね、ファンから手紙を貰うでしょ。例えば以前、あんな**くっだらねぇ事件のスキャンダル**をデッチ上げられても、それがもし、俺を『好き』でなければ「ああ、やっぱり」と人々は感じる。でも『好き』っていうことによって、「いや、俺はどんなことがあったって、俺の猪木は変わらないんだ」というか、そんなことを随分言ってくれた人がいる。

ティグレ　（コックリと頷く）

猪木　これは大変有り難いことでね。だから**『好き』というテーマは絶対なんだろうと。**『愛』というよりも全部許せる。愛はどっかで、「愛は絶対なんだ！」っていう言葉と違って裏腹というか……どっかで本物じゃねぇんじゃねぇかな、愛というのは。

ティグレ　**ンムフフフ。**

猪木　もし、自分にエゴがあって、愛してる愛してないっていう関係がある時はいいけど、もしそうじゃなくなった時、一瞬にして壊れてしまうみたいなね。だから『好き』というテーマで昨日は1時間語り合ったんだけど。だからプロレスが『好き』っていうことの部分で言やぁ、それは肯定的に見れるんですね。それで好きじゃない人間から見ると、もう非常にプロレスの欠点だけを探すじゃない。なんでロープに飛ぶんだとか、**ああだとかこうだとか。**でも、俺のプロレスの三十何年間の歴史の中で見ていくと、ズバリ言って**『好きにさせる』**ってことも凄く大事な要素だろうしね。

——『好きになる』と同時に『好きにさせる』というのも重要！　なんか『好き』というのは延髄を斬られるくらいにズバリとくるテーマですね（笑）。

猪木　だから、さっき言ったことと矛盾するんだけど「（新しい練習方法に）**入って来ねぇヤツはほっとけや！**」というのも一つの方法であるしね。でも、きっかけは作るべきだろうね。そういう輪の中に入ってこれるき

Inoki/Tiger 針の穴にラクダを通せ！'97

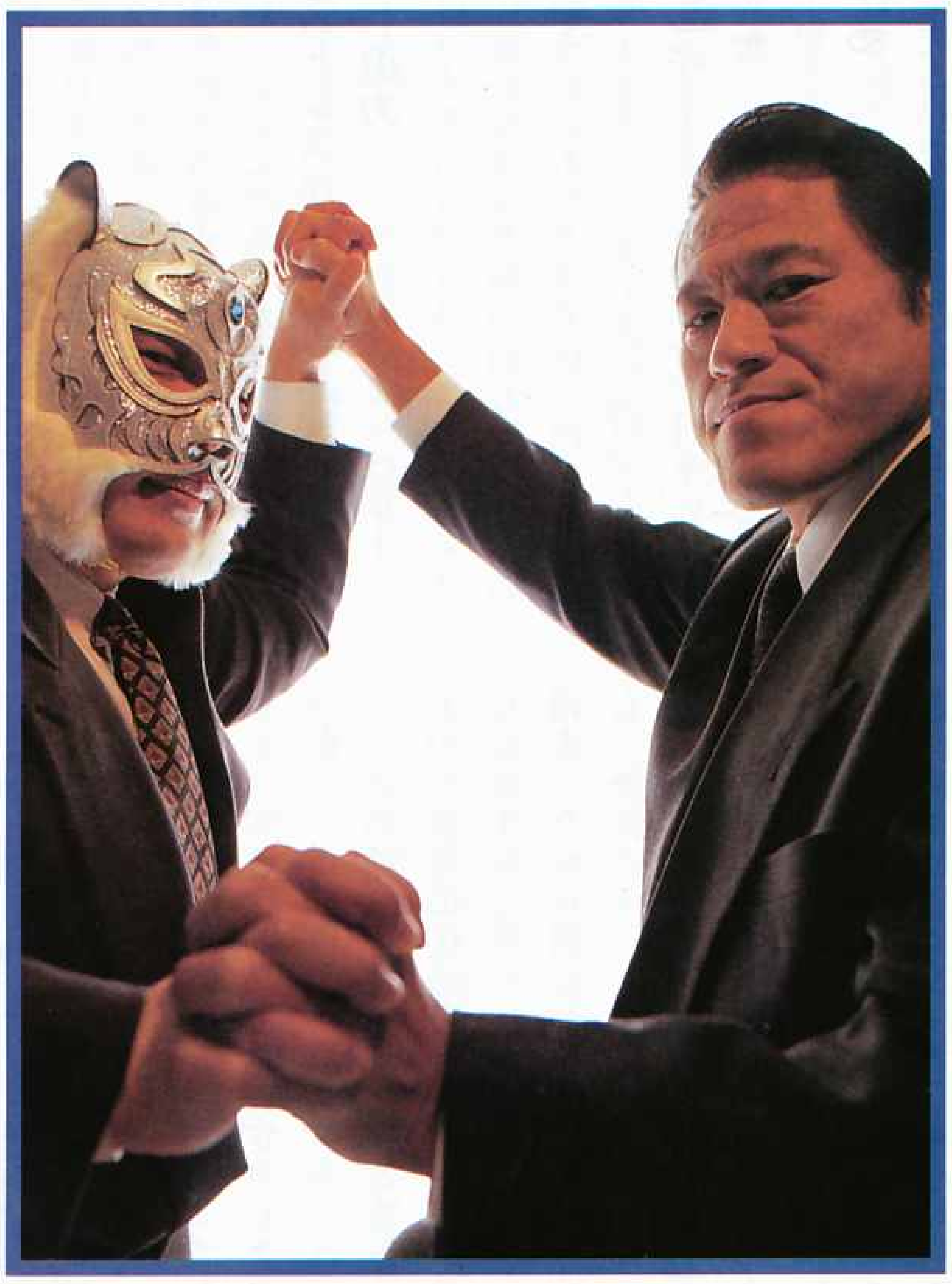
っかけというか。だから昔はよく合同練習や合宿をして、練習の後にみんなで**ディスカッション**というのをやった。ただ、そん時にティグレじゃないけど「そん時に何を言われたかわかんなかった」というね。これは俺が話をするのがうまくなかったのかもしれないしね（笑）。

ティグレ　（「とんでもないで～す」という風に首を素早く横に振る）

猪木　でも今であれば、非常にやはりそういう選手たちに対する教育というのかな。そういうことの重要性というか。だからアメリカのプロレスとか、プロレスのステージを上げていこうという、これはもうズバリ言って**永遠のテーマ**ですからね。そのためにはやれることってのは、全てに対して一生懸命やっていく必要があるだろうとね。どっかでギブアップして「もうおしまい！」っていうわけにもいかないしね。ホントは今スグにでも言いたいんだけどね。ガッハハハハ！

――例えばK－1であるとか、バーリ・トゥードにしても、本来プロレスのステージでやらなければいけない事を、今は他の格闘技にやられちゃってるところがありますよね。プロレスとは別のステージで格闘技ブームの素を作った張本人の佐山さん、その辺はいかがでしょう？（笑）。

ティグレ　いえいえいえいえ（笑）。これもね、なんで自分のとこで育たないんだろう、外部で育つんだろうってありますけど。……だから「**プロレスとは何だ？**」って聞かれた時に、選手もカッコつけていろんなことを「あーなんだこーなんだ」って言えるけども、実体は**みんな迷っちゃってる**んですよ。ホントの姿わかってないわけですよね。**俺なんかもそうでしたからぁ**。人がこういうことを言う、でもそうじゃないこともあって、そこで迷っちゃって、じゃあこっちに行かなきゃいけないとか、あっち行かなきゃいけないってことになっちゃうんですね。それは僕が今度（プロレスを）やる時には全部そういうことがないようにして、全部理論づけて教えてあげる、技術的にしてもそう、精神的にもそう。それを教えていかなきゃいけないと思うんですよね。それがわかったのが**最近**ですからね。今まで全然わかんなかったですからぁ。で、あと格闘技作ったっていうのもそういうところから僕は出てったわけですから。わかんなくて出ていってそういうことになってるわけですから。



――プロレスとは何かが完全にわからないままにシューティングに行ってしまったと。

ティグレ　社長（猪木）のいい言葉があるのね。**「佐山は十年間ぐらい外でなんかやってたけど、それは全部プロレスのためにやってたんだぞ」**って。アハハハァ。それを聞いた時に凄いなこの人、って思ったんですけどね（笑）。

――それは猪木流ですよね（笑）。

ティグレ　前はホントわかんなかったですよ。でも今の状況は若い人にわかってもらわないといけないことじゃないかなぁと思うんですね。だからさっき言ったね、ディスカッションってことですよ。

猪木　**前田**にしても、それから**船木**なんかにしても、**高田**にしてもね。それぞれ、まぁ自分の思いのところに走ってった。そこで、それが成功であるか失敗であるかなんてことよりも、その部分においてみんな一生懸命やってるというかね。ただ総合的に考えた時に、挫折もあったりする中で、なんか「俺たちは成功しなきゃいけない」みたいなことが、もう絶対でしょ。でも、成功なんてのは結果だからね。**思ったことを自分に正直に行動を起こせればそれでいいじゃねぇかと！**結果は結果だしね。今の若い人たちにリング以外のメッセージを送るとすれば、そういうみんなが思ったところに走ってっていいんだ！　というね。その結果として得たものが高田の場合はこういうことです、あるいは前田の場合はこうですと。だから、明確に**ジャイアント馬場**っていう人と俺との違いっていうのはそういった中で見えてくるものがあるんじゃないですか。比較対象がないと見えないものってあるから。

――まあ、佐山さんもそうですけど、猪木さんから放たれる世界というのは、一時期離れていった人が、時を経て気付くものがあるのか、必ずリバウンドして戻ってきますよね。今、プロレス界も結局のところ猪木さんが作り出した原点に戻っていく作業を必要としてるという気が凄くしますね。

猪木　まあ、俺が作り出したというよりね、力道山というか**力道山遺伝子**がね……これは非常に深い問題、政治的な問題、あるいは植民地支配の問題

力道山が持ってたエネルギー！この部分が日本の国民を興奮させた原点



だとかっていうことまで全部言っとかないとわかんなくなってしまう問題で説明できないんですけども。でも、力道山という忘れちゃいけない、言い続けないといけない部分がある。アントニオ猪木がどうこうじゃなくて、要するに我々が少年時代にテレビを通じてね、非常にショックというか、もの凄い感動を子供から大人までが受けた。そこが日本のプロレスの原点だろうというね。だから力道山という人がプロレスの技がうまかったかヘタだったかということよりも、**あの人に内在したストレスがリングで爆発した時のド迫力**というかね。これはルー・テーズだろうがカール・ゴッチだろうが、誰が来ようとあの迫力は出せないというか。もっと言えば、出す出さないじゃなくて、あの人が持ってた**エネルギー！**　この部分が日本の国民を興奮させた原点ですからね。ここがズーッと次の時代に繋げていかないといけないというか。なにもファンに媚びを売る必要はないんだというね。まあ、凄い迫力で凄い試合をしていれば、逆にお客はそこへ入ってくるしね。そこんとこを言い続けておかないと次の時代に繋がらなくなる。でも、もう恐らく伝わりそうもねぇじゃねえかと、**このままだとね。**

ティグレ　（コクコクと頷く）

猪木　だからジャイアント馬場さんが力道山という人を、ある意味では力道山家を匂わしてるけど、力道山という人に対して必ずしもあの人は好感持ってないと思うね。「リキさん」としか呼ばないだろうしね。だから、その遺伝子は間違いなく**俺が引き継ぎ、次に繋げる。**　これが多分世界にないプロレス、要するに日本のプロレスの一つの、一番の源泉というかね。

――その源泉を世界格闘技連盟というもので世界に広めていくというプランなんですか？

猪木　だから別にわざわざ歩かなくても、俺はこう、一つの身体ですからね。でも逆に言えば、今は**世界がメディア**でしょ。ある発信地を一つ基地と決めて流していけば、これは自然に伝わっていくというかね。逆に言えば本物志向っていうか、これからもっともっとそこへ走っていく。だから本物志向っていうのは、みんなすぐ誤解するけど、**アルティメットというのは異質**なんですよ、実際ね。だけど、**俺たちはアルティメットもやってきてる**わけでしょ、今までに。だから、みんながビックリして「スゲエんだよ」って言ったって俺たちはそんなことやってきてるし、今まではね。だからといって、そのアルティメットが持ってる魅力というものを否定すれば何も見えないよね。何が一応少なからずマニアの人たちを興奮させてるのかっていうものを的確に見ていかないとね。

ティグレ　（コックリと頷く）

猪木　だから非常に俺たちがすべてを肯定的に受け入れていくことに対して、なんというか、素質を持ってるから新しい発想が生まれるというかね。ズバリ言って長州的な発想で言えば、**全部シャットアウトする**という世界に入ってくるだろうからね。

――猪木さんの場合は許しきる！　という世界にいきますよね。

猪木　許しきるとかきらないとかじゃなくて、**ただ、面白ェことがやりてえだけ！　というね。**　極論すればね。ダーッハッハ！

――ガハハハハハ。面白ェことがやりてぇだけ！　素敵すぎます！

猪木　何か面白いことを常にやってったら人生はねえ？　ンムフフフ。理屈をつけるとさ、これが正しいとかこれが正論だとかどうとかって言っても、もう**面倒くさい話**になってくるし。とりあえず「面白ェこと！」っていうね。

――どうですか佐山さん？（笑）

ティグレ　アハハハァ。社長らしいのかなァ。らしいですねェ（笑）。

――「面白い」ということに価値観を置く猪木さんのそれは、僕なんかもうズーッと猪木さんを見続けてますからビンビン来るもんがあるんですけども（笑）、「面白いこと」って言った時に、わざわざギリギリのところにテーマとプランを置いてみるというか、そこがなんか実にアントニオ猪木らしいなと

Inoki/Tiger 針の穴にラクダを通せ！'97

いう気がするんですね。今回の格闘技連盟構想にしても、「何もいまさら格闘の原点云々とかそんなシンドイことをやらなくても」という考え方もあると思うんですよ。実際にアメリカン・プロレスでも十分ファンに喜ばれてるわけですし。

猪木　まあ、一歩踏み出す勇気と再三いろんなところで言ってますけど。その**一歩踏み出してみなきゃわからない世界**っていうのは、人間のたぶん永遠のテーマだと思うんですね。人間の資質もあるし。で、**面白ェからやりたい**というのと、冗談じゃないという慎重派もいるだろうしね。だけど究極的に、人間の内在してるものっていうのは自分の歓びというかね、そういうものにこう、輝きが増すわけだから。そうでないものを押しつけられた時には苦しいけど。でも押しつけられても、それを楽しみにしてしまうというエネルギーの持っていき方もあるんだよね。結局、プロレスラーというのは、我々が「**選ばれた**」という表現がいいと思うんだよね。だけど選ばれたと思ってないヤツがいっぱいいるから。そうじゃなくて選ばれた職種として、こういう立場にあればね、それを訴えるだけでも歓びじゃないですか。

ティグレ　（深く頷く）

猪木　ただ会社の社長がもっともらしいことを「会社とはこうあるべきだ」「上下関係はこうだ」とかダァーッと並べたとしてもね、若い人間は耳を傾けてないかもわかんない。でも、俺たちは幸いにして、結構いい加減なこと言ってるかもしれないけど、正直に自分自身を語らせてもらえれば「ああ、そうか」って何か感じ合うものがある世界なんだろうし。

――ホントにもう猪木さんを見てると一周グルッと回ったところで正直だなって思うんですよ。

猪木　それが一番心地いいじゃないですか。**なあ、ティグレ！**　楽だしね（笑）。だからまあ、こういう職業ですから、エンタテインメントとして非常に虚像の部分というか、それが幅が広ければ広いほど、面白いだろうと思うんですね。で、それが嫌な面が見えれば、よく一般の人がスターを「今日までスターだったと思ってたのに、**駅で会ったら**挨拶もしなかった。だから嫌いになった」というようなケースが随分あるじゃないですか。でも、これがホントの『好き』じゃねえんだろうね。

――さっきの『好き』という話にブーメランのように戻ってきましたね（笑）。

猪木　ある表面的なもん。だから、そういう部分を演じてる俳優さん、歌手もいるし、それも一つの生き方だし、まったくそういうことをわかった上で、非常に俺なんかは**自分が『裸』**になってしまうことが一番楽だからね。

――佐山さん。猪木さんの一連のスキャンダルの時に、裁判を見に行ってたんですよ。すると猪木さんが大きな背中を傍聴席に向けて座ってるんですよ。で、敵側の弁護士が「じゃあ、マスコミが伝えたことが嘘だとするなら、なぜ猪木さんは訴えなかったんですか」って猪木さんに聞いたんです。場内はシーンとしたわけですよ。一応裁判という場面の中ではそれがもう焦点だなって傍聴席は肌で感じたわけですよね、観客として。そこで猪木さんがスーッと息を吸い込んで「**めんどくせーんです**」って言ったんですね（笑）。

ティグレ　**エーーーッ！**　アハハハハハァ。

猪木　ンムフフフ。

――これは凄い世界だなと思って（笑）。

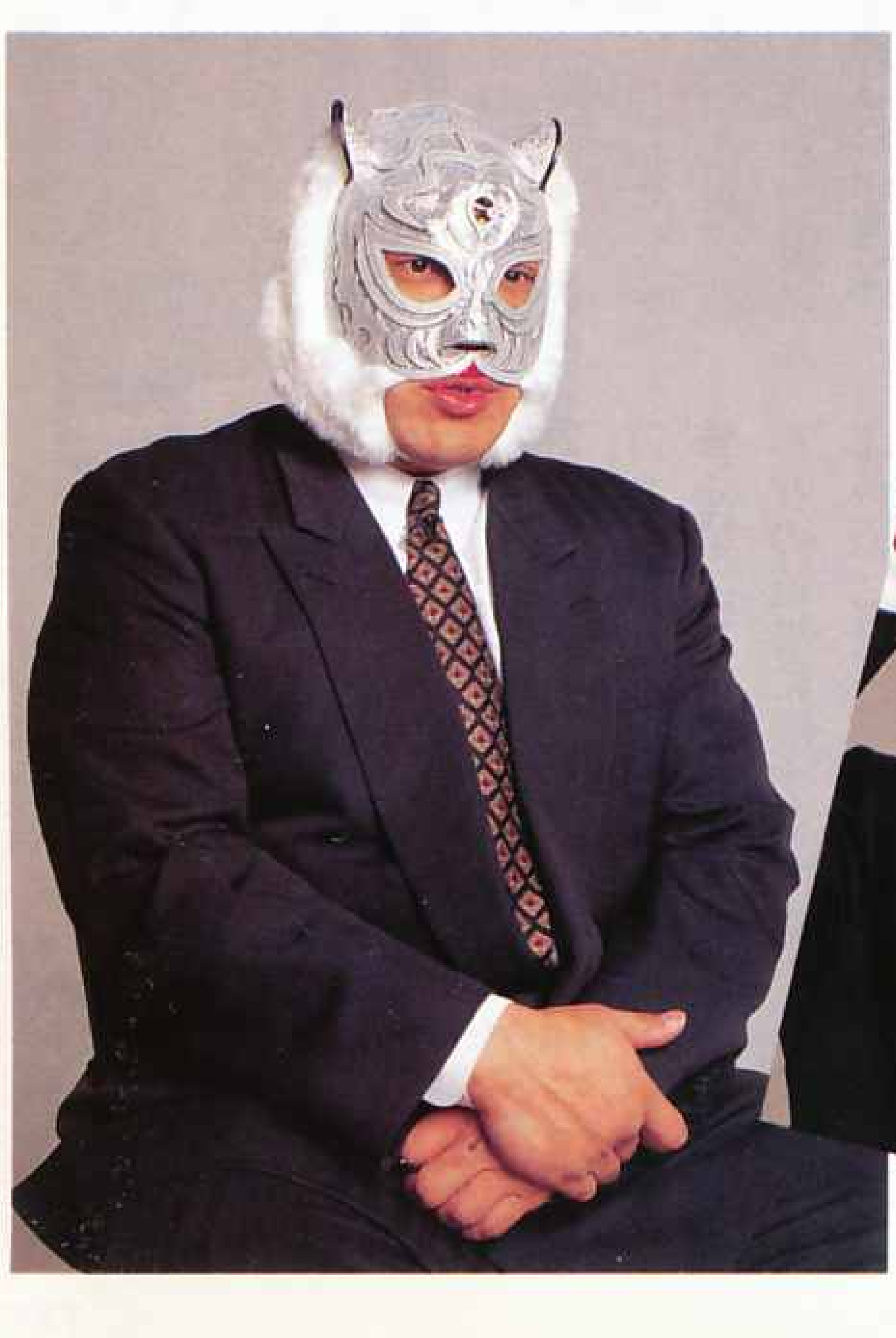
ティグレ　裁判があったんですか。へェー。ヘェー。

――裁判所なんていう、ある意味で一番本音を言っちゃいけない場所で「めんどくせえーんです」って（笑）。

ティグレ　アハハハハァ。凄いなあ、それ。

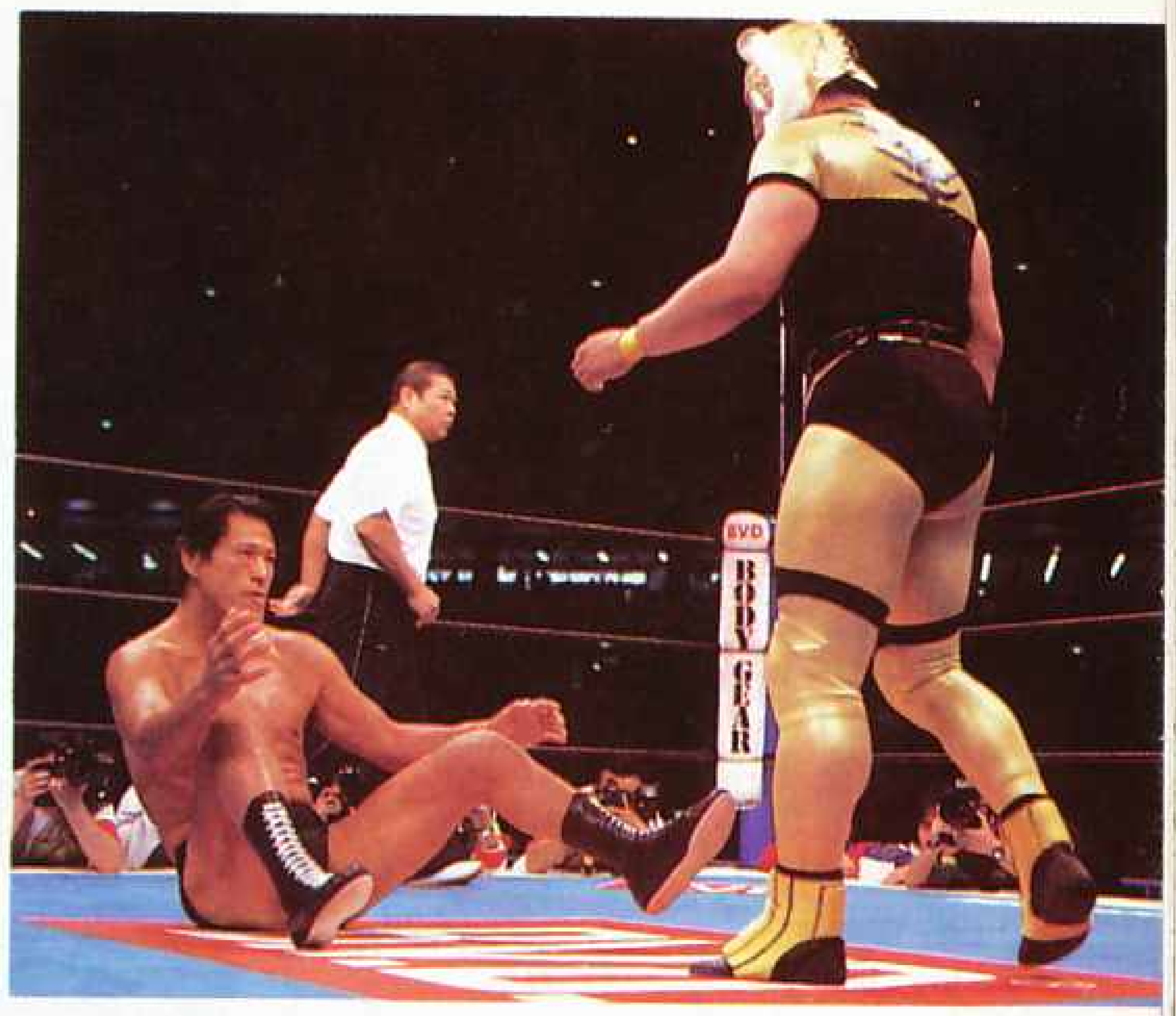
――なんという人間力なんだろうと思ったんですね（笑）。あの時もアントニオ猪木の真髄を見たっていう気がして、その場面が脳裡に焼き付いて離れないんですよ。それも猪木さん流の言い方をすれば、非常に面白く見れちゃった。猪木さんもあのスキャンダルに関してはいろんな苦しい思いしたんでしょうけども、一観客として見たら単なる正直を通り越したそのド正直さに感動しちゃったんですよね。

猪木　ンムフフフ。だからまあ、その一つ一つを**体験させてもらうってことは凄いこと**だなというね。昨日もまた別のテーマがあって話してね、経験っていうか、体験っていうのは、よく宗教でも何でも、苦労は買ってでもしろっていうね、若い時は。そんな言葉もあるけど、練習も同じなんだと思うんですよ。だからレスラーという中で、あれが好きとか嫌いとかじゃなくて、「おい、やってみろよ」って言ったらすぐやるヤツと、一歩引いてるヤツといろいろある。出来なくてもいいじゃないか。でもどっかにプライドっていうか、これは得意だからやる。これは得意じゃないからやらないとか、そっちに入っちゃう人がいるのね。得意なものはいいことです。得意のものでいいから、もうこいつの右に出るヤツはいないっていうぐらいに**ピカピカ**に磨き上げてくれりゃあ





Inoki/Tiger 針の穴にラクダを通せ！'97



猪木VSタイガーキング
愛のムチを振るった師匠と約束を守った弟子が初のシングル・マッチで対決。猪木VSアリ戦を彷彿とさせるシーンも飛び出した。ここ数年で一番充実していた猪木は弓矢固めまで繰り出したが、最後は唐突にコブラツイストでフィニッシュ。ドームを埋め尽くした平成のファンを見事に突き放してみせた。VIVA!

いいけど。そこんとこも曖昧で結局、今の選手は人の真似というかね。この技がポピュラーだから、というかね。だから、**バック蹴りっつうのは**ティグレが最初にやったんだろ、あれ。

ティグレ　あ、あ、ソバットですか？

猪木　うん、ソバットはね。そうすっと、今度ぁ、今流行みたいに誰も彼も猫も杓子もあんなことをやるし。だけどじゃあ、もっとタイミングよくやれるかといったらそうはいかない。コブラツイストもまぁ、いろんな人がやるよね。ジャイアント馬場さんもやったけど。ね。あの人がやったって様にならないじゃない。**ドントコドントコドントコ**ってね。

——ジャイアント・コブラって言ってましたよね（笑）。

猪木　うんうん、そうそう。俺たちは割とその点では人真似はしないという。それは非常に自分が、その人にとってうまくかけられる技もあるんだよね。でもそれは自分のオリジナルじゃないというかね。だから練習はしてる。技は持ってるけど使わない。だから、三角絞めなんかが出てきて、いきなりみんなグレイシーがやったらビックリしたけど、**あんなのは昔から俺たちはいつもやってた**んだよ！

ティグレ　（コクコクと頷く）

——だからホントに面白いんですよ。格闘技の専門家たちが猪木さんの昔の格闘技戦とかを見て、「なんだプロレスとはいえ格闘技じゃないか」っていうんですよ（笑）。いまさら何言ってんだっていう世界ですよね。

ティグレ　あちゃ〜。ヒャハハハハハ。

猪木　（ググッと身を乗り出して）もっと究極的なことを言えばね、要するにアルティメットでも組み合うじゃないですか、どうあれね。組み合わなきゃいいんですよ。アリ戦じゃないけど。よく動物の闘いの中に、絶対に同じ動物同士だったら向き合ってツノ突き合わせてドンッてやるよね。だけど、今度ぁ**動物の異種格闘技**だったら、あれ絶対やらないよね。片っぽが逃げるか、追うか、その闘いでしょ。究極に詰められた時に最後の瞬間で仕掛けていく。そこまで話を詰めていくとね。

ティグレ　この間、それについて議論交わしましたから。**グレートなんだっけ……**動物が逃げるヤツ。逃げて助かるヤツ。エーッと、テレビのコマーシャルでやってるヤツ。

猪木　エスケープってヤツ！

ティグレ　あ、あ、**『グレート・エスケープ』！**　ガァーッて襲おうとするでしょ。弱い方が襲われて逃げるわけですよ。それ全部逃げるビデオ。買わせましたよ。

——買わせたんですか。そういう商売始めたんですか、最近（笑）。

ティグレ　いえいえいえ。アハハハァ。

猪木　闘わずにして勝つ方法っていうかね。こいつはいかに**楽をして勝つ**かってことを考えてるから（笑）。

——言われてますよ、佐山さん（笑）。

ティグレ　タハハハハハー。

猪木　もう練習中も同じだから。いかに楽をするか。今まで膝痛いのに走ってたのがさ、もう走るのやめて早足になるとかね。いろいろ教えてもらってるわけ、佐山に（笑）。

ティグレ　アハ、あれは、あの科学に立証されたあの、立証してくれた科学が……あれ？

——ガハハハ。何を言ってるかさっぱりわかりません！

ティグレ　まいったなぁ、今日はホントに**まいっちゃった**なあ。

——今日、佐山さんはしゃべりが全然少ないんで、最後に猪木さんに質問があれば。何でも、この際ですから（笑）。

ティグレ　質問ですかぁ？　僕が社長に質問するんですか？　あの、僕、社長と昨日話したんですよ。そういう思想ってのはいつ頃からあったんですか？って。そしたらもうズッと前から力道山先生の時代からだって。ああ、そういうことかって思ってですね。ホントにわかるっていうんですか、**プロレスの芯の部分**が。あともう一つ怖いのは、編集長に、自分たちが今から昔の道場に戻すって話を「キ○ガイじみたこと」って言われたんで、「あ、俺たちそんなことやってるのかな」って思ってねぇ（笑）。

——いやいや、今のプロレス界だったら、そう見てる人もいるんだろうなって話です（笑）。

ティグレ　なんか不安になってきちゃったなぁ（笑）。

——もう、その姿勢で猪木さんに付いていってください！（笑）。

猪木　**一ついいですかッ!!**　今の質問はあんまり面白くねぇんでね、俺の方がティグレに質問あるんだよ！

——あ、はい！　どうぞ！

猪木　**「ホントに約束を守りますか？」**っていうさ。ンムフフフ。

ティグレ　（キョトンとして）へ？　へ？　へ？　なんですかぁ？

猪木　そういうのはファンが判断してくれるからさ。ホントに約束は守れますかッ！ってな。

ティグレ　（減量のことだとようやく気づき）アッアッアッ、はい、着実です。着実に今そうなってまーす（笑）。

猪木　ペースは遅いけどな。ガッハハハハハ。



▲これが「グレートなんだっけ？」と佐山さんが思い出せなかった『グレート・エスケープ』のジャケ写！　弱肉強食の壮絶なドラマ『ザ・ファースト・テン・イヤーズ』というオマケビデオも付いて、6800円（税別）で発売中というか。（株式会社オークローンマーケティング）



橋本VS小川
今世紀の最大最後のスーパーマッチ、破壊王VS柔道王が実現。この対戦が決まってからの約2カ月間、猪木と佐山は小川に付ききりで闘魂を伝授した。試合は裸絞めでもちろん小川の勝利。格闘技連盟のサポートがあったのだから勝って当然です！　VIVA!　格闘技連盟！

ただ、面白ェことがやりてえだけ！というね。極論すればね。

ティグレ　アハハハァ。いやいやいやいや。
猪木　**水前寺清子**であるでしょ？
――へ？
猪木　なんとかのマーチ！　3歩進んで……。
一同同時に　2歩下がる！
ティグレ　だってさあ、早速やったんだよォ（笑）。無理に落とす必要ないからって。バーッて行こうと思ったら、「そんなの水分だけなんだからカロリー計算してやれ」って社長が言ったんだよォ。
猪木　違うんだよ。彼の落とし方っていうのはメシを食わないで、何だか知らないけど、**肉ぶとん**みたいな……。
――肉ぶとん！（笑）。
ティグレ　アハハハァ。ヒデェーな〜、もォ。
猪木　ブ厚いトレーニングウェアを着て、その上にオーバーの風を通さないヤツ着てね。それで落ちねぇんだよね。
ティグレ　**落ちてますよォ〜**（笑）。
猪木　だから俺は信用しないんだよ（笑）。ガッハハハハハハ。
ティグレ　いえいえ、今はカロリー計算で。カロリー計算で落ちると面白いですね、水分採らないとポワーンと落ちるんですけど。
猪木　これは、だからボクサーの減量方法なんだよね。これはやっぱり並大抵じゃなく厳しい。そういう意味でもう一つは、なぜ、まあ10キロか、15キロかわからないけど目標をつけて落とすかってことは、**人生を全部ひっくり返さなきゃいけない**のね。今までの人生の、あるいはプロレスの時間の中で考えた人生を全部捨てきるなんてことはできないけど、ある意味でそういう発想に立った時に、どっかで人間、「これでいい」っていう風に妥協してる。俺だって膝が痛ければ、まあこれではって妥協する。でもそれをホントにひっくり返すぐらいの勇気が必要なんだよね。そうするとそれこそ違った世界が見えてくる。これは**俺が見えちゃう世界で彼がまだ見えない世界。**
ティグレ　（物凄い早さでうなずく）
猪木　だから、ああだこうだっていうことまでは言う必要ないわけ。そういう目的意識が一つあれば、そうじゃなくて自分自身の内在するものがグッと変わればね。もう、そんなこと必要ない。それが一番欠けてる部分なのね。自己コントロールという。非常に彼は頭もいいし、顔もいいし、いろんなものすべてあるけど、一番、自己コントロールというところがね（笑）。
ティグレ　でも自己コントロールしないでも、このままいけば**順調に……**。
猪木　アイスクリーム、ポッと出されると、すぐもう考えるヒマなく手が出ちゃう、本能的にね（笑）。
ティグレ　ああ、それは。アハハハァ。
猪木　これが彼の最大の弱点だよね。
――ガハハハハ。『グレート・エスケープ』の逆ですね。逃げずに食らいついちゃう。
猪木　そうなんだよ！　今日のテーマは多分ここだと思うね（笑）。
ティグレ　いやいやいやいや（笑）。
猪木　**ティグレ！　約束守りますか!!**
ティグレ　**あ、キッツ〜い（笑）。**
猪木　偉そうなこと言ったってさあ、理想だとかこうだとか。現実に一番説得力があるもんな、約束を守ったら。
ティグレ　これ、自然になるんだよなあ、このままやってれば。ウフフフ。昨日、僕の秘書に電話があって、「社長があいつを一日でも休ませるな」って言ってるって言われちゃって。ウフフフ。
（この後、なぜかひとしきり神様についての話が続く）
猪木　ところで今日は、これは何だっけか？　紙の……。
猪木さんの心の秘書・S氏　あ、『紙のプロレス』という雑誌です。
猪木　じゃあ、今度は『**神々のプロレス**』にしてみたらどうだい！　ガーッハッハッハ。

〈2月5日・スタジオエビスにて収録／司会進行＝山口昇〉

※編集部注：本人の名誉のために付け加えておきますが、この対談後、佐山聡（現タイガー・キング）選手は師匠・アントニオ猪木選手との約束を守り、ウエイト・コントロールに成功。別人のようになりました。そして師匠との試合では素晴らしい動きと気迫と技術を披露してくれました。VIVA！佐山!!　VIVA！猪木!!　VIVA！世界格闘技連盟!!

KINGDOM

王国の野望!?

安生洋二

Yoji Anjo

編集者、インタビュアー、安生洋二のヤル気が巨大に空回りし続けた旗揚げ直前記念碑的インタビュー!!



野望なんかないよ。だけどあれ（キングダムルール）は自分で考えたルールだけどね

今回、安生洋二は徹夜明けの睡眠不足で、やる気なし　だが一方で、編集のカタブツと聞き手のShowは、やる気十分だが、互いに聞きたいことが違うという末期的状況。しかもこの二人はやる気になればなる程、空回りするタイプ。インタビューは、始まる前から不穏な空気が流れていたことを頭に入れてお読み下さい。

—聞きましたよ、安生さん。『家族対抗歌合戦』に出たって（笑）。

安生　（眠そうな声で）ファ〜、いやあ、食われたね、安生両親に。

—いつなんですか、放送は？

安生　いつだったかなぁ。

カタブツ　4月14日です。

—なんで知ってるんだ（笑）。

カタブツ　……（なんで知らないの）。

—まあいいか。で、あのー、今日は『KINGDOM』旗揚げ前ということとも兼ねてですねえ、一応のテーマは「レスリングとは何か？」なんですよ（笑）。

安生　またあ、わけわかんない。

—いやいや、というのも実は昨日まで”神様”カール・ゴッチに会ってたんですよ。そこで感銘を受けましてね。で、いままで「UWF＝カール・ゴッチ」のイメージがあって、そこからUインターではその「＝」が”鉄人”ルー・テーズに変わったじゃないですか。

安生　それは違うよ。ゴッチさんは来られなかっただけだよ。ゴッチ＆テーズは同一のものと考えてもらいたいな。ゴホッゴホッゴホッ（と、むせる）。

—そこでむせますか（笑）。でね、僕が思い出したのは、以前に安生さんはゴッチさん＆テーズさんよりも「ビル・ロビンソンさんから受けた影響が強い」って言ってたことなんです。

安生　それは確かだ。やっぱりあのおおらかさがいいですね、ロビンソンさんの。ストイックなイメージとはかけ離れた、家に行ったらワインの瓶がゴロゴロしてるような。おおらか？　ただのアル中じゃねえかッ！（笑）

—人間風車はアル中⁉（笑）

安生　違うか。いや、それは違うぞ。いや、うん、テーズさんにしてもゴッチさんにしても、もうジジィなんだけど、バリバリやってるじゃないですか。僕はそういうタイプじゃない。だから、やはりビル・ロビンソンかなと。

—じゃあゴッチさんとテーズさんには、まったく影響を受けてない？

Yoji Anjo 針の穴にラクダを通せ！'97



聞き手／**Show**
Interview by Ass
撮影／**斉藤ユーリ**
photographs by Yuri Saito
担当／**中村カタブツ君**
derected by Katabutsukun

『KINGDOM』では一選手として燃え尽きたい

安生　ないわけじゃないですよ。ゴッチさんにしても、旧UWFの頃に、僕はしばらく付き人としてついていたわけですし。健康法とか見ながら、俺にはできないと思いつつ、「こういう人もいるんだな」ということでね、感じるものがあったんですけども。

——いや、今回ゴッチ宅に行ったら、ほんの少ししか器具はなかったけど、それでも、いきなり「これしかないけど、それでも十分に人を殺す練習はできるよ」みたいな発言があって（笑）。

安生　そういう人はよくないですよ。いまの時代に合わないですよ、人を殺すことを考えてるなんて。だったら特殊部隊か何かに入った方がいいですよ。この平和な時代にそんな。もうちょっとスポーツライクに生きたいな（笑）。

——『KINGDOM』的にはスポーツライクにですか（笑）。ただ、どっちかというと、ゴッチさんにしてもテーズさんにしても、プロモーター的なイメージよりも、一選手としての方が強いじゃないですか。

安生　いや、そういう気持ちはあったはずですよ。ゴッチさんにしても、それができなかったというだけでね。片やテーズさんは、できたにしても失敗の連続でね、向いてなかったというね。そういう点ではゴッチさんの方がテーズさんよりも幸せなのかもしれない。

——じゃあそこで、選手としてもプロモーターとしても成功するという両方の成功を「成功」とするならば、まず安生さんの選手としての成功のために目指すものは何になるのかなあと。

安生　私はそんなものは目指しちゃあおらんですもん。そんな面倒くさい。

——面倒くさい？

安生　難しいですよ、選手としてのゴールがね、単に団体内のエースとして終わるのか、それよりさらに大きいものを見つけるのか、それとも毎日御飯が食べれて、こんなに楽しく試合ができてよかったなあっていうのが「幸せ」ってのがホントの成功なのかもしれないし、非常によくわからないですよね。

——変な言い方ですけど、今日の安生さんは、すごく当たり前の答え方をしますね。いつもの安生節と違うような気がしますけど（笑）。

安生　ヌハハハハ。そりゃあもう、やっと俺にも心の平和が訪れたんでね。波風を立てたくないって、それだけのことですよ。ホントにねえ、『KINGDOM』としてはですねえ、プロモート的なことよりも、一選手として燃え尽きられる場にしたい。それだけに専念したいですね。そういった点で僕が関われるのは、リング内のことだけです。それ以外は何も関わりません。

——ホントですかあ？　まあいいか（笑）。

カタブツ　……（いいのか?·）。

——今度の『KINGDOM』なんですけど、一番目新しいのが、グローブの着用を義務づけたという。おそらく正式に団体ぐるみでそれを認めたのは、業界初だと思うんですけど。

安生　そうですね、はい。やっぱり前々から掌底による攻撃で、指が目に入ったりって事故が多かったんで……。

——ククク、すいません。そういう真面目な話を安生さんがしてると、何だかおかしくなってしまって（笑）。

安生　だったら言わせないでくださいよ（怒）。

——申し訳ないです。でも、立ち技でもマウント状態でも顔面パンチやヒジ打ちがあるわけですよね。

安生　……（沈黙）。

——黙っちゃった。

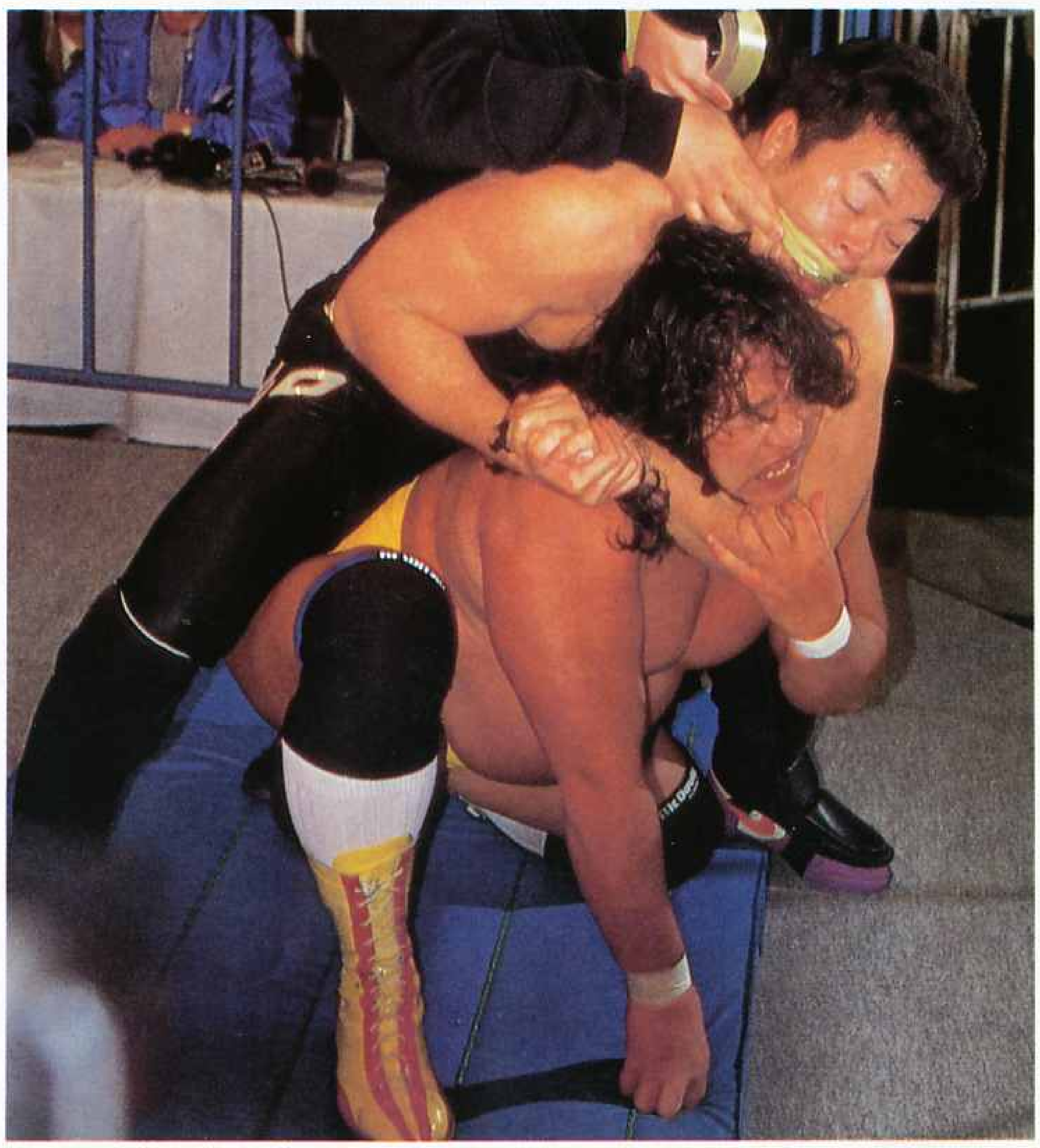
安生　……（沈黙）。

——いやあ、関係ない話なんですけど、今回、ゴッチさんのところに行くのに国際免許をとったんですよ。

安生　……うん。

——で、最近、どうも視力が落ちたらしくて、いつも車の運転をする時だけは危ないから眼鏡をかけるんですよ。でも、それ以外はかけないから、人の顔を見るのにも目を細めてしまうのが癖になってるみたいで、それがニラんでるように見えるらしいんです（笑）。だから、運転以外にも極力、眼鏡をかけようと、一応は決心をしたけど、これとムリヤリにこじつけると、『KINGDOM』のグローブ着用に相通ずるものがあるんじゃないかと（笑）。

安生　ヒッ（笑）。



こんな時代もあった安生。だが、この頃すでにこういった試合にアキていたのかもしれない…





ダメ男二人のインタビューに、完璧にリラックスの安生



カタブツ　……（もっと違うこと聞けないかな）。

——僕なんて『KINGDOM』の旗揚げ記者会見に行かないで、ゴッチさんに会ってたんで、正直な話、どんな記者会見だったかわかんないんですから。大変申し訳ないですけど。

安生　よくよく考えるとヒドイですねえ（笑）。

——はい（笑）。その記者会見で、グロープの件に関して「正統派のデスマッチを目指す」と言ってたらしいですけど、デスマッチ自体が「邪道」と言われてるのを、あえて「正統派を目指す」って逆発想は面白いですよ（笑）。

安生　いや、ただ単純に「肉体を使ったデスマッチ」って言ったら正統じゃないですか。

カタブツ　あのー、すいません。

——えっ、なんですかあ？（なんだ急に）

安生　はぁ。

カタブツ　その思いっていうのは、U—JAPANの頃から？

安生　U—JAPAN？　あっ、あれどうなったんですかねえ。

——僕にはわかりません（邪魔すんなよ！）。

安生　（怪訝そうにカタブツの顔を見ながら）俺が上がるところ上がるところ、みんな失敗してるんだよなあ。申し訳なくてさあ。

——いや、逆に言ったら、それだけ「安生がいれば成功する」っていう幻想があるってことじゃないですか。結果的に成功したかは別として（笑）。で、なんでしたっけ？　U—JAPANの頃から「正統派のデスマッチを目指す」思いがあったかっていう。

安生　やっぱりああいうのに上がってても違うなってのはありましたよね。〝華〟がないですからね。試合を見てて、やはり〝華〟が少なすぎる。やはりお互いに徹底したディフェンス状態からあるから、そのディフェンスをどうやって破っていくかっていう戦法になっちゃう。それを何とかしないかぎりは絶対にプロ競技として成立しえないから、興行的なものを考えたら……。

——ほら、やっぱり興行的というか、プロモーター的なことを考えてるじゃないですか（笑）。

安生　何か考えちゃうんだよなあ（笑）。

——あのー、オクタゴン（八角形）のリングと四角いリングの違いに関してはどうなんですか？

安生　変わらないですよ。

——変わらない⁉　それ、珍しい意見ですよ。

安生　何が違うんですか？　逆に言ったら奇抜なだけだもん、それじゃあいかん。

俺の時代じゃない ってのが俺の野望

——「何が違うの？」っていう発言もすごいですよ。だって、ロープと金網では見た目だけで違うじゃないですか。

安生　それを言ったら、ラッシャー木村さんはどうなるんですか（笑）。

——ということは、アルティメットと金網デスマッチは同じなんだ（笑）。

安生　同じじゃないですかねえ。

——たとえばパンクラスがアルティメットに臨む時に、それ用の練習をしたじゃないですか。だから安生さんの場合も、きっとあるんじゃないかと。

安生　いや、でも正直に言って、金網は変わらないですよ。

——言い張りますね（笑）。じゃあ、あえて金網用の練習をすることはない？

安生　それって、どこでするんですか？

——ありゃりゃりゃ。

カタブツ　安生さんが、U—JAPANを終わったあとに「バーリ・トゥードはお客さんが一人もいなくてもやっていきたい」と言ってましたよね。

——何だか異様に、U—JAPANにこだわりますね（うっとうしいな）。

安生　言ってました？（笑）。僕は自分の発言に責任をもたないタチなんで。昔のことを言われたって困りますよ。日々、成長してるんですから。

カタブツ　えっ……。

——もういいですか（もう言葉につまってるよ）。じゃあ、たとえばパンクラスの高橋義生選手がアルティメット大会で日本人初勝利を手にしたことと

僕は自分の発言に責任を持たないタチなんで

か、どう思うんですか？

安生　いや、よかったですよ。

──相手がグレイシー柔術の選手だったんですけど、安生さんの借りを返してくれたとは思わない？

安生　そうは思わないですよ。俺の兄弟がやってくれたら、そう思うかもしれないけれど、あんまり接点のない人が、ねえ？　向こうにしても、別に俺のカタキをとったとは思ってないですよ。

──思ってないでしょうねえ（笑）。でね、僕らのなかにある「安生洋二幻想」っていうのは、やっぱりチャンプア・ゲッソンリット戦（89年11月29日、東京ドーム）からだと思うんですよ。

安生　私ももう若くないですから。やっぱり若い人たちが育っていく中で僕の役目と言ったら、彼らにキッチリとした道をつくってあげること。そういう段階になりつつあるんじゃないかと。時代の流れを早くするために、いろいろな人材を育てていきたいっていうね。

カタブツ　えっ、安生さんの野望は、いまそれなんですか？

──おい、またかいな（いい加減にしろや）。

安生　俺の時代じゃないなっていうのが、俺の野望ですよね。

──そうすると、このまま高田（延彦）さんから白星を上げられなくても？

安生　それを言っちゃあ、おしまいじゃないですか。

──確かにおしまいです（笑）。

カタブツ　（ホントにおしまいにしていいのか？）

安生　ジジィが子どもにバックを取られながらも、ゴロゴロやるのがいいじゃないですか。プロのリングで老体をさらすよりは。

──その子どもといっしょに、みたいな部分は、何となくわかります。

安生　だから、（『あしたのジョー』の）丹下段平になりたいっていう感じですかね。『KIKGDOM』でバーッとまず走って、あとは後進の指導に当たると。

──丹下段平になりたいってことは、矢吹丈を探さないといけないじゃないですか？（笑）。

安生　そうそうそう、ヌハハハハ。

──じゃあ、矢吹丈を探すということで、話を戻しますけど、新生UWF時代に「最強幻想」をもったモーリス・スミスに、船木（誠勝）&鈴木（みのる）の両選手から「モーリスに勝てる選手が一人いる」という言葉があった。で、それが安生さんだってことで、一気に安生さんの株が上がったと思うんですけど、その時に安生さん自身としてはどう思ってたんですか？

安生　そうかなあ、そうかもしんねえやって。

──UWFの東京ドームが89年だから、もうあれから7年は経ってるわけですけど、当時は「モーリス・スミスを倒せるのは誰か？」というのが、強さへのひとつ解答的な部分があったでしょ？

安生　でも、いまの時代はそんなことないじゃないですか。いまはみんな強くなってんだから、嫌になっちゃうよ、ホントに。

──いや、それが前田日明選手に「200%勝てる」と言ったり、ヒクソン・グレイシーのところに道場破りに行ったりして幻想が膨らむみたいな。

安生　それがね、去年は外れてしまったけれども、その元の流れに『KINGDOM』になって戻るんですよ。

──そういえば、一時期、前田さんが「安生は自分の仕事をナメてるんだ」って言ってたらしいんですけど、ナメてます？

安生　いや、仕事というよりも、人生そのものをナメてるんですけどねえ、俺の場合。いまさら言われることじゃないですよねえ（とソファーに寝転がる）。

──ありゃりゃ寝ちゃった（笑）。で、何だっけ？　あっそうそう、でも、僕は個人的には、前田vs安生の夢は捨てたくないんですよねえ。前田さんは来年には引退だっていうから、早くしてくれないと（マジ）。

安生　（寝転がりながら）その方（引退）がいいですよ。いつまでも前田、高田とかじゃあダメですよ。もう安生でもダメですからね。

──そんなあ。でも前田さんて言えば、田村（潔司）選手に勝ちましたよね。

安生　そうなの？　そうみたいですね、風の便りに。でもだからって、「田村しっかりしろ」って言える立場でもないですし、もうそういう枠で物事を考えてないですから。同じプロレス業界の人間ですからねえ。

──その中のひとつとして、『KINGDOM』も存在していくと。

安生　ただ、最高のものにはしていきたいですよね。

カタブツ　ルールに関しては参画したんですか？

──ムッ！（そんなに割り込みたいなら、自分がインタビューせいや！）

安生　すごく僕の意見が反映されてま



カタブツ君やShowに「ダメな奴ら」と言いたそうな安生さん

すよねえ。

安生さんの意見なんじゃないですか？

安生　まあ、自分が考えたルールですからね。ある程度のものにしていかないとね。

カタブツ　そんな寝転がってますけど、やっぱりなんか野望ありそうじゃないですか。

——もう聞きたいことがあるなら、全部聞いちゃってください‼（怒）

カタブツ　いや、もういいです。さようなら（と、勝手に引き下がる）。

——なんじゃ、そりゃ。

安生　（首を振りながら）あのね、「スポーツエンターテイメント」って言葉好きなんですよ。だから今度の『ＫＩＮＧＤＯＭ』も格闘技界で「スポーツエンターテイメント」として成り得るルールだなと。いま格闘技界でそうなってるのはボクシングくらいでしょう。

——それで、風の噂にですけど、旗揚げ戦には、全日本プロレスから川田利明選手＆田上明選手が参戦するんじゃないかと聞いたんですけど（と聞いていると、突然、安生の目の前にあったソファーを、割り込むように持ち上げるカタブツ）

安生　（驚）ど、どうしたんですか？

カタブツ　ちょっとお借りしたいんですよ。下でやる写真撮影用で。

安生　（不安そうに）下の写真撮

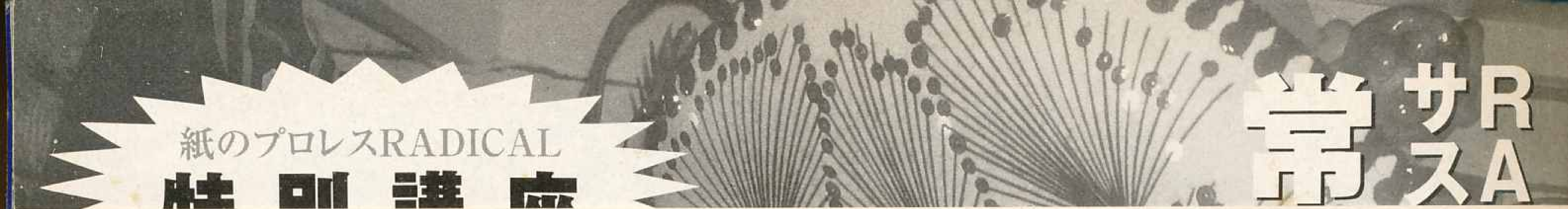


影用？ 微妙な行動がありますね。
——あるんです‼（強調）で、全日本の印象は？
安生 そういう流れに疲れましたからね。いまさら面白さを見い出すっていったらないですからねえ。
——それは全日本に対して？
安生 それは全日本でも、新日本でも。それよりも面白さを見出せる人材が『KINGDOM』の内部にもいるってことですよね。
——安生さんは、3月1日の日本武道館は実際に生観戦してましたけど、全日本の会場の雰囲気はどうでした？
安生 何か違う惑星にいるみたいな雰囲気でしたね。人種も違うのかもしれないし。なにせいままでUWFと新日本しか知らないですから。
——でも、系列で言ったら『KINGDOM』も新日本系じゃないですか。
安生 まあ、インディーも、東プロに行った時は愕然としたものはありましたけどね。「何じゃここは！」と。シャレで上がったとはいえ、いつのまにかシャレで済まないほど、どっぷりつかっちゃったっていう。
——それとは違った印象ですか？
安生 違いますねえ。
——それは「最強を目指す」っていうのをプロレスの基本路線とした場合に、そこから離れたっていうこと？
安生 そうですね。それでもいいや（笑）。
——それでもいいですか（笑）。
安生 ヌハハハ。
——いや、「強さを求める」という基本路線があって、その理想に向かって最初は全員が頑張るんだけれども、観客からしたら「強くても、つまらない試合はつまらないだけだ。やっぱり面白い方がいい」って、強さよりも面白さを求めすぎちゃうと、どんどん基本路線から離れてしまうけど、「プロだから面白くなかったらいけない」とか、そういう問題も絡んできたりして、その辺の微妙な駆け引きというか……。
安生 そう、だからその中間を走るのが一番のプロだよね。両方で頂点を究めたらそれがもう最高にすごい人だね。
——たとえば、WARは全日本系なんですけど、どうですか？
安生 WARはインディーみたいな感じですよねえ。でも、そう言われれば、全日本もそうなのかな。実際にリングに上がったわけじゃないから、わかんないです。「もし、俺が田上と試合したらどうなるか……」とか考えないし。
——マッチメイクされればやる？
安生 組まれたら……微妙だなあ。やりたいヤツがやればいいんじゃない？
——名前を出して「やりたい」っていうほどの人はいない？
安生 そんなに元気ないですよ。ホントに『KINGDOM』をこうしたいって考えてる方が面白いですから。
——この間は、佐野（友飛）選手も全日本に上がって「小橋（健太）とやりたい」と言ってたみたいですよね。
安生 いいじゃないですか、それで。
——まあ、確かに（笑）。いや、この間『スコラ』で、川田さんのインタビューをしたんですけど、「俺とやりたいと言ってる選手とやりたい。それでも選ぶけど」って言いながら、垣原（賢人）選手の名前を上げてましたよ。「彼が俺と試合したいって言ってたらしいから」って。
安生 じゃあ、俺もそうしようか。
——たとえば、全日本の本田多聞選手とかが「安生と試合したい」って言ったらやってもいい？
安生 やってもいいですよ、別に。それが一番楽じゃないですか。でも、このままだと、俺も取り返しのつかないところまで行っちゃいそうで、ますます老け込むんじゃないかって心配がありますから。全日本と俺がやったら一気に老け込むんじゃないかと。
——えっ、なんでですか？（驚）
安生 あそこって「老けてんなあ、コイツら」みたいな感じがあるじゃないですか。試合スタイルにしても。何かねえ、一般の世界からかけ離れてるというか。古き良きものを受け継いでるぞ、みたいな。それはそれでいいんだけど、そこに俺が入ってどうすんの？ってね。発言も真面目だし。
——ただ、安生さんが入ったらどうなるのかを楽しむのが観る側のスタンスだと思うんですよね。
安生 それがあればやっちゃうけどね。だから、全日本に関してはあくまで主導権はファンにありますよ。『KINGDOM』の主導権を握ってるのも。
——今度は「最強」を謳い文句にはしないんですか？（笑）
安生 それを考えるのは僕の仕事じゃないですからね。そういう戦略はやってもらいますから。
——じゃあ、安生さんにとってのレスリングとは何ですか？
安生 なんでいきなりそこまで飛びますかね（笑）。
——一応、言ってみました（笑）。
安生 レスリング？ レスリングはね、趣味でやったら楽しいけど、仕事としてやったら辛いこともいっぱいあるよ、ヌハハハ。
——趣味なら楽しい（笑）。
安生 ヌハハハ、そっちの方が幸せのような気がするな。だけど、不思議なインタビューだったよな。旗揚げ前だってのになんでもっと『KINGDOM』のことを聞かないのかなあ。前田だ、U—ジャパンだってカビの生えた話ばっかりして。全然、緊張感持てなかったよ、今日は（笑）。
カタブツ ……すいません（号泣）。
（97年4月3日、KINGDOM事務所にて収録）
＊文中内のかっこはカタブツ君とShowの心のつぶやきです。

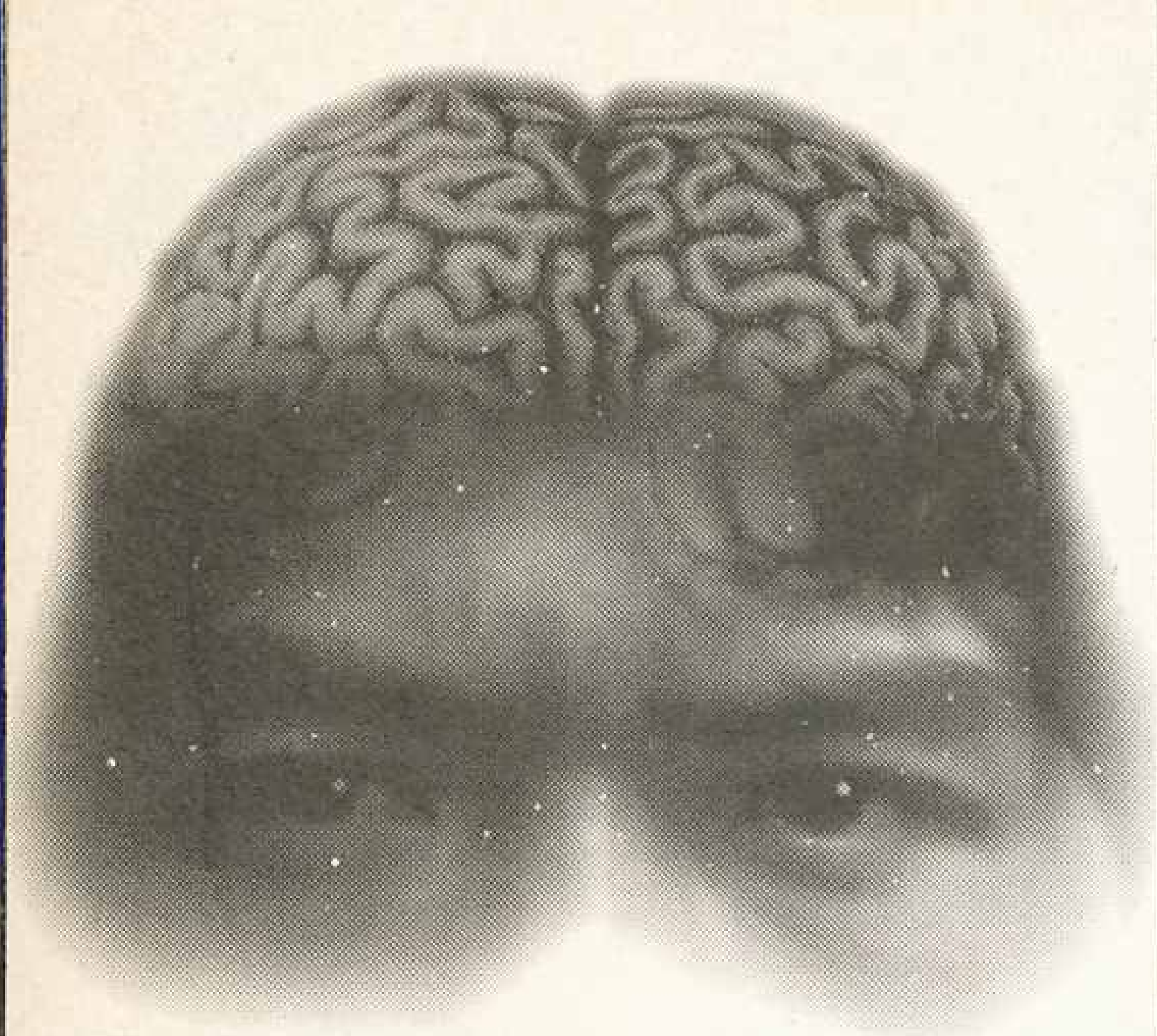
Yoji Anjo 針の穴にラクダを通せ！'97



『KINGDOM』旗揚げ戦は5月4日、代々木第二体育館で開催される。
チケットの問い合わせは（株）キングダム TEL 03（3224）1151まで



紙のプロレスRADICAL
特別講座



聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi

FUNAKI F KING OF LONG INTERVIEW Vol.2

カラー➡モノクロ
ブチ抜き19ページ!!



王者 船木誠勝の~~苦~~脳

※このページは、P12～P23をじっくり読んだ上で
お読みいただくと、ズバリあなたの脳ミソに効きます。

——で、ぶっちゃけた話、船木さんは、これからファンを増やしたいのか増やしたくないのかってことなんですけど。

船木　あのー、増やしたいですよ。でも、だからといってわざわざ増やそうとはしないですけど！

——ダハハハハ。……。

船木　要は、メチャクチャ**不精**なんですよ。

——なるほど、ズボラってやつ？

船木　ほんとにもう、ひっくり返せば、めちゃくちゃ神経質な部分もあるし、めちゃくちゃ**ズボラな部分もある**んですよね。

——それ、僕、スッゴクよくわかりますね。僕もそうなんですよ。一応経営者なんですけど、めちゃめちゃズボラなんですよ！　あ、ズボラといえばいえば馬場さんですよ（笑）。

船木　あ、そうなんですか。だから俺は**馬場さんが好き**なのかもしれないですね（笑）。

——ターザン山本が『16文至上主義』という本を書いてる時に、ホントはタイトルを『ズボラ』にしようかと思ったって言ってましたからね。で、猪木さんとか前田日明っていうのは、ズボラな部分もあるんだろうけど……。

船木　違いますね！

——動きますよね。で、動くことによって人も動いていくと思うんですよ。

船木　そうですね。

——船木さんは、まあ、馬場さんと一緒にすることはないけど……。

船木　馬場さんには、元子さんていう、**ちゃんと動かす人**がいますからね。でも、うちには尾崎さん（パンクラス社長）がいますから。尾崎さんにかかってますよ（尾崎社長を見るような見ないような船木流微笑）。

尾崎社長　俺？　そうなの？（笑）。

——だからその、やっぱり世間の人々っていうのは、ズボラとか不精にはあまり反応しないじゃないですか。やっぱり馬場さんよりも猪木さんの方が、信者的なファンを獲得してったっていうのは、そこにもあると思うんですよ。ま、「信者的なファンはいらない」って言われちゃったら、それまでなんですけど。

船木　いらないんですよ（微笑）。

——ダハハ、いらないんですよね（笑）。

船木　うっとうしくてしょうがないですね。信者的なファンなんて。

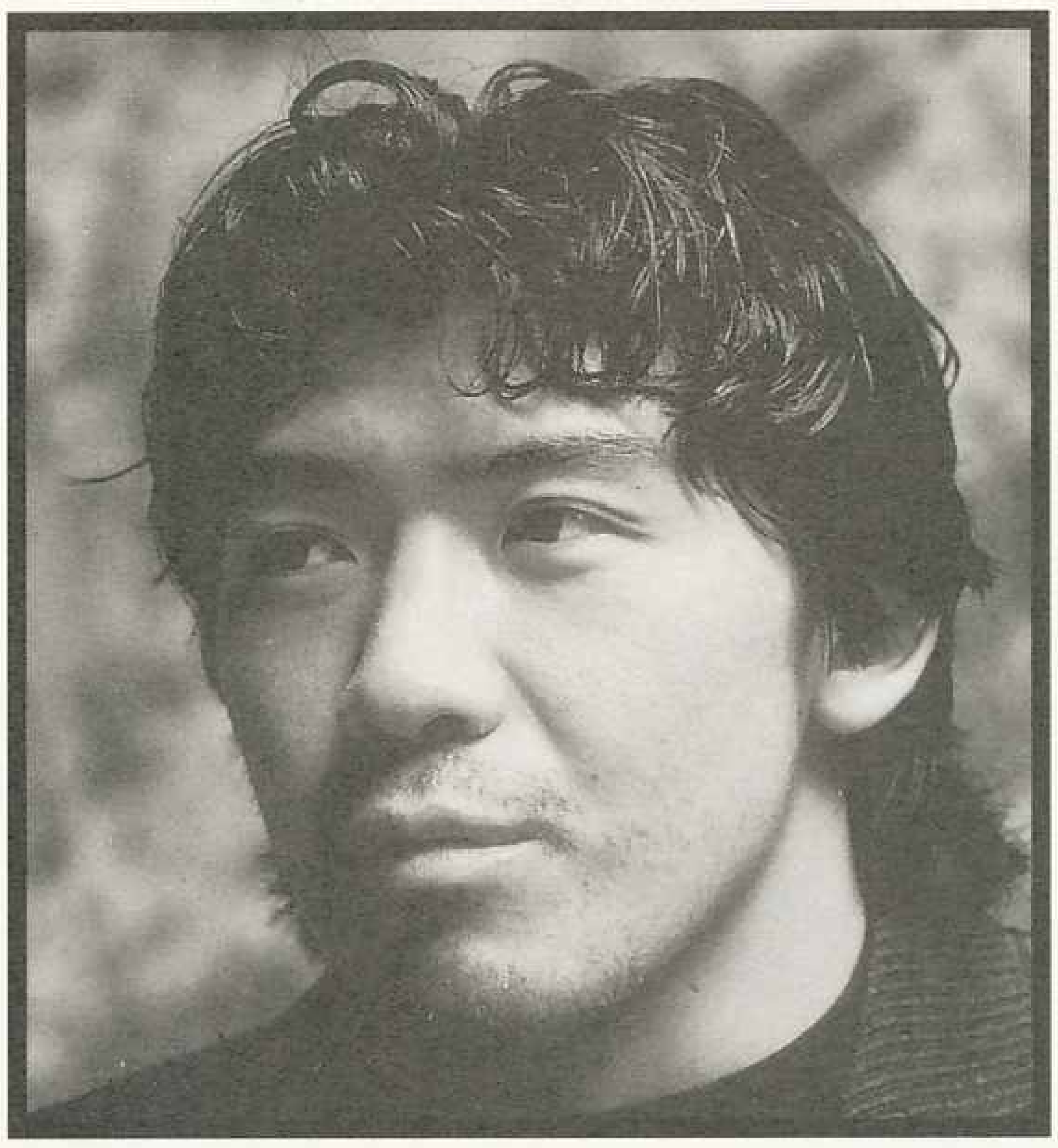
——ですよね。いらない……んですけど、もうちょっと話させて下さい（笑）。で、結局、猪木さん的な動き、周りを巻き込んでいく動きというのを……。

船木　（遮るように）やったら動くと思いますよ。**わかってるからやりたくない**んです！

——動かしたくないわけですか。

船木　動かしたいとは思わないですね。動かしたって、俺に何の得があるかっていったって、**何もない**ですから。

——グフフ。



船木　だから俺、人間を動かすことに快感っていうのは、全然ないんですよ。だから、お金でもないし、**知名度とか名誉でもない**し、自分の生活の中でいかに自分が変わっていけるか、変化があって刺激があるか、それが一番大事なんですよ！　だから人を喜ばすために、猪木的なこととかはしたいとは思わないですね。猪木さんは、多分そういう欲があるからそういうことをやるんでしょうけども。

——その欲というのはいいテーマですよね。

船木　もし、そういう欲が俺にあるんであれば、**まだ新日本にいた**と思いますね。

——はっはー。じゃあ、周りの人が動いてく中で何か渦みたいなものが起きたとしますよね。それを刺激として受け入れて、自分の思った通りじゃなくても、何かいい方向に転がっていくっていうのは実生活の中でもよくあると思うんですよ。誰かが自分に影響を与えてくれたりとか、そういうことっていうのはないんですか？

船木　影響ですか？　影響は……ないかもしれないですね。

——ない!?　ってことは、自分に自分で影響を与えてるわけですか？

船木　そうですね。……っていうか**地球ですよね。**

——へ？

船木　地球が……地球の環境とか変化してるじゃないですか。日本も今は、不景気ですよね。そういう状況が今の俺をつくってますよ。

——ほ？

船木　だから、そういう段階でのパンクラスは、今のこの形なんですよ。もし、この先に景気よくなってくれば、景気よくなった時のパンクラスの船木誠勝が見れます。だから、**それは地球だと思います（キッパリ）。**

——は？

船木　地球が回ってるじゃないですか。回ってると、いろんな人間が増えてきたり減ってきたり、金がどうのこうの、

例えば、明日戦争が起こったら、それはそれでまた、究極の船木誠勝が見れるかもしれないですよ

政治がどうのこうのってなって、変わっていくと。それも全部、地球のせいなんだと。例えば、明日戦争が起こったら、それはそれでまた、**究極の船木誠勝が見れる**かもしれないですよ。

――俺は戦争行きたいですね！

――エッ！　戦争に行きたい！　なんてことを言い出すんだ、この人は！（笑）。

船木　**行きたいですね。**

――でも、そしたら戦争を起こす人が必要になってくるじゃないですか。

船木　だから、それは地球なんですよ。自然に出来てますから、絶対！　だから、自然の流れに逆らうと早死にしちゃいますから。逆らわずに、自然の流れに乗っていけば、自然にその時その時で形が変わっていくんですよ。実際、こんな服装なんかは昭和10年代の頃はなかったわけですから。今は平成9年なんで、みんなこういう服装をして、歩いてるわけじゃないですか。**それが地球なんですよ。**

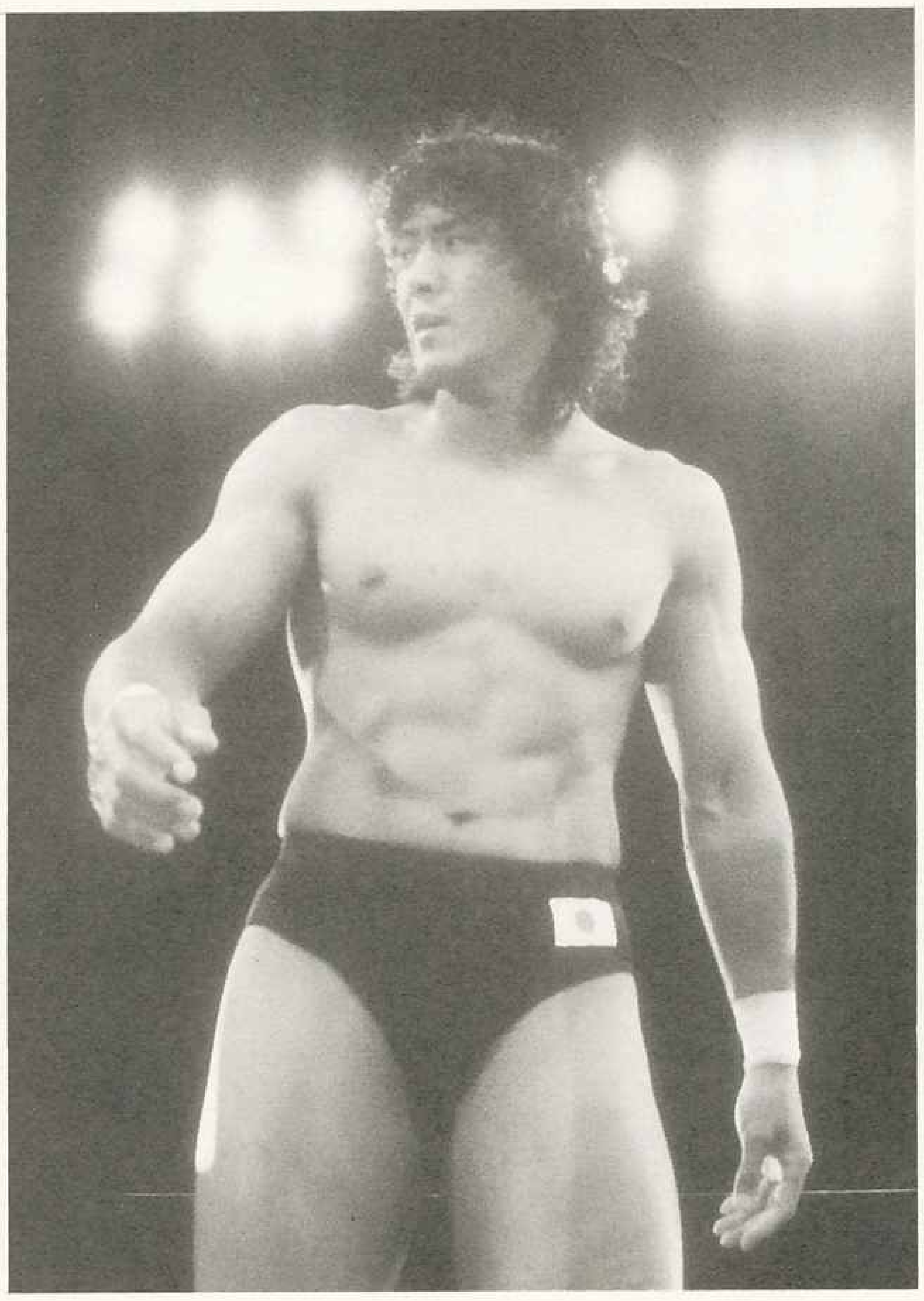
――（ブツブツと）地球が……地球の……服装なんですか。

船木　地球がそれだけ回ったからこういう服装が出てきたんですよ！

――（ブツブツと）地球の……地球が……回ってるんですか。

船木　もしかしたら、あと200回、300回って回ったら、もうちょっと服装も変わってるかもしれませんよ。人間の体型とか、顔自体もやっぱり昔から変わってると思いますよ。それはやっぱり、**地球が回ってるからなんですよ。**

――あの、ちょっと気を取り直して聞きますが（笑）、戦争に行きたいってことは死んでもいいわけですか？



船木　ええ、自然に死ぬと思います。俺、1回戦争って経験してみたいですよね。俺のおばあちゃんとかは経験してるんですよ。おじいちゃんも実際に戦場に行って撃ち合いとかもしてるんですけど、そういう経験した人の話を聞くと、経験してみたいなあと思いますね。

――あのね、船木さんの言ってる戦争ってどんな戦争ですか？

船木　俺は**ホントの戦争しか受け付けない**ですね。国と国の対抗の。

――対抗って（笑）。5対5のイリミネーション・マッチじゃないんですから（笑）。

船木　この前、「もし戦争になったとすれば、どこを志願する？　陸・海・空のどれがいい？」って一人一人の選手に聞いたんですね。

――まったく変な人ですね、船木さんという人は。

船木　**俺は空なんですけど、**鈴木とか富宅（飛駈）、渋谷とか、選手のほとんどが、陸って言いましたけどね。

――へえー。

船木　なぜなら、飛行機は落っこちたら死ぬじゃないですか。

――そりゃ確実に死にます！

船木　でも、陸だったら戦車っていうものがあるから、そう簡単には死にはしないだろうっていう。で、海って奴は誰もいなかったですね。俺は**戦争に行ったら死ぬ**もんだと思ってますから。だから空がいいっていう。

――戦争に行って生き残ろうとは思ってないわけだ。

船木　だから、他の、例えばリング上での対抗戦とかになっちゃうと、死なないじゃないですか。**だから、つまんないんですよ。**

――つまんない！　あのね、一応僕も雑誌を作ってる身として言わせてもらいますけど、今日のインタビューは読者には何がなんだかわからないと思いますね（笑）。

船木　最高にわかると思うんですけど（微笑）。

尾崎　あの、ひとついいですか。船木

レスラーとしては、わざとリアリティを売りにしている。だから、ファッションですよ！

誠勝を表してて、僕が大好きな船木誠勝の言葉があるんですけど、「**人生とは自分を見つけるための旅である。だから、そこに名誉とか名前を残そうとは一切思っていない。ただ、責任が一つだけある。それはパンクラスを作っちゃったことだ**」っていうものなんですけど。だから、パンクラスを残すことだけしかないんですよ。あとは自分を見つけるために生きてるんですよ。

船木 そうですね。パンクラスがある程度形になって残ったらば、また新しい自分を見つけるための旅に出るんですよ。

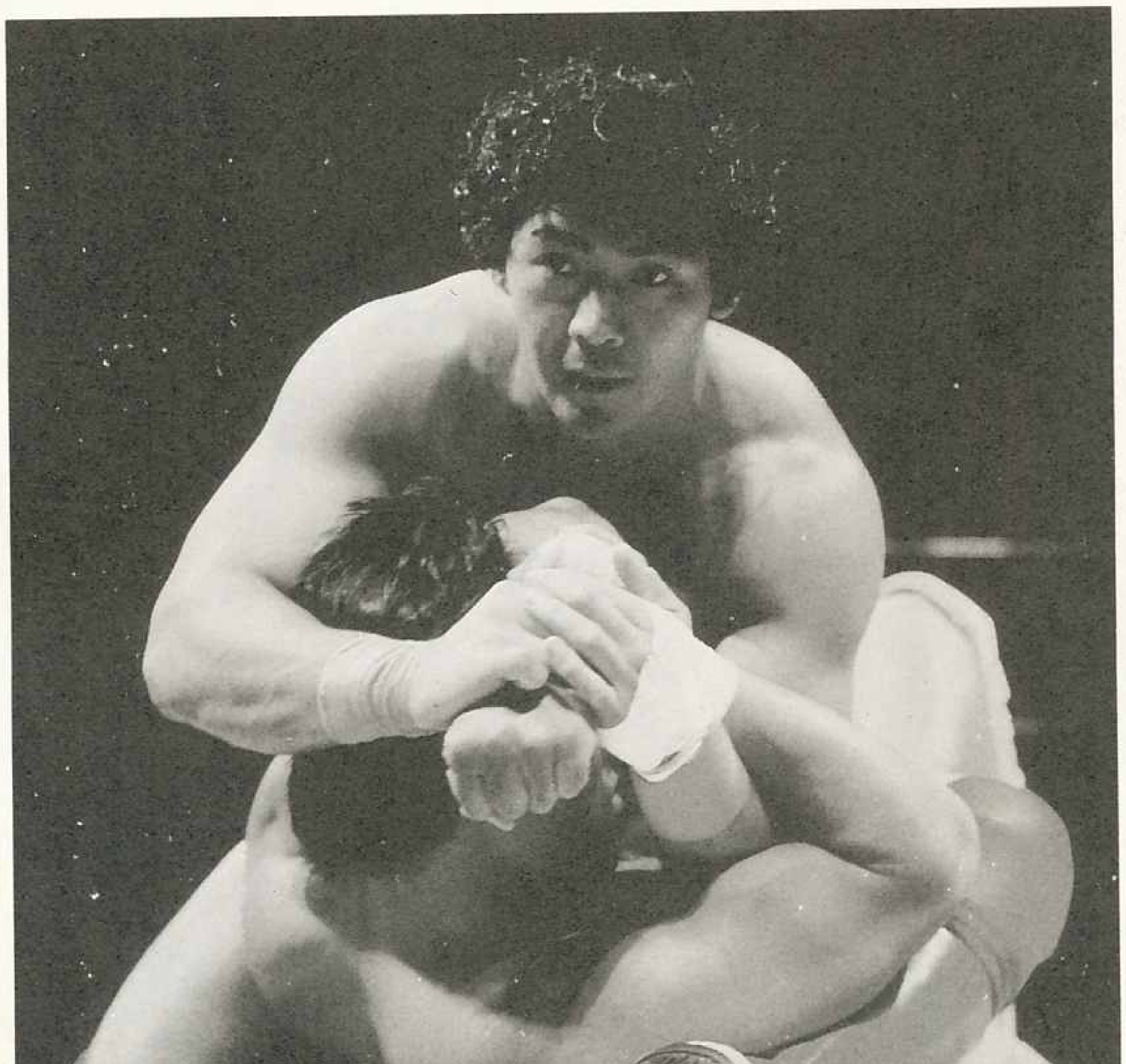
尾崎 だから、お客さんのことっていうのはパンクラスがあるから意識しなきゃいけないし、自分が今あるための行動が変化してるだけであって、本来はどうでもいいんですよ（笑）。

——さすが「ミスターほっといてくれ」ですね。

船木 ある意味で、**俺ほど幸運な男もいない**なと思いますね。

——もの凄く幸せですよね。

船木 でも、裏返せば、俺ほど不幸な男もいないですね。他に見たことないですね、こういう……。



——こういう人間は見たことない！（笑）。いや、あのね、前からわかってるつもりではいるんですよ、船木さんの面白さは。

船木 それをうまく読者に伝えたいんだけど、伝わらない（微笑）。

——メチャクチャ時間掛かりますよね。時間が掛かるっていうか、ほっとけって言うんなら、ほっときたくなりますよね（笑）。

船木 **頭、酸欠になってないですか？**

——いや、今のところ大丈夫です。

船木 俺は朝の5時までやれって言われたら続けられますよ（微笑）。

——ガハハハハハ！ 朝の5時までだったらキャバクラで飲んでた方がいいですよ（笑）。

船木 でも俺は、宇宙人じゃないことは確かですね。

——いきなり何を言い出すんですか？（笑）。

船木 **宇宙人**じゃないけど、やっぱり他人のことは干渉したくないし、一人が好きなんですよね。

（この後、ビジネス的、金銭的な面からみたパンクラスの話へと進むぜどこまでも）

船木 俺は別に乞食でもいいんですから。

——また、言うことがいちいち極端ですね。本物の戦争じゃなきゃ嫌だとか、乞食でもいいとか（笑）。

船木 1回、でも考えたことあるんですよ。**カロリーメイトを5年分買って、5年間乞食**やったらどうだろうって。

——はい？（笑）。

船木 5年分買うために、まず金が必要だなと思って。まず、何千万か貯めて、カロリーメイトを**1日1箱だけ**食ってどれだけ生きれるか？っていうのを考えてたんですよ。そういう乞食っていないですよ。だいたい乞食ってゴミを漁ったりするじゃないですか。

——しますね。

船木 漁ったりする乞食って格好悪い

じゃないですか。これは差別してるわけじゃないです（キッパリ）。同じ乞食でも、毎日カロリーメイトを**コンビニ**に買いに来て、それで暮らす乞食の方が格好よくないですか？

——うーん、乞食とバランス栄養食って言われても（笑）。

船木　やっぱり、ゴミ箱から漁る乞食って1回見ましたけども、格好悪いですよ。

——最近は乞食の人も糖尿病が多いらしいですからね（笑）。



船木　そうですか（微笑）。

——そうか、格好いい乞食か。

船木　**乞食の概念**を崩すでしょうね。だから、まず一通りのモノを揃えちゃうんですよ。どっかに小屋建てたりなんかして。それで、食べ物はカロリーメイトで。それで5年間何もしないでやっていくという。

——でも乞食っていうのは、普通は何にもないから乞食になるわけじゃないですか。そこで、船木さんみたいにカロリーメイトを用意してから乞食になるっていうのは、ある意味ではファッションですよね。

船木　**そうです！**　無職の人は、みんな乞食だと思ってますから。それが僕の考える乞食です。言葉は悪いですけど（微笑）。

——あのー、船木さんのその「格好いい」という価値観が、やっぱり僕の興味ある部分でもあるんですよね。でも、一つの価値観として、逆に乞食をファッションでやるのは格好悪いよ、という価値観もあるわけじゃないですか。

船木　それはありますね。乞食はホント汚くて、そういうゴミを漁るやつの方が格好いいっていう。

——格好いいというよりも、そっちの方が人間らしいというか、生きる姿をさらけ出してるというね。

船木　そういう乞食は辛いと思うんですよ、やってる人たちが。だから、俺は**やってて楽しい乞食**をやりたいですね、やるとすれば。いろんなところに出没したいじゃないですか。一つのところにズッといる乞食って絶対つまんないと思いますね。例えば乞食であろうが、コンビニくらいは入れると思うんですよね。そういう乞食ならしてみたいですね。

——多分、今、読者は置き去りになってると思うんですけど、もうちょっとこの話を続けましょう（笑）。で、今言った、ゴミを漁ってる乞食屋さんたちに**リアリティー**を感じる人たちっているわけじゃないですか。逆に船木さんが言った新しい乞食、まあファッション乞食ですか（笑）。そこに生き方の軸を置いてみる人もいると思うんですよ。

船木　そうですね。現代乞食ですか（笑）。

——もの凄く乱暴な質問なんですけど、パンクラスが乞食だとしたらね、どっちなんでしょうね？（笑）。

船木　う～ん、どっちなんでしょうね？　乞食……レスラーとして考えればいいんですか？

——そうですね。

船木　レスラーとして、ファッションかファッションじゃないかっていう……ファッションかもしれないですね。わざと**リアリティーを売りにしてる**っていうんですか……ファッションだと思います。俺個人は。俺が悩んだんだから、絶対そうだと思います。**ファッションですよ！**

——何か、わざと誤解を招くようなこと言おうとしてませんか？（笑）。でもつまり、船木誠勝はファッショナブルな生き方がしたいということですよね。

船木　そうでしょうね。

——うーん、なるほどね。その発言は揺らぐものがないから出てくる発言なんだろうけど、あ、だから、パンクラスが経営的にうまくいってるかいってないかは知らないですけど、こないだ（2・22）のNKホールも実際にそんなに超満員にならなかったと。パンクラスがファッション乞食だとしたら、今、ゴミを漁る乞食屋さんの方向に地球が回ってるからかもしれませんよ。

船木　それは、もしかしたらですよ、**わざと漁ってる様に見せかけてるかもしれないですよ。**

——そうなんですよね、そこなんですよ。生ゴミを漁ってるように見えて、それは見せかけてるだけで、裏では豪勢な生活をしているというのもありますからね。でも、俺は予言者じゃないけど、生ゴミを食らってでも生き抜いてやるっていうバイタリティーが支持される方向に格闘技界やプロレス界は近いうちに向かうと思いますけどね。見せかけのバイタリティーは溢れてるけど、真のバイタリティーある格闘家って少なくなってるじゃないですか。

船木　そういう時は、そういう方向で**変身しちゃう**んですよ。

——え、誰がですか？

船木　俺がです。

——ははあ（笑）。地球がそっちの方向に回ってくれればということですよね

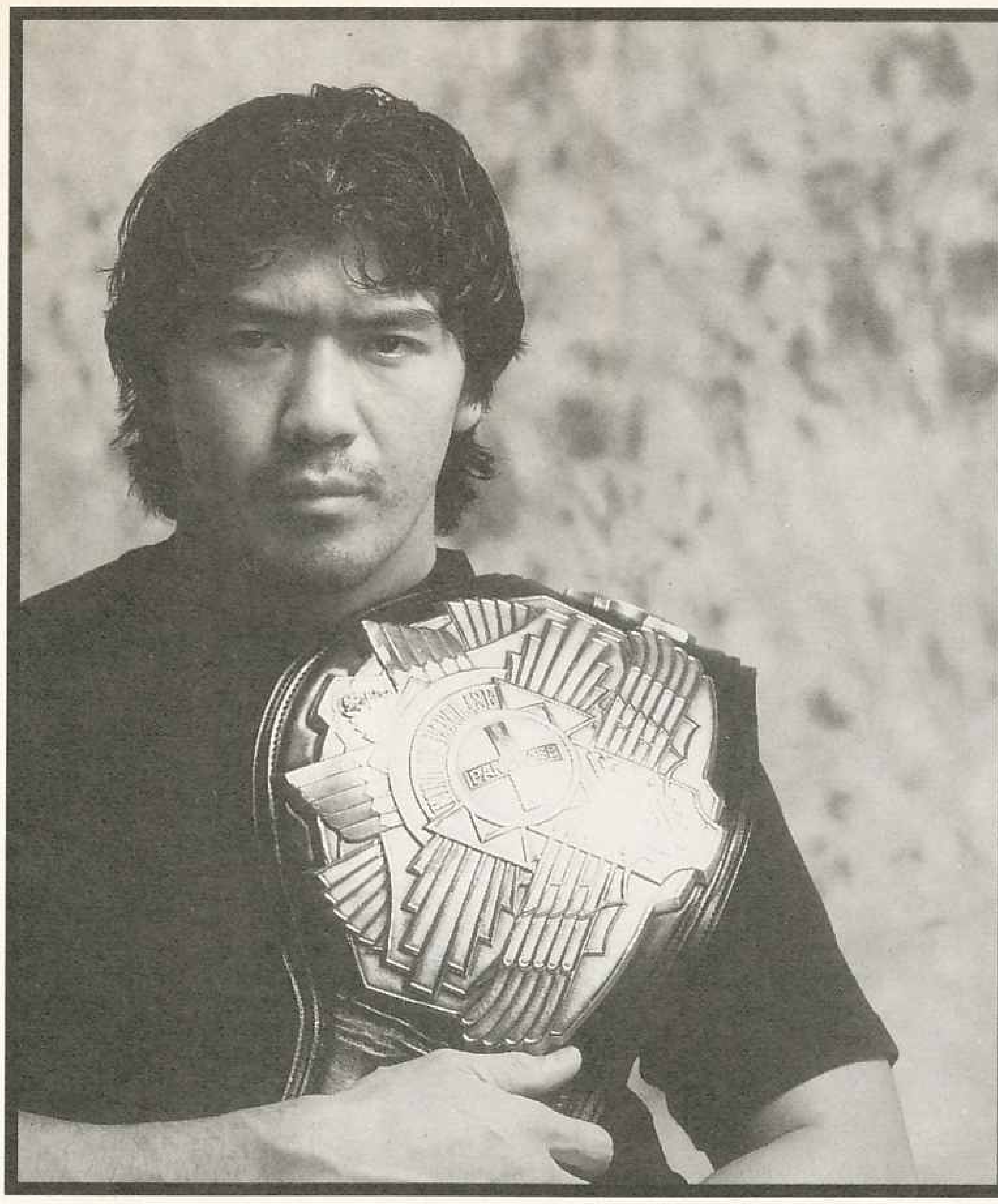
（笑）。

船木　そうですね（微笑）。

——で、僕らが格闘技とかプロレスに求めるものっていうのは、やっぱりその生の迫力、さっきも言った人間の闘争本能であるとか、そういったものを強烈に刺激されるからだと思うんですよね。「生きなきゃいけない」という気にさせてくれるっていうか。

船木　はい。

——で、スポーツって限定しちゃうと別に闘争本能が刺激されなくても見れるわけですよね。野球でも何でも。でも、野球でも乱闘シーンになると血が騒ぐじゃないですか。僕は格闘技やプロレスはスポーツなんて呼び方では括れないジャンルだと思ってますから。



だからパンクラスは、今しっかりスポーツの方向を取ってるわけですから、さっき船木さんが言ってたファッション乞食っていうのはそういう部分かもしれないですよね。

船木　ああ、そうかもしれないですね。

——だから僕は、船木さんさえ知らない船木誠勝をさらけ出した船木さんを見たいんですよ。船木さんも球技が嫌いで、プロレスにグッと魅せられたのも、そこの根っこには闘争本能が刺激された部分があるわけじゃないですか。

船木　それは、俺の少年時代でしょうね。やっぱり単純な幼稚園の**ケンカ**であり、小学校のいじめであり、万引きであり、親との抗争であり、それとおじいちゃん、おばあちゃんからの愛情、さっき言ったツッパリたちとの交流、あと先生。

——センセイですか？

船木　先生も二通りにムチャクチャ別れたんですよ。すっごくいい先生と、もう、ホントに馬鹿みたいな先生と。不思議と、小学校卒業の時と中学校卒業の時の最後の担任の先生が、二人とも凄くいい先生でしたからね。全校のほとんどの先生が「プロレスなんか絶対やめたほうがいい」というんですけど、俺の担任の先生だけは**「それはやるべきだ」**って言いましたから。

——ほぉー。やるべきだと。

船木　それはもう、ホントに、たった一人の力でもの凄く勇気が湧きましたから。その先生が言うんだから、出来るかなっていう。他の先生たちが間違ってるなっていうのがわかりましたから。**ピーッピーッピーッ！**（突然、船木の腕時計のアラームが鳴る）

——だいじょぶですか？　たまごっちじゃないですよね（笑）。

船木　違います。

——今は、船木誠勝の価値観っていうものと、世間の価値観との闘いっていうのはありますか？

船木　闘っては……いないですね。

——闘ってないですか。やっぱり「ほっといてくれ」？

船木　ほっといてくれ……っていうか、とりあえずお客さん入れてるんで、見せてるんですよね、それを。見せてわかる奴はわかってるし、わからないやつはわかってないし、ただファッション的に見てる人たちもいるし、奥深く見てる人たちもいるし。あとは、これがどんだけデカい、例えばテレビっていうものに乗って、その時に、その比率がどうなるかですよね。メチャメチャ爆発的にいくか、それともそこまでいかないか。でも、それはどうなっても仕方がないと思うんですよ、**地球が回ってますから（笑）**。

——ガハハハハ。また回りますか。

船木　その時の運命だと思うんですよね。

——はい（笑）。

船木　だから、ほんとにもう、**秒がドンドン進んでいく**じゃないですか。ホントに速いなと思いますね。こうしてるうちに3秒、4秒は平気で経ってますからね。

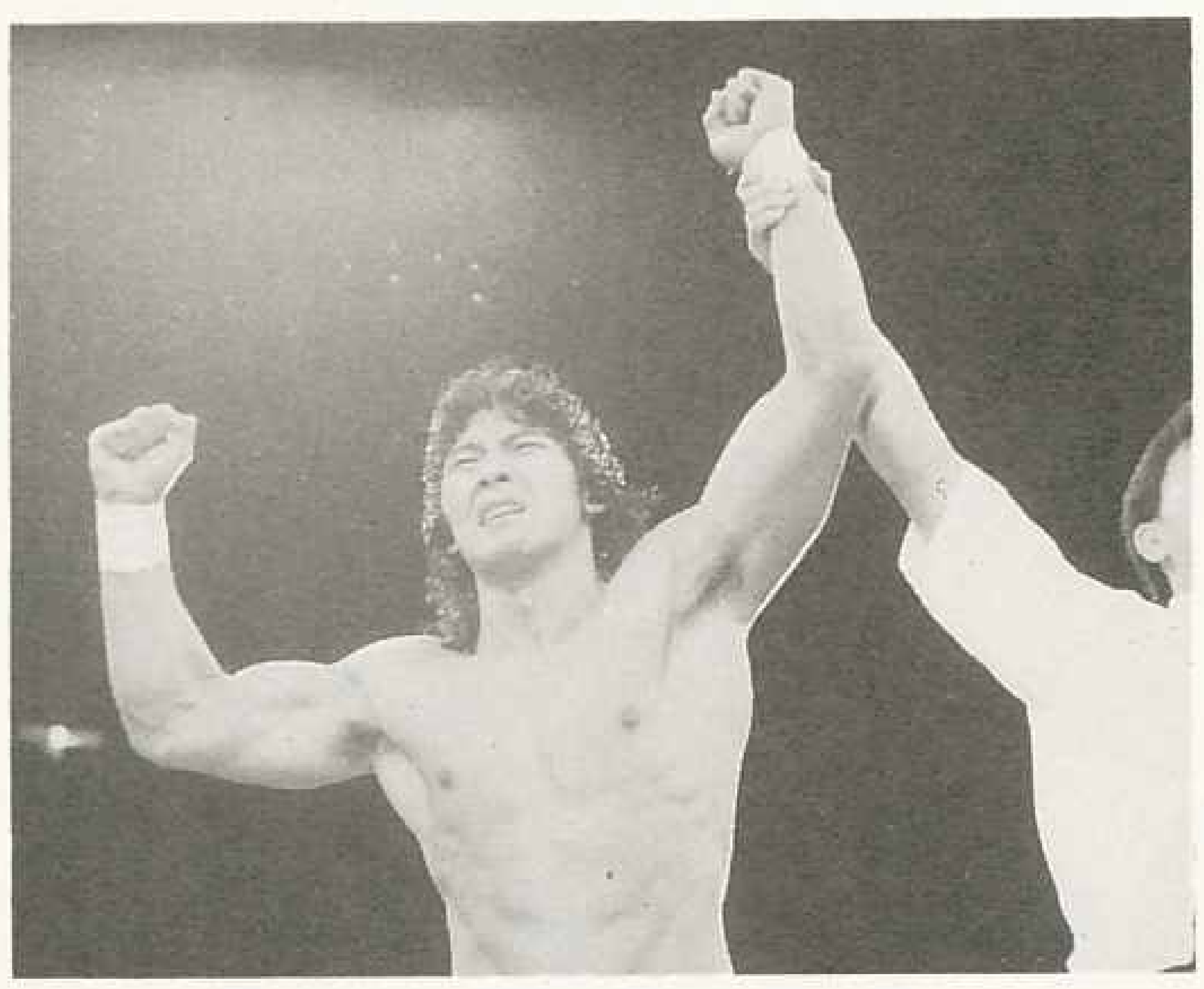
——でも不精なんですよね。

船木　でも、俺は時計はずっと付けるんですよ、なぜかホント不思議なことに。**時計がないと、何もしない**ですよね。だから、時計で操ってるって感じですよ、時間で。あと、日記とスケジュール手帳。もう、2カ月先まで逆算してますから。

——はあー。じゃあ、時間軸っていう

だから、最後には死ぬじゃないですか。それに向かって生きてるんですよ！

のはしっかり持ってるわけですね。
船木 だから、**最後に死ぬじゃないですか？**
——死にますね（笑）。
船木 **それに向かって生きてるんですよ！** もう、どれだけのことが出来るか限られちゃってるじゃないですか、凄くもったいないですよね。何歳で死ぬかわからないですけど、それまで出来るだけやりたいことやって。
——やりたいものっていうのは船木誠勝の中では限られてるわけですから、そこから先の余計なモノはやりたくないということですか。
船木 人が、「あれしたらどう？」「これしたらどう？」っていうものは**全然受け付けない**ですね。自分中心で動いてますから、我がままですから。
——我がままというか頑固というか頑固というか（笑）。あのー、それではですね、って何あらたまってるんだろう、俺は（笑）。
船木 **頭、酸欠になってませんか？**
——まだだいじょぶです（笑）。あの、パンクラスを世界に向けて広げていこうという意志はないんですか？
船木 俺個人は**どっちでもいい**ですね。
——ダハハハハハ！
船木 尾崎さんが、その、ちょっと時期が来たらって言ってたんで。
——船木さんはどっちでもいい？
船木 どうでもいいです。それも、やっぱり地球の話になるんですけど。
——うん、やっぱりここは地球でしょうね（笑）。
船木 その時、例えばアメリカ人に受けるか受けないかっていうのも、一つの手ですよね。もしかして、アメリカ人に受けたら最高だと思うし、受けなかったら全然ちがうし、もうそれは運命だと思うんですよ。運命はやっぱり**否定したくない**ですね。
（この後、日本の漢字文化の話から、日本の漫画文化の話、日本のプロレス文化の話、そしてもちろん地球の話も挟みながら話は進むぜどこまでも）
船木 ということは、やっぱりパンクラスは間違ってないんじゃないですか。
——今の話からだとそうなりますよね。あとはいかに、爆発的なものを付けてくれるかってことです。
船木 そういうことですね。それは、もう**社長**の方に（微笑）。
——それは船木さんが考える役割ではないと。
船木 じゃないですね。俺はとりあえず、**俺の人生だけを（微笑）。**
——ヌハハハハ。「ほっといてくれ」と。まあ、地球は回ってるということですね。今日はここまでにしといて下さい（笑）。今度は朝5時まで話せるように脳ミソを鍛えておきます（笑）。
【3月27日、六本木アートセンターにて収録】



影用？　微
—ある…の印象は？
安生　そう
ね。いまさ
ったらない
—それは
安生　それ
それより
『KING
てことです
—安生さ
館は実際に
日本の会場
安生　何か
囲気でしょ
ないし。あ
本しか知ら
—でも、
DOM』
安生　また
行った時は
たけどね。
ヤレで上が
かシャレて
かっちゃの
—それも
安生　違い
—それは
のをプロレ
そこから離
安生　そ
（笑）。
—それで
安生　ヌ
—いやい
本路線がよ



RADICALだからこそ、
サスケ社長だからこそ実現!!

常識なんか、くつがえせ!!

紙のプロレスRADICAL
特別講座

サスケ社長、
カタブツ君のために
盛岡から
ヘリコプターで飛来!?

RADICAL初登場 超大物(アソコも大物!?)
ザ・グレート・サスケ

vs

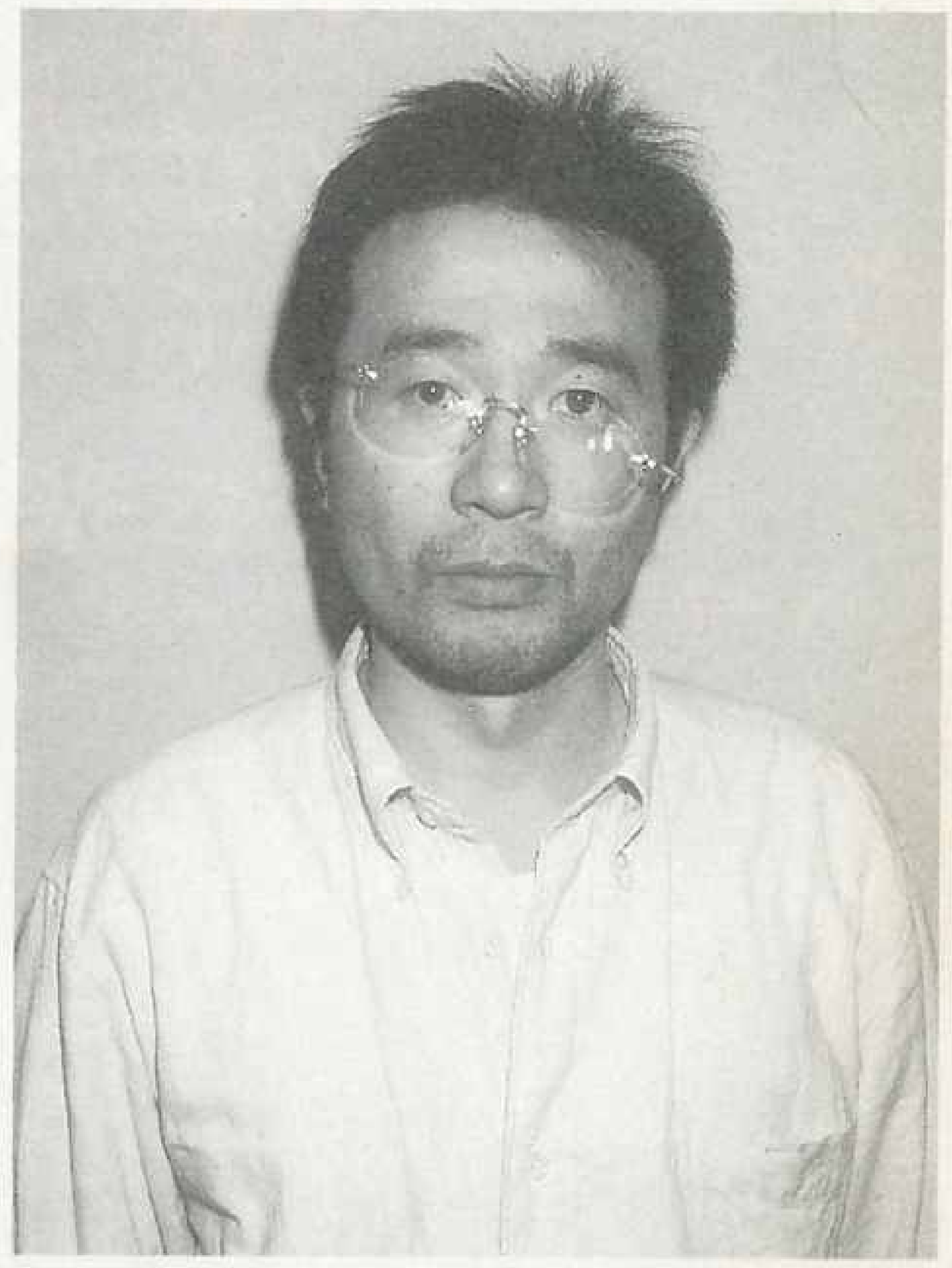
新弟子以下の超小物(または小動物)
中村カタブツ君

聞き手／中村カタブツ君(34歳)
Bad Interview by Katabutsu Nakamura
撮影／斎藤ユーリ
photographs by Yuri Saito
チャチャ／外野&内野
chacha by Gaiya &Naiya

インタビュー相手に、インタビューの極意を教わるダメ編集者。……マスコミ業界初、RADICALだから、サスケ社長だからこそ実現したタブー企画。トイレ流さない場合じゃないぞ、カタブツ！　しっかり盗めよ!

『紙プロ』の新弟子以下にサスケ社長、頭抱える

サスケ　今日のテーマは何ですか?
ブツ　とりあえず、今日のテーマはですね、インディーの今後ということで。
サスケ　そんなものは知らないですよ（笑）。
ブツ　そんなこと言わないで下さい……（泣きそう）。
外野　カタブツ君は、『紙プロ』の茂木って呼ばれてんですよ。
サスケ　ガハハハハ（パチパチパチ）。雰囲気ありますよねぇ。
外野　うちの編集長に新弟子以下って言われてるんですよ。今日のテーマは「サスケ社長にインタビューの極意を教わる」ってことで（笑）。
サスケ　なるほど（笑）。じゃあ、やっぱり最初にテーマを絞んないとね。
ブツ　だからさっき「インディーの今後」って……（ブツブツ）。
サスケ　それは却下です!
ブツ　じゃあ「世界戦略」について。
サスケ　あ、はい、はい。
ブツ　じゃあまずライガー戦から聞きたいんですけど……。
サスケ　ガハハハハ、何でだ!（笑）
ブツ　（自分のことに一生懸命なので無視する）とりあえず、4・12にライガー戦決まってますけど、3・30の（みちプロ）最終戦に（会場に）ライガーさんが突然現れて「こんなんでいいのか、オマエ!」って言われて、あん時、サスケさん、ちょっと無言みたいな……。
サスケ　長々説明してくれたけど、それ、全部『週プロ』の請け売りじゃないですか! 5分前に読んだかのような（笑）。しかも何言いたいのか全然わかりませんよ（笑）。
ブツ　すいません（怯えた子犬の様な目）。じゃあ、8冠に挑戦するんですが、ボクが思うにサスケさん、もう8冠なんか小さいと思ってるんじゃないですか、実の所?
サスケ　う〜ん、ある反面それもありますけど、ただやっぱり大きいですよ。何て言うんだろ、初代王者になっちゃったんでねぇ。自分で自分を偉大だと思わないじゃないですか。
内野　だけどグレート・サスケじゃないですか。
サスケ　イヤハハハハ。いいツッコミですねぇ。カタブツさんもこういう風にツッコまないと（笑）。ただやっぱり手放してみて、8本の重みをいま、感じてますよ。だからいまはもう1回欲しいと思ってますよ。
ブツ　世界戦略に持ってくためにも。
サスケ　そうですね。でもいまは8冠って言われてベルトも8本まとまってるけど、別に8本いっぺんに防衛することはないと思うんですよ。……あの、それより、テープ回ってないですよ。
ブツ　あっ、うへっ、ホントだ（頭をかきむしりながら）。どうしよ……。
※ということで、カタブツ君が用意したテレコには、いままでの会話は録音されていなかった……（幸い、こんなこともあろうかと、もう一台テレコを回していた）。原因は、テープレコーダーの一時停止スイッチがONに入っていたため起こった不祥事なのだが、それについて中村カタブツ君（34歳）は、「だってオレ、そんな機能あったの知らないもん」と、いかにも自分は悪くないとでも言いたいように開き直っている。カタブツよ、機械のせいにしちゃいけない。
ブツ　でぇ〜。
サスケ　で?
ブツ　そのでは……、はい。って言うかだから……。え?
サスケ　え? じゃなくて、ここから話をどう持ってくかですよ（笑）。
ブツ　それが難しいんですよねぇ。
サスケ　ガハハハハ、難しくない!
ブツ　じゃあ、8冠戦に向けて、とりあえず、その、抱負をひとつ……。
サスケ　抱負はつまんないなぁ（笑）。
ブツ　ダメですか……（すごくせつなそうな顔）。
サスケ　あ、じゃあ一応言っときましょうか。ま、とにかく絶対勝つと、これしか言うことはないですね。
内野　聞かない方が良かった（笑）。
サスケ　ガハハハハ。ボクがもう1回8冠に返り咲いたら、エスコートギャルは全て外国から呼びますよ（笑）。
ブツ　世界戦略の第一歩ですね?
サスケ　あ、ちょっとうまく持ってったな、いま（笑）。世界戦略で、いまボクが熱中しているのは、ECWとの合体ですね。カタブツさんは、ECWはどうですか?
ブツ　ECW（※カタブツ君はオウム返しが得意である）、ボクはあんまり好きじゃないんですよ。いや、ECWは、す、す、すごい大会でしたよね?
サスケ　何ですか、そのすごい大会ってのは。見てないじゃない!（笑）
ブツ　で、でも、すごい評判良かったじゃないですか。入場した時点でコールがあったという……。
サスケ　ない、ない、ない（笑）。ど



中村カタブツ君（34歳）既婚
入社以来、ミジンコ以下のダメぶりを惜しみなく発揮（読者ページ・カタブツランド参照）。おまけにメディアに出て読者に不快感を与えるのは、ぽおりゅう♥りき＆Ｓｈｏｗ同様だが、なぜか女性にはウケ良し。そのダメぶりが母性本能をくすぐるのであろうか!?

る。カタブツよ、機械のせいにしちゃ
サスケ ない、ない、ない（笑）。ど

こ読んでんの、カタブツさん！ 入場の時はむしろ「なんだ、あの日本人」って冷ややかな眼で見られてましたもん。試合でファンを掴んで、退場の時にワーッとなったと。

ブツ ですよねぇ。

サスケ 「ですよねぇ」じゃなくて！

ブツ や、でもやっぱり世界各国どこ行っても、サスケさんの飛び技はファンを沸かせられますよ。

サスケ 話の展開に何かムリがあるなぁ（笑）。でもねぇ、飛んでも飛んでもウケなかったってのは、いまだに東北でありますからね。だから、飛び技にこだわらないようにすると言うか。

ブツ はい、はい。

サスケ もっと突き詰めていくと、お客さんのニーズに応えたいってことですよ。とりあえずいまは、飛べばウケるんで、サービス精神で飛んでるだけでね。だから今後、ボクの予想では……、たぶん、20年、30年経ったら、もう飛び技がウケなくなると思うんですよ。そん時がボクらの転換期ですよ。

内野 20年、30年ってずいぶん長いですねぇ（笑）。

サスケ ガハハハハ、20年後じゃ飛びたくても、もう飛べませんよね（笑）。でもねぇ、実際メキシコのルチャリブレがそうなんですよ。あそこは60年以上歴史があるんだけど、飛んでも、もう全然ウケませんよ。

ブツ じゃあ完全に頭止まり……。

サスケ 頭打ち！ 頭止まりって何ですか（笑）。

ブツ じゃあ、いまのメキシコをサスケさんが変えるっていう意気込みみたいなものはあるんですか？

サスケ うん、変えてみたいですね。だから最後はメキシコに乗り込みたいですね。

ブツ え、最終的な目標はWWFって、どこかに書いてあったけど……。

サスケ ガハハハハ。

内野 サスケ社長、カタブツ君にツッコまれてますよ。

サスケ いや〜、まいった（笑）。ドリームボムを喰らったような心境ですよ（笑）。でも最後はメキシコに風穴空けてみたいんですよ。ボク個人のメキシコに対する恩返しって言うかね。いまでもメキシコでの修行時代のことを思い出しますから。

ブツ どんなこと思い出すんですか？

紙のプロレスRADICAL
特別講座
The Great SASUKE & カタブツくん

メキシコ時代の思い出 それは、ファンの姉ちゃんとヤッたこと!?


こんな企画にまで喜んで参加してくれるのは、サスケ社長くらいなもの。カタブツよ、サスケ社長のこのご厚意を無意味なものにするんじゃないぞ！ と言ってるそばから、ちょっと居眠り……。

サスケ そうですねぇ、ファンのお姉ちゃんとヤッちゃったとか。ガハハハハ、それはまぁ、冗談としてね（笑）。

ブツ ええ〜っ⁉ 冗談だったんですかぁ（※カタブツ君は下ネタが異常に好きである）。

サスケ 冗談ですよぉ（笑）。思い出、思い出、えーっと何だろう……。

内野 それしかないじゃないですか。

サスケ ガハハハ。えーっと、えーっと、……何だろう（笑）。

内野 やっぱ、それだけじゃないですか（笑）。

ブツ あの〜、世界戦略の話なんですけど……。

サスケ まだその話するんですか？（笑）ま、世界戦略もいいんですが、それ以降の目標もあるんですよ。

ブツ なんですか？

サスケ あのね、地球脱出。

ブツ あ、はい。

内野 なんで納得するんだよ！

ブツ あの、地球脱出ですか……、月には引力がありますもんね。

外野 何言ってんだよ！

ブツ いや、あの、その……（固まる）。困ったなぁ。もう、聞くことない……。

サスケ もう終わりですか？


内野 さっきから技出すだけ出してる

だけだよ。ライガー戦の茂木と同じ。

全員　ガハハハハハ。　何でだよ！

ブツ　ウヒャヒャヒャ（うれしそう）。

クラスだ。サスケさんは、TAKAさ



だけだよ。ライガー戦の茂木と同じ。これから潰されるよ。

ブツ あの、ザンビアなんですが、ちょっと心配なのはエイズで死んでるじゃないですか。エイズは全然心配じゃないんですか？

サスケ 全身コンドームを付けようと思ってるんで（笑）。

全員 ガハハハハハ。

ブツ ……（無言）。

外野 盛り上がってるのに、なんで黙る！ 話を続ける！

サスケ （食事しながら）カタブツさんはコンドーム付けるんですか？（もぐもぐ）

ブツ ボクは付けてます。え～っと、サスケさんは……、付けませんよね？

サスケ うん、付けない（もぐもぐ）。

外野 ガハハハハハ。

サスケ でもね、ボクは、エイズにはならない体質です。自信あるんですよ。

ブツ はぁ～、それは……。

外野 何でそこで感心しちゃうの！ もっとツッコんで！

ブツ なぜですか？

外野 「なぜですか？」なんてツッコミあるかよ！

ブツ いや、あの、え～っと、メキシコからの経験から？

サスケ どういう経験ですかぁ？（笑）

ブツ いや、生でやってたとか～？（下ネタ好きぶり発揮）

サスケ いや、いや、いや、いや、そんなことはないけど、ボクはならないと思いますよ。ボクは選民思想ってのがあるんですよ。選ばれた民。だから、ボクは死なないですよ（もぐもぐ）。

全員 ガハハハハハ。何でだよ！

サスケ ガハハハハ。まぁまぁ、カタブツさんもどうぞ食べてください（と言って食事をすすめる）。

ブツ あ、いただきます。あっ。

内野 もう、こぼさない！

ブツ はい、すいません。もぐもぐ、ほう、ひふひひんはふぁいふぉ？

外野 口にモノを入れてしゃべらない！

ブツ ふいまへん、ゴックン。えーっと、まぁ、死ぬ自信はない？ あれ、死ぬ自信じゃなくて、何だっけ……。

外野 何なんだよ！

ブツ ですから、サスケさんのその自信ってのは、すばらしいと思うんですけど、要するに他の人が付いて行くか来ないかの問題じゃないですか。

サスケ うん、ウチの人間はみんな行きますよ、うん。

ブツ はー。

サスケ あの、何か別の話題にしましょうか？（笑）

ブツ はい。じゃあ秋の東京ドーム大会について。

サスケ はい。

ブツ で？

内野 「で？」じゃわかんないでしょ！

サスケ ガハハハハ。東京ドームね、よく「ホントにやるんですか？」って聞かれるんですけどね、ホントにやりますよ。もう会場も押さえましたし。ただ、お客さんには、来ないで欲しいんですよね。

紙のプロレスRADICAL 特別講座
The Great SASUKE & カタブツくん

ブツ ウヒャヒャヒャ（うれしそう）。

外野 喜んでないで、ちゃんとツッコむ！

サスケ うふふふ、来ないで欲しいんですよ。チケットも売りませんから。

外野 ガハハハハハ。何のためにやるんだよ！

サスケ ウフフフ。ま、これ以上は言えませんが、ドームに来る暇があったら、すぐ後の10月の両国に来いと。まぁ、この話題はこのへんにしときましょうか（笑）。

内野 この話題も、あんまり良くなかったですね（笑）。

ブツ じゃあ10月の両国の話にしましょう。えっと、今回の目玉は？

サスケ いや～、まだ何も決まってないですねぇ。

外野 何でいま、10月のこと聞かなきゃいけないんだよ！

サスケ 早すぎましたね（笑）。

ブツ うっ、あーっ、もうどうしよう……。えっと、じゃあサスケさんの話題はこのへんにして……。

サスケ あ、終わっちゃうんですか？

ブツ や、あ、あの、とりあえず、TAKAみちのく選手が、今度バトラーツに参戦しますよね？

サスケ バトラーツには、いつも出てますよ。

ブツ あ、バトラーツじゃない、パンクラスだ。サスケさんは、TAKAさんがパンクラスに出場することは、どう思ってるんですか？

サスケ そうですね、まぁ、いまは敵同士ですからね。だから、あんまりどうこう言いたくもないですね。

ブツ あの、向こうのバトラーツ……。

サスケ パンクラス！

ブツ パンクラスのぉ、え～っと、対戦するのは誰だっけ、忘れちゃったなぁ（ブツブツ言いながら一心不乱に資料を探す）。え～、山宮恵一郎さん。それは（TAKA選手が）かなりナメられてるような感じがするんですけど……。

サスケ そうですか？ そんなこともないでしょう。勝負はわかんないですからね。失敗してもいいんですよ。失敗してもいいし、カッコ悪いことやってもいいし、またはリングの上で歌っちゃってもいいんですよ。

外野 ガハハハハ。それはサスケ社長でしょうが！

サスケ ヌハハハハ。ここは、カタブツさんがツッコまないとね（笑）。まぁそれがね、みちプロの強みですから。若い選手ばっかりだから、何やってもやり直せると。

ブツ ボクもやり直せますか？ でもボク、もう若くないし……（ブツブツ）。

サスケ ガハハハハ。ちゃんと家に帰ってくださいよ、カタブツさん。奥さん寂しがってますよ（笑）。

ブツ 寂しがってるかな、正美……。あ、あの、そうじゃなくてですね……。

サスケ （全然聞いてない）あ、そうだ！ こないだねぇ、3、4日前に、



ボクはダメ男が、なぜか好きなんですよね。ガハハハハハ

今年入ったばかりの新人が夜逃げしたんですよ。そいつがねぇ、おかまだったんですよ（笑）。

外野　ガハハハハ。何でその話をいま、思い出すんだよ！（笑）

ブツ　………（沈黙）。

サスケ　飲み会やってガンガン酒飲ませたら、いつのまにか言葉が「何すんの、やめてよ」とか、おかま言葉になってるんですよ（笑）。みちプロ初ですよ、おかまがバレていなくなった練習生。いろいろいますよ。

内野　ガハハハハハハハ。いいぞ、みちのく！

ブツ　はぁ………（また、硬直）。

外野　そこで黙るな！　誰かヤられなかったんですか？　とか、返すことあるでしょーに。

ブツ　誰かヤられなかったんですか？

サスケ　そのままじゃないですか！（笑）ま、オレがヤる方だから（笑）。あのね、ウチの新人が必ず通る道があって、ボクのSMプレイを受けることが新人の登竜門なんですよ。

ブツ　ウヒャヒャヒャ（うれしそう）。そこでデビューできるかどうか決まると？（笑）

サスケ　そう、そこで耐えた者がデビューできると（笑）。

ブツ　茂木さんも、もちろんそれを受けたと？

サスケ　受けない、受けない（笑）。だって他の団体じゃないですか！

内野　みちプロ、やけに逃げ出す新人多いと思ったら、そういうからくりがあったんですか。

サスケ　いやいやいや、そんなことないですけどね（笑）。でも、オレは冗談でやってるんですよ。

内野　本気でやってたら問題ですよ。

サスケ　そうですよね（笑）。その冗談がわかるか、わからないでセンスが決まるんですよ。

ブツ　はぁ………（また、硬直）。

外野　他に何か聞きたいことないの！

ブツ　あ、じゃあ、ユニバーサルの頃の話を。

サスケ　はいはい。

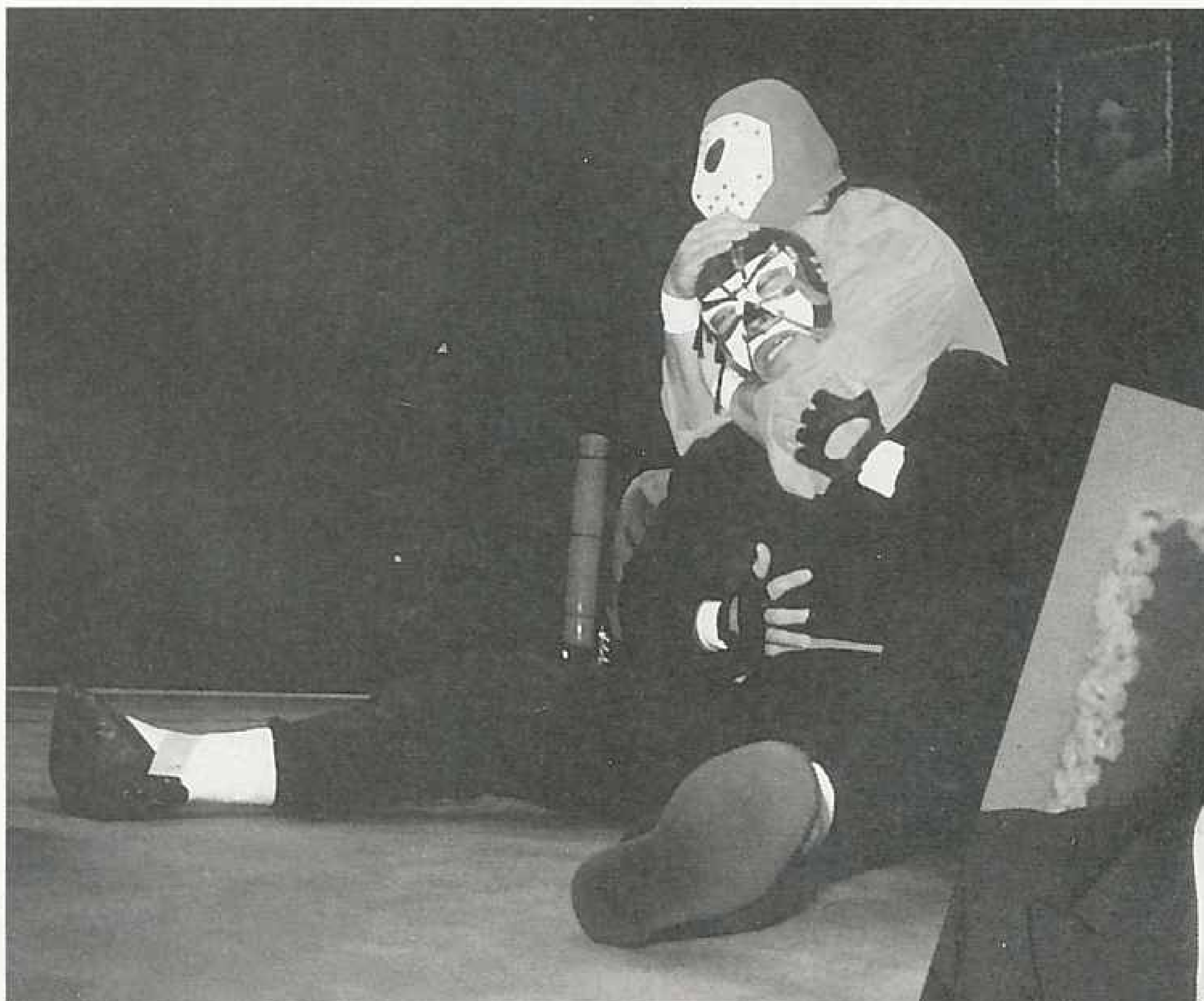
ブツ　サスケさんはユニバーサルの頃、あの、TAKA………じゃない、みちのく……、あの、あれっ………？

サスケ　TAKAァ？

ブツ　じゃなくて、あれっ、ド忘れしちゃったなぁ。何だったっけかな……。

サスケ　MASA。

ブツ　あ、そうだ、す、すいません。



昨年末に行われた『第1回ターザン山本追悼興行』では、バトラーツの石川雄規と社長タッグを結成。TAKAみちのく、小野武志などは大不満だったらしいが、社長の2人はひどくご満悦だったらしい……。団体の長あるべき人間はこうでなくてはならない。



「もう写真撮らないですか？」と確認し、食事をするため、おもむろにマスクを半分ズリ上げるサスケ社長。さすが、東北のカリスマ、半分だけでも素顔を守るこの姿勢。カタブツも、ファンを裏切らないサスケ社長の姿勢を見習うんだぞ！

その、MASAみちのく時代に、いろいろ悩んでたみたいで……。

サスケ　や、悩んでないですよ。楽しくやってました。

ブツ　でも1回、辞表出してますよね？

サスケ　ああ、あの話。あれはね、新間（寿恒）社長を試したかったんですよ。いつも二言目には「オマエなんか首だ！」って言われてましたからね。辞表出して何かリアクションがあればね、やっぱりオレはユニバーサルの一員なんだって思えるじゃないですか。

ブツ　ボクの中では、サスケさんの新間さんが、本誌編集長の山口なんですよ。事あるごとに「ミジンコ以下だ！」「このボケ老人め！」と言われ続けてるわけですが。それで、ボクも試してみたくて、1回「辞めます」と言ったことがあるんですよね。そしたら、まぁ、引き留めてくれたわけで………。

外野　ええっ⁉　引き留めてないぞ！

内野　自分の都合のいいように受け止めない！

サスケ　どっちがホントなの？（笑）

ブツ　ボクの中では引き留めてくれたんですよ（笑）。ま、それはいいとして、世界戦略なんですが……。

サスケ　また世界戦略？　その話、何回してんですか！（笑）

ブツ　ま、最初のうちは、東北にみち

紙のプロレスRADICAL

特別講座

The Great SASUKE & カタブツくん

のくプロレスを根付かせるために頑張っていたわけじゃないですか。それが5年経って世界戦略と、規模が大きくなって行ったわけですが、いつ頃から世界戦略を狙い始めたんですか?

サスケ　いや、でもすべては東北のためですよ、世界でやるというのもね。東北には異常にこだわりありますからね。ただ、いつまでも東北でやってると、東北のお客さんが飽きちゃうし、刺激が無くなるんですよ。だから刺激を与えるために、世界行ったり、全国出たりしているわけですね。

ブツ　ロス支局の話は進んでるんですか?

サスケ　ええ、進んでますよ。何か話がすごいマジメになっちゃったなぁ。でもいま、ロス支局の話を持っていかなければ、うまくまとめられたのにね。

内野　あ～あ。

ブツ　あ、はい（顔色が曇る）。

サスケ　「これからも東北で頑張って下さい」とかって、シメられたのにね。

ブツ　ああ……（自殺しそう）。

サスケ　まとまりがないよね（笑）。結論をあらかじめ用意しないと、インタビューは。

ブツ　あ、はい。ボクの中の結論は……。あ、わ、わかりましたぁ!

サスケ　エヘヘヘヘヘヘヘ、何、何?

ブツ　あの、サスケさんは東北の中の猪木だと!

サスケ　何で!

ブツ　猪木さんも世界戦略を考えていたわけじゃないですか。で、サスケさんも、世界の寒い国を回って、東北と同じ気持ちで……。

サスケ　う～ん、何も寒い国ばっか回んなくても。ちょっと違うなぁ（笑）。プロレスを通じての世界平和ですよ。ECW行った時がそうだったんですが、人種が違ういろんな人たちが、ボクらの試合を一体になって見てるわけですよ。これこそ世界平和ですよ。だからボクはいますぐにでもペルーの日本大使館に行ってプロレスを見せてあげたいんです（笑）。

ブツ　いいですねぇ。

サスケ　うん、うん（笑）。みちプロ見たら、人質なんてすぐ解放してくれますよ（笑）。

ブツ　わかりました。じゃあ、ぜひ人質解放してください。

サスケ　ガハハハハハ。なんかイヤなまとめだなぁ。

ブツ　す、すいません。

サスケ　ま、もっと大きなことを言うとね、中東戦争から広がってね、この先、第三次世界大戦が実際起きると思うんですよ。だけどね、その前にボクが食い止めますよ。いざとなったらイスラエル飛びますから（笑）。

ブツ　国境を越えてケブラーダですね。

サスケ　あ、うまい!!　いいまとめだぁ（笑）。これでいきましょう!

ブツ　ありがとうございます（安堵の表情）。いまのは何点ですか?

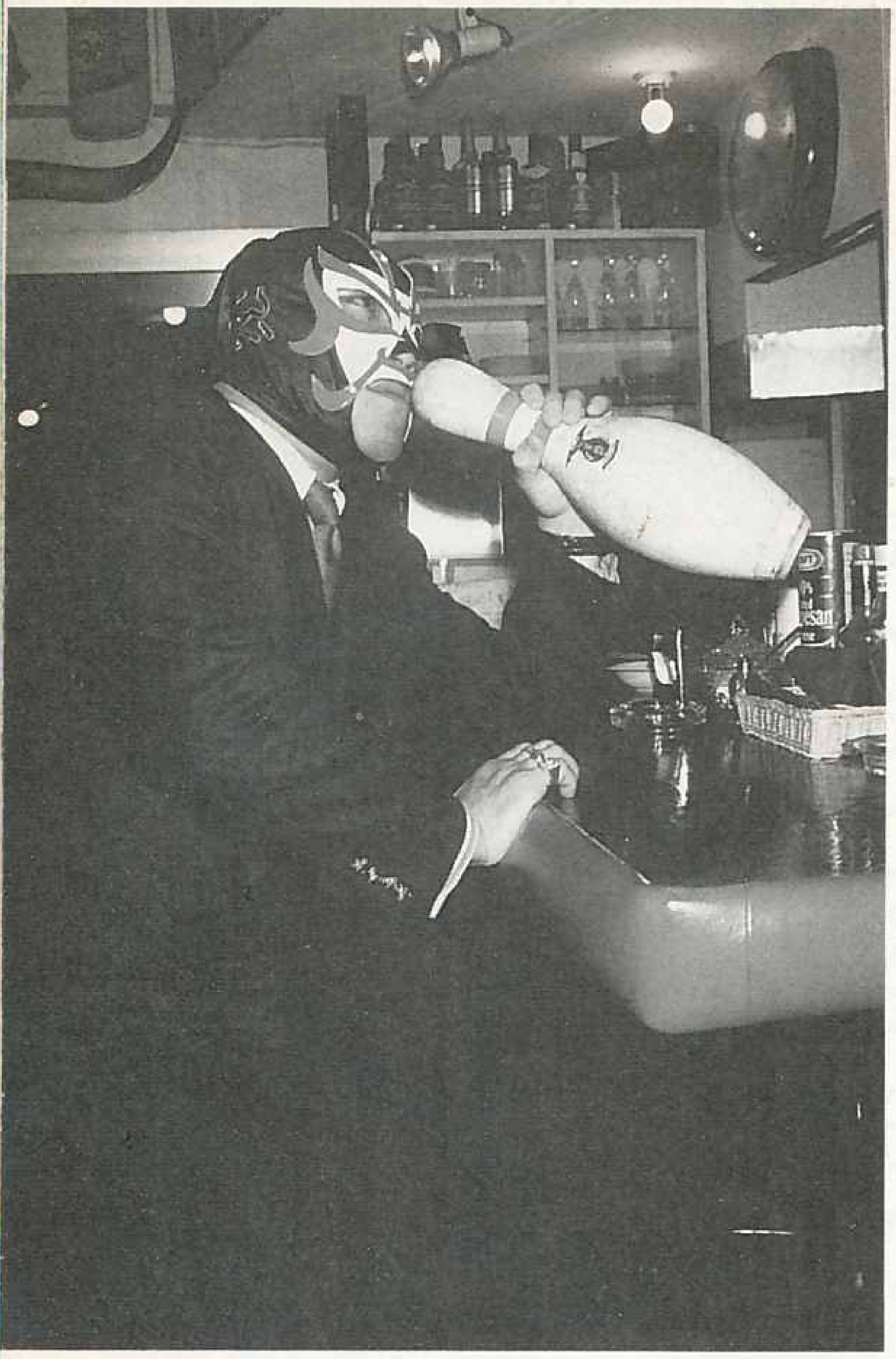
サスケ　いまのは100点!　他は30点くらいだけど（笑）。

ブツ　厳しいなぁ。

内野　でも、サスケ社長ってカタブツ君のこと好きですよね?　茂木もそうだし、ようはダメ男が好きってことですか?（笑）

サスケ　うん、うん（笑）。みんな新弟子以下!　ガハハハハハハハ。

【97年4月8日・バカ軍団会社にて収録】



インタビューのお迎えに上がり、到着したことを知らせないうちにホテルから出てきたサスケ社長。「何で着いたことわかったんですか？」と問うと「それくらいわかりますよ、テレパシーですよ、テレパシー。ガハハハハハ」と。団体の長あるべき人間、テレパシーをも使いこなさなくてはいけない。



ファンのために、身体がボロボロになっても連日連夜、人間技とは思えない飛び技を見せるサスケ社長。アナタがいる限り、みちのくプロレスは永遠に不滅だ……。「でも、サスケスペシャル、やり方忘れちゃったんですよね、ガハハハハ」……ああ、サスケ社長、やはりアナタは、東北の愛すべきバカ社長……。

黙って読め！紙のプロレスRADICALバックナンバー告知だ！

●プロレスの『プライド』とは何だ!!



平和になったプロレス界の
根底を揺るがすNo.1

○前田日明インタビュー
「プロレス界がプライドを持つ方法？　1回潰す」

○高田延彦インタビュー
「プロレスにプライドを持つことを捨て、自分にプライドを持つ」

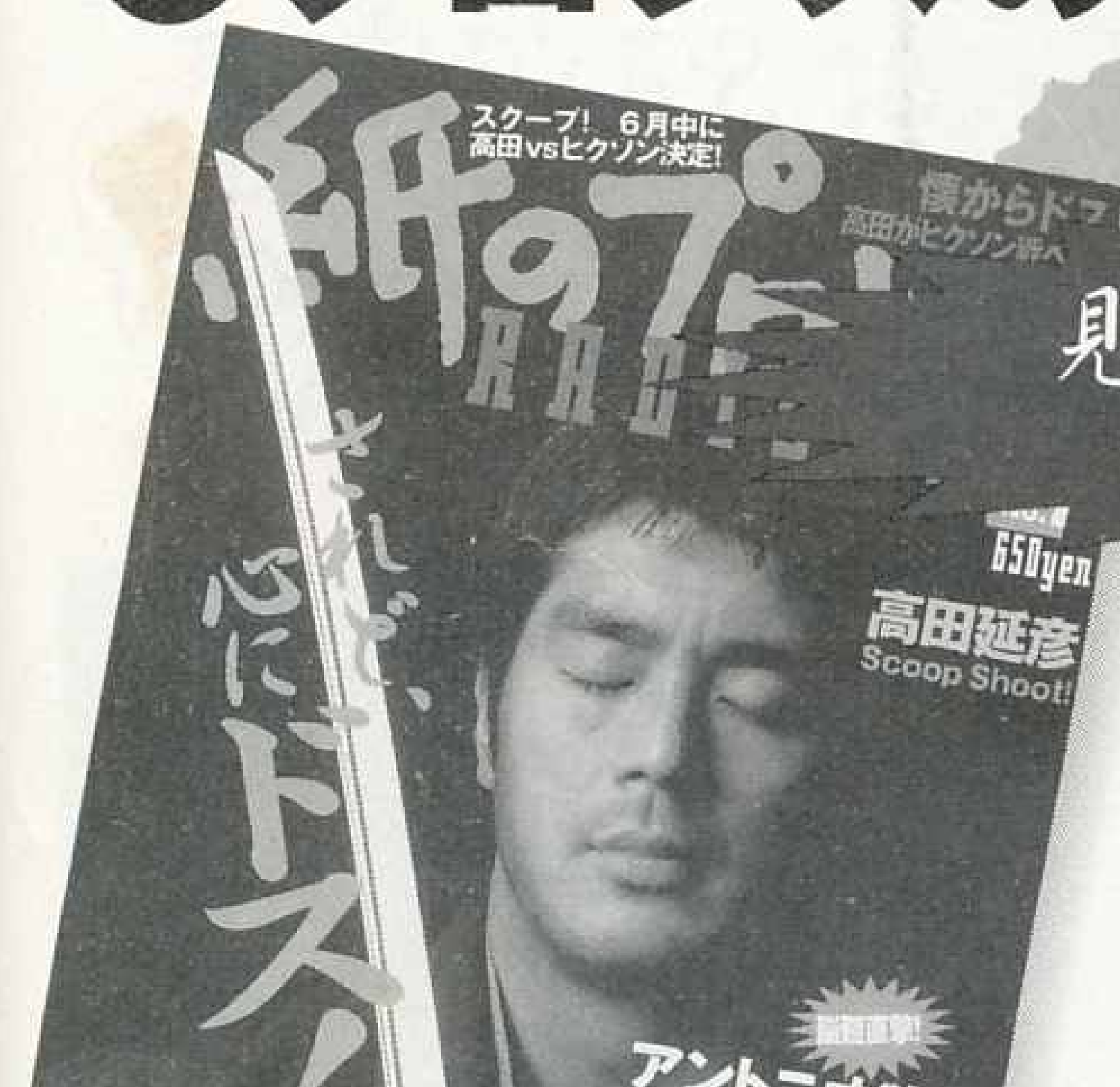
○橋本真也インタビュー
「俺たちはどんなことをやっても美しい!!」

○初代タイガーマスクインタビュー
「芯にはガチンコがある。これからはそんなプロレスを見せてあげたいなぁ」

○船木誠勝インタビュー
「プロレスは人生を表現するデカイ場所」

○タイガー・J・シンインタビュー
「プロレスラーに必要なのは、いつも心に『ダイ・ウイズ・ガッツ』だ」

●プロレスの『プライド』とはこれだ!!



見たいのはレスラーの
気骨だ！なNo.2

○アントニオ猪木VS初代タイガーマスク　パート1
世界格闘技連盟とは何か？
「今、プロレスの練習法一つとっても『面白えことやってるな』っていう興味を湧かせてくれるものがなにもない」（アントニオ猪木）
「棒の運動はね、ホントにいいよ。バカみたいに見えるかもしれないけど（笑）」（初代タイガーマスク）

○田村潔司インタビュー
「山本戦は技術がなくてもできる試合なんです」

○佐山聡爆弾発言！
「はぁい、やっちゃいました、果たし合い！　道場の中でね」

—RADICAL No.1・No.2は通販のみだ!!　申し込み方法は下だ!!—

●申し込み方法
希望号数を必ず明記し、現金書留で
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3—11—3—702　ダブルクロス『RADICAL通販』係まで
郵便振替は00130—3—769154　（株）ダブルクロスまで
定価　1号＝610円　2号＝660円　送料1冊＝310円　2冊＝340円

山に篭って1年半!?　押して忍んだ本誌の思いが一気に暴発!?

紙プロ
ついに下山

紙のプロレス 第23号

ウルトラ企画の数々に、豪華執筆陣！
スケールアップした特集記事！
ゲスト陣は各界で活躍する一流中の一流ばかり？

世の中に暴風雨を巻き起こせ！　台風シーズンに発売予定？

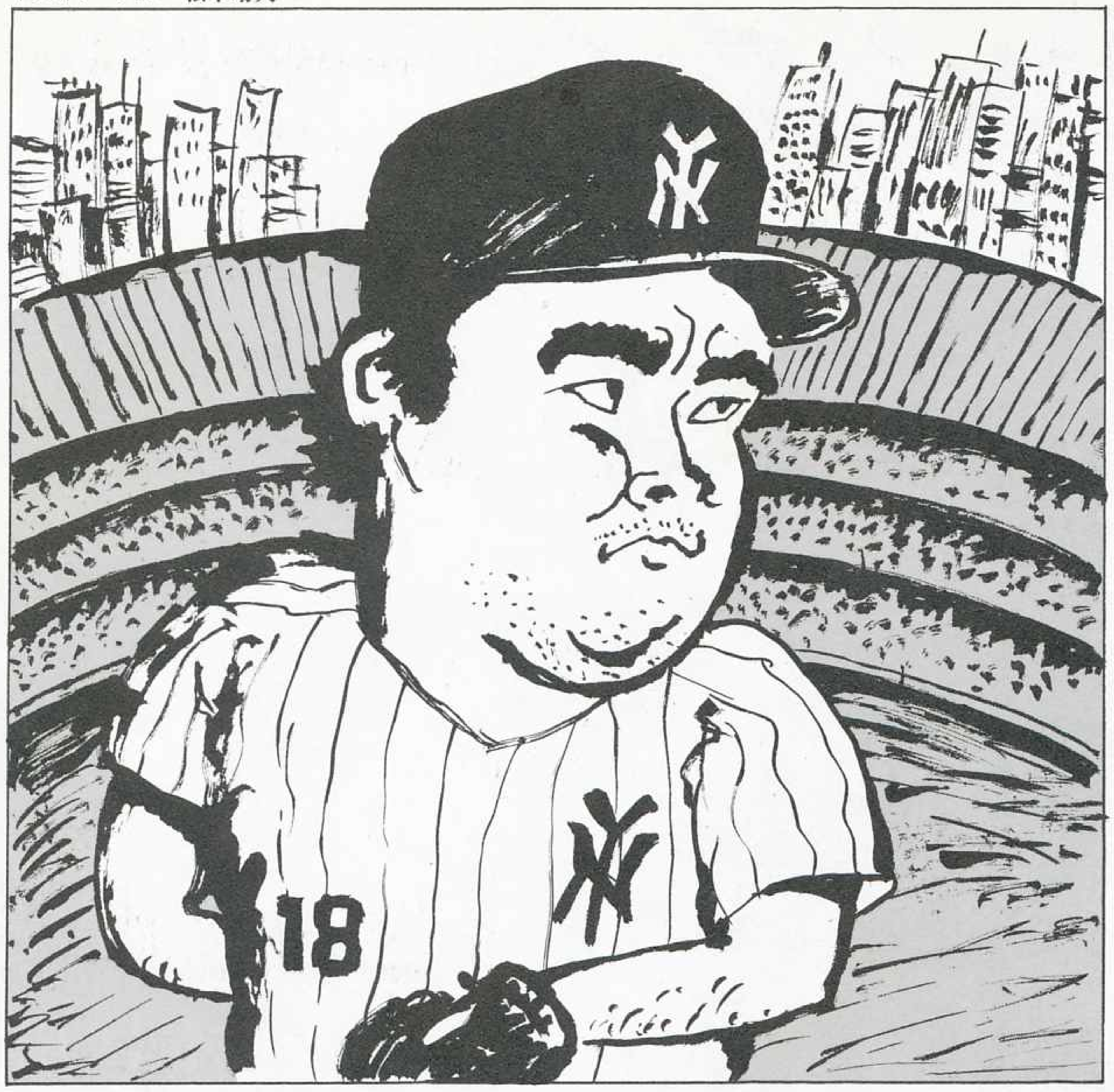
新

ザッツ・レスラー ③

山本隆司

悪への憧れと反発！大衆は決して善人ではない。

イラストレーション＝松本晴夫



プロ野球の世界って、まったくチンケだよなあ。なぜ、伊良部の好きなようにさせないんだ。伊良部が行こうとしているのはニューヨーク・ヤンキースだぜ！

あの天下のヤンキースだよ！
ベーブ・ルースに
ルー・ゲーリックが輝いた
あのヤンキースタジアム！
行かしてやれよな。上には上がある世界！

そのマウンドに立つ伊良部の勇姿、俺ははっきりいって見たいよ。

それでベースボール（野球）に興味を持つ人間が増えて、ジャンルが広がっていけば、それでいいじゃないか？

伊良部がわがままだって？
球団の言いぶんが正しいだって？

それをいうならファンや観客の「伊良部のプレーが見たい！」というわがままをこそ優先させろ！

俺、最近、ロッテのガムを買うのがイヤになったよ。ちょうど消費税も値上がりで100円のガムが、105円になったしな。中途半端だよな、105円って。

めんどくさいしな！

プロ野球って、ある部分じゃ、ゴネてわがままな連中が話題を作ってきたんだよ。

江川に
桑田がそうだろ？
清原もはいるよな。

これがみんな巨人がらみというのが、また、いいんだ。選手がワルでダーティーで身勝手な人種なら、巨人という球団だってそれに優るとも劣らない相当なエゴイズムといえるよな。

つまり、ワルたちの原理は力でまわりをねじ伏せようという魂胆だ。巨人というチームがなぜ人気があるのか？

その理由は簡単なんだよ。

12球団の中で一番、恥も外聞もなくダーティーなことを平気でやってきたからだ。

それもすべて勝つためだよ！

大事なことは、大衆はそのダーティーだが力のあるものに対して、鋭く反応するっていうことだよ。

悪へのあこがれと
悪への反発！

大衆も結局、正直なんだよな。決して善人じゃないってことだ。

だいたいスポーツをスポーツマンシップとか、フェアプレーといっているのは、あれは真っ赤な大嘘なんだよ。

善人が勝負に勝てると思う？

スポーツって勝利者は一人で、あとは限りなく敗者を山のように量産していくんだよ。エゴイストでナルシストでなかったらトップになれるわけがないんだ。

江川はよかったよな！
現役時代、絶対に笑わなかった。
それが今やひょうきんものだもんな。
野茂も決して笑顔をみせようとしない。
昔は桑田もそうだった。

でも、ついこの間、PL時代の同僚、清原とくさい友情物語をみせたもんね。あれはあれで、大衆の好みなんだよな。

だが、友情は1回で終わる。何回もみたくない。それに対して悪は何回も通用する。力がある限り滅びることはないのだ。

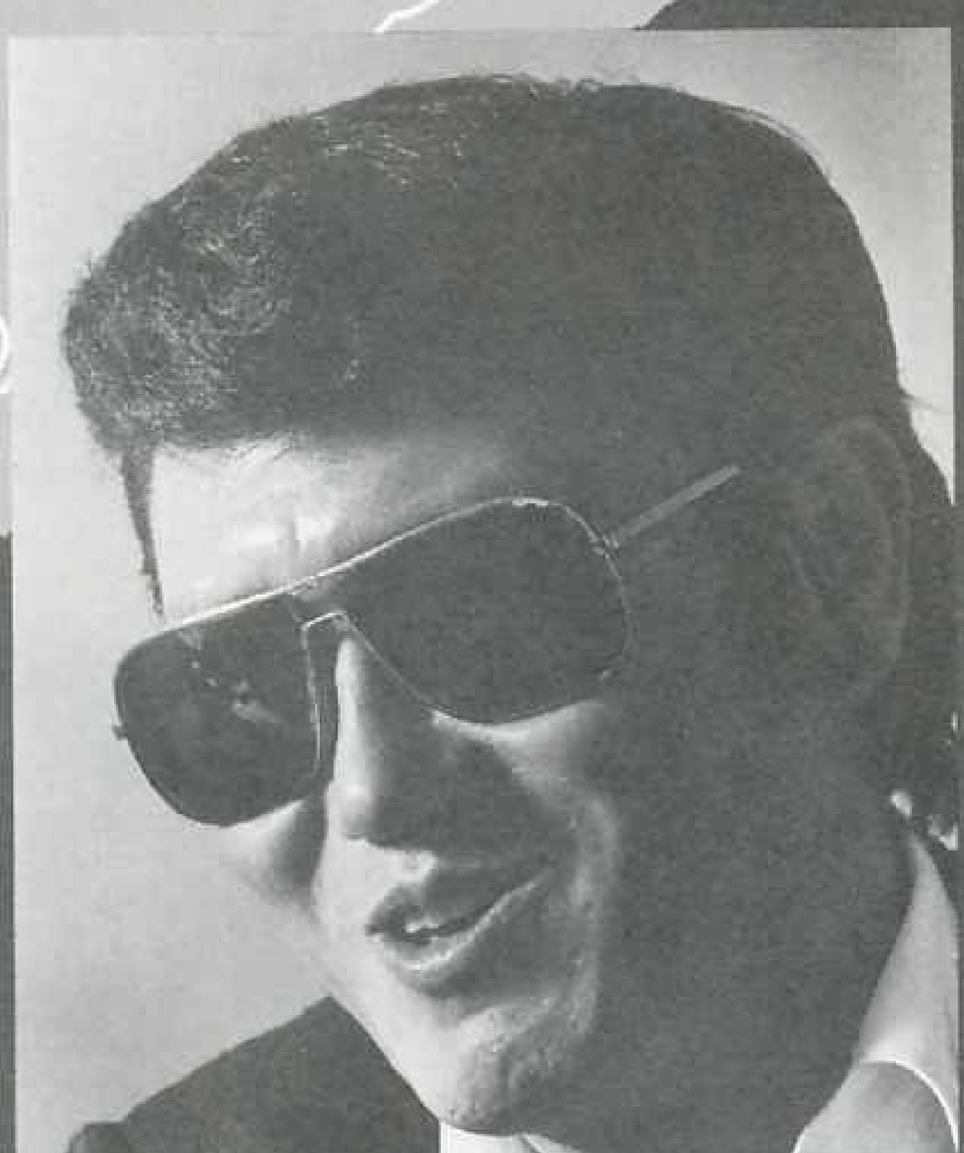
プロレス界には悪も、力もあるものも、両方ともいない。

これでは、ファンはいなくなる。一体、何があるというのだ！

無比人

Muhito

プロレスラー最強説が崩れ出し、
混迷をきわめるマット界——
用心棒あがりの若者・無比人(むひと)は、
はたして救世主となりえるのか!?
本格格闘プロレス小説第3幕!!



真樹日佐夫

コラージュ・
釜津田浩司

(7)

真紅に彩られた十字架に縛り付けられる人々

店内は思ったより、ずっと狭かった。天井も低く、その上内装が黒一色ときているから、さながら穴蔵の趣だ。やや矩形か、といったスペースにボックスが四つ五つ。

奥に申し訳程度にステージとおぼしいフロアは見られるが、段差があるわけでもなく、ただでさえ手狭な客席を圧迫している。そんな印象のなかで唯一、真紅に彩られた等身大の十字架が目を惹いた。それは、フロア中央に屹立し客席を睥睨していた。

「鳩が豆鉄砲、といった顔しているね、社長」

戸口際の席に並んで腰を下ろした無比人が、いたずらっぽい表情で千堂を見返って、

「もっと広いと思ったわけ?」

「だって、きみ、殿堂というからにはこんなに小じんまりしているとは、誰だって」

SMの殿堂ルージュ&ナイフ、と表のネオンにあった、あれは要するにジョークかと、苦笑いしながら千堂は応じた。

「殿堂っていえば、そりゃ普通は広々とした立派なところを思い浮かべるよね。でも、この場合はSMプレーにかけてはどこにも引けは取らない、うちが元祖だってプライド面をメッセージとして込めたく、それであえてSMの殿堂と――なんてえのは、これ、氷見子の受け売りだけどさ」

と言い継ぐ無比人の視線はステージのすぐ手前の席へ注がれているようで、千堂もそれを目で追った。

「氷見子? その女性がきみの後見人的立場にあり、この店に勤めているってわけだな」

その席にはボンデージ・ルックの断髪の女が複数の客といるものの、フロアを除いては照明は絞ってあり、横向きのために顔まではっきりしない。

ほかの席にも同じ衣裳の女が一人か二人就いていて、大した立て込みようなのだ。千堂たちがとっつきに坐ったのも、ほかに空きがなかったからである。

「北海氷見子、当店ナンバーワンの女王さまでね。電話でひと通りの話はしといたんで、おっつけこっちへ」

四人掛けながら、そこにだけ女は就いていなかった。

「SMの女王さまが後見人、ということは、ひょっとして万くん」

千堂の視線をかわすかのように、やおら無比人は客席へぐるり顎をしゃくって、

「満杯だってのに、ねえ、どの席も静かすぎると思わないかい」

【前号までのあらすじ】
プロレスラー植野に路上で暴行を受けながら、傷一つ負わなかった若者・無比人。獣のしなやかさと強さを彼に感じたプロレス雑誌社長・千堂は、無比人を植野と深夜の道場で対決させる。植野にマウントポジションを取られた無比人は、彼の後頭部に蹴りを炸裂させ、一瞬にして勝負を決した。多くのレスラーが苦しめられたマウントポジションをいとも簡単に破った無比人に、千堂はプロレス界の救世主の姿を見る。

「それは、だから」

なるほど、いずこも通夜の席にも似た打ち沈みようで笑声ひとつ聞こえてこない。

「間もなくショーというかプレーがはじまるんだろう。そいつを期待して、皆さん黙りがちに――」

「それもあるだろうけど」

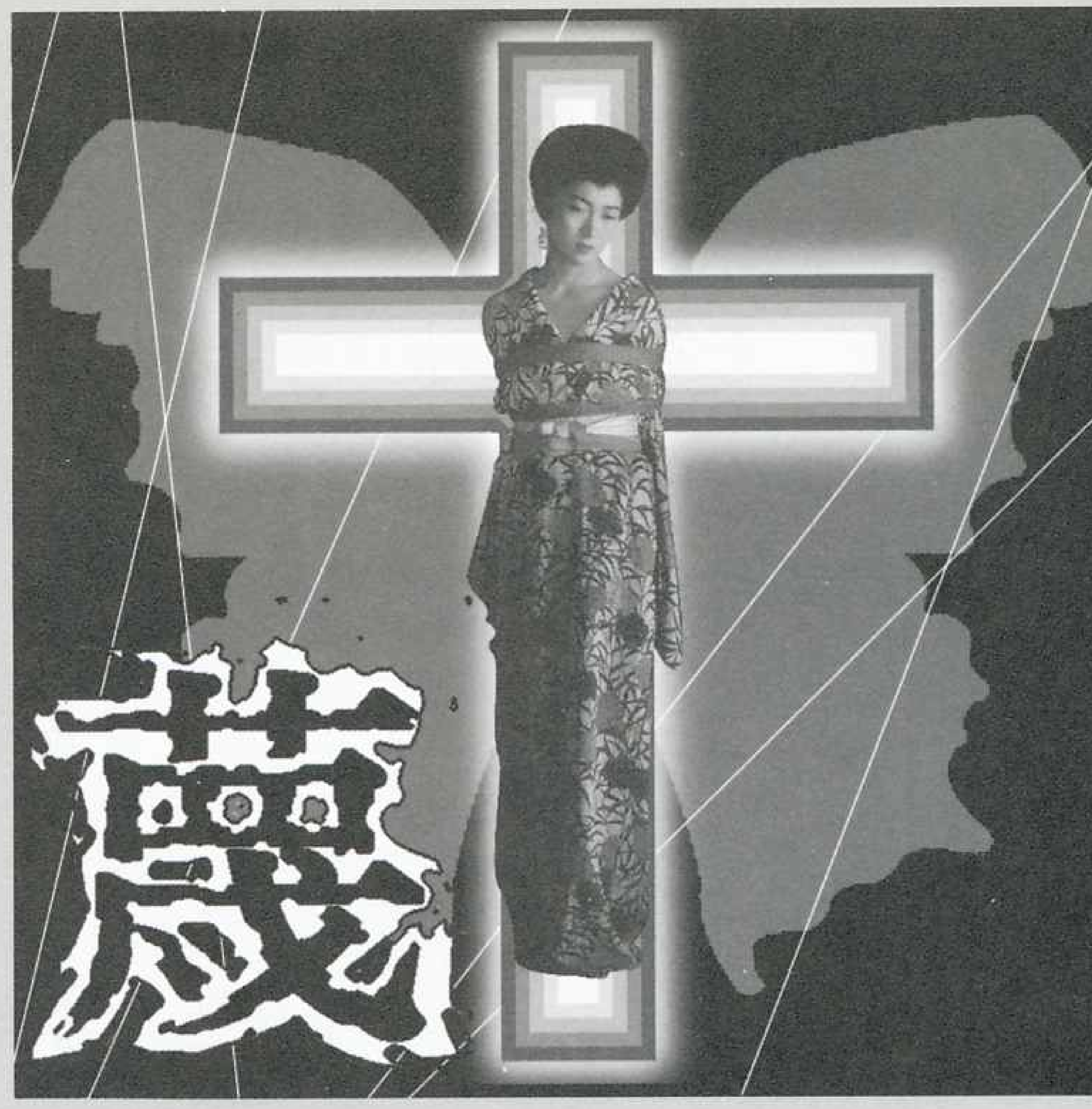
言いかぶせて、耳許へ顔を寄せてくると、

「こいつら全員、M男ちゃんでね。席に就いてるのがそれぞれの女王さまってわけで、客はその奴隷だもんで絶対服従の証しとしておとなしくしていやがるのさ」

「全員がねえ」

「だってS男ならば自分の彼女を苛めてりゃ欲求は充たされるだろうし、余程の物好きでもない限り、こういうところへは足は運ばな





い。そういうものらしいよ、社長」
なんだか真澄とのことを見透かされているような気もしてきて、千堂は落ち着かず、あえて突っ込むことにした。
「ということはつまり、きみも氷見子女王さまのマゾ奴隷だと、そのように理解していいわけだな」
無比人に倣って声の調子を落としていた。
「そういうこと」
と、いともあっさり頚を縦に振られ、千堂としても拍子抜けの思いを禁じ得なかった。

無比人に後見人ともいうべき人物がいて、それは女だと新橋の小料理で聞かされ、どこぞの酔狂な年増の資産家かなにかかと、己が場合に引きつけて千堂は思いを巡らした。勢みがついたせいもあり、
——いつ会える。
畳み込むと、
——いいよ、いつでも。
——いつでもというのは、今日、これからでも構わないってことか？
——まだ十二時前か。
無比人は腕時計を見たところで、
——六本木だから三十分はかからないな。いいよ、案内する。
——よし、善は急げだ。
——ちょっと待って。一発断りの電話を入れとくよ。年の割に結構気難しくて、苦労させられてるんだ。
言うと無比人は、携帯電話を出しながら起って行き、やがて二人してタクシーを駆ることとなったが、めざす相手がSMバーの女王さまで彼にも君臨していようとは、開いた口が塞がらぬというのが実のところであった。
ウィスキーの水割りの一杯目が空く頃、断髪の女が立ち上がった。痩せぎすで小柄ながら、尻が驚くほど高い位置にあった。まっすぐ千堂たちの席へ近づいてくると、向かいに腰を下ろした。
「こちらが無比人をプロレスラーにしたいって方？」
いきなり言われて千堂は面食らい、目を屡叩いた。
「千堂です」
名刺を出して渡した。
「北海氷見子さん」
と無比人が引き合わせた。
「なーに。いつも通りに言いなさいよ、ちゃんと女王さまって」
「あ、はい。氷見子女王さまです」
無比人は素直に言い直した。恥じらうふうもなく、実にあっけらかんとしていた。
「無比人がどう話したか知らないけど、この男の全人格はあたしが支配しているんだから。まずはそのことを、しっかりと頭に刻みつけて置いて欲しいの」
と千堂を上目ごしに見て氷見子。無比人と似た年格好で、顔の輪郭がはっきりしていて化粧も濃くなく、髪のせいもあってか一見男の子のような印象である。時折、八重歯が覗いた。
無比人の年を千堂は、自分より一回り下の

無比人の後見人と称する妖しげな女——

二十三と聞いている。
「後見人ってことだったから、まあ近いんじゃないかな」
「でもね、無比人の名誉のために言って置くと、真性のMではないわけ」
「真性でない、とすると——」
「MでもなければSでもない。つまりノーマル、というよりネイチャーね」
氷見子は、しかつめらしい表情を見せた。
（ネイチャー・ボーイ、自然児か……。そういえばそんなリング・ネームを持つレスラーが、かつてアメリカのマット界にいたが）
千堂は無比人を一瞥して、
「ネイチャーな彼が、なんだってまた」
「やさしさよ。無比人はあたしへのやさしさからM男に徹し、調子を合わせてくれてるの。実際は至極真正面（まとも）なこの無比人までも支配下に置いている、という意識が女王さまとしての自信につながり、厭なことも一杯あるけれどこうしてこの商売を続けていられるわけで、その意味からすると後見人とかかってことは別にしてあたしにも無比人が絶対必要なのよ」
氷見子は踊りの世界に憧れてニューヨークへ渡ったものの、志半ばにしてドロップアウトし、トップレス・バーでダンサーをしているときに店の用心棒であった無比人と知り合い、同棲するに至った。

ストリートファイターとして生きてきた意外な過去

無比人は用心棒稼業のかたわら、ストリート・ファイターとして賞金マッチを数多くこなしており、これまたモダンアートなる分野を究めんとして留学したが学資が続かずに落伍したくちで、そんなことから二人は互いの傷口を嘗め合うような暮らしを重ね、永住権が得られずに帰国を余儀なくされた、というのであった。
「無比人をレスラーにしたいと言われても、おいそれとは認めるわけにいかない理由がわかってもらえた？」
そこでショー・タイムとなり、氷見子は席を起って行った。
客である奴隷の一人をパンツ一枚にし、十字架に縛りつけての鞭苛めがはじまった。
奴隷の股間の膨らみを鞭の柄の部分でこねくる氷見子を眺めつつ、千堂は、
「彼女の言うやさしさ即ち愛だとして、その愛ゆえにきみもときにはああいうことを？」
と無比人に訊いてみた。ショーが終わったらまた説得を続けるつもりだった。
「客には絶対服従の用心棒についても同じことが言えるけれども、SMプレーのMの立場ってのはストリート・マッチで劣勢に——つまり一時的に押し込まれたような場合に、じっと耐える持久力というか糞度胸っていうか、そうした面を鍛える上で結構効果的なんだな、これが」
涼しい顔をして彼は妙な理屈を並べた。

(8)

五ヶ月が経った。
万無比人は東都プロレスに所属し、すでに二十戦以上を消化していた。
週に一試合のペースであり、そして無比人の出場する試合場には決まって北海氷見子の姿が見られた。というのも、千堂が最初に＜ルージュ&ナイフ＞を訪れた夜、ショーのあとに再び氷見子を席に呼んだところ、
——M男をね、パンツの下で情けなく射精させてやった途端に閃いたの。
冷酷無情の女王さまの余韻を窺わせる、きつめの表情のうちに彼女は言いだし、
——閃いた、というと？
——名案よ。
——だから、どんな。
——こうすれば、無比人のプロレス入りを許可してもいいかなって。
——どうすれば。
——あたしを専任のマネージャーとして雇うこと。どう？
——うーん。
——そうすりゃ一緒にいる時間もいまより増えるわけだし、奴隷のなかにはプロレスラーもいるってことで女王としてのステータス

も上がり、まあ文句はないか、と。ねえ、雇いなさいよ。

――よし、わかった。

余計なお荷物までしょい込むのは避けたかったが、背に腹は替えられずで、ここにレスラー無比人に加えて女マネージャーの誕生をみることとなった。

東都プロレスからデビューさせるについては、千堂は、まずは一年間どこかに預けて名前を売らせ、その後に独立させようとの心積もりをしており、さて、どの団体にしたものかと思いを巡らしたところで、植野との関わりに於て真っ先にそこが泛んだのだ。

植野次郎は東都プロレスの代表も兼ねていて、その彼が入門を承認したとなれば、それでもうなにも問題はなかった。氷見子に会った翌日、千堂は『四角いジャングル』社に植野を呼んで無比人の件を切り出したが、ここでもインスタント・カメラで撮った例の写真が物を言ったことは言うまでもない。

主としてロープワークなどの練習を一週間ほどこなしただけでデビュー戦に臨ませたが、その練習期間中、氷見子とともに付きっ切りで無比人の動きを見ていて千堂が痛感したのは、天性の格闘家だという紛うかたなきその事実。

脳天への蹴り一閃！ その一撃で崩れる対戦相手

この世界に限らず、天賦の素質とか天分といったことが言われるが、第一印象の通り四つ肢歩行の獣を思わすしなやかな躰、無駄というものがまったく見出せない身ごなしが感じさせる類いまれなセンスのよさは、まさしく天が与えたものであった。

アメリカへ渡る前には無比人は、小、中、高校と一貫してサッカーをやり、そして彼の地ではグレコローマンのレスリングとボクシングに取り組んだそうで、それらの利点がプラスされ相乗効果を生んだ上に、ストリート・ファイトによって実戦面での勘が培われ総合格闘技として集大成された、と視ていいのではないか。

デビュー戦ではプロレスラーとしての適性を見極めたいのと、今後を占う意味もあって千堂から植野に言い、あえてシナリオなしのセメントでいかせることにした。ところが無比人は、そこで東都プロレスにあって実力的には三番手と目される中堅代表格の竜村勇を文字通り秒殺してのけ、適性を見るも今後を占うもなかった。



試合開始のゴングが鳴って、竜村がショルダー・タックルを噛ませるべく上体を低くしてコーナーを飛び出したところ、その前で無比人はいきなり前方宙返りし、ぴたり揃えた跣の踵で脳天を一撃。それで極まりだった。

千堂が無比人の蹴り技を見るのは、道場で植野をマットに沈めたのに続いて二度目だが、そうか、サッカーのキッキングで磨いたものか、と初めて納得がいった。空手やキックボクシング仕込みの蹴りに較べて、華があるというか、ずっと伸びやかでまたダイナミックでもあった。

植野に次いでナンバーツウの実力者であるグレート嵐とは八戦目でシングルのカードを組ませ、ここでは植野の要望もあって千堂としては、まずは嵐に花を持たせ再戦へ持って行って無比人が勝ち、そして一勝一敗としたところでセメントで決着をつけさせるか、と考えていた。

　試合の前日、道場へ顔を出すと植野が待っていた様子で身を寄せてき、

——撤回することにしたよ。

——撤回って、明日は嵐を勝たせるという話をかね。

——ああ。親の心子知らずで、グレートの奴、自分が万にストップをかけるのは客観的に視てもリアリティーに欠けよう、などと情けないことを吐かしてよ。デビュー以来土つかずできている実績に、というより、ここで連日万の奴の練習中の動きを見せつけられて、すっかりびびっちまっていやがるのさ。

——ではどうする。またいきなりセメントで鳧をつけてしまう、その線でいくか。

——いや、それではグレートが益々びびるばかりだ。明日は時間切れドローにして、もう一試合、万が勝利して決着。ナンバーツウの体面を多少なりとも考えてやるとすりゃ、この線をきっちり守らせるしかないのでは。残念ながら、三連戦はとっても無理だ。

——セメントは抜き、そういうことだな。

まさに天賦の才か！デビュー以来破竹の10連勝

ま、それが無難かも。

　以上の修正案に則って無比人は八、九戦目をクリア。負け知らずのまま十戦目からは若手を結集して反・植野軍を組織し、そのリーダーとして植野以下中堅までの正規軍との全面抗争という新たなパターンが打ち出された。タッグマッチ、三人タッグといったケースが多くなった。

　千堂の意向に沿ってのことにほかならず、あと無比人の相手として対決ムードを盛り上げるとすれば植野だけで、そこへいくにはまだ時期尚早と思われた。このカードを消化してしまえば、もはや後はない。姑息な手段ででもつなぐほかはなかった。

　一方、氷見子だが自ら志願しただけに、彼女のマネージャーとしての手腕は主に金銭面、即ちプロレスラー無比人をいかに高く売るかにかけて如何なく発揮された。

　最初、千堂はプロレス入りさせるに当たっての仕度金として五百万を氷見子に渡し、さらに同額を協力費の名目で植野に支払った。

　都合一千万、『四角いジャングル』社の利益及び来期の税金納付準備金などとして銀行にプールしてあるうちの一部を流用したのだが、一ヶ月と経たぬうちに氷見子から三百万円を追加要求された。

　住環境が悪いので引っ越させたいとのことで、先に渡した五百万がそうした掛かりも含んでいるとして一応千堂は突っぱねたものの、あれは当座の生活費のつもりで借金の返済などもして費えたと譲らず、折れて用立ててやった。氷見子はマネージャーとSMの仕事を掛け持ちしているようだったが、無比人の方はディスコを辞め、彼女と一緒に住む四谷のアパートから蒲田へ通っていた。

　二人の住まいは大森の新築とおぼしいマンションに変わった。

　ほっとしていると氷見子は、今度はファイトマネーのアップを求めてきた。デビューしてまだ五戦しかしておらず、千堂の口添えもあって新人としては破格の十五万円でスタートしたのを、次から三十万にして欲しいと言う。一挙に倍額とは法外も法外、東都プロレスでは看板の植野でさえ三十五万なのだ。千堂の方でも強硬に出て、二十万円で折り合いをつけた。

　それを境に人が変わったように氷見子は金のことを口にしなくなり、少しは反省したのかと安堵の胸を撫で下ろしたが、四月も半ばを過ぎたある午後、千堂が社にいると彼女が一人で訪ねてきた。

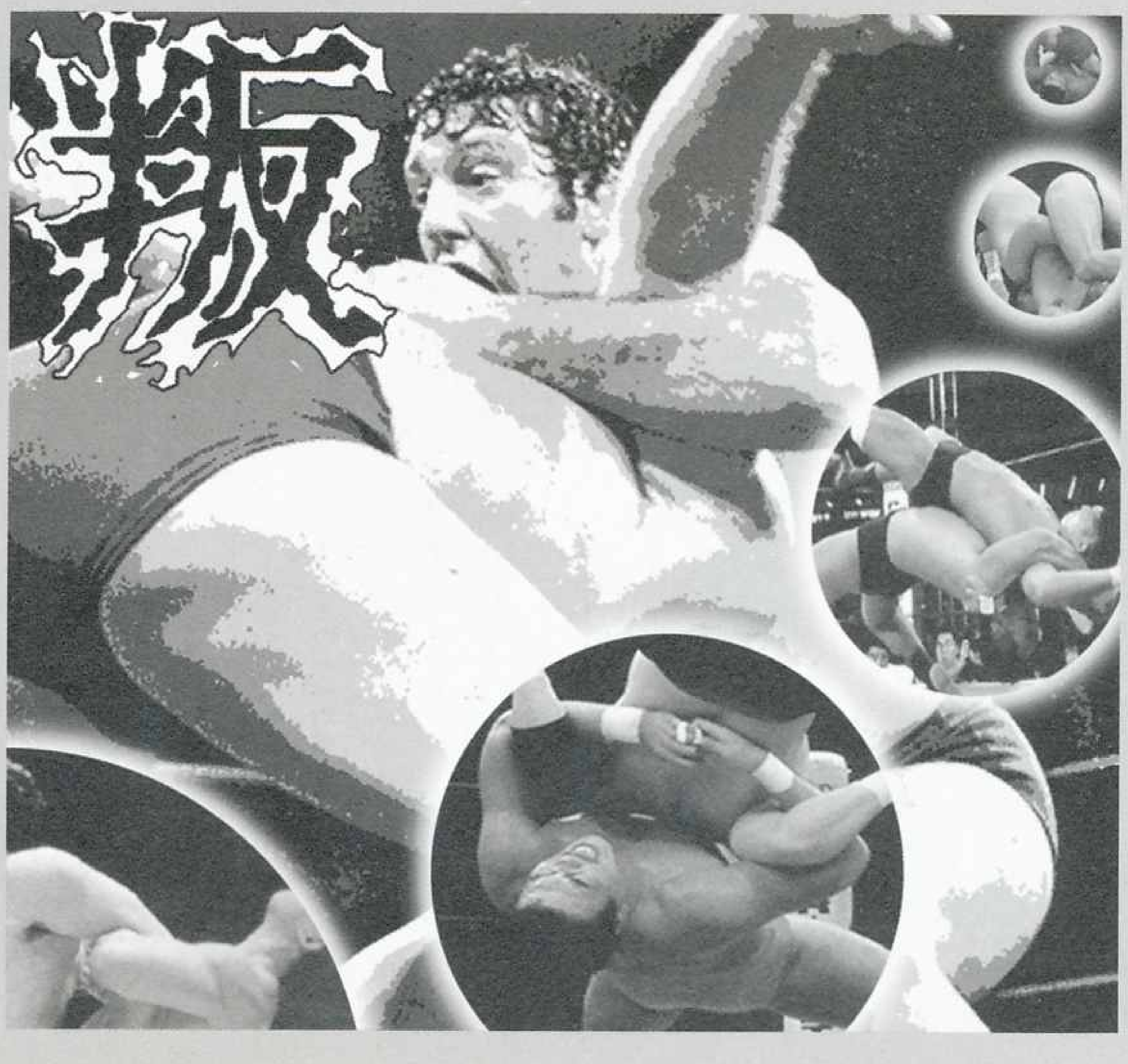
　社長室へ現れると、氷見子は開口一番、

「今度は少しばかり額が大きいわよ。三千万都合してもらいたいの」

と表情ひとつ変えずに言った。

(9)

ムヒト、ムヒトとムヒトコールの響き渡るなか、青コーナーから無比人がリングへ上がった。
　パンツ姿ではなく、その昔、力道山が愛用していたのと同じ黒のタイツに跣である。
　少しの間を置いて、マカロニウェスタン調のテーマミュージックが流れ、減光された赤コーナーへの通路を照らすスポットのなかへ植野が登場。こちらは虎の皮を模したパンツで、シューズを履いている。
　ウエノコールが負けじと爆発し、やがて植野もマットを踏まえて立つ。と、すかさず青コーナーから、
「植野次郎、尻尾を巻くならいまのうちだよう。跪(ひざまず)いて、泣いて命乞いをおし！」
　と、いくぶん巻き舌がかった声が飛んだ。
　ボンデージに網タイツという女王さまルックで決めた氷見子であり、コーナーのエプロンに上がって、ご丁寧にも乗馬鞭を持っている。それでコーナーポストをひと叩きして、
「仕置きの鞭が欲しいかい。だったらこっちへきてパンツを下げ、汚(きたな)い尻をお出しよ」
　植野は苦笑いし顔を背(そむ)けるが、マネージャー氷見子のこの手の衣裳も卑猥な援護射撃も、観客には殊のほか好評なのだった。
　千堂は、青コーナー側のリングサイド最前列の席にいて、氷見子へ注いでいた視線を巡らし隣に坐る真澄をそれとなく窺う。横顔にこれといって変化は見られないが、口許の結びようなど少しばかりぎごちないようでもあり、その目が植野ではなく氷見子を捉えているのは間違いないと思われた。
　五月に入っての三連休の初日。東京水道橋の後楽園ホールでの東都プロレスの興行、名付けて〝メイストーム・第一陣〟もメーンイベントを余すのみ。
　リングアナウンサーが選手紹介をはじめたが、構いなしに氷見子は声高に植野を挑発し続ける。
　利かん気な少年のようなその顔を、いままた斜め下からのアングルで捉えつつ、ほぼ半月前の午後、氷見子に社へ訪ねてこられた際に味わった衝撃を千堂は思い返さずにはいられなかった。
　三千万都合してもらいたい、と社長室に姿を見せるなり氷見子は言い、
　――三千万も？　そんな大金を一体何に。
　デスクに向かっていた千堂が絶句するのをよそに、応接セットのソファに勝手に腰を下ろしたところで、
　――お店をはじめるの。いい出物が見つかったのよ。
　――店って、どんな。
　――決まってんじゃない、SMバーよ。五



三千万円！　多額の金銭の要求に驚愕する千堂

東都プロレスに スターは2人もいらない！

反田にあって、そう、〈ルージュ&ナイフ〉より少し広いかな。
――独立して女王さま兼オーナーに、というわけか。
――無比人もプロレスラーになったことだし、こっちも生活になにか変化をつけないとね。
――万のマネージャーになった、というのは変化じゃないのかね。
――それはそれ、これはこれよ。ねえ、あたしに投資すると思って都合して。
――駄目だな。三千万なんて、とてもじゃないが無理だ。
――無理なら、氏家さんから借りればいいじゃない。
――なに。
――ここしばらくアップやなにやらの要求をしなかったのは、その道のプロを使って社長さんのことを色々と調べさせていたからなの。気を悪くしないで、と言っても無理だろうけど、無比人とあたしの面倒をどの程度まで見てもらえるのかっていうのは、こっちサイドからすりゃなにより重要なことだもん。氏家真澄さんが大したお金持ちで、社長さんの頼みなら諾くはずだ、と確信できたからこうして足を運んだわけで。
　真澄の名前が飛び出して驚いたのは事実だが、衝撃を受けたのはそのことでではない。
　千堂が氷見子に、名状しがたい薄気味悪さを感じたせいもあって沈黙するうち、彼女はソファを起つとデスクの前へきた。そして、こう言った。
――小父さん。あんた、ノーマルでございって顔して澄まし返ってるけど、ひと皮剥けば隠れMだろう。
――なにを馬鹿な。
――いいや、Mさ。店で最初に会ったときに、ぴんときたよ。自分じゃノーマル、またはSと思い込んでる者のなかにもMは結構いるものなんだ。いいかい、おまえ、三千万出さなけりゃここで調教しちまってやってもいいんだよ！
　小父さんと言われ、おまえ呼ばわりされてみてなんとも妙な、というか怪しい気分にさせられ、そしてそれが毫も不快ではない事実に千堂は深い衝撃をおぼえたのであった。
　結局、三千万円は社の預金をまた取り崩して用意し、店の権利書を担保にするという形で融通することにしたが、この先、氷見子にまたなにか言ってこられたりしようものなら、無比人を独立させるどころではなくなる。プールしておいた金が底を突いたことで逼迫感が増し、千堂としても軌道の修正を余儀なくされた。三千万の穴を埋めることが先決だった。
　当初の予定では東都プロレスで無比人を一年間活動させた、その締め括りとして対植野戦を持ってき、それに勝って勢いがついたところで独立、ということであったのを急遽ゴールデンウィークにぶつけることにし、五月五日だけ押さえてあった後楽園ホールを、四、六の両日もなんとかキープ。三連休通しで〝メイストーム・第一陣〟から同・第三陣までを行うとぶち上げた。
　この連続興行の目玉としたのが無比人対植野戦で、どっちが勝っても負けても三試合戦わせるということにし、千堂主導で決定したシナリオでは初戦が植野の反則勝ち、二戦目は両者リングアウトによるドローで、最終戦を無比人が制する約束になっていた。セメントを避けたのは無比人のいる残り半年間、二人の対決路線でなお引っ張らなくてはならぬ事情があればこそだ。
　試合開始のゴングが鳴った。
　氷見子はコーナー下に降りていた。その姿を横目に見ながら、彼女を、そして真澄の目を気にするようになったのも半月前のあの日以来か、と千堂がいまさらのようにまた思いを致すうち、いきなり無比人がダブルアームスープレックスに植野を運んだ。スリーカウントが入った。
「東都プロレスにスターは二人は要らない！」
　起つと無比人は傲然と言い放った。

（以下次号）

◎引っ越し完了＆第23号発売決定？記念

紙のプロレス 本誌 Back Numberの告知

「洋楽も聴きますよ。ホイットニーとか、あとはロス……インディオス」
橋本真也（第16号より）

「今の趣味は献血。すごくいい献血ルーム見つけたんです」西村知美（第11号より）

第9号

特集『週刊プロレスとは何か？』第1回

40万部というオバケ雑誌になった『週プロ』を通してメディアの意義を活字プロレスの鬼・**ミスターX**、**テリー伊藤**、**谷川貞治**らが分析！



＜2大インタビュー＞

大仁田厚
「嘘つきだもん、俺」（本文より）

糸井重里
「このぐらいまでやらないとケツの穴が小さいと思ってるうちに脱肛になっちゃうことってあるんだよね」（本文より）

第8号

特集『さらば新日本プロレス』

本誌編集長・**山口昇**、本誌元発行人・**柳沢忠之**、**斎藤雄一**、落武者・**ターザン山本**が当時の新日本プロレスに決別宣言した禁断の㊙企画！



＜2大インタビュー＞

20ページ堂々掲載！
ザ・グレート・サスケ

初インタビュー
関根勤

第5号

特集『たたかいグランプリ』

鈴木邦男、**杉作J太郎**、**山口昇**らが、それぞれの人生と闘う極私的闘争記大全集！



＜ロングインタビュー＞

馳浩
「芸術とは本能に訴えかけるもの。プロレスもそうですよ」（本文より）

◎対談
デビル雅美VS氏神一番

第12号

特集『色気とは何か？』

＜9大インタビュー＞

村松友視「前田を見てると理解されないだろうなという色気を感じる」（本文より）



蝶野正洋
「他人から壊されにかかっても壊れないですよ、俺は」（本文より）

ザ・グレート・サスケ、**河合メリージェーン**、**アントニオ猪木**ほか

●**前田の暴行事件を検証？**

緊急座談会
「女子便所説教事件」の全貌

第11号

特集『狂気とは何か？』

＜6大インタビュー＞

堀辺正史「狂気性を帯びてる人っていうのは、ただのバカなんです」（本文より）



タイガー・ジェット・シン「俺様の目の中に何を見たいんだ！狂気か！」（本文より）

西村知美
「いまの趣味は献血。すごくいい献血ルームを見つけたんですよ」（本文より）

佐野量子／**糸井重里**／**ガッツ石松**

特集『週刊プロレス』とは何か？完結編

第10号

特集『週刊プロレスとは何か？』第2回

現『UNO』編集長・**花田紀凱**、元『週刊ファイト』編集長・**井上義啓**ほかが『週プロ』の雑誌作りの仕掛けを解き明かす。



◎対談
アントニオ猪木VSキューバ大使

＜2大インタビュー＞

ユセフ・トルコ「俺がいなかったら猪木も馬場もクソもないんだよ」（本文より）

テリー伊藤「俺たちはゴロツキだから自分の楽しいことがベースだよ」（本文より）

第15号

特集『インディペンデントの逆襲』

＜13大インタビュー＞

高野拳磁「新宿のショーパブで俺は化粧してものまねやってたんだから」（本文より）



ポイズン澤田「ウルトラマンに誘われたんですよ」（本文より）

中牧昭二「サラリーマンは陰湿で嫌な世界ですよ」（本文より）

茂木正淑／**戸井マサル**／**島田宏**ほか

特集
『K−1とは何か？』3大インタビュー
石井和義／**谷川貞治**／**ターザン山本**

第14号

特集『神秘とは何か？』

＜5大インタビュー＞

プロボディーガードの世界で生きてきた**清水伯鳳**



相手に触れずに投げ飛ばす大東流合気柔術六方会宗師・**岡本正剛**

佐山サトル
「僕の動き、それがもう神秘になってるんじゃないですか？」（本文より）

大槻ケンヂ「偉大なる理念を残す人はインチキ臭くなければいけない」（本文より）

鈴木みのる

第13号

緊急特集『道場破りとは何か？』

＜2大インタビュー＞

山本小鉄「返り討ちに遭ったら、俺なら、その場で腹切りますよ」（本文より）



上田馬之助「道場破りだなんだって言ったって長生きしたヤツが一番強い」（本文より）

特集『ファミコンプロレスの逆襲』

前田日明　**スペル・デルフィン**　**馳浩**　**斎藤文彦**　**須田剛一**5大インタビュー

＜2大インタビュー＞

養老孟司／**糸井重里**

「今のレスラーは、ちんどん屋だよ」ユセフ・トルコ（第10号より）

第18号
緊急座談会・高田引退発言の読み方
『高田延彦さんへ愛をこめて』
特集『すてきな奥さん』
格闘家、レスラーを陰で支える偉大な妻たち
5大インタビュー



大山倍達未亡人
大山智弥子さん
佐々木健介夫人
北斗晶さん
ライガー夫人
●●千景さん
石川雄規夫人
石川道枝さん
サスケ夫人
村川メリーさん

第17号
特集『実況パワフル北朝鮮！』
＜3大インタビュー＆対談＞
アントニオ猪木VS永島勝司「ポーズ取って筋肉見せたって驚きゃしないよあちらの人は」（本文より）



ブル中野「あの人たちのなにかが変わるきっかけはプロレスだなって思う」（本文より）
橋本真也「プロレスの原点はみんなにできない喧嘩でしょ」（本文より）
村松友視「北朝鮮とアントニオ猪木という世界は一般の真面目な目からはわからない世界だよ」（本文より）
巻末特集
『藤原組の逆襲』

第16号
特集『新日本凸凹大学校』
後藤達俊「酒は飲んでも飲まれるな」（本文より）
マサ斎藤「英語覚えるならベッドイングリッシュが一番よ」（本文より）



キラー・カーン
「うちのカレーの秘密は野菜ジュースの缶を入れるんだよ」（本文より）
橋本真也
「洋楽も聴きますよ。ホイットニーとか、ロス……インディオス」（本文より）
ほか5大インタビュー
＜巻末2大対談＞
糸井重里VS谷川貞治
ユセフ・トルコVS由利徹

第21号
特集『幻的（ファンタスティック）格闘技』
6大インタビュー
前田日明「近所の竹藪行って刀の試し切りしとんねん」（本文より）



岩井作夫（古武術・武備会）
「街を歩くんでもベルトの内側に分銅鎖が入ってました」
甲野善紀（武術研究会松聲館）／**世古典代**（寛水流空手二代目会長）／**井谷利之**（野太刀自顕流師範）／**櫻井文夫**（合気道S・A代表師範）
＜2大インタビュー＞
石井和義／**ガッツ石松**

第20号
特集『劇的（ドラマチック）格闘技』
格闘家の生きざまに迫る4大インタビュー
角田信朗「自分自身が泣けなくて、人を感動させることができますか」（本文より）



真樹日佐夫「男の原点はやっぱり変わらないってことだよ」（本文より）
K－1を語る
村松友視／**大槻ケンヂ**
◎日本プロレス3巨頭スペシャルインタビュー
ユセフ・トルコ／**上田馬之助**／**遠藤幸吉**
＜2大インタビュー＞
松永光弘／**神取忍**

第19号
特集『さようなら紙のプロレス』
紙のプロレスを偲んで5大インタビュー
ターザン山本／**ユセフ・トルコ**／**上田馬之助**／**糸井重里**



紙プロ追悼対談
高野拳磁VSザ・グレート・サスケ
座談会
『K―1三兄弟+負けず嫌い座談会』
出席者　**石井和義、ターザン山本、平仲信明、谷川貞治**
巻末特集
『こんにちは紙プロインター』
山崎一夫／**ミスター・ポーゴ**
インタビュー

バックナンバーの購入方法

定価は『紙のプロレス』第5号、8号、9号は700円、第10号から第22号までは780円となります。『大山倍達とは何か？』『極真とは何か？』は1530円、『猪木とは何か？』は1320円です（消費税5%込み）。
送料は一冊＝240円、2冊＝310円、3～5冊＝380円、6冊以上＝450円。
＊なお1号～4号、6号7号は完売しました。

●郵便振替の場合
00130―3―769154　（株）ダブルクロス

●現金書留の場合
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3―11―3―702
（株）ダブルクロス「本誌バックナンバー係」まで

第22号
特集『この人が喝っ！』
この国はあと100年で滅ぶと嘆く
撃墜王（元特攻隊員）坂井三郎インタビュー



水圧との闘いだった半生を語る
元海女・田仲のよインタビュー
＜新春ウルトラ対談＞
新春から人の臓器について嬉々として語り合った
前田日明VS養老孟司
＜3大インタビュー＞
高阪剛／**セッド・ジニアス**／**ジョージ高野**

バックナンバー常備の気骨のある店

書店
山形／八文字屋エビスヤ店　神保町／書泉ブックマート、書泉グランデ　秋葉原／書泉ブックタワー　池袋／リブロ池袋店、芳林堂書店池袋店　六本木／青山ブックセンター　大井町／博文堂大井町店　中野／タコシェ　吉祥寺／ブックスルーエ　町田／福家書店　浜松／イケヤ文楽館有楽店　名古屋／ヴィレッジ・バンガード、ヴィレッジ・バンガード2　豊田／ヴィレッジ・バンガード5　春日井／アイビー・ブックス　富山／精文館書店　大阪／駸々堂コミックランドアメリカ村　岡山／ブックマスターフィッツ

プロレスショップほか
水道橋／プロレス・マニア館、チャンピオン　新宿／アイドール　渋谷／レッスル渋谷店　池袋／レッスル池袋店　日本武道具　六本木／闘魂SHOP　大山／大山アメリカン　東大和／オフィスTAKA　札幌／リングパレス　甲府／キャッチ　名古屋／アイドール　和歌山／ヘラクレス和歌山駅前店　大阪／アイドール、バディスラム、チャンピオン、金沢／プロレス屋

大好評『何か？』シリーズ



猪木とは何か？
2大緊急
ロングインタビュー
アントニオ猪木／**村松友視**
◎告発仕掛人・**仙波記者**に迫る！
◎**立川談志**メッセージ
◎**新間寿**記者会見誌上再現



大山倍達とは何か？
押して忍んで
11大インタビュー敢行
大山智弥子／**大山茂**／**石井和義**／**前田日明**／**遠藤幸吉**／**松井章圭**他
◎ゴッドハンドの告白発掘
「マス大山の歴史的証言一挙公開」



極真とは何か？
極真魂溢れる
16大インタビュー
黒澤浩樹／**フランシスコ・フィリョ**／**村上竜司**／**ウィリー・ウィリアムス**／**中村誠**／**大沢昇**／**磯部清次**／**松井章圭**他

プロレスmono図鑑

新製品情報と時代を読む特集
プロレス新製品情報 1997 NO.1

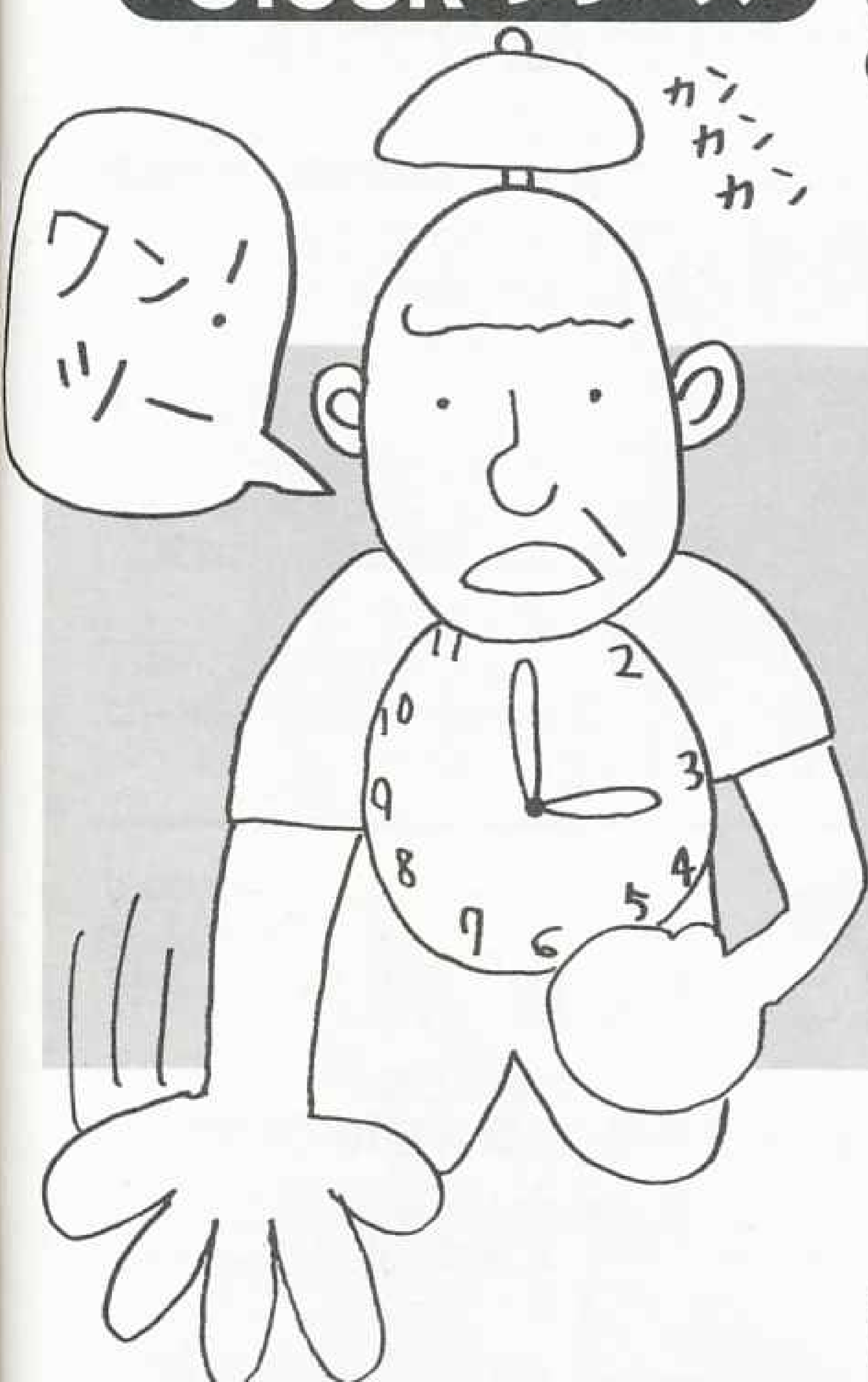
どうよ、最近のプロレスグッズ。なんかセンスのかけらもないって感じじゃない？　もっとさぁ、こう、ファンに夢を与えるようなグッズないの？　見渡せばTシャツばっかりでさぁ。しかもセンス皆無。おまえらはTシャツ屋か！（前号・TAKAみちのくインタビュー参照）とかなんとか吠えちゃってみたりしてぇ。テヘヘ。っちゅーわけで、だらけたプロレスグッズ界に渇を入れるべく、我が『紙のプロレス』編集部で、イカしたプロレスグッズをシンキング！　各団体関係者様、このアイディア、なんぼで買うてくれますぅ？

こんなんあったらえーな～ Clock シリーズ



ジャイアント馬場時計

鳩時計の鳩ならぬ、馬場さんの16文キックが飛び出し、「ポッポ～」という鳩の鳴き声ならぬ、馬場さんの「アッポ」（馬場声）で時を知らせてくれるステキな壁掛け時計。ちなみに右手は、きまぐれで馬場チョップを繰り出し、右足は常に振り子になっている。心が洗われるような、ファンシーな1品。



引退記念 ジョー目覚まし時計

ジョー樋口仕様のかっちょE～、目覚まし時計。時間はジョーがカウントしてくれ（手が動く）、頭のゴングの乱打で、すがすがしい目覚めを約束！

たまにはオレもエンターティナー メタリック馬場バンド目覚まし時計

メンバー全員、馬場の（こう見えても）メタルバンド。完全メタリック製の、高級目覚まし時計（重量3キロ）。メタリック・ババババンドのライブで、爽やかなお目覚めをお約束！



こんなんあったらえーな～ 爪楊枝 シリーズ

ヤマギュー君 楊枝刺し

元ヤマギューこと、天山広吉選手が過去、おでこに楊枝を突き刺すことをステイタスとしていたことを覚えているだろうか？　ということで、商品価値は別として、ヤマギューの楊枝刺し。商品価値は別として……。



大谷晋二郎・スクワット爪楊枝入れ

頭を押してスクワットさせると、下から楊枝を持ち上げてくれる優れモノ。なぜ、大谷仕様かと言うと、藤波辰爾を描こうと思ったら大谷になっちゃっただけのこと。ということで、姉妹品で藤波バージョン、長州力バージョンがあり。



こんなプロレスグッズあったらえーな～

情報号

no

ノモ・マガジン

Cookingシリーズ こんなんあったらえーな～



ブッチャーフォーク
これまた、そのまんま。女の子にウケそうだね。



大仁田ケチャップ
そのまんま。だけど、非常にマズそうなところが購買意欲をそそる。……そそらねーか。



鉄人・カレールー・テーズ
プロレスの鉄人が料理の鉄人に!? 鉄人・ルー・テーズの顔を型取ったカレールー（似てね～）。岩石落とし級のコクとまろやかさ（って、どんな味なんだか……）。



破壊王ケサ切りナイフ
ブッチャーフォークとセット。でも、こっちは、イマイチ女の子にウケなさそうだね。



平田印 しょっぱい塩ですいません
平田の名言「しょっぱい試合で、すいません」から生まれた、硬派な塩（何でだ!?）。それにしても、この平田のイラスト、似てなさすぎる……。どこが平田なんだか。



炊飯ジャ～
大仁田仕様の炊飯ジャー。炊いた米はあんまりウマそうじゃないけど、作りは頑丈。



ブッチャーソファー
ビニール素材でできたブッチャー仕様のソファー。座り心地バツグン!! うたた寝にも、もってこいだね!



棒の運動
アントン考案の『棒のトレーニング』をモチーフにした置物。おみやげとかでよくあるじゃん、こういうの。それよ、それ。ちなみに佐山版、小川版もあり。



獅子マークの蛇口マスコット
新日本のライオンマークの蛇口マスコット（商品名がわからない。何てんですか、あれ?）。ちなみにイラストは、どこをどう見ても新日のマークじゃないけど、実物はちゃんとしたヤツということで。

猪木カレンダァァァァー!!
アントニオ猪木のカレンダー。ちなみに「1、2、3ダァァァーッ!!」1、2、3……ってことで、1月、2月、3月までしかない。



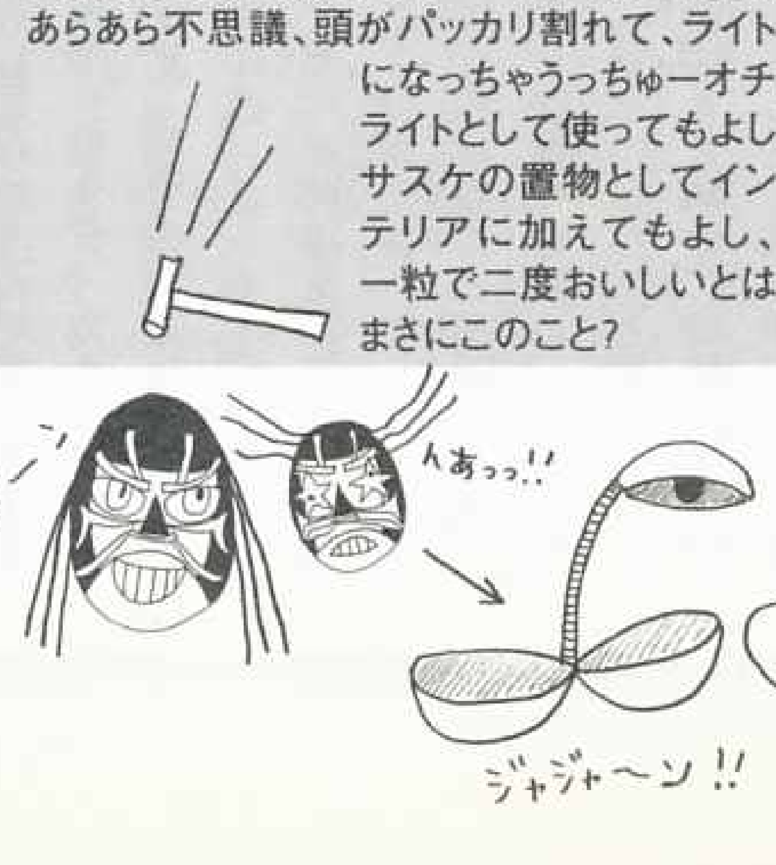
さぁ、みんなもかんがえよう!! イカした（イカれたでも可）プロレスグッズ大募集

これを見て「何だよコレ、マジかよ～」（小野ちん風）、「ほぇぇぇ」（のものも風）、「何でやねん!」（高田“最強”ノブ風）と思った読者に問う! だったらそのアイディア送ってこんかい! 優秀な作品は、ダブルクロスの社運を賭けて商品化するぞ! それだけじゃなく、自腹を切って（誰の?）そのアイディア買ってやる! **最優秀賞は1万円、優秀賞は5千円、佳作は千円だ!** どーだ、まいったか! あ～こんなこと言わなきゃ良かったって後悔させてくれるような素晴らしいアイディア待ってるゾ!

宛先は〒151 渋谷区千駄ヶ谷3—11—3—702（株）ダブルクロス 紙のプロレスRADICAL『アイディアマンコンテスト』係まで。

アットランダム? ガンダムの兄弟か何かか?

こんなんあったらえーな～ アットランダム



サスケ スタンドライト
普段はサスケの顔なのに……、叩くと目が光り、あらあら不思議、頭がパッカリ割れて、ライトになっちゃうっちゅーオチ。ライトとして使ってもよし、サスケの置物としてインテリアに加えてもよし、一粒で二度おいしいとは、まさにこのこと?



源ちゃんの豹柄パンツメッセージボード
天龍源一郎のパンツは豹柄。それは源一郎なりのファンへのメッセージ。なお、それが伝わるかどうかは当人次第ってことで。



熊さん＆ウイリー君
北海道名物、木彫りの熊と闘わせられるウイリー君人形（木彫り）。米粒サイズから等身大まで、サイズいろいろあり。

投稿ページが遂にベールを脱ぐ!!

ノブ PRESENTS

ハガキングダム

通称ハガキング

最強の読者ページが旗揚げ!

紙プロRADICALに満を持して登場した読者のための投稿ページ王国、それがハガキングダムです! そしてこのページを仕切る男、オレがノブです! オレがやるからには面白い読者ページは絶対見れます! 保証します! (爽やかに) ま、見てて下さい!



☆まずは、RADICAL2号の感想のおハガキから。

♂ **ターザン山本が生き生きとしている(ブレーキがこわれてる?)のがいい。**(名古屋市 28歳)

☆1号の表紙に続いて、2号でもあちこちに出没した落武者亡霊。こんなに温かく見守ってくれる人もいるんだと思うと、他人事ながら胸が痛みます。ご愁傷様。

♂ **言うだけ番長・長州はキライなので、ターザンと共に埋めてしまえ。**(岐阜市 24歳)

☆ターザンは既に亡霊だからいいとして、天下の長州力に向かって「埋めてしまえ」というのは、失礼でしょ? 何でそういうこと言うのかな。ま、キライならしゃーないな、と。

♂ **1号よりぜんぜん面白いよ! もう山口昇にはインタビューさせるな! ターザンとだけ喋らせといたほうが良い!**(練馬区 27歳)

☆ここ1月間で、ちょっと見かけないな〜、と思ったら九州方面に失踪してみたり、アメリカに高飛びしてみたりと、狂ったように飛び回る本誌スーダラ編集長に、貴重な助言をどうもありがとう! 多分、本人は聞いちゃいないと思うが・・・ま、編集長にプライド持ってもしゃーないな、と。

♂ **表紙が黒いので1号より良くなった。**(寝屋川市 26歳)

☆いつも気がつくと終電に乗り遅れるダメオヤジ、中村カタブツ君(34歳)も黒く塗れば少しは良くなるのか。

♂ **昭和のプロレスをもっと語ってほしいんです。バトラーツやみちのくには共感しにくいというか。知らねえもん。(中略)「ストロングタイトル」よりは面白いと思う。**(徳島県 36歳)

☆いつも無意識に万引きをしてしまうダメオヤジ、中村カタブツ君(34歳)も毎回万引きして読んでるよ、ストロング・スタイルを。

♂ **この本はプロレス雑誌なのだろうか? それはともかく、のものもかわいいっす! ののもをもっと出せばもっと売れるはず。**(仙台市 16歳)

☆先日も六本木から代々木まで2時間かけてドライブしてきたのものも。そうか、のものもは近くで見るともっとかわいいぞ……バトラーツの小野ちんに「デブ」とか「バカ」とか言われてたけどね。

♂ **紙のプロレス読ませていただきました。実は、昔、大阪の臨海スポーツセンターというところで行われた格闘技選手権を見に行った際、トイレにションベンに立ったところ、隣に佐山さんに似た人がおられたので、顔を見たいと思い覗き込んだらメンチを切られてしまいました。事実は定かではありません。**(兵庫県 JOKER or WILDCARD)

☆天才、佐山聡画伯のちょっといい話のお便りでした。ちなみに、中村カタブツ君(34歳)という名前を聞いた佐山画伯、「人間はカタブツになったらおしまいです」と一刀両断に切り捨ててしまいました。

☆さて、こんな素敵なイラストも送られてきました(左)。

☆正真正銘ラディカルなプロレス雑誌に宮尾すすむのイラストを送ってくるのはいただけないな。ちなみに、これを見たカタブツ君、「え、プリティ長嶋じゃないの?」とめずらしく的を得た指摘。



カタブツ曰く「プリティ長嶋」。こういうイラストも募集中。でも基本はお笑いッスよ。

♂ **島田レフェリーの特製プロレステレホンカード欲しいです。なぜなら、僕はプロスタイル・レスリング「NPW」という社会人プロレス団体で4年もレフェリーをしています。**(兵庫県 24歳)

☆質問! なに、プロスタイル・レスリングって? 略してプロ・レスですか。そこでレフェリー4年もやってるの? 是非、今度は中村カタブツ君(34歳)の家の夫婦仲も裁いてもらいたいな。

♂ **タコヤキ君はどこ? メキシコ君は? アメリカ君は? 二番煎じはいらない。**(山形県 32歳)

☆先日、元・紙プロの西村アメリカ君が編集部に電話をかけてきました。電話を取ったのものもが、「メキシコ君ですかぁぁ」と、大ボケ、相手を絶句させ電話を切られるという事件が発生したばかりです。

♀ **ダジャレは言いたくないというかね、「紙プロ」本誌を早く出せって言うかね、なんで悲しき天才セッド・ジニアスにインタビューに行かないのか、と言うかね、IWGPリングなんか誰もしたかねえんです。要するにちっともラディカルじゃないでーす。**(埼玉県 26歳)

★耳の痛いメッセージが届きましたね。本誌編集部では、この手紙を非常に重くとらえ、編集会議を重ねること25回。カタブツ君が居眠りを始め、のものもが「ビバ、ビバ」と歌いながらお絵描きを始め、結核の咳がけたたましさを増す中、達した結論は、「夕めしは『野方ホープ』でラーメン」でした。ん〜、ビバ、ビバ。

フワフワ! な募集のお知らせです

♥ハガキングダムではご意見、ご感想はもちろん、芸術が爆発するステキなイラスト、日本が転覆するタレコミ情報、さらにはダジャ専入選を狙う「元気ですかー!」なダジャレ、中村カタブツ君(34歳)の原稿が読みたい人は、カタブツ君へのメッセージを添えて、〒151 **渋谷区千駄ヶ谷3・11・3・702 (株)ダブルクロス 「ハガキングダム」係**までフワフワ! っと手紙を下さい。掲載者にはなんかあげます。

読者ページ界に風穴を開ける王道投稿

日本ダジャレズム専門学校 通称ダジャ専

君もダジャレで世界征服してみないか？

校長………アントン
教頭………ティグレ
用務員……カタブツ

☆石を投げれば専門学校に当たると言われる街、代々木に我がダブルクロスは城を移しました。それにしても、この街の予備校は、どこもきれいなビルを建てていやがる。どうやら予備校は儲かるビジネスらしいです。いいな〜、というわけで、当社も予備校業界に参入すべく、ここに日本ダジャレズム専門学校、通称ダジャ専を開校します！ 申し遅れました、私は講師のダジャ・コングです。

そもそも何故ダジャレか？ ことの始まりは中村カタブツ君（34歳）が10日間かけて作った前号の読者プレゼント・ページにあります。応募条件に「ダジャレを書くこと」と入れたばっかりに、ダジャレで家が建ちそうな勢いでハガキが舞い込んで来たのです。なんにせよ、読者の生の声（？）を聞けるのは面白いという理由だけで、このコーナーは誕生してしまいました。

というわけで、本校の生みの親である中村カタブツ君名誉理事長（ボンコツ）の模範演武をご覧いただきましょう。

♪ **佐山聡が無我に参戦したらヨークシャー・スタイル。**

☆おそらく読者の100パーセントが「何を言ってるんだ、カタブツ！」「カタブツ、意味わかんねえよ！」と心の中で野次ってることだろうから、私が解説しよう。ヨークシャーという豚の種類があるらしいのだが、それとランカシャーがかかっているのである。1ミクロンも笑えない模範演武で申し訳ない。こんな出来損ないのダジャレはほっといて、読者があみだした珠玉のダジャレを紹介していこう。

♪ **すべての道はオマンコに通じる**（東京都 44歳）

☆1枚目のハガキにふさわしいエンジン全開のダジャレ。44歳という歳のなせる技？ だが実は、ちっともダジャレじゃない強引さで持っていった、含蓄の深い会心の作品。先生は好きだよ。

☆さて、イラスト付きのダジャレも届いているので紹介しよう。

♪ **芸術は爆殺だ！**（愛知県 33歳）



☆「プロレスは芸術だ」と言ってはばからない破壊王をズバリ言い表しているね。先生はダジャレの専攻だから、絵は分からないけど右のイラストもかわいいクソブタ（b¥夫山）といった趣がナイスだと思うよ。

♪ **渋谷お〜寒!!**（静岡県 22歳）

☆中村カタブツ君（34歳）の永遠のライバル、Show氏に正面切って「太りましたね」と言うナイスガイを扱った作品。しかし、このダジャレには力強さが足りないかもね。先生は思うね、君はきれいさなんか目指さずに、オッサンの足の裏でも見習うべきだよ。

♪ **人妻をひとつまみ！**（香川県 25歳）

☆いいねぇ、先生はそういうピンクなダジャレは好きです。でも、これを書いて本誌編集部に送るっていうのはおそらく香川県で最もムダなハガキの使い方だろうね。

♪ **新日本プロレスは面白い。**（練馬区 19歳）

☆おい、誰がこんな『ほんとのこと』を送ってこいって言ったんだよ！ 廊下に立ってろ！（『ほんとのこと』は場合によっては、ブラック・ジョークになります）

総評 あなたが道で通りすがった人に「ダジャレを言え」と言われて、パッと出てくるようなダジャレはロクなもんじゃないことはだいたい予想がつく。ダジャレとはそういうものです。また、せっかく書いたダジャレに「ごめんなさい」とクソの役にも立たないようなコメントを添えたがる輩が多いのはいただけない。ダジャレは繊細に大胆に！ 以上、先生からのお説教でした。平たく言えば、ズルムケで細かく動かせってことです。

まだまだたくさんダジャレはあるけど全部は紹介できないので、最後に優秀作品をまとめてみました。ランキング制度でアントン級からカタブツ級までの5段階評価です。要するに、オンモシれぇこと書きゃあいいんです！

アントン級 ♪ **しまった！ 裕二**（福岡県 25歳）

ティグレ級 ♪ **神取は鼻をかんどります**（岡山県 17歳）

サスケ級 ♪ **まったくあんたはスズキホナミ（すぐにオナニー）するんだから**（東京都 35歳）

ユージ島田級 ♪ **IDOの電話はいーど**（茨城県 33歳）

カタブツ級 ♪ **戦車を洗車する**（徳島県 19歳）

●無意識とは悪である●

カタブツランド。



カタブツ君とは何か？

中村カタブツ君、34歳。極真4級、大道塾3級のプチ・空手家である。新婚1年と1カ月の妻帯者でもある。この件を本人に確認してみたところ、先月の結婚記念日を忘れていたことが発覚、「えらいことしちゃった」と青い顔をしている。「えっ、そんな人間いるのかよ」などと驚いているようでは、まだまだ青いと言わざるを得ない。こんなことはカタブツ君にとっては日常茶飯事でしかないのだから。カタブツランドとはカタブツ君なら何をやっても許される、地上でたった一つの「カタブツ君のための楽園」コラムである。

さて、今回のテーマはカタブツ君とは何か？ である。

プロレス業界内では「使えない」という評判だけで話題になった凄玉なのである。さらに、非人情な業界の中でも、最も非人情なことで知られる我が(株)ダブルクロス社内でも「ダメ親父」「アルツハイマー」「ボンコツ」「何言ってんだかわかんない」など、圧倒的な罵声を浴びる入社8カ月のロートル新人である。

どうしてそこまでクソミソに言われるのか？ その原因は全て、星の数ほどある失敗にある。1日に必ず大小合わせて30回の失敗をするのが日課なのだ。そんな、ありのままの中村カタブツ君（34歳）を読者の前にさらけ出すためには、代表的な入社以来の失敗を書き連ねてみるのが一番、との見解に達したので、紹介しよう。

●会社が代々木に引っ越したのを忘れて、池袋に出勤。

●トイレを流さない（もちろん大）で本誌・吉田に大目玉を喰らう。

●本誌ぼんぼこ経理・林ヘックションー枝を車でへーキな顔してひき殺しそうになる。

●引っ越しのゴタゴタで携帯電話の充電器が行方不明に。足かけ4日も探してあきらめていたところを、のものもが5秒で発見する。

●会社の車を擦ってしまい20万円の損害を与えるも「払えばいいんでしょ、払えば」と完全に開き直る。「ブッ殺してやろうかと思った」とは山口昇本誌編集長の弁。

●ジャン・レノを意識して髪を切り、ヒゲを伸ばすも、誰が見ても「茂木正淑みたい」としか言ってもらえない。

●コンビニで、コッペパン、おにぎり、表紙がボロボロの『ストロングスタイル』などしみったれたモノばかりを常習的に万引きする（無意識）。

●奥さんの話を聞いたら、「かわいいんだぜ。俺が帰っても背中向けてるし、話しかけても応えないんだよ。きっと俺にかまってもらいたいんだよ」と大きな勘違い（無意識）。

●新日本プロレスのフロントに向かって「天山のツノは新日の象徴ですから」と大暴言（無意識）。

●3月に入ってから「新団体の特集を組もうと思いまして」とFFFの事務所に電話。そこで初めてFFFの崩壊を知る言語道断な情報収集力。

●首都高の入り口を金も払わずに時速60キロで突破。料金所のオヤジもひき殺しそうになる。

などなどである。しかし、これは氷山の一角にすぎない。

こんなにスキだらけのくせに、本人は硬派な二枚目のつもりでいるから始末が悪い。以前勤めていた会社では、「悩み事の相談が多かった」（本人・談）「わりとツッコミだった」（本人・談）のだから、世間恐るべし、である。本人はようやく最近おとぼけなキャラクターに目覚めたらしく、そのギャップが気に入らないらしいのだが、後輩のボクにしたら、そんなこと悩む暇があったら少しは仕事してもらいたい。

最近は少々おとぼけが過ぎてしまい、「カタブツの失敗は笑えない」と社内でもギブアップ宣言が続出。そんな空気を察知してか、「原稿も書けるカタブツ」をアピールし、あわよくば失敗を帳消しにしようと意気込んで書いた原稿を山口昇・本誌編集長に手渡したカタブツ君。ところが、これが「新弟子以下だ!!」と一瞬でボツとなってしまった。これは僕が読んでも、つまらないと断言できる代物なのだが、とりあえず先輩を立てなければならないという都合上、しかたなくここに「カタブツ革命」の片棒を担ぐ次第なのである。その原稿とは本人曰く、「筒井康隆と渡辺淳一のいいとこ取り」というズバリ言って非常に手におえない怪作である。


手始めに、このお蔵入り原稿の掲載の是非を読者に問いたいと思います。少しでも読みたいと思った人は、カタブツ君への励ましのメッセージを添えて、ハガキを送って下さい。30通以上来たら、掲載を検討することを前向きに検討してみます。

（坂井結核）



これが中村カタブツ君（万引き王）だ。ハの字眉毛が淋しさを誘う34歳である。

はみだしのもとぴあ 「切手くれるなら文通したーい！」というのものもの願いをかなえてくれる人募集中。さらに「ボケベルくれたらベル友にもなっちゃう！」そうだ。宛先は『**紙のプロレスRADICAL**』のもとぴあ係まで。



池田大輔

Daisuke Ikeda

バトラーツで「セカンドインパクト」起こしますよ！

撮影／遠藤政文
photographs by Masafumi Endou
聞き手／吉田豪
interview by Go Yoshida

——え〜、今日は、ウチの山口昇が「大ちゃんは好きなんだけど、何をやりたいのか俺にはわからないから聞いて来い！」って無茶を言い出したんで、じっくり聞かせてもらいます。

池田　……ふわ〜い（眠そうにインタビュアーの手帳を見つめながら）その手帳、ドラえもんなんスか？

——そうですけど（笑）。池田さん的にはプロレスって何なのかなとか、考えたりはするんですか？

池田　……（手帳を見つめながら）ああ、最近、何か出来事があって考えたんですけど……。

——出来事って（笑）。

池田　思い出せないです。答えも出たけど……、忘れちゃった（笑）。

——忘れましたか（笑）。

池田　あんまり語らないから、山口さんもわからないんでしょうけど。よくわかりづらいって言われますけど、いまはそのままでいいかな、と。

——藤原さんの影響なんですかね。

池田　いや、元々。……燃え上がってから語るんだと思いますよ。

——じゃあ、いまは全く燃え上がってないんですね。

池田　………ちょっと薬飲んで寝てるんで、起きれないんですよ。身体（肋骨骨折）がおかしいんで薬飲んでるから、頭がボーッとして……。

——いまもボーッとしてる、と（笑）。

池田　かなりボーッと（笑）。

——試合やってて楽しいですか？

池田　アメリカから帰ってきた頃に、楽しめるようにはなりましたね。

——そこで何が変わったんですか？

Daisuke Ikeda 針の穴にラクダを通せ！'97

池田　言わなきゃ何もないスね（笑）。

——ちゃんと言ってくださいよ（笑）。2ページくらいになっちゃいますよ。

池田　あ、そうか。まあ、いろんな人に会いましたけど……。

——どんな人ですか！

池田　プロレスラーとか（笑）。

——だから誰！

池田　一番大きかったのは、やっぱりカール・ゴッチさんで。

——どんな話をしたんですか？

池田　ゴッチさんとはね、そこで1時間くらい話したんですけど……。

——時間じゃなくて！　どんな話をしたのか聞いてんですよ（笑）！

池田　あ、そうか（笑）。だから練習方法とか、車に例えてコンディションはいかに大切かってこととか……。

——そういう話だけ聞いてると、出会いが大きかったようには全然聞こえないんですけど（笑）。

池田　そうですねえ。カール・ゴッチさんという人に圧倒されちゃって。普通、人と会ったときに泣かないじゃないですか、別れるときは泣いても。ゴッチさんは、もう話してくれるだけで感動して泣いちゃって。

——泣くほどの話をしてくれたんですね。でも、その話は教えない、と。



池田　まあ、わけわかんなければ、それでいいかなと思うんスけど（笑）。

——で、アメリカでプロレスに対する考え方が変わったんですか？

池田　俺、ホントにこういうこと考えないんですよ（笑）。だからそういう出来事があった時に、「プロレスとは何か？」って話を聞いてくれたら良かったんですけどねえ。

——今日はタイミング悪いですか？

池田　4月2日っすもんね。

——はあ……。池田さんは結局、プロレスで何がやりたいんですか？

池田　いま、目指すものに向かって行ってるんスけどね。……言えないですね（笑）。ささやかな夢の方がいいかなって。それ言っちゃうと、実現した時に面白くないですよね。

——団体内ではみんな目指す方向性がバラバラなんですけど、誰と比較的近いんですか？

池田　誰でもないですね。俺、猪木イズムは追求したくないですから。

池田　そうですねえ。カール・ゴッチ

ね。でも、その話は教えない、と。

ズムは追求したくないですから。

あいつらが米米クラブになるなら、俺は一人でバトラーツを守る！

——猪木イズムの石川社長に、長州イズムで噛みついたり藤波イズムで地道に対抗したりしないんですか？

池田　無我フォーエバーって感じでね（笑）。噛みつきは、しょっちゅうしてるんですけど。

——……でも、噛みつき方が中途半端で、続かないんですよね。

池田　そうですねえ、中途半端な自分がまた嫌になるんですけど。別に社長に狙いを定めてるわけじゃないんで、まだまだその上にいますからね。

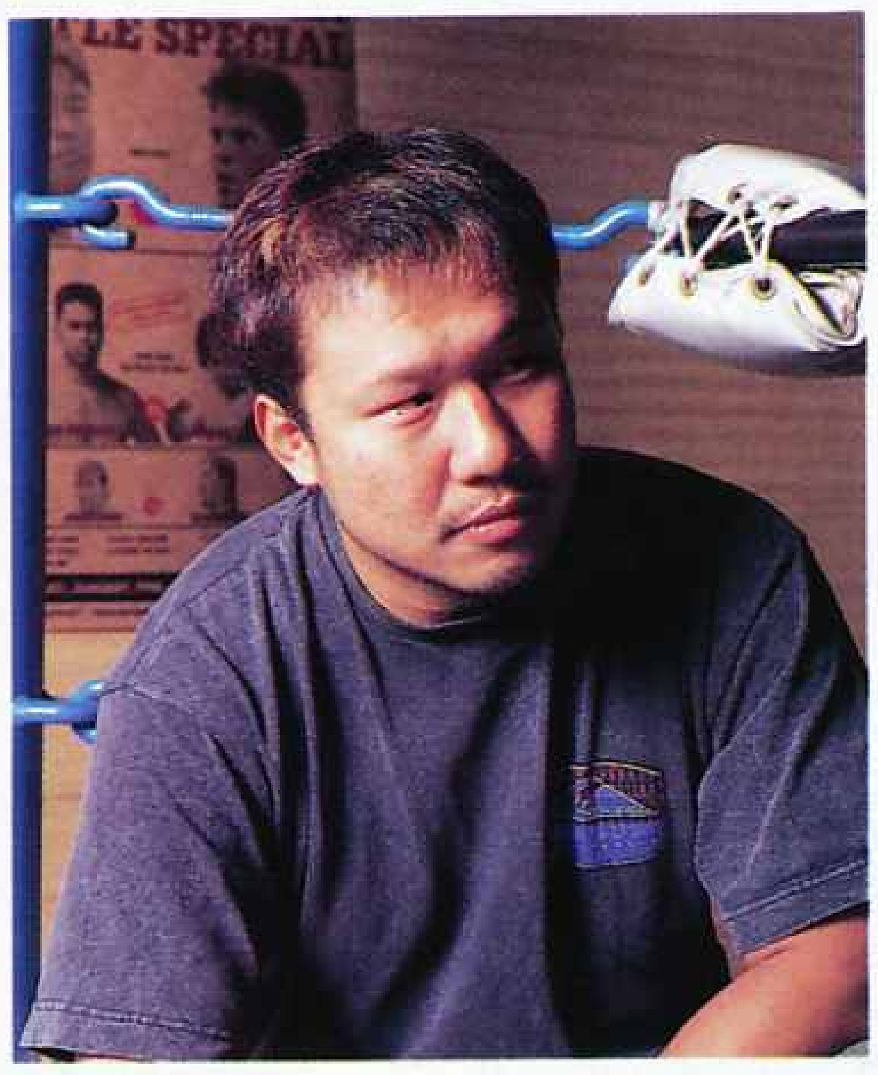
——………やっぱそれ（ドラ手帳）どけましょう（笑）。気になるから。

——これがいけないんですか（笑）。（手帳を裏返す）で、石川社長に対して許せない部分もあるわけですか？

池田　いっぱいありますけど。……俺に批判をして欲しいんスか？

——どうせならキッチリ噛みつくべきですよ！　例えば3月の米米クラブ解散コンサートでも他の選手はパンツ一枚でステージで踊って「今日から俺達が米米だ！」とか言ってたのに、池田さんだけ参加しなかったこととか。

池田　めちゃめちゃ内輪ネタじゃないですか、それ（笑）。



——池田さん的には言いたいことってないんですか？　「あいつらが米米クラブになるなら、俺は一人でバトラーツを守る！」とかって。

池田　まさにその通りですね！　いいこと言いますね（笑）。だって米米の後ろで躍ってても、みんなバトラーツだってわかんないでしょ。安室奈美恵の後ろで躍ってる人なんか、誰だかわかんないでしょ。

——でもスーパーモンキーズからMAXになる可能性はありますよね。

池田　それは絶対ないと思いました。全てを捨ててもいいから、俺は出ないって決めてましたね。やるなら俺は辞めるって思ってました。

——ようやく自己表現しましたね！

池田　自己表現できましたね、米米で（笑）。めちゃめちゃ怒りが湧いてきましたからね。

——あんまり短気に見えませんよね。

池田　けっこう短気なんですよ。昔、レンタルビデオ屋でバイトしてたときも、オーナーに「お前、ちゃんとやれ！」って言って胸ぐら掴んじゃいましたしね（笑）。昨日もチンピラみたいなことやっちゃいましたし。

——いい話になってきましたね！

池田　でも俺、ほのぼの路線で売ってるからなあ（笑）。

——で、何やらかしたんですか。

池田　小野さんと何かわからないヒップホップ観に行ったんスけど、そこにいた客の若い兄ちゃんにちょっとムカついたんでスネ蹴って。でも、喧嘩やる前に罵声を浴びせると、相手はシュンとなっちゃうしね。

——そんな強烈な罵声を浴びせるんですか（笑）。

池田　大阪に2年いましたから。けっこう使えもしないのに無理矢理関西弁で話してる馬鹿も多いんですけどね。「何やねん！」とか（笑）。

——ああ、原タコヤキ君系ですね（笑）。

池田　あっ、あいつだけはムカつきます、ホント（怒）。「池田選手、ナイスファイトやで～」って言われたときはね！「別に俺、『サムライ』のためにプロレスやってんじゃねーよ！」って！

——いいっスねえ。やっぱりレスラーは噛みつかなきゃ駄目ですよ！

池田　そうですか？　でも、全日本プロレスに噛みついたら『週刊ファイト』に書かれましたよ。

——ああ～、そういえば「夢はBI砲だ！」とか書いてありましたね。

池田　あ、それわかってんじゃないですか、俺の夢のこと。

——へ？　それがさっき黙ってた夢ですか。なにも一度活字になってるネタを隠すことないじゃないですか（笑）。

池田　知らないのかな～と思って、黙ってたんスけど。すいません（笑）。

——なんでまたBI砲なんですか？

池田　そっから言うべきでしたね。俺がプロレスファンになったきっかけが馬場さんだったんですよ。俺の爺ちゃんが相撲とかプロレス好きで、二人で馬場さんの話で盛り上がってましたから（笑）。動きが遅いから応援したくなるって（笑）。

——また失礼な事を（笑）。

池田　っていうことを爺ちゃんが言ってたんスけど（笑）。まあ、『ファイト』には冗談で言ったんスけど、これで名前くらいは覚えてもらえたかなって。

——じゃあ目指すはBI砲！　と。

池田　っていうか、俺のプロレスを目指したいんで。

——だから、それは何なんですか！

池田　試合で表現します。

——はあ。そういえば前、FMW出たりしましたけど、どこでもそれなりにこなせちゃうのがプラスなのかマイナスなのか、どうなんですかね。

池田　別に人に合わせてるわけじゃなく、自分を曲げずにやってるだけなんですけどね。

——たとえ全日に参戦しても自分は曲げたくない、と。

池田　そうっスね。関節技にこだわるとかじゃなくて、蹴るときにしっかり蹴る。やっぱり、やってて楽しくないと。……思い出した！　プロレスとは、やっぱり愛なんスよ！

池田大輔

――なんだか猪木さんみたいですねぇ。「昨日もちょっとラブについて考えてたんだけど」って感じで（笑）。

池田　やべえ、俺も猪木イズム（笑）。じゃあ俺はラブラブにして下さい。

――（無視して）愛なんですか？

池田　試合は、やっぱり楽しくやんなきゃダメじゃないですか。……試合はたぶん、セックスなんですよ。

――それは昔、ブル中野さんが言ってましたね（笑）。で、プロレスはセックスなんですか？

池田　愛のあるセックスですね。

――中には愛のないセックスをする選手もいますけど、バトラーツ内では愛のあるセックスができると？

池田　というのを信じてますけど、それがわからなくなる時もあるじゃないですか。そうしたら酒飲めないんで、ついコーヒー飲み過ぎて眠れなくなるときがあります（笑）。

――いまのところ、俺の愛を受け止めてくれそうな奴って他に出てきてるんですか？　それが馬場さん？

池田　いやいや。なかなか俺、口で言わないんで伝わらないんスけどね。

――それは実際の恋愛でもですか？

池田　まさに（笑）！　そうなんスよ～。ちなみに、吉田様は……。

――様じゃないですよ（笑）。ボクはプロレスラーに常識なんていらないと思ってるんですけど、オーナーの胸ぐら掴んだりもする池田さん的には、自分を非常識だと思います？

池田　はい。隣のクリーニング屋の小学生の娘に声掛けたりするし……。

――はぁぁぁぁ？

池田　あと、人を怒らせるのも好きですね。太った女に「ブタ」って言いますから（笑）。

――それは非常識ですね（笑）。

池田　最近、人に嫌われるのがいいことだと思ってきたんで。っていうことは、やっぱり常識なくした方がいいのかなぁって。駅の階段とかでも、俺はグワーッといっぱい人が下りてくる所を真ん中ガンガン上って行くんですよ（笑）。これは人間が決めたことだから、守らないぞって。

――へ？

池田　自然の流れには逆らえないけど、人間が決めたことは守らない！

――俺が法律だ、と。

池田　そう。基本的に人を怒らせたいし、それに笑わせたい、泣かせたい。けっこう気ぃ使ってんですよ。

――基本的にインタビューでは、笑わせたいんですか、怒らせたいんですか、感動させたいんですか？

池田　ああ、感動させたいってのはないっス。難しい言葉も知らないし。俺、夢とか語った方がいいんスか？

――語れるもんなら、語ってもらいましょう！

池田　でも、夢語るなら社長の方がいいよなあ。

――じゃあネタ振らないでいいですよ（笑）。どうせ夢語るの嫌いなんだから。

池田　ああ、そうでしたね（笑）。

――こういう調子で、インタビュアーを怒らせてやろうとか、いかにすり抜けようとか考えてるんですか？

池田　……じゃ、感動させモードに入りましょうか？

――泣かせて下さいよ。もう泣く準備できてますから（笑）。

池田　それ一番苦手な分野ですから（笑）。吉田さんは猪木さんとか、そういう話に弱いんですか？

――当然です！　ボクは、常識のないプロレスラーが大好きですから。

池田　俺は、バトラーツのスタイルは常識ないと思いますけどね。だから、石川さんが言ってるのも常識との闘いじゃないスか。でも俺はプロレス業界の常識とかと闘いたいですね。そこから崩していきたいですね。世間にナメられないように！

――覚えとけよ、原タコヤキ君！　ってわけですか（笑）。

池田　覚えとけよってほどのものはないんスけど、ただもう、見ただけでムカつきますね。だから、あいつに話しかけないようにしてますよ。でもにこやかなイメージで売ってる私としては、声かけられたら「あ、どーも」って、ついつい言っちゃうんですけど（笑）。いつかは爆発しますよ。

――そういえば、前号のTAKAみちのくインタビューを読んでけっこう共感する部分があったとも小耳に挟んだんですが？

池田　共感しますね。丁度、島田さんいなくなったんで、これからはガンガン行きますか。今日はインタビューの場所（道場）が悪かったんですよ。だから、のらりくらりと。これからは噛み付きトーク！　ホントは俺、総理大臣にも噛みつきたいんスよ。消費税5％は痛いっスよ。説明してほしいっス。そのために会社も給料5％上げて欲しいっス（笑）。

――噛みつきますねえ、また（笑）。

池田　いつも、オヤジがブツブツとボヤいてるみたいだって言われるんですよ。指1本の動きでも言いますから、めちゃめちゃ細かいですよ、実は。だからドラえもんが気になってしょうがないんですよ（笑）。

――（無視して）バトラーツのスタイルは、どの団体も前座がなくなった中で前座なものを極めたと言うか、いわばUスタイルの全日的展開みたいなもんですよね。相手の技をキッチリ受けるっていう。

池田　それはやっぱり愛ですよね。愛のない奴には、受け止める術はないですよ！

――で、バトラーツスタイルにもブツブツ言いたいわけですかね。

池田　だからここから、どういう風に俺が影響されていくかでしょう。あっ、（手をパチンと打って）いい例えがあった！　俺はザルっスよ。こう「ふるい」にかけて全部落として、残った金だけいただくという（笑）。

――その残ってる中に、バーリ・トゥードとかもあるんですか？


池田　ありますよ。ただ口に出さないだけで。

――じゃあ、それ用の練習したりとかもしてんですか？

池田　それも、あんまり口にしたくないんスけどね。ハワイで地獄のグレイシー特訓やったりとか。でも、やっぱり基本は笑いですからね。

――だから、根っこの部分が見えないと。恥ずかしがり屋なんですか？

プロレスとは、やっぱり愛なんスよ！



――はぁぁぁぁ？

りましょうか？

ス。そのために会社も給料5%上げて

と。恥ずかしがり屋なんですか？

池田　いや、シャイなんでしょうね。
――同じゃないですか（笑）。
池田　やっぱり練習嫌いって言われてる方が楽しいし。
――練習嫌いで強いっていうのも、鶴田みたいでカッコいいですからね（笑）。で、池田さん的には「こんな試合を続けていたら、十年持つ身体が三年でダメになってしまう」とかっていうのはないんですか？
池田　いや、だから俺ホセ・メンドーサなんスよ。昨日の夜、『あしたのジョー2』見たんですけどね（笑）。
――技の見切りが紙一重だと？
池田　はい（笑）。俺、けっこうアニメには影響されてますよ。だから、いままでのバトラーツが『ガンダム』みたいに細かかったなら、俺は「でも、『エヴァンゲリオン』の細かさはもっとすごいんだよ！」っていうのを見せたいんです（笑）。だからバトラーツで「セカンドインパクト」起こしますよ！
――起こしますか（笑）。ちなみにあの生意気な原タコヤキ君はバトラーツが大好きで、ずっと追って見てたんですけど、「最近はみちプロみたいに固まりすぎてて、ちょっとアカンわ」って言ってたんですよね。
池田　「お前、タッグマッチやってみろ」って言いたいですね。めちゃめちゃ繊細な攻防と、めちゃめちゃ繊細なタッチワーク、めちゃめちゃ繊細なカットプレーと。顔面に受けたら頭ボーッとなりますよ！
――いまもなってるみたいですけどね（笑）。でもバトラーツのタッグはセカ

Daisuke Ikeda 針の穴にラクダを通せ！'97

ンドインパクトほどじゃないけど、かなり衝撃ありましたよ。ボク、正直言ってプロレス見に行くと5回に4回は寝ちゃうんですけど、バトラーツはずっと起きてましたからね。
池田　普通、選手も緊張するじゃないですか。でも、俺は入場テーマが流れるまで笑ってるんですから。それがリングに上がったら、遠山の金さんになるんですよ！　「どうだ、恐れ入ったか！」で「はは～っ！」と言わせなきゃいけないんですよ。
――普段は遊び人なんだけど（笑）。



池田　例えが悪かったか（笑）。緊張してると客と同じレベルになっちゃうんですよ。でも、こっちは客の上から見下ろさなきゃいけないんスよ、舞台の上から桜吹雪出して！　俺のために俺の試合をやって、それで真っ白に燃え尽きるのも良し、でね。
――BI砲の夢が叶ったら、燃え尽きちゃうってことですか？
池田　BI砲じゃ燃え尽きないですよ。それは途中経過ですから。その先はちょっと言えないですけど。
――何か、ちょっとだけ見えてきましたね（笑）。
池田　だから普段の発言は、意味がなさそうでちゃんとあるんで。わかんないスよね？　まぁ、リングの上だけっスから、真剣になるのは。
――はあ。人となりはわかっても、その先がまったく見えませんね（笑）。
池田　俺の場合、世間に出せる夢がBI砲ぐらいだしね。俺の夢は深いっスよ。俺、ささやかな夢ってのが好きなんスよ。ファミレスで朝からカップスープ飲みながら飯食うとか。
――ちっちゃいですね（笑）。それだけでいいんですか、個人的な幸せは。
池田　俺の場合、プロレスと生活は一緒ですから。でも普段は「俺はプロレスラーだ！」と肩をいからして歩くことはないんですけどね。
――さっきホームで階段逆に上ってくって言ってたじゃないですか（笑）。
池田　それは俺としてってことですから（笑）。刃向かいたい気分になるんス。……難しいスか、俺？
――大体わかるんですけど、言わないことが多すぎますよ（笑）。
池田　言えないっスからね。でも不思議な男ってのもいいっしょ。
――どうして言えないんですか？
池田　書かれるから。行き着くところはささやかな夢なんですよ。プロレスファンとかを離したところでのね。ただ自分の欲望のための。



――じゃあ、●●●●をするとか？
池田　そういうことです！　書かないで下さいね。だから俺、……（諸事情により、原稿削除）ですよ！
――うわ～っ、それって無茶苦茶いい話じゃないですか！
池田　だからダメっスよ、これは書いちゃ！　書いたら俺、捕まる勢いで殴りに行きますから（笑）。
――非常識な男ですね（笑）。
池田　だから夢を話すと俺が見えちゃうでしょ。とぼけてる男として書いてくれれば、それでいいんです。
――もったいない話ですねえ。
池田　基本は喧嘩っスから。それを言っちゃうと見えてくるでしょ？　でも、具体的には書いちゃダメですよ！
――気持ちはわかりますよ。やっぱりプロレスはスポーツじゃなくて闘いじゃなきゃいけないんですよね！
池田　無茶苦茶ノリノリっスね、いままで濁してたこと言ったら（笑）。だから社長（石川）イズムが出来上がっちゃうとダメなんですよ。やっぱり不安を持ってるし、強くなりたいんで。
――あ～あ、いい話なのになぁ。
池田　書けないけどね（笑）。それが俺の大事でささやかな夢です。
――それは絶対に実行すべきですよ。

基本は喧嘩っスから！何をやってもいいんですよ

池田　やりたいですけどね。だからいまみたいに怪我してると、試合よりも練習できないことが嫌ですから。

――いや～っ、掴み所がないって言われる池田さんの根っこには何があるのか、ずっと謎だったんですけど。

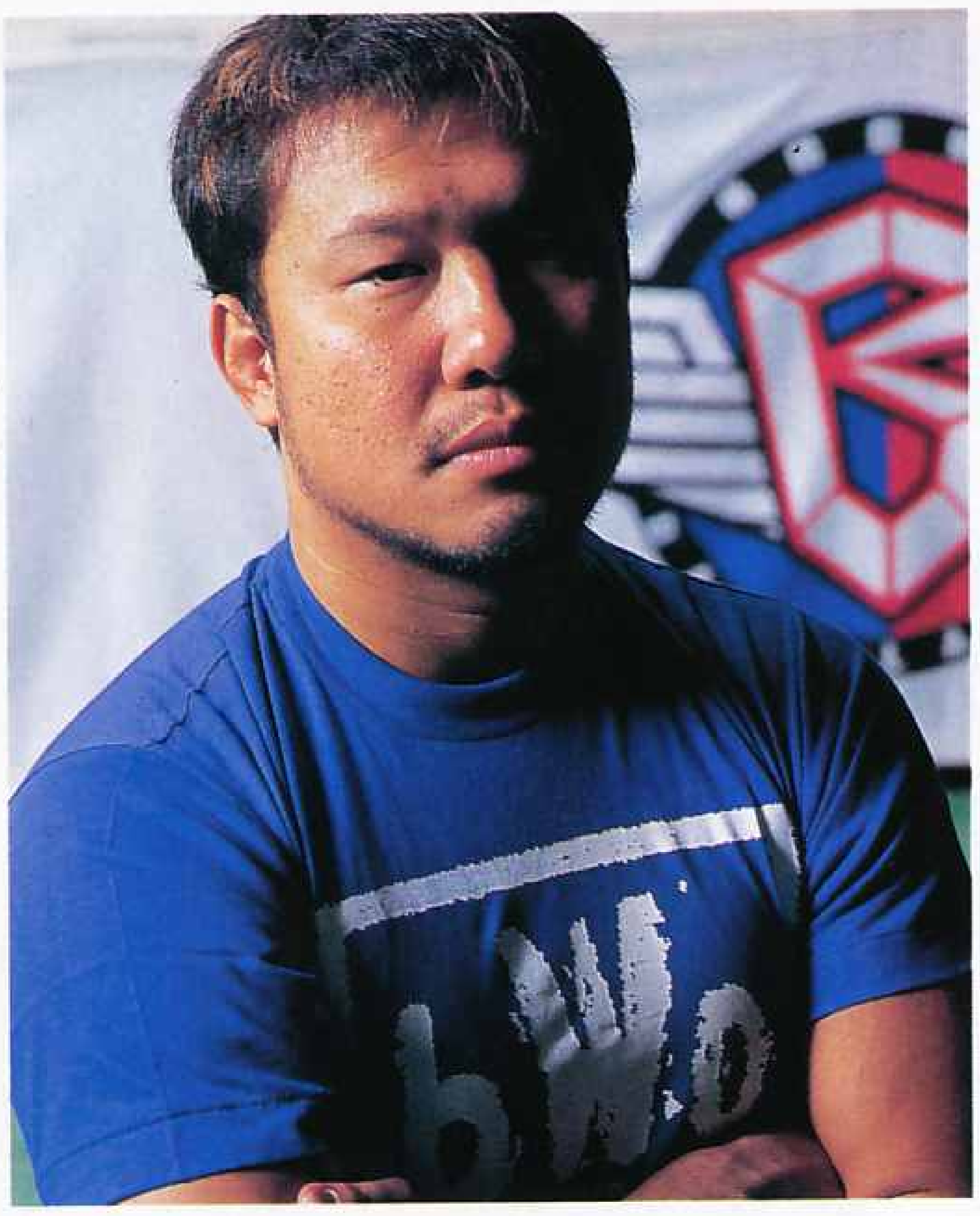
池田　これがあったんです。でも俺、これが初めてですよ、人に教えたの。小野さんには話してますけど。

――なんだ、実はちゃんと感動的なネタ持ってるんじゃないですか（笑）。

池田　やっぱりプロレスは喧嘩だと思ってますから。何をやってもいいんですよ。勝つためには！

――というと猪木さんが相手の目に指を突っ込んだりしますけど、そういうのも許容範囲ですか？

池田　当然ですね。だから普通、反則技やる人をチキンハートって言うじゃないですか、俺はでも、闘いだから殴りにいきますよ。



――技術じゃ勝てなくてもハートだけは勝つとか、そういう気概がなきゃレスラーは駄目ですよね。

池田　そうですよ。世間的には不評でしたけど、俺も垣原戦（95年末）でヒザ十字ガーッと極められたとき、ガーッと睨んだら向こうは一瞬手を離しましたしね。「やれるもんならやってみろ！」って眼でしたから（笑）。

――ちゃんといい話できるくせに、ずっと騙してましたね（笑）。

池田　やべぇ、鳥肌立ってきました、ホントに（笑）。言わないだけなんスよ。とりあえず笑いがないとダメなんですよ（笑）。だから女の子を口説かなきゃいけない場面でも、笑いを取っちゃうんですよね。

――いつもインタビューとかでも、ふざけた段階で終わっちゃう、と？

池田　そうそう、大体みんな呆れちゃうんですよね（笑）。

――チーム名も、真剣に見られるのを拒否してるとしか思えませんしね。

池田　それは照れ隠しって感じでね。

――いい魂持ってるじゃないですか。

池田　でも、伝わらないんスよね。

――伝えようとしてないし（笑）。

池田　伝えたくないっていうのがあるんですよ（笑）。だから構えてくる人じゃないと、そこまで言わないんですよ。いつも「アハハハハ～」で終わりです。みんなそういう風にしか思ってないじゃないですか（笑）。

――そういうキャラクターを、自分で良しとしちゃってるんですね。

池田　たぶん、山口昇さんならここまで言ってないですよ、俺は（笑）。

――ガハハハハハ！

池田　だから芳賀元太の言葉にある通り、「わざらしいことがリアル」なんですよ。漫画こそ真実！

――つまり、『空手バカ一代』も『エヴァンゲリオン』も真実だ、と。

池田　そうそう。だから俺、ルパン三世みたいな男になりたいんスよね。何考えてるかわかんないっしょ。

――キラリと光るナイフを隠し持った遊び人タイプですね（笑）。

池田　石川さんはレスラーは狂気がないといけないって言ってますよね。でも俺は、狂気見せるのはリングの上だけでいいと思ってるんで。

――その夢は十分に狂気ですよ（笑）。だから普段はBI砲とか適当なこと言って煙に巻こうとするわけですね。

池田　そうそう。でも、それだってやれないことはないんで。この前までは長州力選手とやりたいと思ってたんスけどね。

――それは本気だったんですか？

池田　ええ。でも、新日出れてもヤングライオン止まりじゃないですか。やっぱり喧嘩するにも頭を狙いたいし、そいつを倒せば全て終わりじゃないですか。喧嘩のルールでは。

――やっぱり格闘ケンカプロレス・バトラーツですからね。

池田　バトラーツって、ファンに一番近いレスラーだと思うんですよ。それはいいのかどうかっていう部分はあるし。それはそれでいいんじゃないかと思う部分もあるし。

――ボクも団体と仲良くしちゃいけないと常々思ってるんですけどね。下手に批判できなくなっちゃうし。

池田　でも俺はガンガン批判できるでしょ。「やる気あんのか！」とか（笑）。「マジメに喋れ！」とか（笑）。

池田　でも返ってくる言葉は「すいませ～ん」「ごめんなさ～い」で。

――ルパン三世体質ですね（笑）。

池田　そうですねえ（笑）。ああいう男に魅かれるってことは、小ずるい奴なんでしょうね。

――相手に油断させるタイプ？

池田　そうですね。思いきり真っ直ぐ行くブルース・リーより、ジャッキー・チェンが好きなんですから。ジャッキーは動くだけでも笑えるじゃないですか。昨日のライブ出てたヒップホップの連中も酔拳を真似て踊ってましたしね。指先の細かいとこまで。

――また指先ですか（笑）。

池田　やっぱりウチの試合もそうじゃないですか。指先の攻防までエヴァンゲリオンなんですよ（笑）。

【97年4月2日、バトラーツ道場にて収録】

池田大輔



失格vs結核
スーパーマッチ実現!?

「酒飲んでの藤原イズムならあるんだけどね」

レスラー失格!?

撮影／遠藤政文
photographs by Masafumi Endou
聞き手／坂井結核
interview by Kekkaku Sakai

臼田勝美

Katsumi Usuda

中野さんに鼻血のひとつでも出させてやりますよ。

臼田　何でも聞いて。何でも答えるから。

――そうですか。それじゃあ早速……臼田さんって『週プロ』の選手名鑑見ると、藤原組→フリー→バトラーツってなってますけど、他にもいろいろ経歴があるんですよね。その辺のことから伺おうかなと思うんですけど。

臼田　皿洗いもやったし、鉄筋屋もやったし、土木全般やってるよ。

――はあー、メチャクチャ絵になりますね（笑）。新日本プロレス学校にもいたんですよね？　さっき、それを池田さんから初めて聞いたんですけど。

臼田　あ、そうなの。そんなの前から言ってるのに。池田さんの前の『週プロ』かなんかのインタビューだよね。「プロレス学校は数々の人材を生み出してますけど、今のプロレス界にいる選手で、誰がいましたか？」って。で、池田さんは「サスケ選手とかUインターの金原選手とか……」オレの名前が出てこないんだよ。

――一番近くにいるのに（笑）。

臼田　で、池田さんに「オレの名前が出てないッスね」って言ったら、「いや、言ったんスよ。あとから思い出して、『そうだそうだ、臼田君も一緒です』って。でも、書いてくんないんだもん」って（笑）。

――それで次にW★INGに入るんですか？

臼田　いや。その後一回藤原組入って辞めて、ブラブラしてるときに「新しい団体が出来るけど、格闘技路線でやるらしいから参加しない？」って言われて。練習に参加したらオレが考えてたのと違う団体だなと思って、辞めようと。

――1日でですか？

臼田　2日間合宿があって、その1日目で辞めようと決意して、2日目の昼飯をみんなが食ってる時に「オレ、辞めますよ。じゃあ！」って出てきた。だから、それをあんまり経歴に入れられても困るんだよ（笑）。

――そうですよね。

臼田　だけど、旗揚げのパンフレットに載ってたらしいんだよ、オレが。

――で、次にリングスに入るわけですか。

臼田　リングスも通いで1週間くらい。

――あ、そうなんですか。

臼田　『通いでいいんだったら来い』っていう感じで前田さんから許可下りたから」っていう話で。正式な入門じゃなくて。

――前田さんには会わなかったんですか？

臼田　一回道場で会って、挨拶したら、頑張れって言われて。辞めた後も、一回ウチに電話がかかってきて、「続けたい気持ちはあるけれど、家庭の事情で続けられない」って話をしたら前田さんが「そうか、練習だけは続けとけよ。頑張れよ」って励ましのお電話をもらって。

――いい話ですね。

臼田　なかなかホロッと来る話だろ？

――今は前田さんと話したりするんですか。

臼田　こないだ（3・27）のNKホールのリングスで会ったよ。入場式の時に、「おう、アルティメットの鬼！　来たな」って声かけられて。「アルティメットの鬼って言われてるらしいやんけ」「いや、誰もそんなこと言ってないです」って（笑）。ちょこちょこって会話して、ハハハって笑って行っちゃったよ。

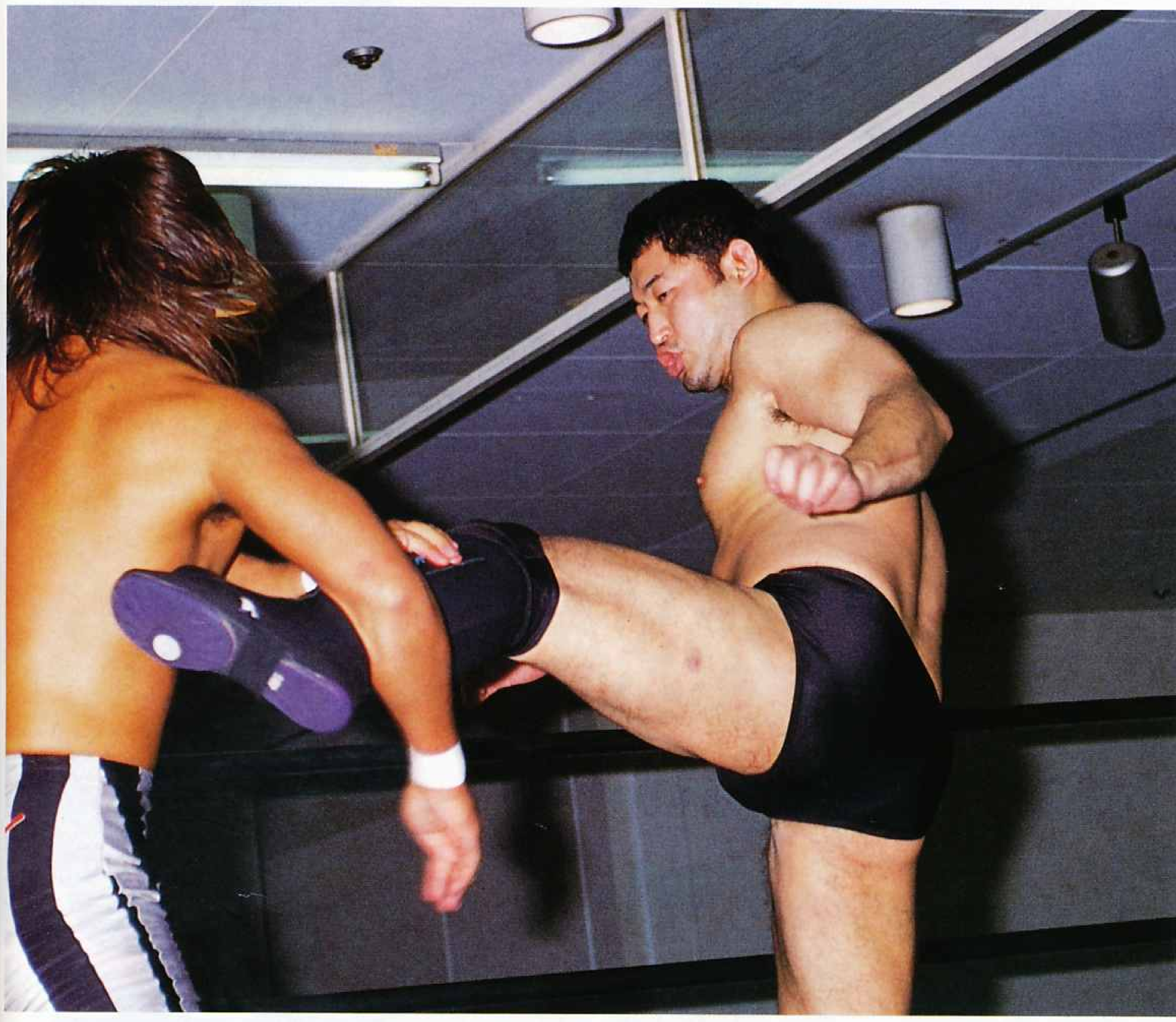
――あの日の試合とか見ましたか？　メインはいい試合でしたよね。

臼田　前田VS田村戦は刺激的な試合だったね。オレにとってはいい刺激になるな。頑張らないとなっていう気になりましたね。



臼田勝美

——で、リングスの次は正道会館ですね。93年3月のサンクチュアリで平直行選手と対戦してるんですよね。
臼田　それはこないだのリングスのときに、つのだ☆ひろさんに言われたよ。向こうが覚えてるとは思わなくて。オレは知ってるけど。オレは、最初に会場がパッと暗くなった瞬間に歌おうかなって思ってたくらいだから。
——「メェリージェェーンン！」って（笑）。
臼田　いきなり言われて、「正道会館の時に一回会ってる」って。
——印象に残る男だったんですね。
臼田　さあ？　でも、こんな話しても、どうせカットされるんだろ。
——いやいや、臼田史の中のこの辺りのことって媒体によってマチマチなんですよ。2カ月くらい前の『週プロ』の「BOYS ARE BOYS」とか。
臼田　だって、あんなの全部いい加減だよ。
——そうなんですか！
臼田　その辺の経歴をいちいち説明するの面倒臭いじゃん。今とこれからが一番自分にとっては興味があるから。だから、聞かれても適当なことしか答えてないからね。その辺で結構、向こうが勝手な解釈で。
——デタラメなんですね。
臼田　プロレス業界だからね。
——毒のある言い方ですね（笑）。
臼田　毒のある話をいっぱいするよ、今日は。
——それでは、中野龍雄さんの話しますか？
臼田　自分から「やりたいです」って言ったから。ねえ？　そのコメントを聞かれて「その話はいいです」っていうのは中野さんにも失礼だから、ちゃんとコメントしますけどね。
——本音の部分で語ると、どうなんですか？
臼田　どうって？
——臼田さんが中野さんとやりたいって言ったのは、1年くらい前ですよね、もう。
臼田　そうだね、ちょうど4月。旗揚げ戦のシリーズの浜松かな。
——なんなんですかね、この寝かせ方は。
臼田　日程がかみ合って、盛り上がってるときにやった方がインパクトがあるかなっちゅうのは……。
——そうですね。
臼田　だから、覚えてないんじゃないかなっていうのもあったけど。ま、少なくとも中野さんは覚えてくれたんだなっていうのがあるから。今度あったら、キッチリやろうかな、と。「胸をお借りします」っていう感じですね。でも、まあ「お借りします」って丁重に言いながらも、やるからには「オレが勝つよ」っていう気持ちがあるけど。
——例えば、こういう中野戦みたいに思い通りにことが進まないことがあるじゃないですか。
臼田　はい、はい。



3・14福岡の西新パレスで船木勝一と対戦。ポーカーフェイス・ソルジャーとbWoの絡みがはまった好試合。会場はすごい声援でした。

——そういうのが原因なのか、臼田さんの試合から感情があまり見えてこないなと思うんですけど。
臼田　それはだって、藤原組時代からポーカーフェイス・ソルジャーっていう変なニックネームを付けられてたくらいだからね（笑）。ポスターにも書かれたし。
——ポーカーフェイス・ソルジャー（笑）。
臼田　ポーカーフェイスじゃなきゃいけないのかな、っていうマインド・コントロールにかけられたんだな（笑）。
——そのポスターに。
臼田　知らず知らずのうちに。「そうか、オレはポーカーフェイスなのか……」って。
——ハハハ。
臼田　でもさ、最近は石川さんとかとやっても対等な意識しかないから、いいの一発もらって効いてても、効いた顔はやっぱり見せられないから。
——試合の駆け引きの上でのポーカーフェイスなんだと。あんまり観客に対してアピールは考えていないわけですか？
臼田　それをアピールしないのがむしろアピール、変な言い方だけ

格闘家に武勇伝は必要だと思ったから、曜日決めてケンカしてた。

ど。

——臼田さん、中学とか高校の頃ってケンカしてました？

臼田　高校は行ってないよ。中学出て、バイトしながら虎視眈々とプロレスラーになるチャンスを狙ってました。筋トレしかやってなかったけど。それで、夜中にオートバイ乗って騒いでる人たちのところにランニングがてらに行って、「うるせー、バーカ！」って言って。

——ハハハハハハ、すげえ！

臼田　で、ガーッと来たら、ボーンと倒して。

——でも、いいなぁ〜、プロレスラーのそういう話。

臼田　1対3でも、1人目にバーンッて膝入れて、2人目をハイキックで倒して、倒れたところにヒジ打ち入れて。で、3人目はもう頭下げて謝ってるから、その頭をボーン、ボーンってこづいて（笑）。「謝るんだったら、テメェ、はじめっから、夜中にそんなデケェ音で騒ぐな！　年寄りだって寝てンだろうが！」って。



元・ベルト泥棒、前・夢狩人、現在は正真正銘UWA世界ミドル級チャンピオンである船木勝一さんのベルトを強奪して記念撮影。

——メチャクチャいい人じゃないですか（笑）。そういう非常識な輩を見るとブン殴りたくなるわけですか？

臼田　オレも非常識と言えば、非常識なんだけどね（笑）。

——ですよね（笑）。でも、それには腕試し的な意味もあったわけですよね。

臼田　最近はどうか知らないけど、オレらの世代までの選手の中では、「格闘家＝絶対に武勇伝は必要だ」っていう公式があったから。

——それはほんとにそうですよ。

臼田　プロとかアマチュアとかでも、名前が売れていく前の段階で、ケンカをやって、そういう腕を磨くっていうのは必要だよ。

——それじゃなきゃ夢がないですもんね。

臼田　それで、よくやってましたね。一番盛んだった頃は週2回ぐらいのペースでやってたね。17歳のときは、曜日で決めて（笑）。

——バイト感覚ですね（笑）。

臼田　そしたらある日、街で突然パンチ・パーマの兄ちゃんたちが、気をつけの姿勢で、「コンチワッス！」とか言ってきたりして。で、オレも、「あ、ああ……元気？」って（笑）。

Katsumi Usuda 針の穴にラクダを通せ！ '97

礼儀正しくされると弱いんだよ。要するに、そいつらの先輩連中を殴ってたから。

——じゃあ、もう地元の顔だったんですね。

臼田　でも、ケンカは殺されても文句言えないからね。やめたほうがいいよ。

——殺されそうになったりとかっていうのは、あるんですか？

臼田　あるよ。そっち系の人とやっちゃったっていう……。

——あら！

臼田　からまれてるネエちゃんをオレが酔っ払って助けに入ったんだけど。あれは格好良かったよ（笑）。雨が降ってる中で、ブッ倒れて、額から血流して、片目潰されて、腕折られて、そんで蹴っ飛ばされて、金属バットでブン殴られてたんだから。

——ウワァァァ……。1対1だったんですか？

臼田　違うよ！　1対1だったら絶対やってるよ。3人ぐらいはノシたんだけどね、素手と傘使って。後ろから金属バットで殴りかかられて。

——あら！

臼田　「こういう奴は殺した方がいいんだ」とか言い出して、「ほんとに頭はマズいよ。死んじゃうからやめろよ」って他の奴が言ってるのにゴツンゴツ



3・13長崎のNCCスタジオでの「地味」(本人・談)な試合。余談ながら・27リングスで田中稔のセコンドに臼田はついていた。

ン殴ってるんだよ。

——それ聞いてて、意識あったんですか?

臼田　ハッキリ覚えてるよ。

——金属バットで殴られても平気なんだ……。

臼田　手術したんだけどさ。全身麻酔打つと、普通3日間ぐらいグッタリしてて疲れが抜けないはずなんだよ。その日の夜から、水飲みたいとか、やれウンコ出そうだから便所行きたいんで管を外してくれっていうのはプロレスラーくらいだって看護婦に言われた。

——レスラーは一般常識の枠に収まっちゃだめですよ。

臼田　一般常識の枠にそろそろ収まりたいよ。

——とりとめのない話になっちゃいましたね。

臼田　お前が振ってくるからじゃねえか(笑)。

——じゃあ、そういう部分も含めて、今後の臼田勝美を話して欲しいんですけど。熱い姿を是非リング上でも見たいんですよ。

臼田　中野龍雄戦で、見せれたら見せますよ。鼻血の一つでも出させようかなって思ってるんだけどね。

——博多で「中野とやれねえぞ!」っていう野次が飛んでましたね。

臼田　うるせえバカヤロウ!　って客に言ってたけどね。その野次った方角をちょっと睨んで。

——ポーカーフェイス・ソルジャーの意外な一面ですね。

臼田　まあ、あれはオチャメな一面をだな……そんな野次に本気で怒っちゃダメっていうね。ただ、シーンとした会場でどれだけテンションを上げられるかっていうのが腕の見せ所じゃないの。

Katsumi Usuda 針の穴にラクダを通せ!'97

臼田勝美

——そういう意味では長崎大会はすごく良かったと思いますよ。

臼田　長崎はオレ、地味だったでしょ?　(田中)稔さんとは、ああゆう展開にしかできかったから。オレは相手によって変わるからね。

——そういった意味ではニュートラルですね。

臼田　ニュートラルっていうのかな?　ほんとは誰とやっても結局オレの色を出して、臼田の試合だったなっていうのが一番いいんだけど。藤原さんは、誰とやっても藤原喜明の色を出して、負けても勝っても光ってるしね。

——自分も光るし、相手も光らせる。

臼田　でも、よく考えるとあの人はすごく地味な技しかやってないんだけどね。

——そうですね。

臼田　でも、それは藤原さんしかできないからな。

——そういう意味の藤原イズムは、臼田さんから匂い立ってきますよね。

臼田　酒飲んでの藤原イズムはあるんだけどね。

——さっき言ってた地味な技で自分も光って相手も光るっていうのは……

臼田　それは自分があるからだろうね、ちゃんと自分のキャラクターが。

——一本の芯があるんでしょうね。

臼田　藤原さんもよく言ってたからね「早く自分を作らなきゃだめだ」って、「昔のレスラーっちゅうのは、自分で

人間はいつ死ぬかわからない。だからオレは酒を飲む！

自分を作ってた」って。だから、藤原喜明の真似してもしょうがない。でも藤原さんを真似てプラスになるところは自分なりに真似てきたつもりだし、それにプラス・アルファ……。

――臼田勝美の色をつけていくわけですね。

臼田　だからよくUスタイルとかB系とかバチバチとか言ってんじゃん。そんなの関係ないよ。

――結局は個人ですからね。

臼田　臼田スタイルを早く作らないと。つまるところは、そんなもんだよ。日高は日高スタイルを作ればいいし。船木さんは船木スタイル作ればいいし。

――結局、プロレスラーは個人商売なんですね。

臼田　じゃないとつまらないでしょ。バレーボールじゃないんだから。

――その人なりの考え方とか人生が投影されて、初めてプロレスになるんじゃないかなと思うんですけど。数字が多いから勝ちっていうもんじゃないんじゃないですか。

臼田　まあね。試合に勝って勝負に負けるとかね。試合には負けたけど勝負には勝つとかね。

――じゃあ、そんな臼田イズムっていうのは、なんですか？

臼田　……。

――まだ、言葉にできる段階じゃないですか？

臼田　まだ、正味キャリア3年半でね、イズムを語っちゃいけないね。よくわかんないよ。プロレスは奥が深いから。だから面白いんじゃないの？　そんなに簡単だったら、もう飽きてるよ。引退してるよ（笑）。

――まだ、辞めないでください。

臼田　人に言われたって、辞めるときは辞めるよ（笑）。試合で怪我して、会社に「カタワは使えないから、いらない」って言われたらそれまでだからね。そういう商売ですよ、所詮。人間はいつ死ぬかわからないからね。だから、オレは試合が近いときで、酒控えなきゃいけないときも、飲んじゃうんだよ。

――なんでですか（笑）。

臼田　「今、飲まないと明日の朝、生きてるかどうかわかんないから、飲んじゃおう！」っていうタイプなんだよ。

――「あした」がないんですね。

臼田　そう、そう。「あした」が確定してないから。

――その場、その場で生きてるんですね。



酒の席では誰もこの男にはかなわない。酔っぱらって石川社長を土下座させた前科を持つ危険な男である。

臼田　一応、プランとかビジョンとかは持ってるよ。持ってるんだけど、その通りにはなかなかならないよ。

――不確定要素を残しておこうと。

臼田　だから、面白いんじゃん。どう転ぶかわかんないから。思いもよらないようなことが起こったりとかして。意外なアクシデントで思っていたのと全然違う方向行って、大失敗っていうのもあれば、そこから大成功っていうのもあるし。だから、楽しめる時に楽しむっていう。

――酒の席以外でも感情溢れる臼田勝美が見たいんですけど。

臼田　っていうか、頭ブッ壊れてるから感情表現はムリだね。涙も枯れ果てたね、もう。

――キャリア4年で（笑）。

臼田　太宰治って感じでさ。死ぬことばっか考えてる。

――玉川上水から身投げでもしますか？

臼田　それにしても「生まれてすいません」はねえよな（笑）。

――失敗に失敗を重ねて、さらに自殺まで失敗したり（笑）。

臼田　レスラー失格（笑）。

――そういう本をね……（笑）。

臼田　まあ、書かないんだけどね。

（4月2日、埼玉県越谷バトラーツおんぼろ道場にて収録）

平成9年4月12日は私とA・猪木との連帯の日である

ターザン山本

4月12日の夕方、私はJR水道橋の駅まで来ると、そのまま後楽園ホールに直行した。全日本プロレスの後楽園大会を見るためである。同じ時刻、東京ドームでは新日本プロレスが興行を打っていたが、私はドームに行くわけにはいかないのだ。

ホールの西側の花道の奥で菊地毅選手と会った。「え？　山本さん、ドームに行かないんですか？　またあ、そういいながら橋本―小川戦の時間になると、ホールを抜け出してドームに行くんでしょう？」とからかわれた。

その直後、今度は『週刊プロレス』の市瀬記者と会った。市瀬記者は「小川が勝つとやばいですね。もし勝ったらやっぱり新日本はたいしたもんだなと感心しますよね」というのだ。

何がやばいかというと全日本がである。さすが"全日本が命"の市瀬記者、本当に心配そうな顔をしていた。しかし、一方では小川が橋本に勝って、新しい渦と流れが起きることを市瀬記者は期待しているのだ。

まったく可哀想な男である。

全日本のメインはチャンピオン・カーニバルのリーグ戦、川田対小橋戦だった。30分時間切れの引き分け。場内には"ぜんにっぽんコール"が発した。それぐらい2人の試合はハイレベル、ハイテンションだった。

その時である。誰かが私に「小川が橋本に勝ったぞ！」と言ったのだ。私は「やられた！」と思うと同時に「よし、それでいいんだ！」と心がおどる思いだった。

3人の少年ファンが私の前にやってきて「全日本って素晴らしいですよね」と話し掛けてきた。ああ、そうか、これでまた明日のスポーツ新聞のプロレスの記事は、小川一色で川田―小橋戦は落とされるのか？　そう思うと全日本ってせつない団体だよなと、悲しくなった。



市瀬記者同様に私の心も複雑になった。ホールを出るとレッスル・マニアのツアーの常連とバッタリと会った。彼らは新日本のドームに行っていたのだ。9人いたので私は焼肉を食べに行こうと提案した。

水道橋から飯田橋まで歩き、さらに大久保通りを30分ばかり我々は歩いた。途中で私の携帯電話が鳴った。A氏からだった。彼は私をライバルと考えている人間である。

「今日という今日は、A・猪木の凄さをみせつけられましたよ。やっぱりプロレスはリスキー（危険）な連中がやるもんですよ。これでターザン山本の復活もみえてきたんじゃないですか？」

前の日、『リン魂』が「朝まで生テレビ、最強は誰か？」という討論会をやったが、テリー伊藤氏など参加者の多くは「小川が橋本をぶちのめさなかったらプロレスはもう終わりだ！」と言いあった。

小川を好きだとかそういう問題ではなくて、とにかく今のプロレスをぶち壊して欲しいという気持ちになっていたのだ。小川と橋本の両方に強く感情移入するものはないが、何かを壊して欲しいと願っていた。

A・猪木の復権はなった。

長州力ではもう新しい時代をデザインすることはムリである。長州力はターザン山本をプロレス界から追放することで、彼のプロレス人生を自己完結してしまったからだ。

そう、されど時代は動くのだ。

私がマット界にいようが、いまいが時代はどんどん変貌していく。つまり、私の役割もすでに終わっているということである。

だが、今日という日が週プロを辞めて一番、気持ちがよかったこともたしかだ。なぜならリスキーなA・猪木が復権したからだ。

焼肉を食べていたら今度は、K―1の石井館長から電話があった。「山本さん、プロレスっていいですね。ファンの人がみんなプロレスに対して優しいじゃないですか？」。

私はピンときた。石井館長も小川が勝ったことに衝撃を受けていたのだ。それでこそ「ライバルは生きている」なのだ。

私は平成9年4月12日をA・猪木との連帯の日と位置づけたい。

RADICAL COLUMN

針の穴にラクダを通せ!

山口昇

世の中には知らないことがたくさんある。数の子は、またの名を「かずかず」ともいうらしいのだ。

不思議な呼び名である。

不思議といえば、失読症という、文字が読めなくなる病気があるらしい。

なんでも、大脳皮質の一部である「角回」という場所がブチ壊れると、文字が読めなくなるそうなのだ。

この「角回」が壊れると、外国の人たちは文字全部が読めなくなるという。ところが、日本人の場合は、ひらがなやカタカナの「仮名」は読めなくなるが、なぜか『漢字』だけは読めるらしいのだ。だから新聞を読んでも「仮名」の部分が抜けて穴ボコだらけになる。まったく、驚くべきことではないか。

で、どうやら日本人の場合、文字を読むときには、二カ所の別々の脳を使うらしいのだ。

「仮名を読む用」と「漢字を読む用」では使う脳が違うのである。

一方、外国の人たちは文字を読むときには一カ所の脳で読み、日本人が「漢字を読む用」に使っている脳は他のなにかに使っているらしい。

例えば漢字は、「外」という文字の下に「界」と付ければ「ゲカイ」と読み、「りる」という送り仮名を付ければ「オりる」、「れる」を付ければ「ハズれる」と読む。音読みと訓読みというのもあって、「外」の場合でいうと、音読みは「ガイ」「ゲ」、訓読みは「そと」「ほか」である。

中国など漢字を使う国はあるが、読み方はあくまでも一つしかない。しかし日本の場合は、「妻」と書いて「おんな」と読んだり、「女」と書いて「なおん」と読むことさえ可能である(ちなみに編集部では「中村」と書いて「ダメおやじ」と読んでいる)。

つまり、外国の人が他のことに使っている脳の容量を使いきるほどに、『漢字』というものは複雑で奥行きのある世界だということだ。

こんな国は世界広しといえども、日本しかない。

ところで、いままで『漢字』について語ってきたことは『プロレス』にもピタリと当てはまるということを、本誌の読者ならすでにお気づきだろう。もしお気づきでない場合は、たったいまから「読者」と書いて「ばか」と読むことにする。

アメリカから輸入されたプロレスを、我々は「漢字に使う用の脳」の周辺にある脳をフル稼働させて読んできた。

日本のプロレスには様々なスタイルがあり、読みようによってはいくらでも読みようがあるというのも、この「漢字に使う用の脳」に由来があるのかもしれない。

『プロレス』の音読みは、「ババ・プロレス」「ゼンニホン」、「アメリカン・スタイル」。

訓読みは「イノキ・プロレス」、「シンニホン」、「カクトウギ」である。

訓読みプロレスにあって、音読みプロレスにないもの。それは激しい「前座」の世界である。

「前座」とは、目をつぶっていても針の穴に糸を通せる技術を道場で学びつつ、試合では針の穴にラクダを通すかのような気迫を出して、上を狙っていく世界でなければならない!

しかし残念ながら4・12ドームには、第1試合、第2試合はあっても、「前座」がなかった。

新日本プロレスが、ここ数年徐々に音読み化していくことで、プロレス界全体が音読みプロレスになってしまったといってもいい。

プロレスが一つの読み方しかできなくなったら、それはもはや日本のプロレスでなくなってしまう。

小川直也の勝利と、いまのファンには物足りなかったであろう猪木vsタイガーキング戦は、そんな視点からみていくと、実に意味深いものがあるのである。

つづく?・?・?



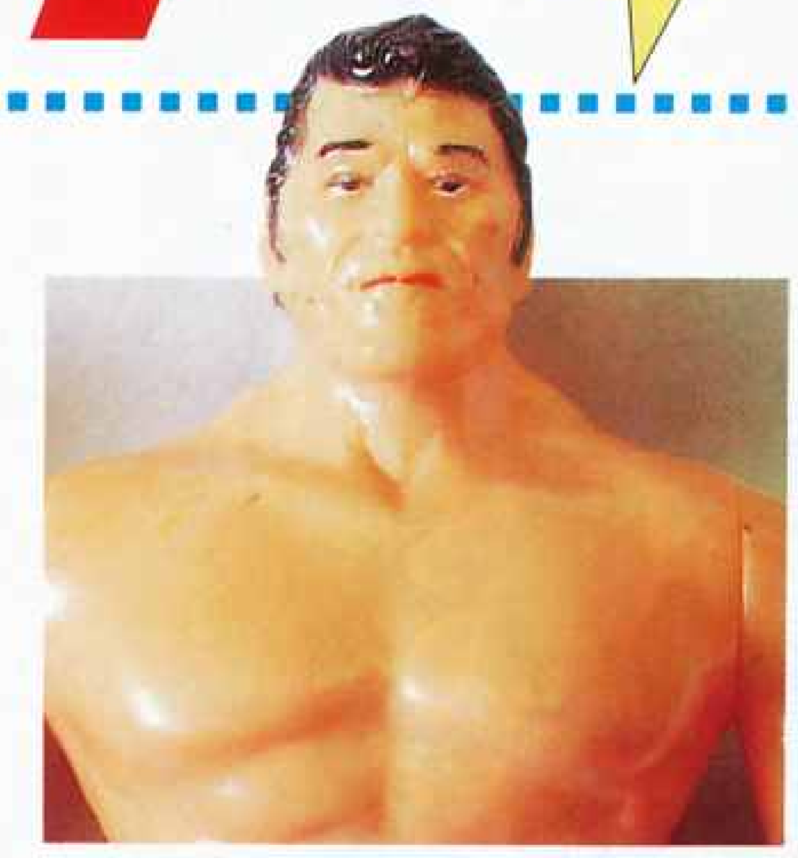
イラスト/のものも

もうすぐ梶原一騎没後10年追悼特集!!

スゲーかっこいい■プロレスの■フィギュア

S.P人形W.F

突然ですが、
時流に乗ってみました!
どーですか、お客さん!



「さらばアニキ」とばかりに劇画王・梶原一騎が真っ白に燃え尽きてから、もう10年になる。梶原は、我々に膨大な数の素晴らしすぎて男泣きするような劇画を残してくれた。そしてポピーのプロレスラー人形や中島製作所のタイガーマスク人形まで我々に残してくれたのだから、もはや劇画王、ならぬフィギュア王と言っても過言ではないのである。つまり、いま巻き起こっているフィギュアブームも、実は裏で梶原が糸を引いていると考えて間違いないのだ。「これは事実である!」(原作者)とすれば、我々が梶原の追悼記念にプロレス・フィギュア特集を組むのも、至極当たり前の話。友よ、愛する読者諸兄よ、梶原一騎のゴージャスなる「フィギュア最強・最後の晩餐」に堪能せよ!

初代タイガーマスク改名記念
さらば! タイガーマスクの部



タイガーマスク

どう見ても猫というか中国みやげチックな、覆面のトラさん。虎柄パンツ着用で額にマークのないオリジナル版は、佐山タイガー(新リングネームはブタイガー?)を見慣れた目には、ちょっぴり不自然。まあ原作版Ⅱ世も初期には虎柄パンツだったんだが。



伊達直人

とてもじゃないが虎の穴で過酷な修行に耐え抜いた黄色い悪魔だとは思えない、ちびっこ丸出しの表情がキュートなちびっこハウス出身者・キザ兄ちゃん人形。キッチリ固めた七三分けのあぜ道カットと、ほんのり赤い頬も実にイイ。



タイガーマスクⅡ世

背中のボタンで腕と足が連動する、ゴングとトロフィー付きⅡ世人形(ポピー)。「力が正義ではない。正義が力だ!」という、佐山にはどう考えても不似合いなキャッチフレーズや、スポーツ新聞のプロレス記者が正体というどうにもバレやすすぎる設定が魅力であった。

頑張れ、ボクらのバーガー・キング、もといタイガーキング!

梶原一騎のチビっ子向け代表作といえば、もちろんこのタイガーマスク(Ⅱ世はあまりにもチビっ子騙しだったので、ここではほとんど触れず)。そしてプロレス好きヤングのチビっ子センス溢れるハートを鷲掴みするのも、これまたタイガー・ウッズ、もといタイガーグッズなのである。

ここで紹介するのはすべてフミ斎藤御用達『ワイルド・コムズ』のバンドもできる覆面店長、性獣ショットガン・ライガー氏の個人所有物。

これらはウルトラマン系の怪獣ソフビほどレアでもなくマニア人口も多くないため、相場は初代タイガーで1万2000円、ミスターXで8000円、ナゾの魔人で1万円、他は全品5~6000円程度。足の裏に持ち主の名前が書かれてたりするともっと安いが、マニアならタスキ付きの完品で揃えたいものだ。

ちなみにこの店長は取材後、「2万までなら出す!」と豪語していた幻のコンビクト入手に成功したとのこと。おめでとう、性獣店長!



リング

覆面ワールドリーグ戦専用の、草も木もない四角いジャングル・リング(あおやま英雄)。ザ=スカルスターで遊ぶときには、部屋の電気を消すように。数字の書かれたマットから凶器が飛び出すギャンブル・デスマッチ用リングも欲しい。



技かけタイガー

ポピー製のガチャガチャ消しゴムに着色した、激レア物。宇宙プロレス連盟(ワカマツ?)の刺客に、タイガマン(島田宏?)もといタイガーマスク二世(三沢?)がタイガースープレックスならぬジャーマンを決める珍品。パイ・ピンピン。

格闘技の祭典10周年記念

タイガーマスク悪役完全コレクションの部

ー1



ナゾの魔人

もはやカタログにも載っていない、誰も知らない知られちゃいけないナゾの魔人。要するに虎の穴を牛耳りミスター＝Xを操る、3人の支配者人形なのである。要するにアニメ版に登場するビッグタイガー、ブラックタイガー、キングタイガーのことね。

ミスター＝X

「エックスで〜す」（高野拳磁）などと、プロレス界にXは数多く（近頃ではスーパー・ライガー）、女子プロ界にXジャパン愛好家も数多いもの。ちなみに、このXは職業プロモーターで人さらいの、誰がどう見てもウサン臭すぎる闘う極悪人である。

ミスター＝ノー

これまたウサン臭すぎる、人間離れした体格のレスラー。頭上に鉄球を乗せ、覗き穴を見ながら全身タイツで試合していたと暴露されるが、この視界も狭く呼吸も困難な衣装で、頭上に鉄球を乗せてもバランスを崩さないのは、ある意味で天才的だろう。

ザ＝グレート＝ゼブラ

大きいことはいいことだが、大きすぎるのは考えもの。アンドレ扮するジャイアントマシーンの正体が一目瞭然だったように、馬場さん扮するゼブラもまた、あまりにも一目瞭然であった。それにしても、みちプロのゼブラの正体は誰だ？　やっぱり一目瞭然？



ブラック＝シャドー　ブラック＝バイソン　キングサタン　ザ＝エジプトミイラ　ザ＝ライオンマン　ザ＝スカルスター　ミスター?

●ここに掲載してあるタイガーマスクグッズの問い合わせは［1］



ゴルゴダ＝マスク　ザ＝ドラキュラ　ミスター＝カミカゼ　ザ＝レッド＝デスマスク　ザ＝ピラニアン　ザ＝ゴールデンマスク



ザ＝コンビクト（今回ナシ）　ゴリラマン　ユニバーサル＝マスク　ジキル＝アンド＝ハイド　バイキング＝キッド　デビル＝スパイダー　ミラクル3

訃報はゴッチから聞いた記念
さらば！ ビル・ミラーの部

某所でのおもちゃショーで、坂口征二人形を発見したときの衝撃は、正直言ってかなりのものであった。無性に欲しい。だが、高すぎる。吉村道明人形はまだ安いが、あまり欲しくない。とにかくそんな葛藤に悩まされたものなのである。結局、買わなかったんだけどね。

日本プロレスのソフビには猪木や馬場の存在も噂されるが、残念ながらまだ見たこともない。これらのコレクターがもし存在するのなら、ぜひとも取材させていただきたいと心から思う次第である。



坂口征二

いまはなきブルマァク製、世界の荒鷲ビッグ・サカこと、さかぐちせいじ人形。ちょっと顔的には吉村道明入っているが、それでもいい。未開封の完全ミント状態で3万8000円と無茶苦茶高いが、無茶苦茶欲しい！→［4］



ミスターX
（ビル・ミラー）

シスターMではなく、ミスターMとしても活躍したX人形（ブーツなしで1万円）。『狂った獣医』という決して世話にはなりたくない通り名で知られた彼氏は3月に死んだが、人形は不滅なのだ。なお「YとZの人形も実在する！」との噂。→［2］

ビッグ・サカを緊急GETせよ！



安生洋二　船木誠勝　武藤敬司　獣神サンダーライダー　北尾光司

キングダム
王国旗揚げ記念
ガチャ王の部

ゲームセンター以外では入手不可能なためか、発売後1年近くになるのにまだプロレス雑誌で紹介されたこともないガチャ王（通称・ガチャ・キングダム）人形。不可解極まりない人選、ライガー以外は誰が誰だかわからない造形など問題は多いが、ヤな感じの二等身人形ばかりが横行するプロレス業界では、一服の清涼剤と言えよう。それにしても安生、関根勤顔です。

売ります！

本誌特約カメラマンの斉藤ユーリ氏特製、猪木&ジャッキー人形。「2〜3000円で売る！」とのことだが、どうですか！







長州力

ジャパンプロ特製の長州貯金箱。なんと小林邦昭や谷津嘉章貯金箱も存在したのだが、いまや入手超困難。→［3］

ザ・デストロイヤー

キュートな表情と「朝、剃ってきたんだけど」と言いたくなる剃り残しのような胸毛がたまらない、デストロイヤー貯金箱。デストロイヤー・ファンクラブ会長宅や、W★INGのTシャツデザイナー宅にもあるとか。→［3］





ハルク・ホーガン

『ダディーほーがん！』というか、ちょっとローランド・ボック入った一番貯金箱。おすましポーズです。→［3］

とっくに引退してるじゃねえか記念
さらば！ デストロイヤーの部
貯金箱編

S.P人形W.F

吉本入り&パチパチパンチ記念
さらば！ブッチャーの部

ハリー・レイスやダスティ・ローデスなど渋目のラインナップが魅力だった、ポピーの梶原一騎プレゼンツによるソフビ人形シリーズ。
いまや入手超困難のため1体1万円程度にはなっているわけだが、造形レベルはこんな程度。タイガーマスクのようにディフォルメしちゃった方がゴキゲンだったような気もするが、これはこれで非常に良し！メキシコ製のルチャ人形みたいに色だけ塗り替えたようなインチキ人形とは、元から志ってもんが違うんです！でしょ？

ミル・マスカラス
ビリー・ミリガンをも越えた千の顔を持つ刑事貴族、もとい仮面貴族なだけあってプライドだけは高い彼氏。これで付け替え用のオーバーマスクもあれば、幸せなんだが。→［私物］



アントニオ猪木
とてつもなくマッチョバディーでボンバイエな、我らの猪木人形。去年、細身になって肩幅も狭くなって足も長くなって、ついでにパンツの履き込みまで深くなって再発された。→［私物］





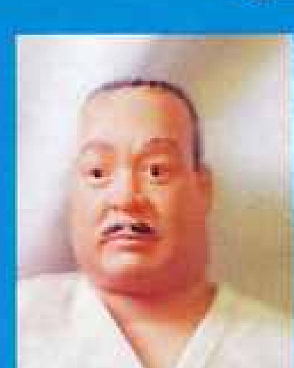


ボブ・バックランド
あまりにも魅惑的なボブ・スマイルゆえ、思わず船木じゃなくてもミサイルキックを喰らわせたくなるボブ人形。さすがアメリカが誇るとっちゃん坊やというか、オヤジ坊太郎というか、ガキ親父である。→［私物］

アブドーラ・ザ・ブッチャー
先日、吉本の海外公演に乱入してパチパチパンチを披露したブッチャー人形。どちらかというとキラー・トーア・カマタにしか見えないのは、靴のトンガリが不足気味ゆえなのか。→［私物］

力道山ゆかりの男からパチパチパンチの芸人まで





ハロルド坂田
力道山にプロレスを教え込み、「007」出演によって日本人（日系二世だが）で初めて海外でフィギュア化された伝説の男。くれぐれも言っておくが、水野晴郎ではない。→［私物］





ハルク・ホーガン
昭和58年頃出回った、ニットー製の巨大な無色超人ソフビ。どうにも塗り甲斐のない（特にパンツ周辺）人選である。→［3］



アステカイザー
ジョージ高野マニアには嬉しい、『サムライ!』加入者には嬉しくないアステカイザー人形。入手は非常に容易だし、値段もそんなに高くないブツ。→［3］



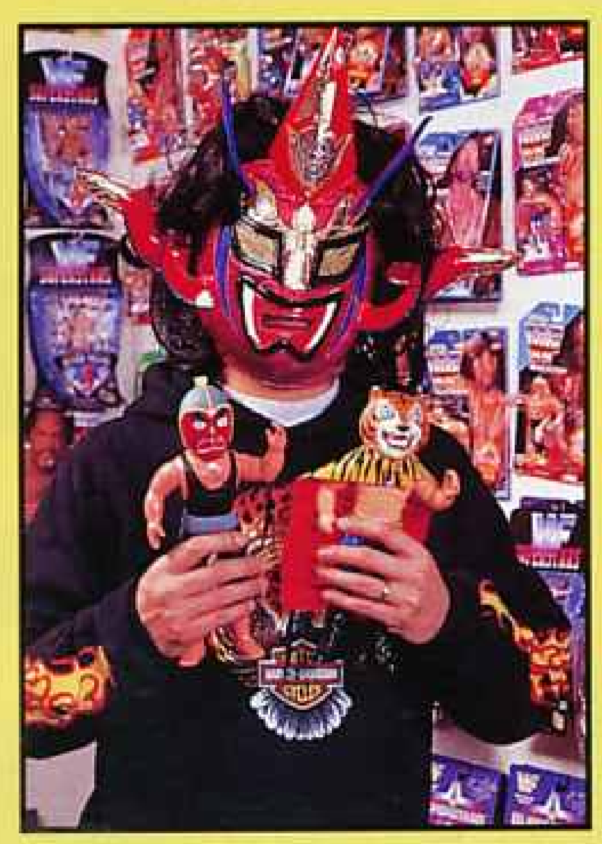
ドリー・ファンクJr.
先日、ダン・スバーンとNWA戦を行い、30分時間切れ引き分けながら内容では勝ったというドリー。ただの老人ではない。→［私物］



アンドレ・ザ・ジャイアント
木こり出身の、いまは亡き巨大アンドレ（通称・デカブツ君）人形。雑誌『アントレ』（アントン・トレーディング?）とは無関係。→［私物］

ゴチャゴチャ言わんと、一度店に行ってみたらどーだい？

［1］ワイルド・コムズ（高円寺）



バンドもやってる性獣ショットガンライガー店長。いい人です。現在、お店には覆面ワールドリーグ戦のフィギュアが比較的揃っているとのこと。アメプロのフィギュアも充実している。
〒166東京都杉並区高円寺南4-42-4 広門ビル2F
TEL. 03-3315-4161

［2］ゴジラや（高円寺）



取材した日はプロレスフィギュア・マニアの常連さんが情報交換してました。元々は居酒屋だったお店。店長の木澤さんが気さくに応対してくれます。いい人です。
〒166 東京都杉並区高円寺南3-67-1
TEL. 03-3336-3178
FAX. 03-3223-6034

［3］キャプテン・コレッキー（水道橋）



今回、取材したフィギュアは全て店長の丸山さんの私物。プロレス好きが高じて後楽園ホールの目と鼻の先に店を構えてしまったとか。顔は怖いが、紙プロを愛読するいい人です。「買い取り強化中なのでよろしく」とのこと。
〒101東京都千代田区三崎町2-15-2-2F
TEL.&FAX. 03-5276-2524

［4］さあどあんくる（小岩）



『世界の荒鷲』のフィギュアはここで発見。タイガーマスクのフィギュアも充実してる。撮影には秋葉店長の代理としてビッグ・サカに登場してもらいました。いい人です。
〒133 東京都江戸川区西小岩3-34-8 西小岩シャトーハイツ1F
TEL.&FAX. 03-3659-5545

構成・坂井結核　作文・吉田豪



by NOMONOMO

GIRLS ARE GIRLS SPECIAL

撮影／遠藤さん
photographs by San Endou
聞き手／のものも
interview by NomoNomo

恋話（こいばな）!!

プロレス専門誌では
絶対に読めない!!
工藤めぐみ、
引退直前の……

LOVE LOVE KUDOME

下の子の話すると涙もろくなっちゃうんですよぉ。初めて子供の運動会見に行く、お母さんの心境って感じですか（笑）



96・12・23の『工藤めぐみX'masイベント（ビデオ「Squll」発売記念）』では、ののももが司会を担当したんだよ。この時が、初対面だったんだぁ。楽屋が一緒だったんで、実は着替えを手伝ってあげたのだ。くどめ'Sサンタの衣裳のチャックを上げたんだよ。ムフフ、いいだろぉ～。

ののもも　お久しぶりですぅ。

くどめ　イベント（96・12・23のビデオ発売記念トークイベント）の時はお世話になりました。

ののもも　引退前にこうやって、ちゃんと会えてうれしいですぅ～（笑）。

くどめ　アハハハハ、私も～（笑）。

ののもも　でも、もうホント、引退まで秒読み段階ですよね？

くどめ　そうですね。こないだ、たまたまカレンダー見たら3・29だったんですよ。それまで日付を気にしたりってなかったんですけど、その時初めて「あ、1ヶ月後なんだ」って意識しましたね。

ののもも　実感出てきた？

くどめ　うん、実感はありすぎるほど、ありますね。

ののもも　今日みたいに、取材で引退のこと聞かれるから余計そうでしょ？　忘れてたのに、思い出させやがってぇ～って感じ？（笑）

くどめ　そんなことないですよぉ（笑）。

ののもも　ところで、やめたらどうするんですの？

くどめ　全く考えてないんですよぉ。

ののもも　ゼロからのスタートだぁ！

（笑）

くどめ　うん、とりあえずいまは引退試合のことで頭がいっぱい。先のこと考える余裕ないです。

ののもも　相手はシャーク土屋選手で決定？

くどめ　私の中では決定です。

ののもも　でも、意外だったですよ。絶対、他団体の同期の選手だと思ってたもん。

くどめ　うん、いろいろ名乗りを上げて頂いたんだけど、私の中で、一番最終決着つけなきゃいけない相手は土屋なんで。

ののもも　うぉ～、最終決着！　そして、また『電流爆破デスマッチ』をやるわけなんですね？

くどめ　私的にはやりたいと思ってます。

ののもも　個人的に、2度とやってほしくなかったんだぁ、本音言うと。特にくどめさんは……。

くどめ　賛否両論ありましたからねぇ。自分でも2度とやらないだろーなって思ってましたし。

ののもも　昨年のその『電流爆破マッチ』をやった試合、つまり豊田選手の引退試合で、くどめさんも引退を決意したわけですよね？

くどめ　そうですね。その辺りから考えてはいましたね。

ののもも　でも、ズバリ言って、くどめさんから下の選手って、まかせるにはまだ早いってカンジがするんですケド……。

くどめ　うん、そうですね。まだ完全な形じゃないですよね。でも完全な形になってからじゃダメなんですよ。そもそも引退を決意したのも、私のポジションを下の子に明け渡してあげたいっていうのが、一番の理由だったんで……（ホロッ）。

ののもも　下の子の話になると、くどめさん、泣きそうになっちゃうんだぁ……。何か、私も泣きたくなってきちゃった……（涙）。

くどめ　ダメなんですよぉ、下の子の

●●●●● くどめ・キューティー笑顔3連発!! ●●●●●







話になると、涙もろくなっちゃってぇ（笑い泣き）。心境的には、お母さんが子供の運動会を初めて見に行って、その姿見て感動して泣いちゃうって、そんな感じなんです（笑）。引退決意して、自分のことより、周りに対して涙もろくなっちゃってぇ。

理想はプロレス辞めたら、即、結婚なんですけどね～

のものも　でも運動会見に行くお母さんってのは……。お姉さんくらいにしときましょうよぉ（笑）。くどめさん、自分の性格を分析すると、けっこう悩みを抱え込んじゃうタイプなの？

くどめ　期間短いんですけど、ドーッと悩むだけ悩んで、後はスッキリ。

のものも　1週間くらい悩むだけ悩んで、泣くだけ泣いたら、後はスッキリィ～？（笑）

くどめ　ガーッと悩むのは3日間くらいです（笑）。あとね、考えてるようで実は考えてないタイプ（笑）。

のものも　えっ!?　くどめさんって何型だったっけ？

くどめ　AB型ですぅ。

のものも　私も～。一緒だぁぁぁ、うれし～（笑）。AB型って、潔いよねぇ（笑）。考えるだけ考えて、あとはスッパリ、はい、じゃあ次！　って（笑）。



意気投合した私たちは（って思ってるのは、のものもだけ？）、対談後、お互いの携帯電話の番号を交換しちゃったのだぁ。ムフフ、いいだろぉ～。

くどめ　そうそうそう。

のものも　恋愛に対してもそう？

くどめ　う～ん、AB型って「理想が高い」とかってよく言うけど、そんなこと全然ないですよ。でも、経験がそんなにないですからぁ（笑）。

のものも　あらぁ～、かわされたぁ（笑）。直感型で恋愛する方？

くどめ　そうですね……、うん。波長をすごく大事にします。

のものも　私もぉ～、何よりも波長を大事にするぅ（笑）。じゃあ想う方、それとも想われる方？

くどめ　前は想われる方だったんですよ。最近、想う方もいいなって思うようになったんですけど……、でもやっぱり想う方がいいな。のものもはどっちがいいですか？

のものも　のものもは想う方がいいな。でも、くどめさんはモテモテじゃないですかぁ。

くどめ　モテないですよぉ、ちっとも。

のものも　少なくても私よりはモテてますぅ！　って何ムキになってんだぁ（笑）。でも、プロレス業界って女子少ないし……。

くどめ　業界の人は忙しいみたいじゃないですかぁ。

のものも　うん、そうかも。じゃあ同じレスラーってのは？

くどめ　う～ん、でも心配ですよね、気持ちもわかるし……。あと、プロレスの悩みが話せなくなっちゃうかなぁって。

のものも　う～ん、そうだねぇ。でも心配な気持ちってのは、つき合ってる

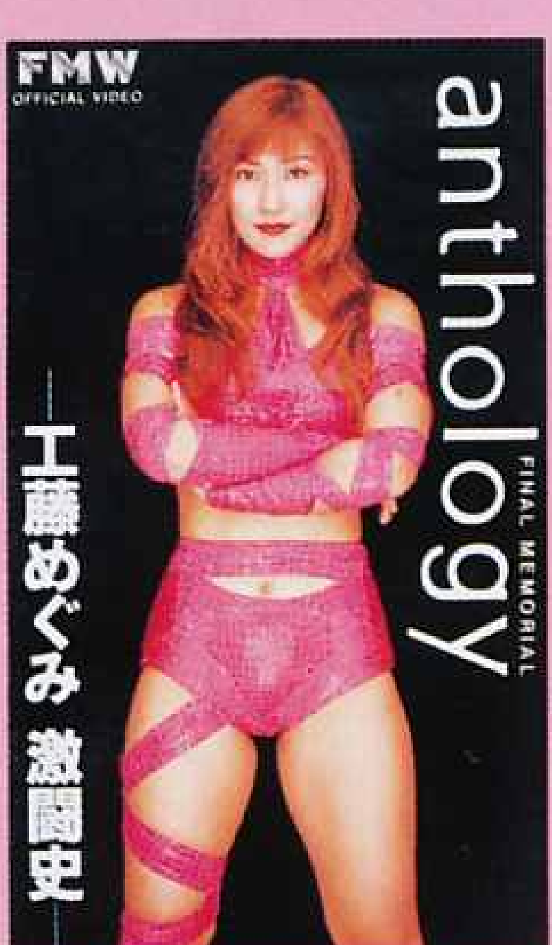
相手の方が強いと思うよ。あっちは男子、くどめさんは女子なわけだし。
くどめ　うん、でももし「心配だからプロレスやめろ」って言われても困っちゃうし、そういうこと言う人とは、まずつき合わないですから（笑）。
のものも　普通女子が「私と仕事どっちが大事なの⁉」って言うのにねぇ（笑）。仕事と恋愛は両立できるタイプ？
くどめ　あくまでも過去の話ですけど（笑）、両立できるつもりです。
のものも　恋愛の話って他の選手に相談したりするの？
くどめ　私、人の話聞くのは好きなんですけど、自分の話はしないんですよぉ（笑）。
のものも　うわっ、ズルゥ～（笑）。じゃあ私も話すから、くどめさんも話してよぉ（笑）。
くどめ　アハハハハハ。
のものも　じゃあちょっと心理テストしていいですかぁ？　あのね、くどめさんはお天気リポーターなんですね。で、台風で、風はびゅんびゅん、雨はザーザー、そんな中、外でリポートをしなくちゃいけないの。格好は上から下まで完全防備なんだけど、終わったらどの程度まで、自分の身体濡れてると思いますぅ？
くどめ　完全防備なんですよね？　じゃあ裾と手首がちょこっとだけ濡れてるくらい。
のものも　ぐふぅ～。これはね、浮気度チェックなんですよぉ。ズブ濡れって言ってたら、浮気しまくり～ってことだったの（笑）。
くどめ　よかったぁ、ズブ濡れって言わなくて（笑）。
のものも　「ほとんど濡れない」ってことは浮気の心配はないってことだね。私も「ほとんど濡れない」って答えたんだぁ（笑）。って何自慢してんだか（笑）。でも、それで自分が一途だって気付いたの（笑）。心理テストで自分を知ったなんて……、バカだね（笑）。
くどめ　うふふ。でも女の人はその方がいいんじゃないですかね。
のものも　そうかなぁ。でも度が過ぎると重たくなっちゃうから、加減が難しいんですよねぇ。ところで、結婚願望はあるのぉ？
くどめ　いまはないですね。いずれはできればいいな～くらい。だから先のこと全く考えてないですよぉ。流れにまかせてって感じ。
のものも　私がくどめさんの立場だったら、プロレス辞めたら、すぐ結婚するな（笑）。
くどめ　でも、それが一番理想ですよ。そうなれば一番いいと思う。
のものも　だからぁ、いまのうちに相手見つけとくんですよぉ。
くどめ　ホント、作っとけばよかったぁ（笑）。
のものも　実際、いまは恋愛してないの？
くどめ　いまはないです。
のものも　えぇ～ホントぉ？　腹割って話そうよぉ（笑）。あ、テープ回ってるからいけないんだ。テープ消しちゃう？
くどめ　いやいやいやいや（笑）。
のものも　またまたかわされたぁ（笑）。じゃあね、失恋は引きずるタイプ？　って言ってもフラれたことなんかないかぁ？
くどめ　フる、フラれるって言うほどつきあったことないですから（笑）。自然消滅みたいな感じかなぁ。のものもはどうですかぁ？
のものも　のものもは、ハートブレイクしたばっかりぃ。なーんちゃって（笑）。……って、だからぁ、私の話じゃなくて、くどめさんの話を聞きたいんだってばぁ～（笑）。

【97年4月1日・FMW事務所にて収録】



実はこの真ん中にいる謎のマスクマンも、くどめファンとのこと。イベントのゲストとして、自ら立候補してきたのでしたぁ。サスケ社長もすみに置けないねぇ。（撮影／木目いち）

KUDOME♥INFORMATION



セクシャルイメージビデオ「Squll」に続いて、くどめ、引退メモリアルビデオ第2弾が4月28日に東芝EMIから発売されるわよ～。タイトルはズバリ！「アンソロジー」。御大・大仁田氏との対談、全女時代の貴重な映像、密着ドキュメントなどなど、スペシャルおいしい映像がいっぱいなの～。のものもも2秒くらい出演してるんだ～。「さすが、木目いち！」って言うくらい、めちゃめちゃグーな作品なんで、みんな、いっとこー！やっとこー！　買っとこー！



4月29日（祝）に、遂にくどめが引退しちゃうよ～。場所は横浜アリーナ。開場13:00、試合開始15:00だよ～。おそらく、シャーク土屋とデスマッチ、しかも女子初のメインだよ～。のものもは女子レスラーの中で、くどめが一番好きだったんだよ。いつもはウソばっかりついてるけど、これはホントだよ。だから、くどめの最後は正直言って、あんまり見たくないんだ。だって、引退なんてヤダもん。きっと泣いちゃうもん。でも、見に行くもん。のものもだもん。

レスラー人生6年目にして最大のスランプ

茂木正淑

（レッスル夢ファクトリー）



正直言って、いま、プロレスやめたいんですよ……。

撮影／浜田孝一
photographs by Kouichi Hamada
聞き手／のものも
interview by NomoNomo

bMo
blue motepyon order
憂鬱なもてぴょんの秩序



ベルトにかける執念、執着は人一倍強いのに、その執念、執着が、ライガーには全く届かないんですよ……

ーー茂木選手は、ヒゲがステキですよね。

茂木　えっ、そうですか（笑）。

ーー何で伸ばしてるんですか？

茂木　あんまり好きじゃないんですどね。評判悪いんですよ。

ーーじゃあ何で伸ばしてんですかぁ？

茂木　マスクマンのマスクと一緒ですよ。レスラー用の顔って言うか。だからオフは剃っちゃってます。

ーーあ、そうなんですか。ところで茂木さん、怒ってますぅ？

茂木　ええっ、何で!?

ーー茂木選手が『紙プロ』本誌（15号にインタビュー掲載）に対して、大変ご立腹でいらっしゃると、風の噂で聞いたもので……。

茂木　「ご立腹」というのは、腹が立ってるっちゅーこと？

ーーふぁい。

茂木　いやっ、自分は別に……。ああいうコンセプトでやってたんだろうから、まぁ。

ーーホントにぃ～？

茂木　いやホントに。別にご立腹じゃないっスよ。でもインタビューの後、代表には怒られましたけどね。

ーー怒られちゃいましたか。私もさっき高田龍代表に30分ほど怒られちゃいましたぁ。「ああいうふざけたインタビューは2度とするな！『紙プロ』は本来なら取材拒否だ！」ってな内容だったんですけど、私に言われても……。私が考えたわけじゃないのにぃ～。

茂木　ねぇ、彼女のせいじゃないのにね。彼女、名前なんて言うの？

ーーのものもですぅ。

茂木　のものも？（笑）。じゃあボクはもてぴょん（笑）。

ーーもてぴょん（笑）。

茂木　さて、今日は何の話しましょうか？

ーープロレスの話。

茂木　えーっ、君に言ったってわかんないよ（笑）。『紙プロ』なんだから、ふざけた話でいいじゃん。

ーーふぁい。ふざけた話でいいですぅ（笑）。でも、いまプロレスのことでお悩みなんですよね？　そんな時にふざけてていいんですかぁ？

茂木　いいよ。

ーーあらぁ～。でも、今日は私もブルーなんで、ブルーな話しましょうよぉ。

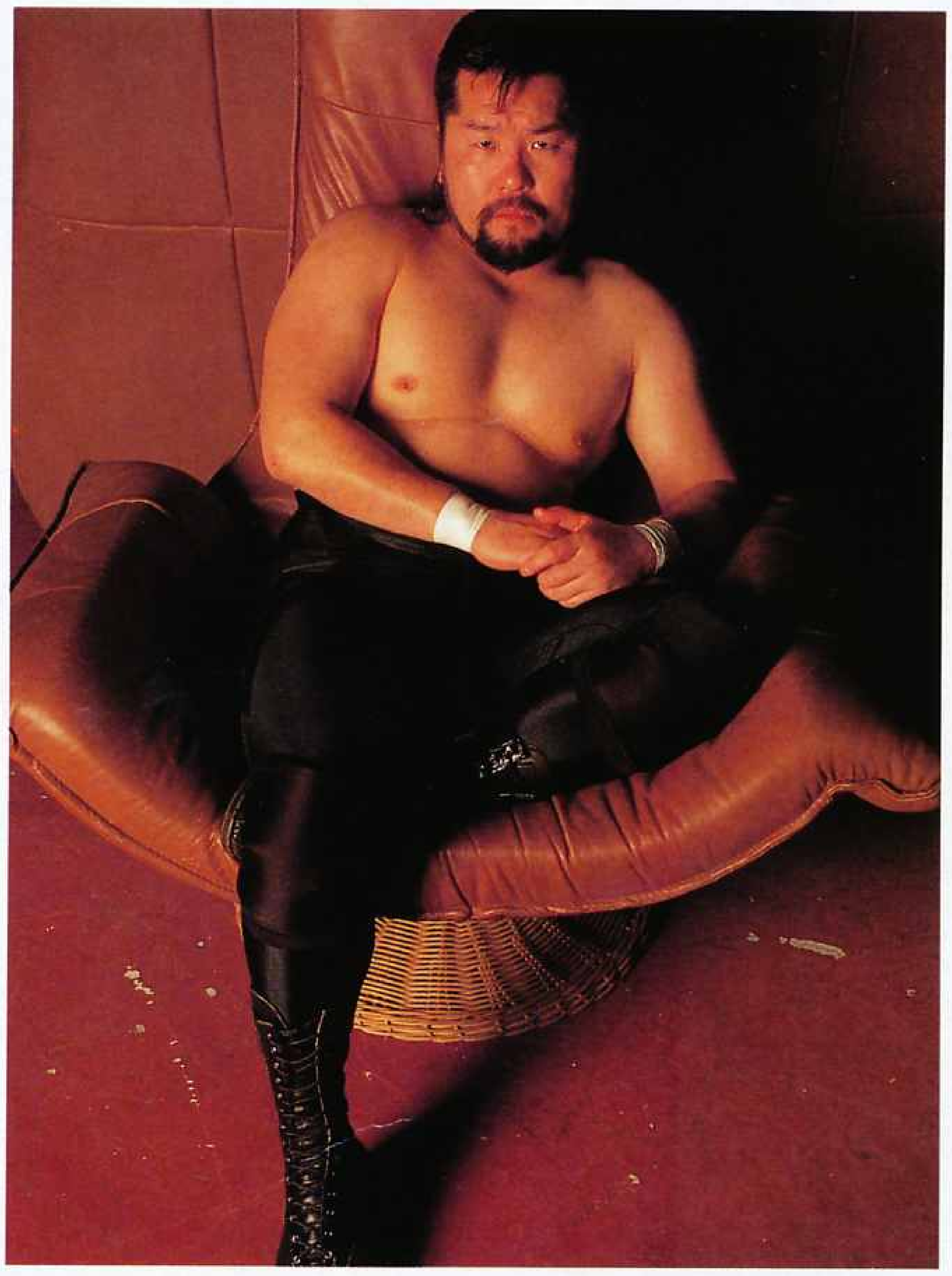
茂木　何でブルーなの？

ーーま、私の話はいいとして、もてぴょんはライガー戦が終わり、いまはプロレスに対して完全にやる気を失っていると言うか、失望しちゃってると言うか……。とにかくいま、超ブルー入ってるんですよね？

茂木　まぁ、練習も身に入んないし、今後のことも全く考えられない状況だし、ライガーが「大切なモノをかけたらそっちのリングでやってもいい」って言ってるけど、一体何をかけるべきなのかわからないし……（遠い目）。

ーー私もわかりませ～ん。

茂木　まぁ、こっちのリングに上げて闘ったとしても、いまの状況だと前回と一緒の結果になっちゃうだろうし……。だからいまは何も考えてないですよ。



●茂木正淑プロフィール
S37年11月24日生まれ・H３年５月、対島田宏戦でデビュー。W★ING、SPWFを経て、H6年にレッスル夢ファクトリーを設立。ニックネームはもてぴょん＆下半身の暴れん坊（本人曰く、「あれはW★ING金村が『週プロ』の選手名鑑に勝手に書いたこと。下半身は至って落ち着いてます　」とのこと）

ーーでも、もてぴょんって、他のジュニア選手に比べると、めちゃめちゃチャンスに恵まれてるじゃないですかぁ。

茂木　チャンスに恵まれてるっていうか、そのぶんボク、動いてるつもりだし、アクション起こしてるつもりだからね。

ーーじゃあ他の選手もアクション起こせば、ベルトに挑戦できるんですか？

茂木　うん、じゃないですかね。みんな、あんまり動いてないでしょう。

ーーそうですねぇ、グラン浜田選手なんて、『8冠統一戦』以来、全くシカト状態ですもんね。

茂木　ジュニアの一線で活躍している選手が、よく「IWGP以外はガラクタだ」とか何とか言ってるじゃないですか。

ーー言ってますねぇ。

茂木　何で「ガラクタ」なんだと。それは全チャンピオンに失礼だし、防衛戦やって、その防衛した相手にも失礼だし。どう考えてるのかなと。

ーーごもっともでございますぅ。

茂木　実際ボク「IWGP以外はガラクタだ」って言われてるから、NWAだけでもいいかなって思ってライガーのとこに行ったわけですよ。「NWAだけでいいから挑戦させてくれ」と。そしたら8冠戦になったと。

ーーへぇ～、棚から牡丹餅！

茂木　そう、ラッキーだったなと。でもそのラッキーをモノにできなかったんだけどね。

ーーあらぁぁ。まあ、それだけNWA

のベルトに執着してたと。そのベルトに懸ける執念ってのは、どこ行っちゃったんですか？

茂木　その執念、執着が届かないんですよ（遠い目）。

――じゃあいまは『8冠統一戦』に参加してしまったことを、非常に後悔しているんじゃないですか？

茂木　別にしてないよ。アレはアレでジュニアの活性化のためにやったわけだし、現にいま、活性化されてるわけじゃないですか。ボク自身は失敗したなぁって思うけど、ジュニア全体見ればいいことだったと思いますよ。

――えーっ、それはウソだぁ（笑）。そうは言ってもやっぱり自分じゃないですかぁ。自分にとってプラスかマイナスかですよぉ。

茂木　勝てばプラスでしょ？

――そりゃ勝てばですけどぉ。

茂木　だって負けるつもりで出たわけじゃないから。いま、現在だと失敗したなって思いますよ。でもあの時は「こりゃうまくいけば8本ベルト取れるかな」って思ってたんですよ。ギャンブルと一緒だから。

――ギャンブル！　勝てば8倍！

茂木　それで初日のサスケ戦で「茂木にしちゃあいい試合だった」と、いい評価もらって、で、ドラゴン戦。ドラゴンにもボクずっとアクション起こしてたんですよ。会場まで行って「挑戦させてくれ」って言ってて。で、チャンスもらって、ドラゴン戦もいい評価もらったんですよ。結果的には負けたんですけど。



――ま、結果はどうあれ内容が良かったので、自分では納得してると？

茂木　うん、で、またライガーにもボク、自分で動いて「NWAだけでもいいんでお願いします」って言ったら8冠戦が転がってきて、挑戦したにも関わらずダメだったと。……次は何すればいいんだと（遠い目）。練習方法が間違ってたのかなとか、そういうことといろいろ考えるわけですよ。やっぱりオレには向いてないのかなって………。

――んぅぅぅぅ。超ブルー発言。ライガー戦って、今回で2回目ですよね？　今回終わって、さらなる厚い壁になってしまったと？

新日本には、いい経験させてもらってるけど、いい思い出は全くないですよね……

茂木　壁ですよね。その壁を打ち破れるかって言ったら、やってみて「NO」だから、今後どうしたらいいかって悩んでるんです。

――あぁぁぁ（涙）。でも私がこんなこと言うのは非常に生意気だと思うんですが、他のジュニアの選手含めて、なんかライガー選手に対しての幻想が大きすぎると思うんですよぉ。もちろん私もライガー選手は大・大・大好きで、すごく強いと思うし、うまいと思うし、ジュニア界の“最強”ってのもよ～くわかっております。でも、みんな「ライガーはスゴイ、スゴイ」って讃えてばっかりで、「同じレスラーなのに讃えてどうすんの⁉」って、正直そう思うんですよぉ。「手の届かない人だからライガーと一戦交えてうれしかった」って、「うれしかった？　アナタはファンですか？」ってツッコまずにはいられないわけなんですよねぇ。こんなこと言ってちゃ常にトップはライガー選手で、壁を越えるなんてもってのほかと、そう思ってしまうのが、正直なとこなんです。

茂木　うん、でも実際問題喰ってかかる選手いないからねぇ。自分は、だからライガーの強さを崩そうとして挑戦したわけだけど、散っちゃったわけだから。

――あぁぁぁ、散らないでくださいよぉ（涙）。でも喰ってかかる選手と言えば、ある時期『神風』選手がビッグマウスだと言われたことあったじゃないですか。マスコミにすごいバッシングを受けて。当然、注目より中傷の方が大きいと、私がわかるくらいだから本人だってわかってたと思うんですよねぇ。

茂木　じゃあ『神風』インタビューに変更しますか？（笑）

――何でですかぁ。マジメに話してんだからちゃんと聞いてくださいよぉ（涙）。だから、『神風』選手は、大きなリスクを背負っても、あのビックマウスっていうキャラクターを貫き通したんだから、ある意味非常に評価できると思うんですよ。

茂木　うん、いいことだと思いますよ。ビッグマウスって言うか、自信を持って言ってたと思いますけどね。ま、プロだからね。

――はいぃ。そのプロ根性っていうのは、いまのもてぴょんは、ズバリ、なくなってしまったわけなんですね？

茂木　んん……（遠い目）。

――挑戦権もらいに行くとき、ライガー選手に張り手しましたよねぇ。

茂木　「いままでと違うな」って思いました？

――うん、今回のもてぴょんは、ちょっと違うなって思いましたぁ。

茂木　そのつもりで行ったんですよ。にもかかわらず負けちゃったから、壁にブチ当たって、いま、落ち込んでるわけですよ。今後どうしたらいいかと……（遠い目）。

――それだけ落ち込んでるってことは、今回のライガー戦は、かなり自信があったというか、気合いが入ってたって

bMo
blue
motepyon
order

わけですよね？

茂木　けっこう研究しまたよね。夜眠れないくらいビデオずっと見てたし、掌底をくらっちゃいけないなとか……。

――でも、もてぴょん、過去を蒸し返すようですが、新日本にはあんまりいい思い出ないじゃないですかぁ？

茂木　いい経験はさせてもらってるけど、いい思い出はないですよね。一番最初は『J-CUP』、気負い過ぎてロープに足引っかけたし、次の『ベスト・オブ・スーパーJr』では最後の大谷戦、飛んだら頭から落っこちて、交通事故現場みたくなったし……。いい思い出ないですね。唯一、何事もなく終わったのが『スーパージュニア・タッグリーグ戦』くらいで。

――でも『神風』選手に、完全に喰われてしまいましたが……。

茂木　うん、あれはあれでよかったんだよ。あん時は社会人プロレス（SPWF）にいたんだよね。だから昼間仕事して試合してたんですよ。

――ほぇっ？

茂木　ボクは某有名電気会社で、働きながらプロレスやってたんだよね。

――すご～い！「昼間のパパはちょっと違う～♪」って歌があったけど、まさにそれだぁ！　もてぴょんの場合、昼間はサラリーマン、夜はレスラーですね。

茂木　大谷戦あったでしょ、あの流血戦の。アレは津山だったんですよね。試合やって、救急車で運ばれて、頭縫って、その日の夜行バスで帰ってきて……。

――夜行バスぅ！



茂木　次の日は休みだったんだけど、SPWFの試合に顔だして、次の日は頭にぐるぐる包帯巻いて会社行きましたから。

――ひやぁぁぁぁ。会社の人は、レスラーだってこと知ってたんですか？

茂木　内緒ですよ。だから「茂木君、その頭どうしたの？」って聞かれるわけですよね。

――なんて答えたんですかぁ？

茂木　あん時は何て答えたかな。「いやぁ、きのうね、車がちょっと調子悪くて、ボンネット開けていじってたんですよ。そしたら急にボンネットが落ちてきてですねぇ」って。

――ダハハハハハ。すごい言い訳ですぅぅ！　夜行バスで揺られながら、そういう言い訳を考えてたわけですねぇ？

茂木　いや、ボクは頭切れますから（笑）、それはその場で考えて。

――サラリーマンやりながら、新日本のリングに上がる、それはスゴ～イことですねぇ。

茂木　例えば大阪で試合やって、朝帰ってくるんですよ。ホームで歯磨いて、背広に着替えるんですよ、電話ボックスで。

――何で電話ボックス！　トイレでいいじゃないですかぁ（笑）。

茂木　スーパーマンみたいでしょ？（笑）

――スーパーマンだぁ（笑）。でもある意味スーパーサラリーマンですよねぇ。そん時は、都内に住んでらっしゃったんですか？

茂木　いや、群馬県。職場も群馬だったんで。

――SPWFの道場って早稲田ですよね？

茂木　自分たちがいた頃はなかったんです。

――ほぇ？　なかったんだぁ……。

茂木　月何回かの合同練習しかなかったんですよね。とある体育館で合同練習をやってたんです。

――ふぇぇぇ、それで新日本のリングに上がってたんですかぁ？

茂木　「ホントにいいのかな、上がっちゃって」って感じでしたね。

――あんまりよくないですよねぇ（笑）。

茂木　や、でもそれだけじゃないですよ、練習。毎日やってましたよ。ボクが行ってた会社には『レスリング部』があったんですよ。ボク、高校からアマレスやってて、会社入ったのもレスリング推薦みたいなもんだったんですよね。だからレスリングの練習は毎日やってましたよ。

――ホント、スーパーサラリーマンですよね。デスクワークして、部活して、プロレスラーもしてって。

茂木　そうそう、それにね、当時アマチュアレスリングの試合と、プロレスの試合とダブって出てる時もあったんですよ。

――え～っ、それはすごいぃ。

茂木　途中でやめたんですよ。レスリングやってるヤツって、けっこうプロレスファンいるんですよ。だからだんだん気付いちゃって「アイツ、茂木じゃねえか!?」って言われるわけですよ。で、負けちゃうじゃないですか。

――負けちゃうんですかぁ？

茂木　負けることだってありますよ。強いのもいますから。

――そうすると「なんだ、茂木も大したことねーな」って？

茂木　そうそう、だからやめたんです

よ。

——ところで、話はびゅーんと飛ぶんですが、最近みちプロによく上がってますよねぇ？

茂木　8冠戦終わって、次また挑戦権を得るには、みちのく行ってサスケをぶっ倒すのが一番いいかなって。アイツだったらいい試合できそうだし……。

——でもサスケ社長と絡んだのは……？

茂木　しょっぱな星川選手。で、次は人生なんですよ。ボク、ジュニアの勉強で行ったんですよ。サスケとやりたくて行ったんですよ。なのに何で人生なんだと！

——ダハハハハハハハハ。……すいません、必要以上に笑っちゃいましたぁ。

茂木　だから、あん時はさすがに頭きましたね。だから雪の中でサスケのこと、殴りつけてやりましたよ！　で、次、大阪ですよ。いよいよサスケとシングルマッチかなって思ったら……。

——思ったらぁ～？

茂木　人生なんですよぉ～。

——ダハハハハハ。またもや人生い！（笑）すごいぞ、サスケ社長！（笑）。

茂木　もう全てサスケの陰謀ですよ。ライガー戦発表になった大事な時ですよ。それがいきなり人生ですからね。まぁ、『週刊ファイト』は、仮想ライガーで丁度いいって書いてましたけど。

——どこが仮想ライガーなんだぁぁ（笑）。

サスケが8冠のベルトを取ったら、何か変わってくるかも……。でもいまは、先のことは白紙同然……

茂木　そう、違うよね。でもファンはオレを観に来てくれてるんだし、それを裏切っちゃいけないから。ちゃんとはやりましたけど。ま、でも岩手・矢巾で10人タッグ、サスケと当たれましたからね。それにボクが向こうの選手フォール取りましたから。

——スゴイですぅ。これでみちのくストーリーは完結……。

茂木　いや、まだですよ。

——あ、そうでしたぁ。まだちゃんとサスケ社長とやってないわけですもんねぇ。

茂木　でもライガー戦終わって、今後のこと考えてないんですよ。

——あ、じゃあ4・12の東京ドーム、ライガーVSサスケの8冠戦は、もてぴょんにとって、非常に重要な試合になるわけですねぇ？

茂木　ああ……（遠い目）。

——あ、しばらくハッピーな話題だったのに、いきなりまたブルーに戻っちゃいましたかぁ。でも、ベルトがなければ、別にライガー選手とやりたいわけじゃないんですよねぇ。これでサスケ選手が8冠取れば、もてぴょんがこだわってるベルトも懸けられるし、「打倒サスケ！」の夢も叶うと。一石二鳥じゃないですかぁ。

茂木　そうですね。でもサスケがライガーに勝てばでしょ。

——勝つよぉ。絶対勝ちますって。……茂木選手のために（笑）。

茂木　何だよ、それ（笑）。

——サスケ選手が8冠取ったら、いま悩んでる答えが見えるんじゃないですかぁ？

茂木　うん、変わってくるかもしれないですね。でもいまはプロレス自体続けていくかどうかもわかんなくなっちゃってるから……。でも続けていくって気持ちが少しでもあるから、練習してんだろうけどね。

——そうですよねぇぇ。別にダイエットのためでもないでしょうし……。

茂木　それもあるけどね（笑）。

——あれぇぇぇ。

茂木　最近腹の辺りが……。

——私もなんですよぉ。最近どこ行っても「デブ」とか「どっちがレスラーかわかんない」とか言われまくってて……（涙）。私のブルーはそこなんですぅぅう（号泣）。

茂木　はい？

——いえいえ、いまのは聞かなかったことに。でも目標ができれば、「やめたい」って思いもなくなるんじゃないですかぁ？

茂木　…………それは、サスケがベルト取ってからじゃないとわかんないですよ。いまはとにかく先のことは一切考えられないです（遠い目）。

——そういう話になると、もてぴょん一気にブルーになっちゃいますねぇ。とにかく、この号が発売になる頃に、もてぴょんがどう動いてるかが、非常に重要なポイントになってきますよねぇ。復帰してたら悩みが吹っ切れたと。欠場してたら「引退」の思いが強くなってると。

茂木　そういうことですね。

——そうですか、じゃあ今日は大変ブルーな話、どうもありがとうございました。

茂木　ウソ、終わり⁉　こんなんで大丈夫なの？　どうせ1ページなんでしょ？（笑）

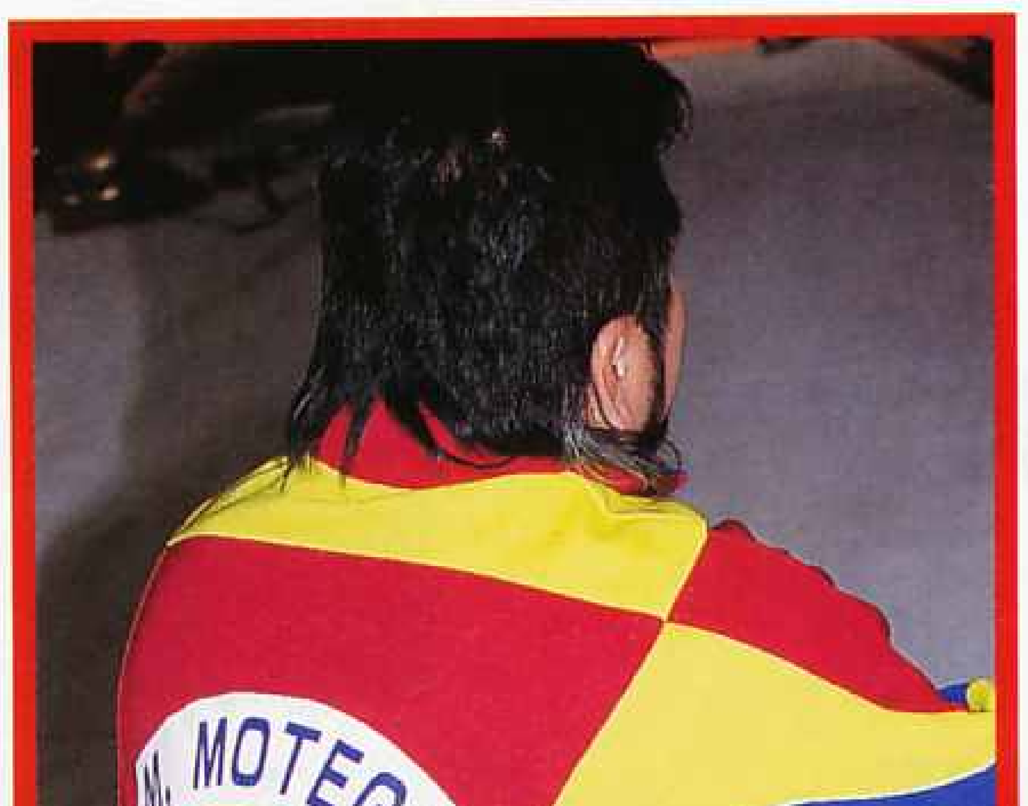
——ほぇぇ、もっといっぱいありますよぉ。

茂木　いや、『紙プロ』のことだから、わかんないよ（笑）。

——もう、せっかくカッコよくしめたのにぃ～（涙）。

【97年3月31日、熊谷・夢工場にて収録】

bMo blue motepyon order



この読者プレゼントページだけが僕の世界……

中村カタブツ君の

どうせ僕なんかいらない人間なんだ。(号泣)



★たまごっち　1名

写真のたまごっちは撮影中、ケーキを与えすぎて翌日、死にました

春の新作(もう初夏だけど)Tシャツ13枚を各10名に

●バトラーツ提供



ワンポイントTシャツ

これもユーリさんについ、あげてしまったTシャツ。そのせいでカタブツ君(私)は紙プロ・吉田豪にこっぴどくしかられた

ガッチリTシャツ

『週プロ』では"バッチリ"と紹介されたバトラーツNo.1の練習好き、ガッチリのTシャツ

●レッスル渋谷店提供



bWoTシャツ

カメラマン・ユーリさんに、つい1枚あげてしまったのでこれは9名

nWoTシャツ

新日会場でも買えない初期nWoTシャツアメリカ直輸入モノ。

●インポートショップ「バンバン・ビガロ」提供



プロレス好きの店長が、あくまで趣味で作ったTシャツ(ちなみに非売品)

●冬木軍プロモーション提供



旗揚げ戦成功で感激の涙を流した、実は良識ある人・冬木弘道の冬木軍プロモーションTシャツ

●レッスル夢ファクトリー提供



熊谷発デンジャラスドリーム・もてビョンTシャツと悪夢シャツ

●格闘軍団『メビウス』提供



解体業界の若大将・宮本氏(『月光』社長)とプロレス界の青大将・折原(ヘビ好き)がタッグを組んで創設した日本版"蛇の穴"格闘軍団『メビウス』からTシャツとステッカーをセットで

通販もOKなパンクラスグッズ



昨年後半のビッグマッチ収録のビデオ(各1名)

通販問い合わせ／03(3707)4646



船木誠勝・最新Tシャツ

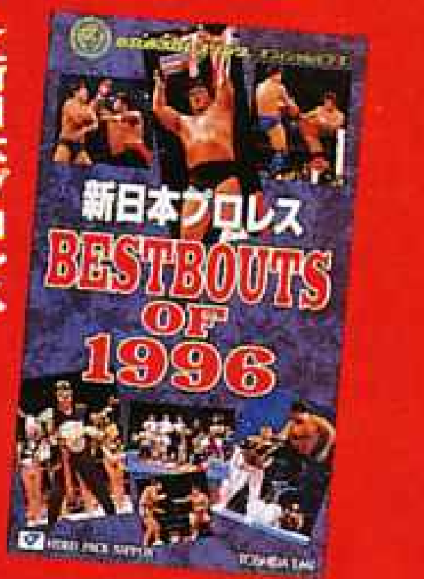
応募方法・

はがきに住所、氏名、年齢、希望商品、面白かった記事、つまらなかった記事、好きな鼻歌、今号の感想とやってほしい企画を明記し、下記宛に。ダジャレも引き続き募集。郵便番号151 渋谷区千駄ヶ谷3—11—3—702 ダブルクロス「勝つまでやめない」係まで。

春の新作ビデオ 各3名

●東芝EMI提供

★新日本プロレス ベスト・バウト・オブ・1996



ビデオ未収録だった9月の大日本プロ乱入、SGタッグリーグ戦決勝戦ほか、昨年、一年間の新日ベスト・バウトの集大成。この一本で1996年の新日の軌跡がすべてわかる!

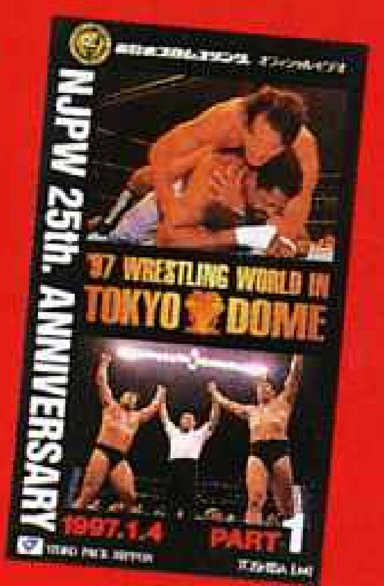
★プロジェクトB



バトラーツ後楽園ホール進出第2弾大会。浪花の大流血、小野、池田の容赦ない蹴りあいと大興奮の試合を完全収録。さらに石川VSサスケ対談、石川VS佐山対談というスペシャル映像付き。

★97レスリング・ワールド・イン・闘強導夢パート1&パート2





恒例となった1・4東京ドーム大会。毎年、観客の度肝を抜くカードが目白押しだが、今年も、格の違いを見せつけた新日VS大日本プロ4連戦ほか、ジュニア8冠選手権UドラゴンVSライガー、IWGP選手権橋本真也VS長州力の激闘と見どころ満載。2本組をセットで

●クエスト提供

★殺人魚 人喰いピラニアデスマッチ



「ピラニアが意外と小さかった」とナガサキが試合後、文句を言ったピラニアデスマッチ。松永曰く「このぐらいのサイズが一番狂暴なのだ」。どっちが正しいかはビデオで確認

★凄絶! 人間闇なべデスマッチ!!



ロープに裸電球がずらっと並び、田舎の夜祭りみたいな情緒あふれる「月光闇討ちシャンデリアツリークラッシュスクランブル…デスマッチ」

●VAP提供

★97新春ジャイアントシリーズ 二大選手権



馳浩全日初参戦を完全収録。大激闘となった小橋VS三沢の三冠戦、世界タッグ選手権・ウィリアムス、エース組VS川田、田上組の一戦を収録した今年の幕開けを飾るスーパーバトルも満載

★97エキサイト・シリーズ 最終戦



3・1日本武道館興行。元Uインター高山がオブライトと組んで川田・田上組と激突した世界タッグ選手権試合をノーカット収録。三沢vsウィリアムスの三冠戦も収録

★ザ・Uジャパン・スーパーファイテング96



安生洋二、臼田勝美、そしてバンバン・ビガロらのレスラーが全敗した昨年11月のバーリ・トゥード大会の模様を完全収録。選手インタビューも特別収録

●PTAコミティ提供

★全日本女子プロレスCD『Action&Bright』 3名



たま、フカ、チャパリータ、椎名ら全女の若手女子レスラー11人のテーマ曲集

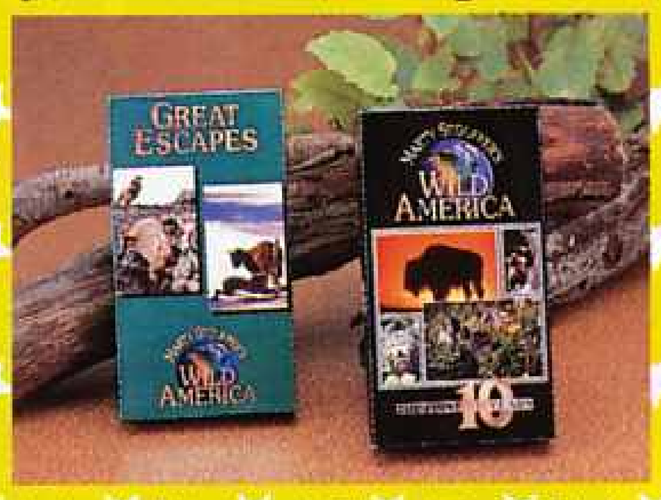
世界にはばたけ格闘技連盟!!

★サスケ『トペコン人形』 20名



火星に向かってトペ・コンヒーロ。サスケ社長のブランブラン人形の新作

★ビデオ『グレートエスケープ』 10名



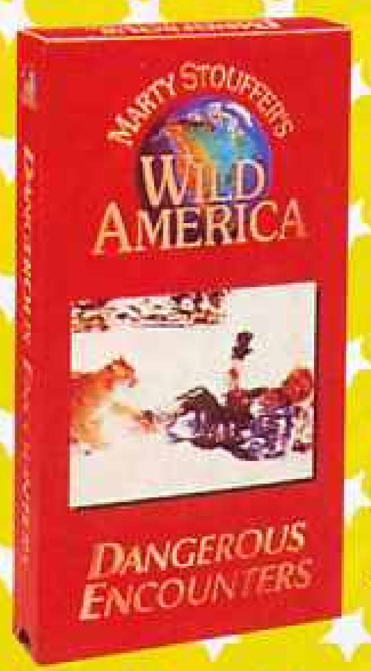
猪木・初代タイガー対談の中で、話題となった"逃げる"ビデオがこれ。肉食獣に追われた動物が無事に逃げ切る場面ばかりを集めた感動のビデオ。『ファースト・テン・イヤーズ』とセットで

★アントニオ猪木ブロンズ像 10名



『世界格闘技連盟』のためならと作者・村田善則先生が自ら10体提供を申し出てくれた品

★ビデオ『デンジャラスエンカウンターズ』 10名



『グレートエスケープ』シリーズの第2弾。人間が野生動物と突然、遭遇した危機的映像の集大成。これも『ファーストテン……』とセットで。各セット6800円で発売中。問い合わせは、0120—75—6644『オークローンマーケティング』

★5・4『KINGDOM』旗揚げ戦チケット 5組10名



旗揚げ戦チケット入手!!

これまでのUスタイルに顔面パンチとマウントパンチを加味し、さらに進化したプロレスを見せるというキングダム。ルールを作ったのは安生。兄もフロントとして参加した安生兄弟の動きに注目?

団体崩壊メモリアルグッズ

★FFF崩壊3点グッズ 10名



話題だけで消えたFFFのメモリアルグッズ。パンフレット、200%コイン、プレスシールの3点セットを10名に。なお、このセットは2000円で販売中。申し込み、問い合わせは03—3555—2455『Kプロダクション』

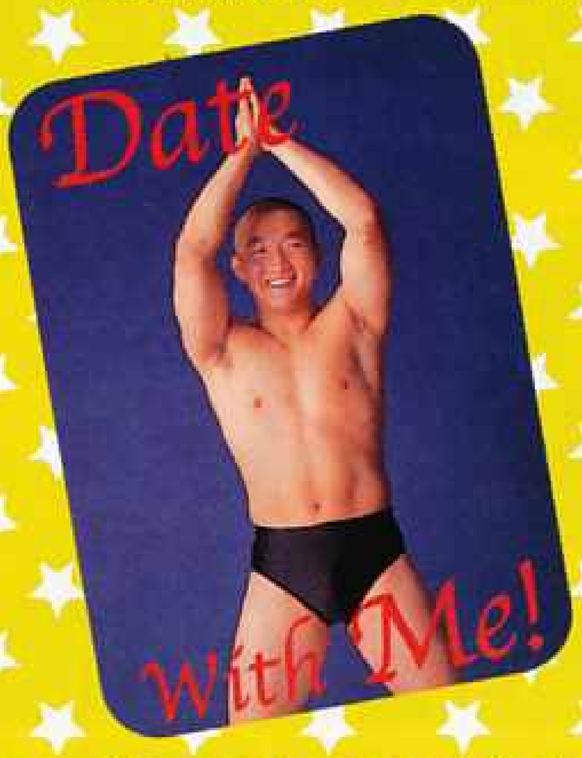
★UWFインターナショナル ペンダント 10名



Uインターが"ブシドー"と名乗ってイスラエルで興行した時、現地で製作した記念ペンダント

紙プロ引っ越し祝いグッズ

★日高郁人デート券 1名



バトラーツのクールアイ・日高っちと一日デートができる券

★チーム『悪だくみ』サイン入り傘 1名



地球をバトラーツの魔の手から救うため、なぜか博多のネオン街で結成されたチーム「悪だくみ」(池田大輔、小野武志、臼田勝美)のサイン入り傘

★引っ越し記念ゴミ出し福袋 10名



ダブルクロスの引っ越しで出てきた今ではもう決して手に入らないビデオやパンフレット(UWF、NOW、W★ingなど)他を一挙放出

★水道橋博士ポストカード 30名



免許証写真はどこまで変装が許されるかに挑み、結局、書類送検されてしまった水道橋博士の芸人魂がこもったポストカード

★大槻ケンヂ&紙プロ監修新刊本『トンパチ』10名



サスケ、ターザン山本、邪道・外道、折原昌夫ら十人のレスラーのトンパチぶりに大槻ケンヂ、浅草キッドらが迫ったインタビュー集。発売は5月9日。定価1500円(税別)

お待たせです!



5月15日
発売決定!
6930円(税込)

すべての道がローマに通ずるなら、ドンキホーテよ、デタラメに行け!

紙のプロレスRADICALビデオ

『闘いのドンキホーテ』

～幻のみちプロ&バトラーツ合同興行
or第1回ターザン山本追悼興行～



たった700人しか目撃できなかった毒々の「第1回ターザン山本追悼興行」。一部のレスラー、関係者からは非難轟々! それでもオんモシレェからビデオを出します!

仰天・永久保存版の収録内容
96・12・26 クラブチッタ川崎

●【究極の社長タッグ、遂に実現!】
ザ・グレート・サスケ&石川雄規 vs 山賊男ガリバーX&山賊男ガリバーXX

●【バトラーツ初のバチバチ6人タッグ】
池田大輔&アレクサンダー大塚&米山サトシ vs 臼田勝美&小野武志&田中稔

●【伝説の「怖い虎」が復活!】
初代タイガーマスク vs 獅龍

●【みちプロ正規軍vs海援隊、96年最終戦争】
グラン浜田&スペル・デルフィン&薬師寺正人 vs ディック東郷&MEN`Sテイオー&TAKAみちのく

●【人生、96年最終巡礼】
新崎人生 vs 愚乱・浪花

●その他、ターザン密葬と発狂の場面、翌日インター解散を控えたゴールデン・カップス突如来襲の様子も収録!

問い合わせ=03−3403−5188

全国書店、レコード店、ビデオショップでお求めください。
発売:(株)ダブルクロス　販売:(株)クエスト

世界平和のために、特別通信販売も行うんです!
①現金書留　②郵便振替…00130−3−769154　名義:(株)ダブルクロス
①②いずれかの方法で下記住所へビデオの料金をご送金ください。送料・税込みの出血価格7500円です。その際、住所、氏名、年齢、電話番号を明記していただかないと商品が届かない場合がありますので、必ず明記してください。(郵便振替の場合は用紙裏面の通信欄に記入)
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702　株式会社ダブルクロス『ドンキホーテ通販』係まで。
TEL.03−3403−5188　FAX.03−3403−5187
※前号で申し込みいただいた方、いましばらくお待ちくださいね♥

紙のプロレス RADICAL
No.3
1997年5月25日発行
定価:本体648円+税

発売元:株式会社ワニマガジン社
〒160　東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03−3357−2911(販売・営業)
発行元:株式会社ダブルクロス
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
TEL.03−3403−5188(編集・制作)

編集兼発行人:山口昇
編集スタッフ:野本のももも真貴子／中村カタブツ君／坂井結核／吉田豪／八木賢太郎(ミニーの世話のため非番)
デザイン:ツースリー(出田さん、村松さん、ヒサくん、マツ)
運搬:出前持ち入江　アタリ:古川ハラペコ
カメラマン:斉藤ユーリ
お勘定:林ヘックションー枝
フィニッシュ:ツー・スリー
印刷:図書印刷株式会社

編集内容等に関するお問い合せは(株)ダブルクロスにね♥

紙のプロレス RADICAL
No.4は
6月下旬
発売予定

〆切り迫る!!4月30日まで

デジタル携帯電話を1000名様にプレゼント!!



POW 6th Anniversary

アンケートに答えてもらっちゃおう!

●アンケート(回答は番号でお答えください)

Q1:あなたの一番好きなジャンルのゲームはどれですか?
1. ロールプレイング　2. シューティング　3. アクション　4. シミュレーション　5. その他

Q2:ゲームであなたが最も重視するポイントは何ですか?
1. テーマ(素材)　2. システム　3. グラフィック　4. サウンド　5. その他

Q3:あなたが関心を持っているジャンルをひとつだけ答えてください。
1. スポーツ　2. 音楽　3. レジャー　4. ギャンブル　5. その他

応募はいずれかで

ハガキ
官製ハガキに住所・氏名・年令・職業・電話番号・アンケートの回答を記入し、下記の宛先まで。
〒104-00 東京都中央区銀座6-13-16 銀座ウォールビル11F 株式会社ガイア内
POW6周年記念キャンペーンプレゼントM係

FAX
住所・氏名・年令・職業・電話番号・アンケートの回答を記入し、下記の番号まで。
ファックス番号　03-3542-5571
POW6周年記念キャンペーンプレゼントM係

※18歳未満の方のご応募はご遠慮ください。

ご応募上の注意

★締め切り:1997年4月30日(当日消印有効)

★発表:抽選の上、当選者に申込書をお送りし、発表にかえさせていただきます。

★月々の基本料金、通話料、商品発送代金と事務契約手数料は、お客様の負担となります。

★ご質問等がございましたら、フリーダイヤルまで。
0120-884-814



LEGEND OF THE GAMBLEKING
一発逆転/ギャンブルキング伝説



THE VICTORIOUS THOROUGHBREDS
サラブレッド達の栄光



FANCY COCO　魔法少女ファンシーココ
●育成シミュレーション



BLOCK KUZUSHI　ブロックくずし
●ゲーム初心者からの定番アイテム



GEKIRETSU PACHINKERS
激烈パチンカーズ

PlayStation

pow パウ

株式会社プランニングオフィスワダ　〒150 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-17-11　Planning Office WADA

紙のプロレス RADICAL WANIMAGAZIN MOOK ㊽ 1997 No.3
カール・ゴッチ 神様降臨!!
平成9年5月25日 編集発行人/山口昇
発売元:(株)ワニマガジン社 〒160 東京都新宿区内藤町1番地 電話/03-3357-2911
発行元:(株)ダブルクロス 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話/03-3403-5188
ワニマガジン社 定価:本体648円+税

9784898292891
ISBN4-89829-289-5
C9476 ¥648E
1929476006486
雑誌 69861-48
印刷:図書印刷株式会社